

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第214集

ほ く ざ ん か ま あ と
北 山 窯 跡

か ん す け か ま あ と
勘 介 窯 跡

2020

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

やきもののまちとして知られる瀬戸市は、愛知県尾張地域の北東部に位置します。ここは岐阜県との県境に接するところでもあり、多治見市、土岐市などとともに日本有数の中心的な窯業地として、今日まで長い歴史と豊かな伝統を伝えてきた地域であります。

この瀬戸市域北東部、落合町の丘陵部にかけて立地する北山窯跡と勘介窯跡について、急傾斜地崩壊対策工事の対象地域に含まれることになり、両遺跡の発掘調査が行われました。調査は、平成 27・29 年度に公益財団法人瀬戸市文化振興財団と公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターがそれぞれ実施し、北山窯跡では近代に操業した連房式登窯が 1 基、勘介窯跡では 16 世紀の戦国期の窯体 2 基と物原の広がり確認されました。

調査された北山窯跡の連房式登窯は、明治 35 年に開窯されたものであり、本格的な遺跡の発掘調査事例として大変貴重な事例となりました。また勘介窯跡では操業期間の異なる 2 基の大窯が隣接する空間が捉えられ、戦国期の窯業生産の実態を伝える貴重な情報が得られました。

本書はこれらの成果をまとめたものであり、今後学術的な資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財の理解への一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査に対しての御理解と御協力を賜りました関係諸機関ならびに地元の皆様、発掘調査や資料整理に参加協力していただきました多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

令和 2 年 3 月

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 尾崎 亨

例 言

1. 本書は愛知県瀬戸市落合町地内に所在する北山窯跡・勘介窯跡（県遺跡番号 030970・030408）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、急傾斜地崩壊対策工事（防災・安全）に伴う事前調査及び工事中の立会調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた公益財団法人瀬戸市文化財振興財団と公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
（公財）瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター
平成 27 年 8 月 5 日から 9 月 30 日まで 発掘調査 190 m²
平成 27 年 10 月 1 日から平成 28 年 3 月 10 日まで 立会調査
（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
平成 29 年 5 月 9 日から 5 月 26 日まで 発掘調査 100 m²
3. 現地調査の担当者は次の通りである。
（公財）瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 岡本直久（所長） 松澤和人（主任）
（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
 井井俊彦（主任専門員） 武部真木（調査研究専門員） *（ ）内は刊行時役職
4. 発掘調査および立会調査は、(株)永井組、(株)イビソク、(株)波多野組の協力を得て実施した。
5. 調査にあたっては以下の関係機関の協力を得た。
愛知県尾張建設事務所 愛知県教育委員会文化財保護室
瀬戸市教育委員会 愛知県埋蔵文化財調査センター
6. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々から指導・協力を賜った。（敬称略）
小澤一弘 太田攻 加藤真一 深川完雄 藤澤良祐 森山雄二郎 山下峰司
落合クリーニング店 株式会社永井組 曹洞宗龍洞山久雲寺
（発掘調査）
青山一甫 石黒義人 井上正昭 浦川百々子 加藤清美 加藤孝子 黒田泰史
杉井健二 杉本英子 中根千恵子 西田まゆみ 野村 忍 橋本 克 宮本勢津子
森川敏育 山下洋子 山中美代子
（整理作業）
遠藤満喜子 加藤孝子 野村 忍 山下洋子 山田達美 山中美代
阿部裕恵 鈴木好美 瀧 智美 時田典子 堀田祐美 前田弘子 山田有美子 山本孝枝
7. 本書は、(公財)瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センターにより平成 28 年度に刊行された『北山・勘介窯跡発掘調査概要報告書』（編集・執筆 松澤）を元としている。その後に行われた発掘調査の成果に加え、出土遺物の整理作業、報告書刊行を(公財)愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。報告書編集は武部が担当した。執筆の分担については目次および本文中に示す通りである。
なお第 5 章は(株)パレオ・ラボ 藤根 久・米田恭子の分析結果等を掲載した。（敬称略）
8. 報告書に関わる整理作業において、陶磁器類の実測・トレース業務は(株)島田組に、遺物写真撮影については写真工房・遊 金子知久に依頼した。（敬称略）
9. 出土遺物の登録は、本書図版の掲載番号を元に整理を行った。
10. 本書に示す座標値は、国土交通省に定められた平面直角座標第 VII 系に準拠する。海拔表記は東京湾平均海面 (T.P.) の数値である。表記は世界測地系を用いている。
11. 写真および図面などの調査記録については(公財)愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 (0567-67-4163)
12. 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 (0567-67-4164)

目 次

第1章 調査の概要	1
1 遺跡の位置と地形 (松澤)	1
2 歴史的環境 (松澤)	2
3 発掘調査に至る経緯・経過	7
(1) 公益財団法人 瀬戸市文化振興財団による調査 (松澤)	
(2) 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターによる調査 (武部)	
第2章 遺 構	9
1 調査の方法 (松澤)	9
2 北山窯跡 (松澤・武部)	9
(1) 調査区の概要	
(2) 検出遺構	13
ア．窯体 イ．物原 ウ．平坦面 エ．通路状遺構 オ．補足 (窯体断面)	
3 勘介窯跡 (松澤)	17
(1) 調査区の概要	
(2) 検出遺構	
ア．1 試掘坑 イ．2 試掘坑 ウ．勘介1号窯遺構 (窯体・灰原) エ．勘介2号窯遺構 (窯体・灰原)	
第3章 遺 物 (松澤・武部)	23
1 北山窯跡	23
(1) 陶器製品	
(2) 磁器製品	
(3) その他	
(4) 窯道具類	
2 勘介窯跡	44
(1) 勘介1号窯	44
(2) 勘介2号窯	48
第4章 自然科学分析 ((株)パレオ・ラボ 藤根・米田)	87
北山窯跡の焼成室床材の材料分析	
第5章 総 括 (松澤・武部)	94

掲載遺物一覧表

写真図版

挿 図 目 次

図 1	瀬戸市の位置と地形	1
図 2	瀬戸市域の地質	2
図 3	北山・勘介窯跡周辺の地形 (縮尺 1/20,000)	3
図 4	北山・勘介窯跡周辺の地形 (縮尺 1/20,000)	5
図 5	北山・勘介窯跡調査地点位置図 (縮尺 1/5,000)	8
図 6	北山・勘介窯跡の調査範囲 (縮尺 1/250)	10
図 7	北山・勘介窯跡 調査区配置図 (縮尺 1/250)	11
図 8	北山窯跡 窯体実測図 (1) (縮尺 1/40)	12
図 9	北山窯跡 窯体実測図 (2) (縮尺 1/40)	13
図 10	北山・勘介窯跡調査区位置図 (縮尺 1/100)	14
図 11	北山窯跡 調査範囲南壁土層断面図 (縮尺 1/80)	16
図 12	北山窯跡 窯体残存部土層断面図 (縮尺 1/80)	16
図 13	勘介窯跡 1 試掘坑実測図 (縮尺 1/40)	18
図 14	勘介窯跡 2 試掘坑実測図 (縮尺 1/40)	20
図 15	勘介 1 号窯被熱範囲実測図 (縮尺 1/20)	21
図 16	勘介 2 号窯窯体実測図 (縮尺 1/20)	22
図 17	北山窯跡出土遺物 1 (1/3)	24
図 18	北山窯跡出土遺物 2 (1/3)	26
図 19	北山窯跡出土遺物 3 (1/3)	28
図 20	北山窯跡出土遺物 4 (1/3)	29
図 21	北山窯跡出土遺物 5 (1/3)	30
図 22	北山窯跡出土遺物 6 (1/3)	31
図 23	北山窯跡出土遺物 7 (1/3)	32
図 24	北山窯跡出土遺物 8 (1/3)	33
図 25	北山窯跡出土遺物 9 (1/3)	34
図 26	北山窯跡出土遺物 10 (1/3)	35
図 27	北山窯跡出土遺物 11 (1/3, 1/6)	36
図 28	北山窯跡出土遺物 12 (1/3)	37
図 29	北山窯跡出土遺物 13 (1/3)	38
図 30	北山窯跡出土遺物 14 (1/3, 1/6)	39
図 31	北山窯跡出土遺物 15 (1/6)	40
図 32	北山窯跡出土遺物 16 (1/3)	41
図 33	北山窯跡出土遺物 17 (1/3)	42
図 34	勘介 1 号窯跡出土遺物 1 (1/3)	45
図 35	勘介 1 号窯跡出土遺物 2 (1/3)	47
図 36	勘介 1 号窯跡出土遺物 3 (1/3)	49
図 37	勘介 1 号窯跡出土遺物 4 (1/3)	51
図 38	勘介 1 号窯跡出土遺物 5 (1/3)	53
図 39	勘介 1 号窯跡出土遺物 6 (1/3)	55
図 40	勘介 1 号窯跡出土遺物 7 (1/3)	56

図 41	勘介 1 号窯跡出土遺物 8 (1/3)	57
図 42	勘介 1 号窯跡出土遺物 9 (1/3)	58
図 43	勘介 1 号窯跡出土遺物 10 (1/3)	59
図 44	勘介 1 号窯跡出土遺物 11 (1/3)	60
図 45	勘介 1 号窯跡出土遺物 12 (1/3)	61
図 46	勘介 1 号窯跡出土遺物 13 (1/3)	62
図 47	勘介 1 号窯跡出土遺物 14 (1/3)	63
図 48	勘介 1 号窯跡出土遺物 15 (1/3)	64
図 49	勘介 1 号窯跡出土遺物 16 (1/3)	65
図 50	勘介 1 号窯跡出土遺物 17 (1/3, 1/6)	66
図 51	勘介 2 号窯跡出土遺物 1 (1/3)	67
図 52	勘介 2 号窯跡出土遺物 2 (1/3)	68
図 53	勘介 2 号窯跡出土遺物 3 (1/3)	69
図 54	勘介 2 号窯跡出土遺物 4 (1/3)	70
図 55	勘介 2 号窯跡出土遺物 5 (1/3)	71
図 56	勘介 2 号窯跡出土遺物 6 (1/3)	72
図 57	勘介 2 号窯跡出土遺物 7 (1/3)	73
図 58	勘介 2 号窯跡出土遺物 8 (1/3)	74
図 59	勘介 2 号窯跡出土遺物 9 (1/3)	75
図 60	勘介 2 号窯跡出土遺物 10 (1/3)	76
図 61	勘介 2 号窯跡出土遺物 11 (1/3)	77
図 62	勘介 2 号窯跡出土遺物 12 (1/2, 1/3)	78
図 63	勘介 2 号窯跡出土遺物 13 (1/3)	79
図 64	勘介 2 号窯跡出土遺物 14 (1/3)	80
図 65	勘介 2 号窯跡出土遺物 15 (1/3)	81
図 66	勘介 2 号窯跡出土遺物 16 (1/3)	82
図 67	勘介 2 号窯跡出土遺物 17 (1/3)	83
図 68	勘介 2 号窯跡出土遺物 18 (1/3)	84
図 69	勘介 2 号窯跡出土遺物 19 (1/3)	85
図 70	勘介 1 号窯・2 号窯の匣鉢と窯印 (模式図)	86
図 71	分析試料と態度の偏光顕微鏡写真 (1)	92
図 72	分析試料と態度の偏光顕微鏡写真 (2)	93
図 73	北山窯跡構造図 (縮尺 1/100)	95
図 74	勘介窯跡構造図 (縮尺 1/250)	97

挿表目次

表 1	北山・勘介窯跡周辺遺跡一覧表	4
表 2	北山窯跡出土遺物の文字・記号 (1)	42
表 3	北山窯跡出土遺物の文字・記号 (2)	43
表 4	北山窯跡床砂・製品の胎土分析試料	87
表 5	各試料の粘土中の微化石と砂粒組成の特徴記載	89
表 6	胎土中の粘土および砂粒の特徴	89
表 7	岩石片の起源と組み合わせ	90
表 8	北山窯跡出土遺物の重量	94
表 9	北山窯跡出土陶器の主要器種	96
表 10	北山窯跡出土磁器の主要器種	96
表 11	勘介窯跡出土遺物 (器種・重量)	98

写真図版目次

図版 1	北山・勘介窯跡航空写真 (北山窯跡・勘介窯跡周辺風景 昭和 32 年撮影)	3. 遺跡付近全景 (北から 平成 29 年)
図版 2	北山窯跡・勘介窯跡より北東方向 上品野地区をのぞむ (平成 29 年) 北山窯跡・勘介窯跡全景 (平成 29 年)	4. 北山窯跡調査準備状況 (北西から 平成 29 年)
図版 3	北山窯跡・勘介窯跡 調査前風景 (平成 27 年) 北山窯跡 調査前風景 (平成 29 年)	図版 5 左 北山窯跡完掘状況 (南東から) 窯体完掘状況 (南から)
図版 4 左	1. 遺跡付近遠景 土岐市方面を望む (北方向) 2. 遺跡付近遠景 瀬戸市街方面を望む (南方向) 3. 調査前風景 (西から 平成 27 年) 4. 調査前風景 (南東から 平成 27 年)	図版 6 左 1. 窯体完掘状況 (南から) 2. 窯体西半完掘状況 (南から) 3. 窯体完掘状況 (北から) 4. 窯体煙道煙突検出状況 (西から)
図版 4 右	1. 遺跡付近遠景 (北西方向) 2. 遺跡付近遠景 (西方向)	図版 6 右 1. 窯体コクド完掘状況 (東から) 2. 窯体東半完掘状況 (南から) 3. 窯体東半完掘状況 (北東から) 4. 窯体東半完掘状況 (南から)
		図版 7 左 1. 煙突・西煙道完掘状況 (北から) 2. 煙突裏込め石材検出状況 (西から) 3. 西煙道東壁完掘状況 (西から) 4. 西煙道西壁完掘状況 (東から)

図版 7 右

1. 煙突完掘状況（南から）
2. 煙突完掘状況（北から）
3. 煙突完掘状況（西から）
4. 煙突完掘状況（東から）

図版 8 左

1. 東煙道完掘状況（西から）
2. 東煙道土管検出状況（東から）
3. 東煙道暗渠天井部検出状況（北から）
4. 窯体中軸断割り土層断面（西から）

図版 8 右

1. 横軸（窯体東脇）断割り土層断面（南から）
2. B7・C7 北壁土層断面（南から）
3. A7・ZZ7 南壁土層断面（北から）
4. 山ノ神現況（南から）

図版 9 左

1. 調査区東半完掘状況（東から 平成 27 年）
2. 調査範囲全景（東から 平成 29 年）
3. 調査区東半完掘状況（東から）
4. 南側断面 整地層・物原層（南から）

図版 9 右

1. 通路状遺構完掘状況（東から）
2. 平坦面完掘状況（南西から）
3. 平坦面上石列検出状況（北西から）
4. 南側断面東部 土層断面（南から）

図版 10 右

1. 立会調査範囲断面（北から）
2. 立会調査範囲断面（北西から）
3. 立会調査作業風景（東から）
4. 立会調査 体床面の一部（東から）

図版 10 左

1. 窯体残存部断面 1（北から）
2. 窯体残存部断面 2（北から）
3. 窯体残存部断面 3（北から）
4. 窯体残存部断面 4（北から）

図版 11 左

- 1.1 試掘坑西壁土層断面（南東から）
- 2.1 試掘坑南半西壁土層断面（東から）
- 3.1 試掘坑南半東壁土層断面（西から）
4. 勘介窯跡西半調査後全景
- 5.1 試掘坑完掘状況（北から）

図版 11 右

- 1.2 試掘坑完掘状況（南から）

2.2 試掘坑完掘状況（北から）

- 3.2 試掘坑北壁土層断面（南から）
- 4.2 試掘坑東壁土層断面（西から）

図版 12 左

1. 勘介 1 号窯検出状況（南東から）
2. 勘介 1 号窯検出状況（北から）
3. 勘介 2 号二次窯完掘状況（北から）
4. 勘介 2 号一次窯完掘状況（北から）

図版 12 右

1. 勘介 2 号二次窯完掘状況（北西から）
2. 勘介 2 号二次窯完掘状況（東から）
3. 勘介 2 号二次窯天井支柱痕検出状況（北西から）
4. 勘介 2 号一次窯焼台出土状況（東から）

図版 13 左

1. 勘介 2 号窯横軸東半断割り土層断面（北から）
2. 勘介 2 号窯横軸西半断割り土層断面（北から）
3. 勘介 2 号一次窯完掘状況（北西から）
4. 勘介 2 号一次窯天井支柱痕検出状況（北西から）

図版 13 右

1. A7・ZZ7 区南壁土層断面（北から）
2. ZT7 区西壁土層断面（東から）
3. ZU6 区北壁土層断面（南から）
4. ZV6 区北壁土層断面（南から）

図版 14

北山窯の焼成品
（陶器・磁器 / 北山窯跡）
北山窯の窯道具類

図版 15

勘介第 1・2 号窯の焼成品
勘介第 1・2 号窯の窯道具類

図版 16

北山窯跡出土遺物（陶器製品・磁器製品）

図版 17

北山窯跡出土遺物（磁器製品）

図版 18

北山窯跡出土遺物（磁器製品）

図版 19

北山窯跡出土遺物（窯道具類）

図版 20

北山窯跡出土遺物

図版 21

北山窯跡出土遺物（銘・刻印など）

図版 22

北山窯跡・勘介跡出土遺物（1号窯）

図版 23

勘介窯跡出土遺物（1号窯）

図版 24

勘介窯跡出土遺物（1号窯）

図版 25

勘介窯跡出土遺物（2号窯）

図版 26

勘介窯跡出土遺物（2号窯）

図版 27

勘介窯跡出土遺物（2号窯）

図版 28

勘介窯跡出土遺物（2号窯）

図版 29

勘介窯跡出土遺物（2号窯）

図版 30

勘介窯跡出土遺物（窯道具類）

<<CD-ROM 収録データ >>

- ・ 報告書 PDF データ
- ・ 登録遺物一覧表
- ・ 『概要報告書』 遺物観察表
- ・ 窯体残存部壁面写真（平成 29 年）

第1章 調査の概要

第1節 遺跡の位置と地形 (図1～3, 写真図版1)

瀬戸市は名古屋市の東部に位置し、東西12.8km、南北13.6km、周囲約50km、面積111.40km²である*1。旧尾張国の東北端に位置していて、周囲は岐阜県多治見市、土岐市および旧尾張国の春日井市、名古屋市、尾張旭市、長久手市、ならびに旧三河国の豊田市の7市と境を接する。

瀬戸市には、東部に位置する三国山(標高701m)、猿投山(標高629m)を頂点とする、北部山地および東部山地があり、西部にかけては標高100～200mの低丘陵地を形成している。これらの丘陵地は、水野川、瀬戸川、矢田川によって開析され、穴田丘陵、水野丘陵、菱野丘陵、幡山丘陵と呼称される。なお、各河川流域には、堆積物によって、盆地や沖積地が形成されている。

地質的には、瀬戸市域は、水野川以北では中・古生層、そのほかは花崗岩類を基盤とし、南西部の丘陵低地は堆積物に覆われる。新第3紀中新世の品野層が中央部から北部に分布し、さらに鮮新世の瀬戸層群に区分される瀬戸陶土層および矢田川累層が分布している。

品野層は、崖錐性の角礫岩層・凝灰質シルト岩層・砂岩層から成り、風化すると赤茶色になり、乾燥するとサイコロ状に割れて細くなる凝灰質シルト層と、巨石を含むホルンフェルスを主体とした角礫層から構成される*2。

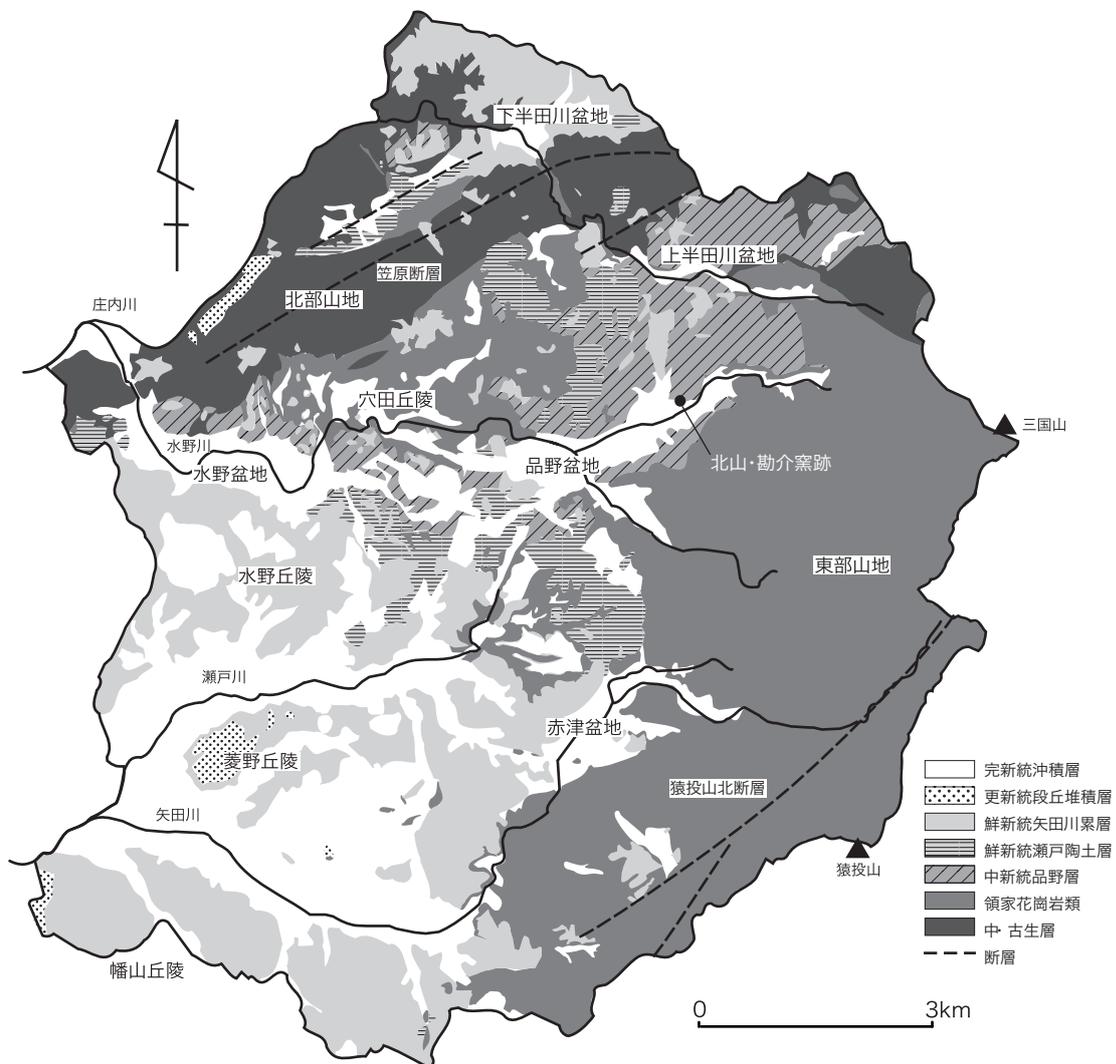


図1 瀬戸市の位置と地形

勘介窯跡と北山窯跡は、瀬戸市の中央部やや北寄りに位置し、水野川と鳥原川の合流点付近、品野盆地の北側にあたる水野川右岸丘陵に所在し、東側には支流の寺前川が南方へ流下する。この丘陵は品野層の分布域であり、崖錐性の角礫岩層・凝灰質シルト岩層・砂岩層により形成されている。

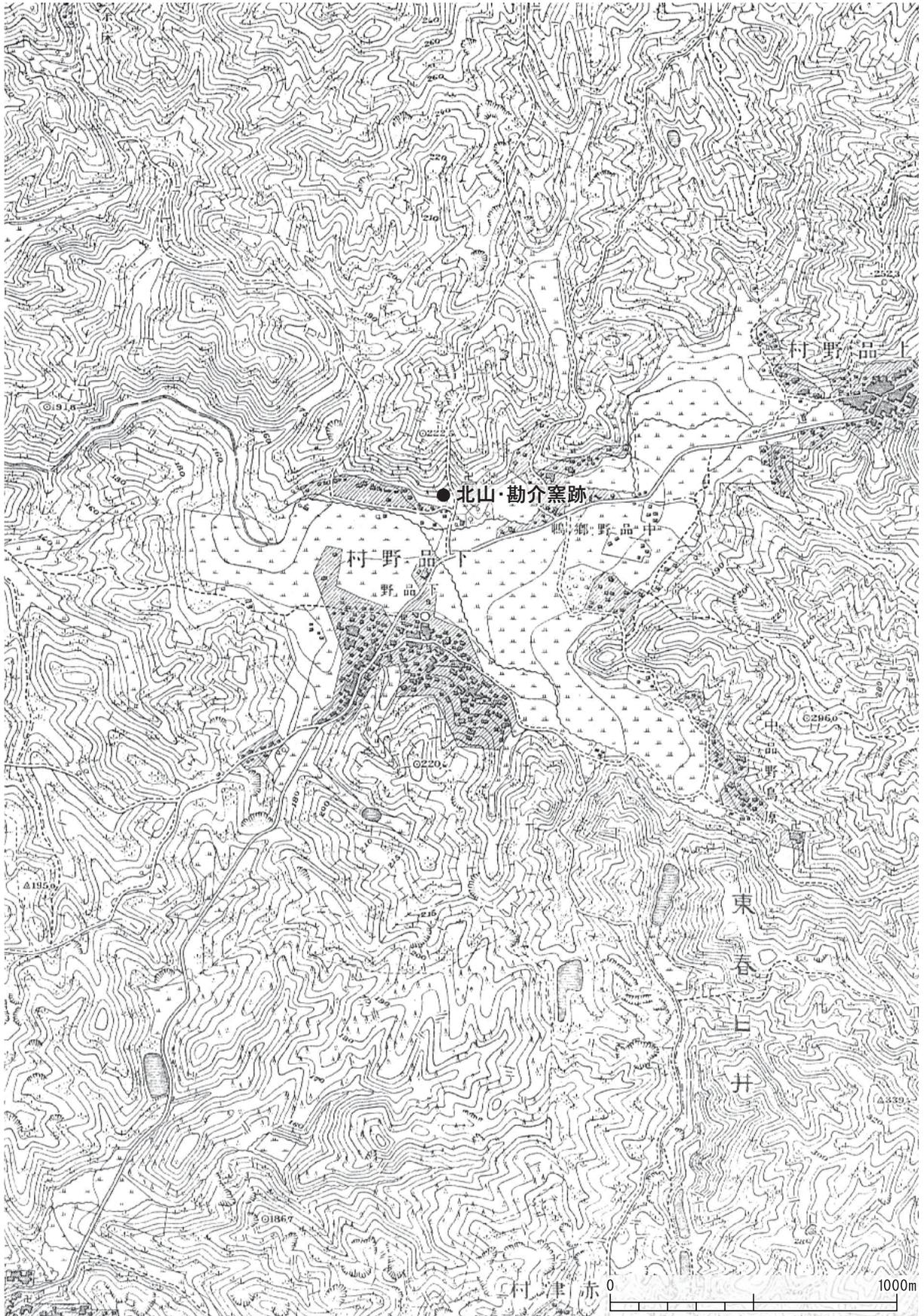
第2節 歴史的環境 (図4・5, 表1)

北山・勘介窯跡が位置する丘陵地は、水野川と支流の鳥原川との合流点付近、水野川右岸にあたる北部山地であり、南側には、水野川と鳥原川によって形成された品野盆地が広がる。盆地内の河川が形成した沖積地や周辺の丘陵地において、旧石器時代から近世にかけての遺跡が知られている*3。水野川の上流左岸の上品野遺跡*4において台形石器が出土し、旧石器時代後期まで遡ることが明らかにされている。また、縄文時代の遺跡は、水野川左岸には縄文時代の草創期の尖頭器のほか中期から晩期の土器が出土した品野西遺跡*5、鳥原川右岸に縄文時代草・前期の岩屋堂遺跡*6や中期の鳥原縄文遺跡*7が知られ、水野川の上流域の上品野蟹川遺跡*8では、縄文時代後期から弥生時代前期の土器が出土している。また、上品野遺



瀬戸市史編纂委員会1986『瀬戸市史』資料編二自然および
愛知県1997『愛知県活断層アトラス』を引用一部改編

図2 瀬戸市域の地質

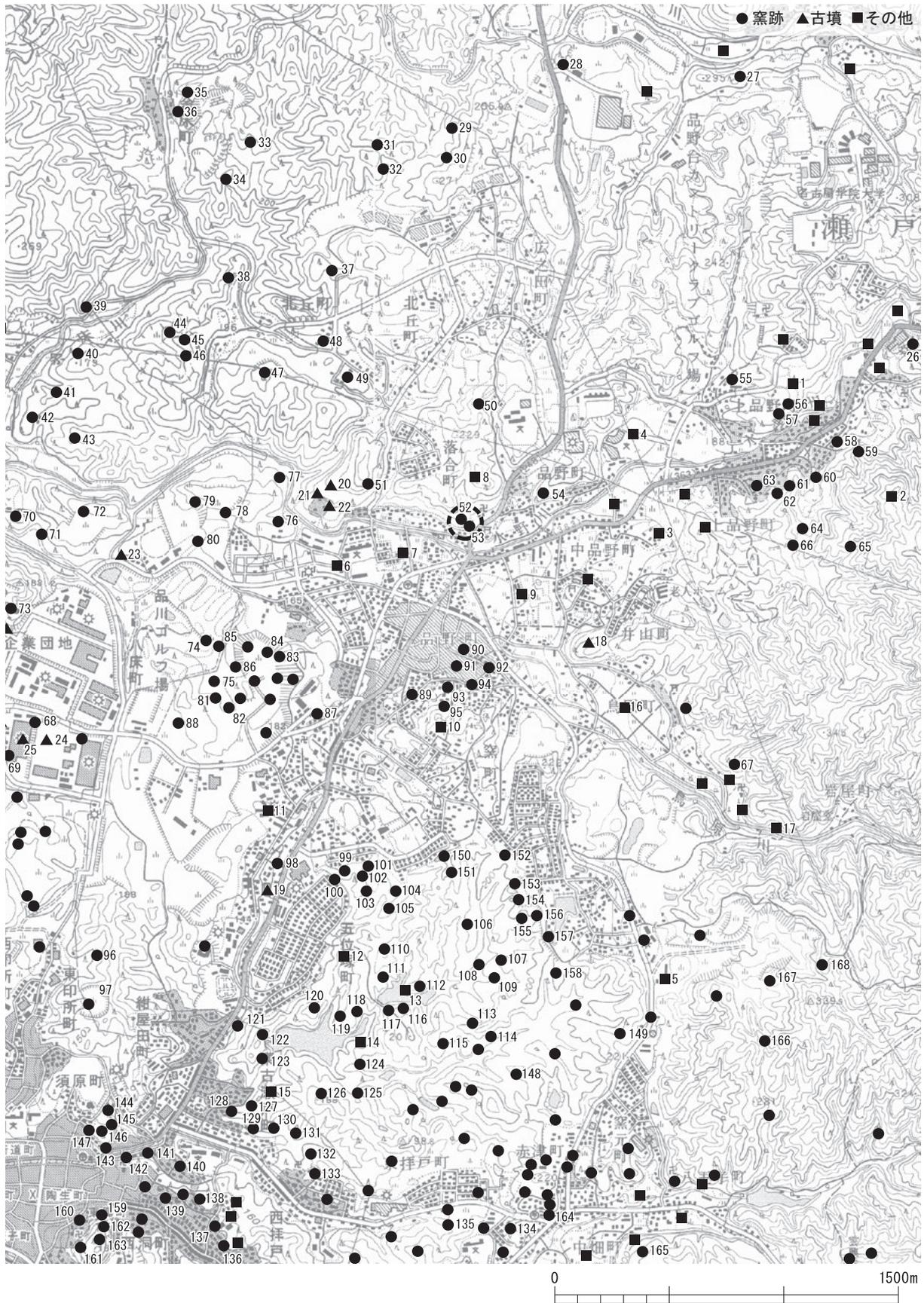


「この地図は、明治24年測量 大日本帝国陸地測量部発行二万分の一地形図「瀬戸」を使用したものである。」

図3 北山・勘介窯跡周辺の地形（縮尺 1/20,000）

表1 北山・勸介窯跡周辺遺跡一覽表

No.	遺跡名	種別	時代	概要	No.	遺跡名	種別	時代	概要	No.	遺跡名	種別	時代	概要
1	桑下城跡	城跡	中世	磁胎陶器、木・金属製品 平成17～22年調査	57	桑下窯跡	窯跡	15世紀	磁胎陶器	113	大榎B窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器、片口鉢
2	品野城跡	城跡	中世		58	稲荷神社北窯跡	窯跡	19世紀	磁器	114	大榎窯跡	窯跡	13～15世紀	山茶碗、磁胎陶器、片口鉢 平成14年調査
3	上品野遺跡	集落跡	古代～近世	縄文土器、須恵器、灰輪陶器他 昭和63年調査	59	稲荷神社窯跡	窯跡	19世紀	磁器	115	種窯跡	窯跡	13～15世紀	山茶碗、磁胎陶器 平成14年調査
4	上品野蟹川遺跡	集落跡	縄文～中世	縄文土器、須恵器、灰輪陶器他 平成7年調査	60	上品野B窯跡	窯跡	19世紀	磁器	116	馬ヶ城L窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器
5	針原遺跡	散布地	縄文	縄文土器、石器	61	上品野C窯跡	窯跡	19世紀	磁器	117	馬ヶ城K窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器
6	品野西遺跡	集落跡	縄文～中世	縄文土器、須恵器、灰輪陶器他 平成3～5年調査	62	清五郎窯跡	窯跡	19世紀	磁器	118	馬ヶ城H窯跡	窯跡	13～15世紀	山茶碗、磁胎陶器、片口鉢
7	落合橋南遺跡	集落跡	縄文～中世	縄文土器、須恵器、灰輪陶器他 平成7～9年調査	63	上品野D窯跡	窯跡	19世紀	磁器	119	馬ヶ城I窯跡	窯跡	13～15世紀	山茶碗、磁胎陶器
8	落合城跡	城跡	中世		64	宇下ノ窯跡	窯跡	14～15世紀	磁胎陶器、片口鉢 平成13年調査	120	馬ヶ城Q窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器
9	品野中部遺跡	散布地	古代～近世	土師器、須恵器、山茶碗、磁胎陶器	65	上品野A窯跡	窯跡	15世紀	山茶碗、磁胎陶器、片口鉢	121	五位塚K窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗
10	山崎城跡	城跡	中世		66	中洞窯跡	窯跡	13～14世紀	磁胎陶器、片口鉢 平成13年調査	122	水源地西窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器
11	阿弥陀峰城跡	城跡	中世		67	養窯跡	窯跡	14～15世紀	磁胎陶器、片口鉢 平成10～14年調査	123	馬ヶ城S窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器
12	五位塚J遺跡	散布地	18世紀		68	敷成口1・2号窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器 昭和57年調査	124	馬ヶ城窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器、片口鉢
13	馬ヶ城M遺跡	散布地	古代		69	焼1・2号窯跡	窯跡	13～14世紀	山茶碗、片口鉢 昭和57年調査	125	馬ヶ城G窯跡	窯跡	13～14世紀	山茶碗、磁胎陶器、片口鉢
14	馬ヶ城跡	城跡	中世		70	種成1・2号窯跡	窯跡	13～15世紀	山茶碗、磁胎陶器、片口鉢	126	留林窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器
15	瀬戸城跡	城跡	中世		71	種成3号窯跡	窯跡	13世紀		127	馬ヶ城R窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器
16	鳥原遺跡	集落跡	古代～近世	土師器、須恵器、山茶碗、磁胎陶器、昭和62年調査	72	種成4号窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗 昭和63年調査	128	菊畑窯跡	窯跡	15世紀	磁胎陶器
17	岩屋堂遺跡	散布地	縄文	縄文土器、石器	73	種成5号窯跡	窯跡	14世紀	山茶碗	129	東古瀬戸A窯跡	窯跡	13～14世紀	山茶碗
18	井山古墳	古墳	古墳	土師器、須恵器	74	穴田A窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗	130	井守沢C窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器
19	五位塚古墳	古墳	古墳	埴埴、須恵器	75	穴田B窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗	131	井守沢B窯跡	窯跡	15世紀	山茶碗、磁胎陶器、片口鉢
20	太白1号墳	古墳	古墳	埴埴、横穴式石室、須恵器 昭和50年調査	76	品川北6号窯跡	窯跡	14世紀	山茶碗	132	東古瀬戸B窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器
21	太白2号墳	古墳	古墳		77	品川北7・8号窯跡	窯跡	13～14世紀	山茶碗、磁胎陶器、片口鉢	133	金剛院裏窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器
22	太白3号墳	古墳	古墳		78	品川北1・2号窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器	134	小左衛門窯跡	窯跡	17～19世紀	磁胎陶器
23	八床古墳	古墳	古墳		79	品川北3・4号窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器	135	秋坂窯跡	窯跡	13～14世紀	磁胎陶器
24	焼1号墳	古墳	古墳	埴埴、横穴式石室、須恵器 昭和58年調査	80	品川北5号窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗	136	東洞A窯跡	窯跡	15～19世紀	磁胎陶器、磁器 平成24年調査
25	焼2号墳	古墳	古墳	埴埴、横穴式石室、須恵器 昭和58年調査	81	八床1号窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器、片口鉢 昭和36年調査	137	洞窯跡	窯跡	15～19世紀	磁胎陶器 平成24年調査
26	上品野丸山窯跡	窯跡	15世紀	磁胎陶器	82	八床2号窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器 昭和44年調査	138	王子沢奥窯跡	窯跡	19世紀	磁胎陶器
27	上半田川A窯跡	窯跡	近代	磁器	83	八床7・8号窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器 昭和44年調査	139	仲洞窯跡	窯跡	17～19世紀	磁胎陶器 昭和63年調査
28	庄之田3号窯跡	窯跡	13～14世紀	山茶碗、磁胎陶器	84	八床9・10号窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器 昭和44年・平成8年調査	140	古瀬戸小西窯跡	窯跡	19世紀	磁胎陶器 昭和63年調査
29	七曲窯跡	窯跡	14～15世紀	山茶碗、磁胎陶器、片口鉢	85	八床11・12号窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器 昭和44年調査	141	王子沢窯跡	窯跡	16世紀	磁胎陶器 昭和58年調査
30	北丘C窯跡	窯跡	14～15世紀	磁胎陶器	86	八床13・14号窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器	142	寺本窯跡	窯跡	16世紀	磁胎陶器 昭和60年調査
31	北丘A窯跡	窯跡	14世紀	山茶碗	87	八床18号窯跡	窯跡	15世紀	磁胎陶器	143	夕日窯跡	窯跡	15～16世紀	磁胎陶器 平成25年調査
32	北丘B窯跡	窯跡	14世紀	山茶碗、磁胎陶器	88	八床19号窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗	144	夕日3号窯跡	窯跡	19世紀	磁胎陶器
33	余床B窯跡	窯跡	14世紀	山茶碗、片口鉢	89	品野馬場窯跡	窯跡	19世紀	磁胎陶器	145	夕日4号窯跡	窯跡	19世紀	磁胎陶器 平成25年調査
34	余床C窯跡	窯跡	14世紀	山茶碗、片口鉢	90	蕨町C窯跡	窯跡	17～19世紀	磁胎陶器	146	夕日5号窯跡	窯跡	19世紀	磁器 25年調査
35	余床A窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗	91	蕨町B窯跡	窯跡	17～19世紀	磁胎陶器	147	日影窯跡	窯跡	17世紀	磁胎陶器
36	余床F窯跡	窯跡	19世紀	磁胎陶器	92	蕨町E窯跡	窯跡	18～19世紀	磁胎陶器	148	俣手窯跡	窯跡	13～15世紀	山茶碗、磁胎陶器
37	北山南7号窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器	93	蕨町A窯跡	窯跡	17世紀	磁胎陶器	149	奥白根・ツカイ窯跡	窯跡	13～17世紀	山茶碗、磁胎陶器 平成19年調査
38	豊刈窯跡	窯跡	14世紀	山茶碗、磁胎陶器	94	蕨町D窯跡	窯跡	17～19世紀	磁胎陶器	150	境1・2号窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器、片口鉢
39	余床E窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗	95	円六窯跡	窯跡	15～16世紀	磁胎陶器	151	五位塚A窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器
40	曾野C窯跡	窯跡	14世紀	山茶碗	96	稲屋田A窯跡	窯跡	13～14世紀	山茶碗、磁胎陶器 平成19年調査	152	境3号窯跡	窯跡	不明	
41	曾野E窯跡	窯跡	13～14世紀	山茶碗	97	兼印所A窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器 平成24年調査	153	境4号窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器
42	曾野H窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗	98	五位塚北窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗	154	境5号窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗
43	曾野D窯跡	窯跡	14世紀	山茶碗	99	五位塚G窯跡	窯跡	14世紀	山茶碗、磁胎陶器、片口鉢	155	境6号窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗
44	曾野B窯跡	窯跡	13～14世紀	山茶碗	100	五位塚H窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器	156	境7号窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器
45	曾野G窯跡	窯跡	14世紀	山茶碗	101	五位塚F窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器	157	境8号窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗
46	曾野F窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗	102	五位塚E窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器	158	馬ヶ城A窯跡	窯跡	13～14世紀	山茶碗、磁胎陶器、片口鉢
47	北山南3～5号窯跡	窯跡	13～15世紀	山茶碗、磁胎陶器	103	五位塚D窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器	159	経塚山東窯跡	窯跡	17世紀	磁胎陶器
48	北山南6号窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗	104	五位塚B窯跡	窯跡	13～15世紀	山茶碗、磁胎陶器	160	経塚山西窯跡	窯跡	17世紀	磁胎陶器 平成8年調査
49	北山南1・2号窯跡	窯跡	13～14世紀	山茶碗、磁胎陶器	105	五位塚C窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器	161	経塚山南窯跡	窯跡	15～19世紀	磁胎陶器、磁器
50	広之田B窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗	106	殿原窯跡	窯跡	13～14世紀	山茶碗、磁胎陶器	162	朝日下窯跡	窯跡	15～16世紀	磁胎陶器
51	落合窯跡	窯跡	16世紀	磁胎陶器	107	馬ヶ城C窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器	163	朝日窯跡	窯跡	15～16世紀	磁胎陶器
52	勸介窯跡	窯跡	16世紀	磁胎陶器 平成27年調査	108	馬ヶ城窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器	164	赤津B窯跡	窯跡	17世紀	磁胎陶器 昭和60年調査
53	北山窯跡	窯跡	近代	磁胎陶器、磁器 平成27年調査	109	馬ヶ城B窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器	165	鳳山A窯跡	窯跡	16世紀	磁胎陶器 平成11・13年調査
54	品野8丁目A窯跡	窯跡	19世紀	磁器	110	五位塚I窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器、片口鉢	166	赤津長根窯跡	窯跡	14世紀	山茶碗、磁胎陶器、片口鉢 昭和50～55年調査
55	西窯跡	窯跡	16世紀	磁胎陶器	111	馬ヶ城J窯跡	窯跡	13世紀	山茶碗、磁胎陶器、片口鉢	167	五葉窯跡	窯跡	13～14世紀	山茶碗、磁胎陶器 平成13年調査
56	桑下東窯跡	窯跡	16世紀	磁胎陶器 平成17年調査	112	壹原窯跡	窯跡	13～14世紀	山茶碗、磁胎陶器	168	敦立窯跡	窯跡	14世紀	山茶碗、磁胎陶器



「この地図は、国土院発行の2万5千分の1地形図「高藏寺」「瀬戸」「多治見」「猿投山」を使用したものである。」

図4 北山・勘介跡周辺の地形 (縮尺 1/25,000)

跡*9でも、縄文時代晩期から弥生時代にかけて貯蔵穴群や古墳時代の集落跡が確認されたほか、古代から中世の集落跡が確認されており、品野地区の実態が明らかにされつつある。

また、水野川流域の丘陵地には、いずれも古墳時代後期に属すると考えられる円墳が分布する。市域には120余基の古墳があり、約半数がこの水野川流域に分布している。このうち、品野盆地では、3基の天白古墳群*10がわずかにまとまるものの、八床古墳*11、井山古墳*12が確認されるにすぎず大変希薄である。

このほか、窯業生産遺跡である窯跡は盆地周辺の丘陵地から比較的多く確認されている。これらは、13世紀から14世紀にかけての山茶碗窯や古瀬戸前期から後期にかけての施釉陶器窯だけではなく、集落に近接する丘陵部の末端に窯跡が築かれるようになる古瀬戸後期終末の窯跡である、西窯2号窯跡*13や桑下窯跡*14が水野川上流部の右岸で確認されている。なお、続く大窯期の窯跡は西窯跡*15や桑下東窯跡*16のほか、水野川と鳥原川との合流点付近の水野川左岸の盆地に近接した丘陵地の末端部で落合窯跡*17、勘介窯跡*18が知られている。

また、盆地周辺の丘陵地には落合城・桑下城・品野城・山崎城などの中世城館*19が確認されており、このうち桑下城*20で発掘調査が実施されており、大窯の桑下東窯跡との関連が指摘されている。

このほか、盆地南部に近接する丘陵地には窯町A～D窯跡*21が確認されており、連房式登窯のほか大窯の存在が推定されている。なお、磁器生産の窯跡*22も確認されている。

註

- 1) 『瀬戸統計書』瀬戸市 2015
- 2) 『瀬戸市史 資料編二 自然』瀬戸市史編纂委員会 1986
- 3) 『瀬戸市詳細遺跡地図』瀬戸市教育委員会 1997
- 4) 『上品野遺跡』財団法人 愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター 2005
- 5) 『品野西遺跡』財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター 1997
- 6) 「岩屋堂遺跡」『瀬戸市詳細分布調査報告書』瀬戸市教育委員会 1997
- 7) 「鳥原縄文遺跡」『瀬戸市詳細分布調査報告書』瀬戸市教育委員会 1997
- 8) 『上品野蟹川遺跡』財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター 1998
- 9) 前掲註(4)
- 10) 「天白古墳」『瀬戸市詳細分布調査報告書』瀬戸市教育委員会 1997
- 11) 「八床古墳」『瀬戸市詳細分布調査報告書』瀬戸市教育委員会 1997
- 12) 「井山古墳」『瀬戸市詳細分布調査報告書』瀬戸市教育委員会 1997
- 13) 「西窯2号窯」『瀬戸市詳細分布調査報告書』瀬戸市教育委員会 1997
- 14) 「2. 桑下窯跡」「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅹ』瀬戸市教育委員会 1991
- 15) 「7. 西窯」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』瀬戸市教育委員会 1986
- 16) 『桑下東窯跡』(公財)愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター 2011
- 17) 「9. 落合窯」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』瀬戸市教育委員会 1986
- 18) 「10. 勘介窯」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』瀬戸市教育委員会 1986
- 19) 『中世城館跡調査報告Ⅰ(尾張地区)』愛知県教育委員会 1991
- 20) 『桑下城』(公財)愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター 2013
- 21) 「窯町A～D窯跡」『瀬戸市詳細分布調査報告書』瀬戸市教育委員会 1997
- 22) 稻荷神社窯跡など数カ所確認されている。『瀬戸市詳細分布調査報告書』瀬戸市教育委員会 1997

第3節 発掘調査に至る経緯・経過

(1) 公益財団法人 瀬戸市文化振興財団による調査

瀬戸市落合町地内の丘陵地において、「急傾斜地崩壊対策工事（防災・安全）」が愛知県尾張建設事務所により実施されることとなった。当該地には北山窯跡および勘介窯跡が所在していることから、この事業に伴う事前調査として北山窯跡と勘介窯跡の発掘調査が実施された。

現地調査は、公益財団法人瀬戸市文化振興財団が愛知県尾張建設事務所より受託した「急傾斜地崩壊対策工事（防災・安全）の内埋蔵文化財調査業務委託」により実施することとなった。

発掘調査は平成27年8月5日から9月30日まで実施し、工事着手とともに、引き続き平成28年3月11日までの期間で立会調査を実施した。

北山・勘介窯跡発掘調査は、平成27年7月より現地作業のための事前準備を開始し、現地調査は8月5日から開始した。（図6、写真図版3,5）

発掘調査では、北山窯跡の位置する北東丘陵斜面を中心に、工事用仮設道路建設予定地に調査区を設定した。調査区は当初地上に窯体の一部が露出する箇所を中心に設定した。ただし、調査開始時に伐採木が調査地の一部（東端）を被っており、現況地形を確認することが困難な部分も認められた。このため、東端部では伐採して除去したのち設定した。

調査はまず調査区南側の窯体の断面が露出をする崖面を精査したところ崖面に広がる窯体の一部を検出した。この壁面を横軸として、5m×5mのグリッドを6カ所設定した。表土を除去したところ、窯体部分は北側へも遺構が続くことから、推定される窯体の中軸ラインを設定するとともに横軸を設定し窯体の調査を進めた。その後、窯体の末端部と推定した地点から煙突と思われる基礎も確認でき、本来の中軸とは異なることから、あらためて中軸を設定した。また、窯体部分の東側では通路状遺構や石垣および窯脇の平坦面を検出し、西側でも平坦面の一部を確認している。

また、勘介窯跡では2カ所において試掘坑を設定し遺構の確認調査を実施した。

これらの掘削作業はすべて人力で行い、表土層の除去から調査を進め、遺構検出ののち、平面図および断面図を作成し、写真撮影を実施した。その後、現況地形測量を実施するとともに9月30日発掘調査を終了した。10月1日工事が開始されたことから、引き続き立会い調査を進め、勘介窯跡では2基の窯体と灰原、北山窯跡の平坦面と物原を確認し、3月10日すべての現地作業を終了した。調査面積は約190㎡である。

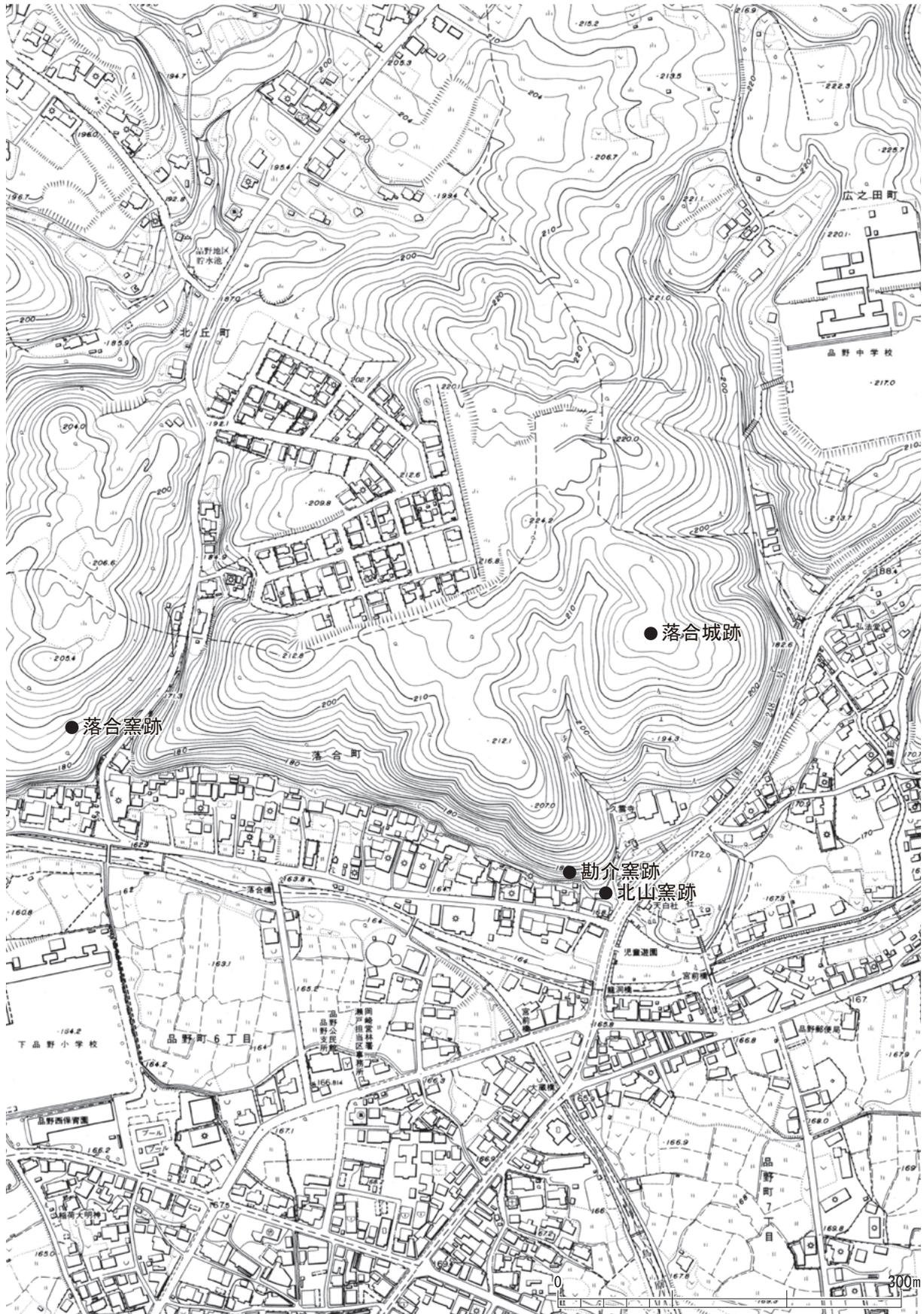
現地調査終了後、概要報告書の作成作業を実施し、執筆および編集の作業を経て、平成28年3月18日概要報告書を刊行した。

(2) 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターによる調査

同工事計画の変更に伴い、北山窯跡の隣接地に新たに調査の必要性が生じた。そのため、既に調査が終了した範囲の北側に隣接する斜面地形について、平成29年5月9日から26日にかけて100㎡の面積の調査を行った。追加された調査地点は物原（トチ層）と平坦面・通路に続く部分であり、物原層の掘削と排土処理等を機械掘削で行い、平坦面と通路部分の調査を中心に人力掘削を進めた。国土座標（世界測地系）を用いて記録（測量）を行い、立会調査の扱いとなった南側（民家側）に残る窯体の一部については、北側壁面の断面観察と記録を行った。調査による出土資料は磁器製品などを中心にコンテナ10箱程度と築窯時に形成された整地層よりコンテナ2箱の大窯製品を採集した。

参考文献

『瀬戸市詳細遺跡地図』瀬戸市教育委員会 1997



「この地図は、瀬戸市発行の5千分の1瀬戸市平面図「18」を使用したものである。」

図5 北山・勘介窯跡調査地点位置図 (縮尺 1/5,000)

第2章 遺構

第1節 調査の方法 (図6,7)

平成27年8月5日から平成28年3月10日にかけて現地調査を実施した。調査地点は水野川の右岸の丘陵北斜面に位置しており、北山窯跡の窯体が所在する丘陵斜面とその西側にあたる勘介窯跡が位置する丘陵斜面である。

調査区は北山窯跡が露出する崖面地点を中心として、5m×5mのグリッドを設定している。グリッドは北山窯跡の窯体が露出する崖面に直交する方向を主軸とした5m×5mで設定した。グリッドラインは、斜面上方の北西方向から南東東方向へ6～8の数字、北西方向から南東方向へA～Eのアルファベットをあて、各グリッドの名称は、北端隅のポイント名称をあてた(図6)。調査面積は約190㎡である。グリッドの設定は5m×5mの範囲を標準としたが、工事用の作業道路部分として掘削される範囲としていることから、変形部分が多い。調査区の掘削は何れも表土からすべて人力で行い、上層の遺構面を確認した面で掘削をとどめている。すべての調査区で平面および土層断面の測量と写真撮影を実施した。その後、断割り調査を実施し、下層の遺構を確認するとともに、窯体の下層に堆積した物原の掘削を進め、平面および土層断面の測量と写真撮影を実施した。また、発掘調査後半において調査区の約190㎡について地形測量を実施して9月30日発掘調査を終了した。

なお、勘介窯跡では2カ所において試掘坑を設定し遺構の確認を実施している。

発掘調査を終了後引き続き10月1日から実施した立会調査では、勘介窯跡の2基の窯体と灰原を確認し、平成28年3月10日に終了した。

第2節 北山窯跡

(1) 調査区の概要・検出遺構 (図8～10, 写真図版2～10)

今回調査を行った調査区の基本層序は、窯体や平坦面造成に伴う大規模な盛土や改変がなされていて、地山が掘削された地点や盛土が認められる地点もある。概ね上層に腐植土(表土)があり、その下層では盛土を確認した。表土層は地点により若干色調が変化するものの、一般的に灰褐色を呈し粒位は細かく、小礫を含む。地山は砂礫層で、角礫が多く混在する。

調査区で確認できた遺構は、中央付近の窯体および西側と東側に分かれて分布する。調査区の中央では窯体をはじめ、東側隣接地点から窯体に付属する窯脇平坦面(写真図版5上)を検出した。西半では、窯体脇には石垣があり、この石垣の西側には平坦面1が確認でき、窯体に並行する石垣だけでなくこれに直交する石垣(石列)も確認した。また、東半では、調査区東端から南北にのびる通路状遺構1の一部とともに並行する溝(写真図版9左1)が確認されており、溝にかかる自然石の橋と北側へ続く通路状遺構2(写真図版9左1)のほか窯脇と通路状遺構2の脇、溝脇にそれぞれ石垣を検出した。なお、窯体の北側にあたる調査区北半では窯体奥側に堆積する物原および平坦面2の一部を確認している。

なお、立会調査において、北山窯の西側にかけて広がる平坦面1の西側部分の一部が検出でき、この平坦面の下に堆積する物原の下層にも新たに平坦面(写真図版8右3)が確認できた。

このほか、本窯の近接地である窯体北側の丘陵斜面中腹に山ノ神が祭られている(写真図版8右4)。

以下、各遺構について窯体、物原、平坦面、通路状遺構に分けて概要を解説する。



図6 北山・勘介窯跡 調査範囲位置図 (縮尺1/250)

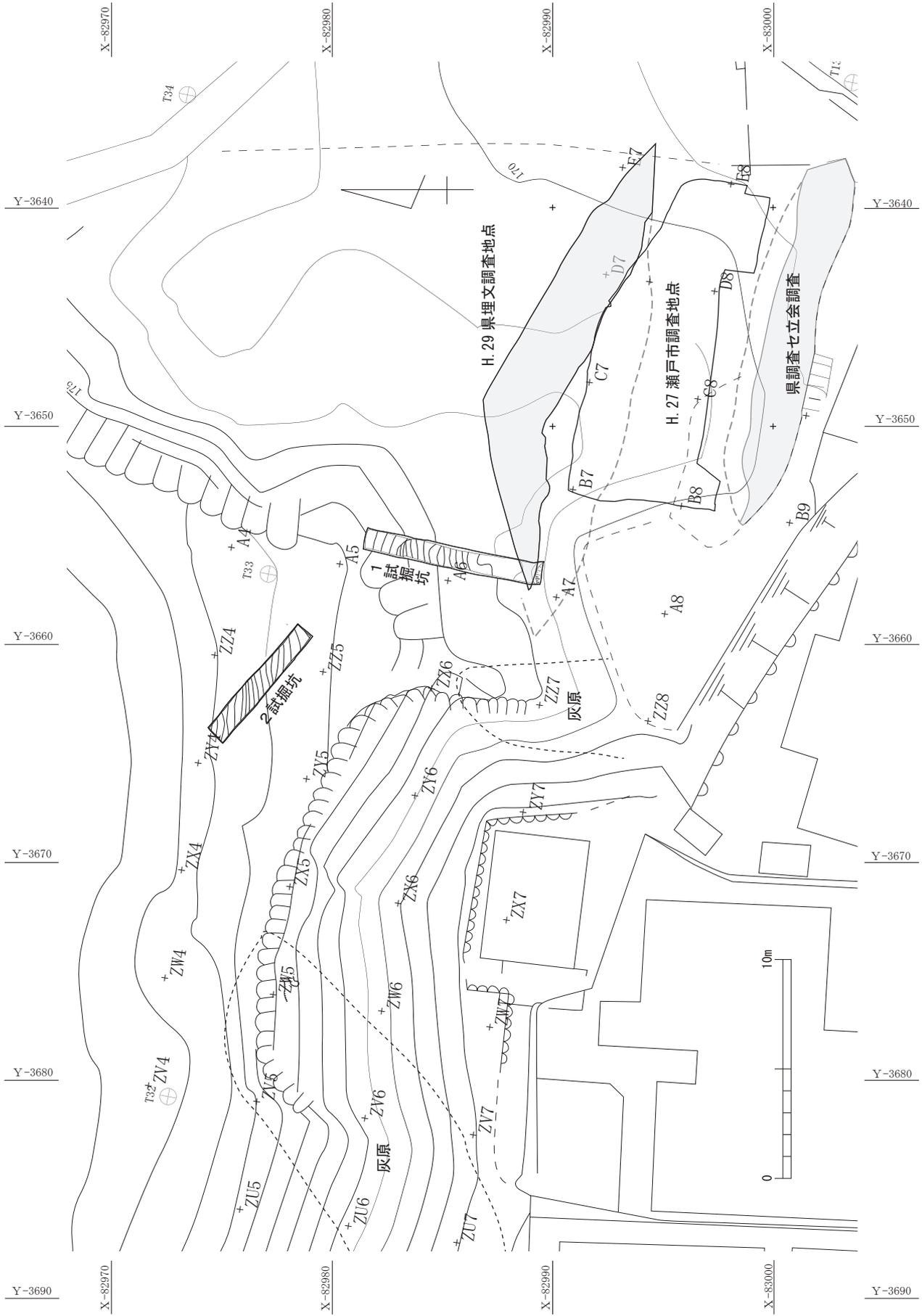


図7 北山・勘介窯跡 調査区配置図 (縮尺 1/250)

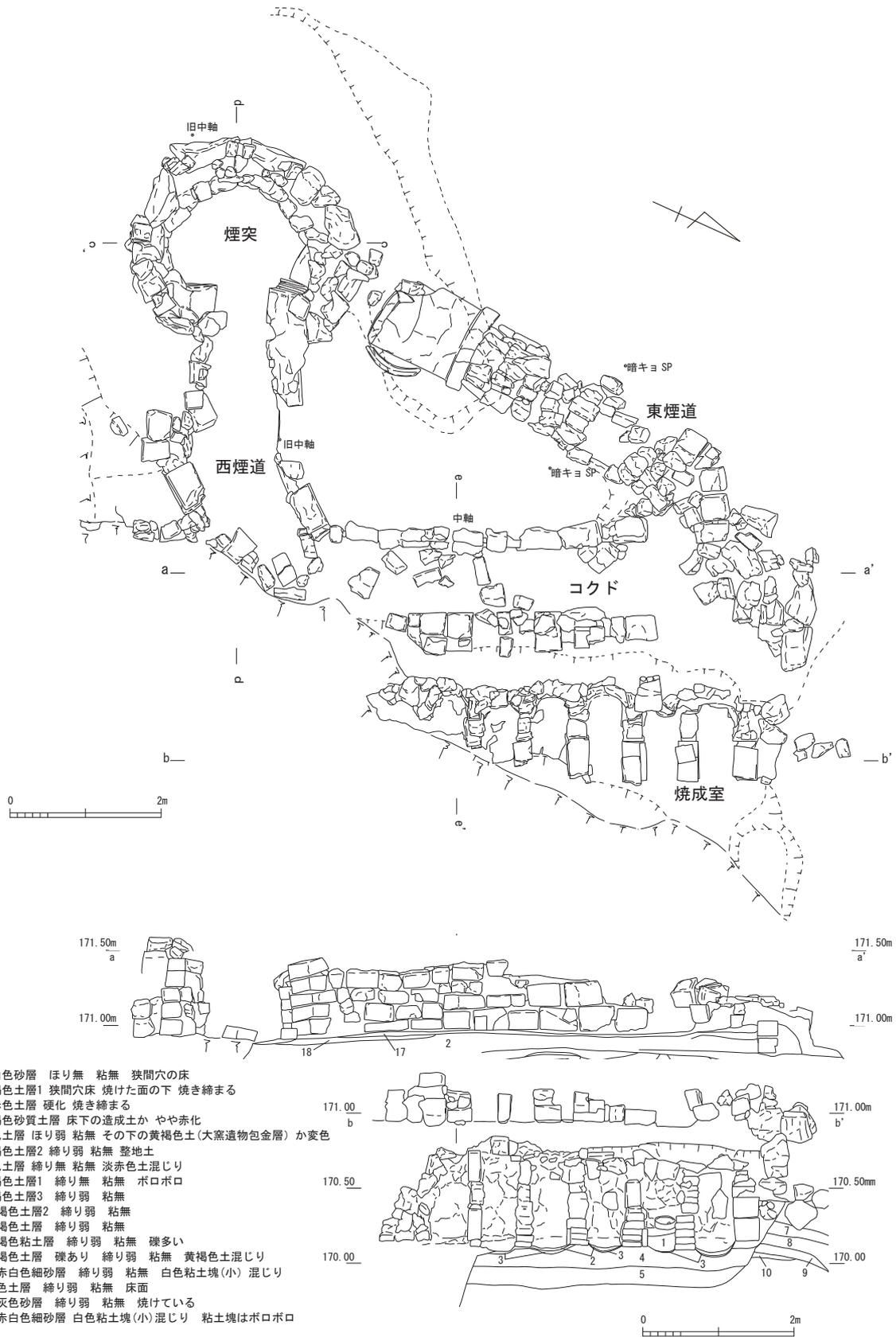


図8 北山窯跡 窯体実測図(1) (縮尺1/40)

ア. 窯体 (図8～10、写真図版5～8)

調査区中央付近で確認できた窯体は連房式登窯の上方が残存しており、1房(室)の焼成室と、コクド、西煙道、東煙道、煙突がある(写真図版5下)。検出した窯体は残存長5.2m、最大幅4.3mが測られた。主軸はN 18.5° Wである。断割り調査により、煙道や煙突の下層には物原の堆積があり、焼成室の下層には堆積が認められないことから、煙道および煙突は窯体の改築に伴って新たに追加されたもので、窯体は二次に変遷することが確認できた。窯体は下端から焼成室、コクド、煙道があり上端に煙突がある。以下、部位ごとに解説する。

焼成室(写真図版5,6)は、床面が標高170.1mに構築されており、1房(室)のみ確認した。焼成室の大半がすでに削平されており、右奥側が部分的に残存するにすぎない。最大で幅2.6m、奥行き0.9mまで残存する。床面は砂床で上段床面との比高差は0.8mである。奥壁側は縦狭間構造で狭間が7ヵ所残存する。狭間柱は角クレあるいは柵板で構成されており、最大で0.6mの高さまで残存する。右壁は角クレで構築される。

コクド(写真図版6)は幅3.9m、奥行き1.2m。床面は砂床で左壁は残存しないが奥壁と右壁は角クレで構築される。中央に長辺方向の角クレ列があり中央付近では列の一部が空白となっている。奥壁の左右(東西)に煙道が接続する。右壁の手前側に出入口がある。

西煙道(写真図版6)は最大幅0.5m、奥行き1.7mで、高さ0.7mまで残存する。コクド奥壁の左(西)端にあり、窯体の中軸方向にほぼ直線的に伸びて端部が煙突に接続する。床面は砂床で、天井部は崩落して残存しないが埋土中に角クレが堆積することから、側壁とともに角クレで構築されたものであろう。端部はコクド側と煙突側ともに角クレがアーチ状に積まれている(写真図版7右2)。

東煙道(写真図版8)は中央付近で幅0.35m、高さ0.4m。コクド奥壁の右(東)端にあり、一旦中軸方向に伸び左(西)側へ屈曲して煙突に接続する。コクドから接続し中央付近は天井部と側壁は角クレで

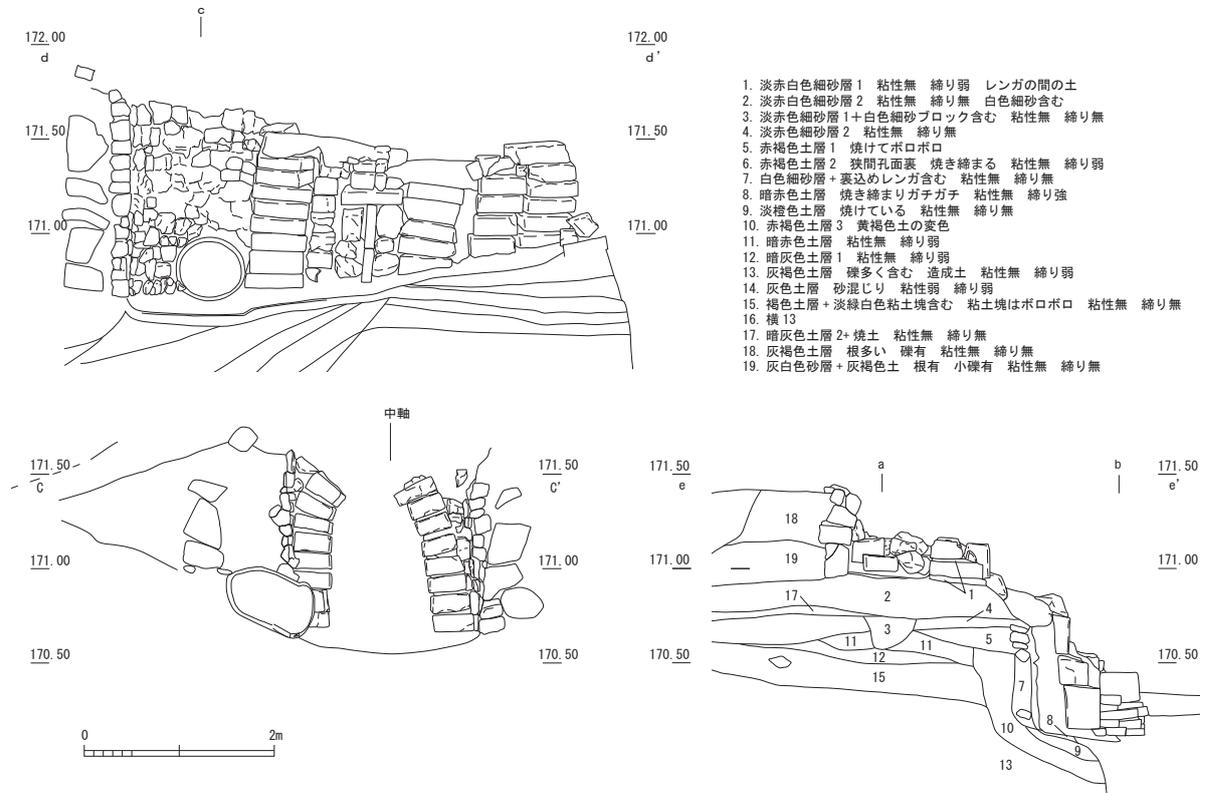


図9 北山窯跡 窯体実測図(2) (縮尺1/40)

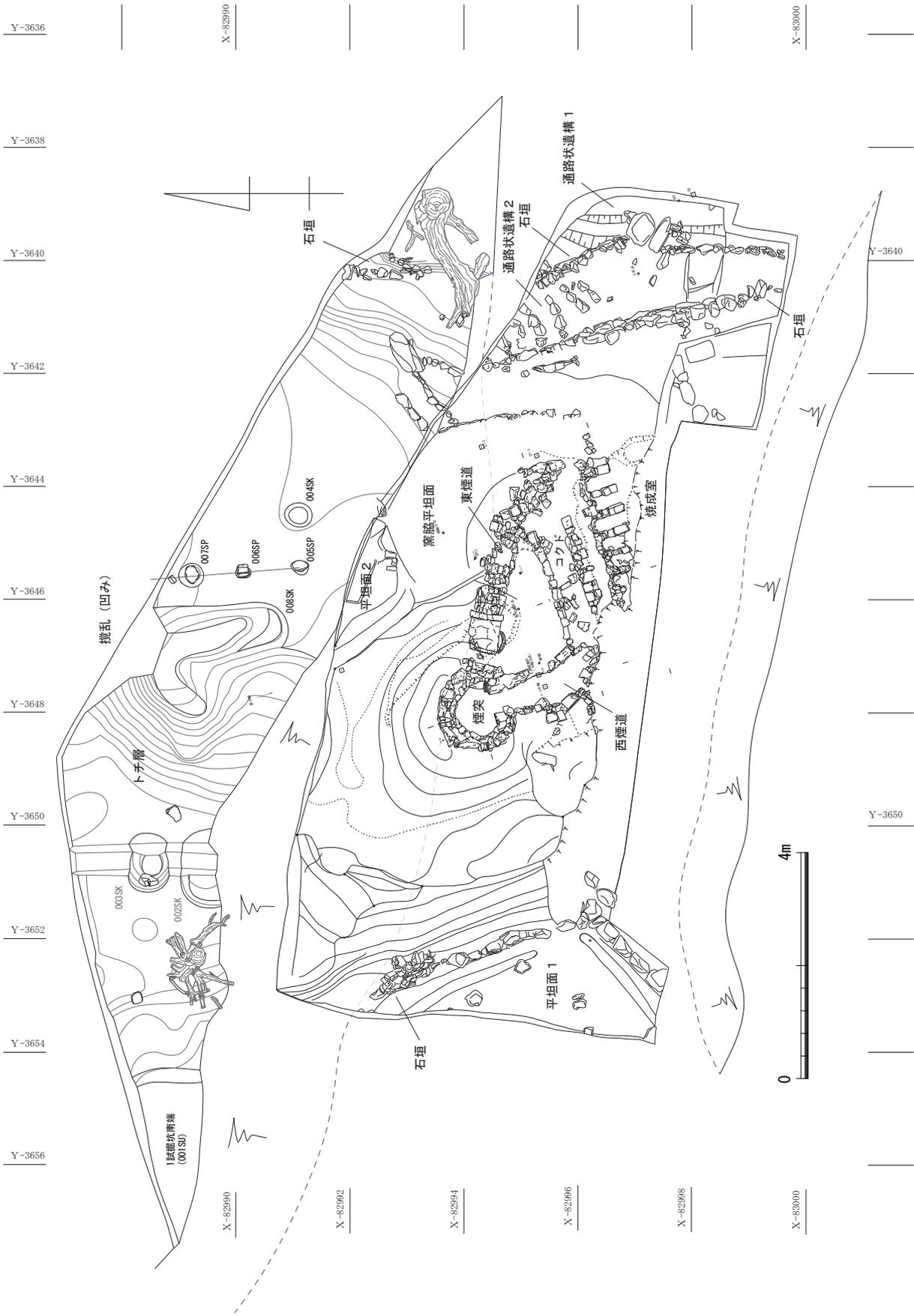


图 10 北山・勸介窯跡調査区位置図 (縮尺 1/100)

構築されており、煙突の手前が2連の土管となり、煙突脇に土管が挿入される構造（写真図版7右3）である。

煙突（写真図版6,7）床面は砂床で、径0.75 m、高さ1.1 mまで残存する。残存部は地下構造で、壁面は角クレで構築されており、その外側には自然石の石積みがある。周辺から筒状の陶器片が出土していることから、煙突の上方は筒状の陶器枠を重ねた構造と推定される。

イ. 物原（写真図版8）

二次窯段階の物原は窯体の上方B7グリッド付近で確認できた。分布範囲は幅7 m、奥行きは不明であるが北側調査区の外まで広がることは明らかである。物原はほとんどすべてがトチで構成され、主として板トチで若干磁器片を含む。最大で1.2 m堆積する（写真図版8右2）。

一次窯段階の物原は窯体の上方（北側）とその左右（東西）に分布する。7ラインの土層断面では幅11 mにわたり分布し、北側は調査区の外へ続く。最大で0.8 m堆積するが、その下層は地山ではなく盛土で、西側の一部で地山を確認している。（松澤）

平成29年度調査地点の南側壁面、上記の物原層を含む土層断面（7ライン付近）を図11に示す。注記番号no.1～6が大量の板トチ、磁器製品片を含む物原層（写真図版9左4）であり、さらに北側調査区外に向かって傾斜しつつ連続する。物原層の下層の整地層no.11には細片となった大窯期播鉢、匣鉢片が含まれる。さらに東側の平坦面下の整地層には近代の製品（陶器、播鉢）や匣鉢片、焼土が含まれる。（武部）

ウ. 平坦面（図10）

平坦面は窯体西側の石垣の西に平坦面1、窯体の北側にあたるC7グリッドから平坦面2を確認している。平坦面1は南北方向で4.0 m、東西方向で2.5 mまで残存する。

平坦面1は東側と南側に石垣があり、石垣下端に幅0.2 m程度の浅い溝が石垣面に並行する（図10）。この平坦面の西側は、現況地形でも明らかに平坦な地形でありさらに西側へ続くものと推定される。平坦面2は南北方向で1.6 m、東西方向で1.4 mまで残存する。南側の斜面の下には並べられた角クレが残存する（図10）。この平坦面の北側は、現況地形が平坦な地形で、北側へ広がるものと推定された。（松澤）

平成29年度の調査では、上記の平坦面2北側に接続する部分が4.0×3.0 mの範囲で確認された。西側は物原堆積層に覆われ、その境目は大きく凹み物原堆積自体は調査区外北側にかけて傾斜して深くなる。平坦面2の全体の形状は不明ながら、少なくとも東西5.6 m、南北4.4 m以上の空間が広がると推定される。平坦面上では1.2 m前後の間隔で並ぶ石列と浅い小土坑が検出された。石は平らな面を上にして検出されており、小規模な建物あるいは区画施設の痕跡の可能性が考えられる。（武部）

エ. 通路状遺構（図10, 写真図版5,9）

通路状遺構は現在の参道の下（通路状遺構1）とここから西側へ分岐するもの（通路状遺構2）がある。通路状遺構1は参道の下層0.7 mで確認した。最大幅0.4 m、延長2.4 mで南北側と東側は調査区の外側へと続いている。北から南へ傾斜しており表面は平坦で硬く締まる。西端に素掘りの溝がある。溝の断面形はU字形、幅0.6 m、延長2.6 m、深さ0.15 mの規模で、北から南へ傾斜する。この西側に石垣がある（写真図版9左1）。溝は南北側の調査区の外側へと続く。

通路状遺構2は通路状遺構1から西北側へ分岐する構造で、通路状遺構1脇の溝には自然石である花崗岩の板石が2枚架けられ石橋となる。最大幅1.2 m、延長4.1 mで北側は調査区の外側へと続いている。通路は傾斜しており、横方向に石材が並べられ階段状となる。この通路状遺構の側方は左右とも自然石の石垣である（写真図版9左1）。（松澤）

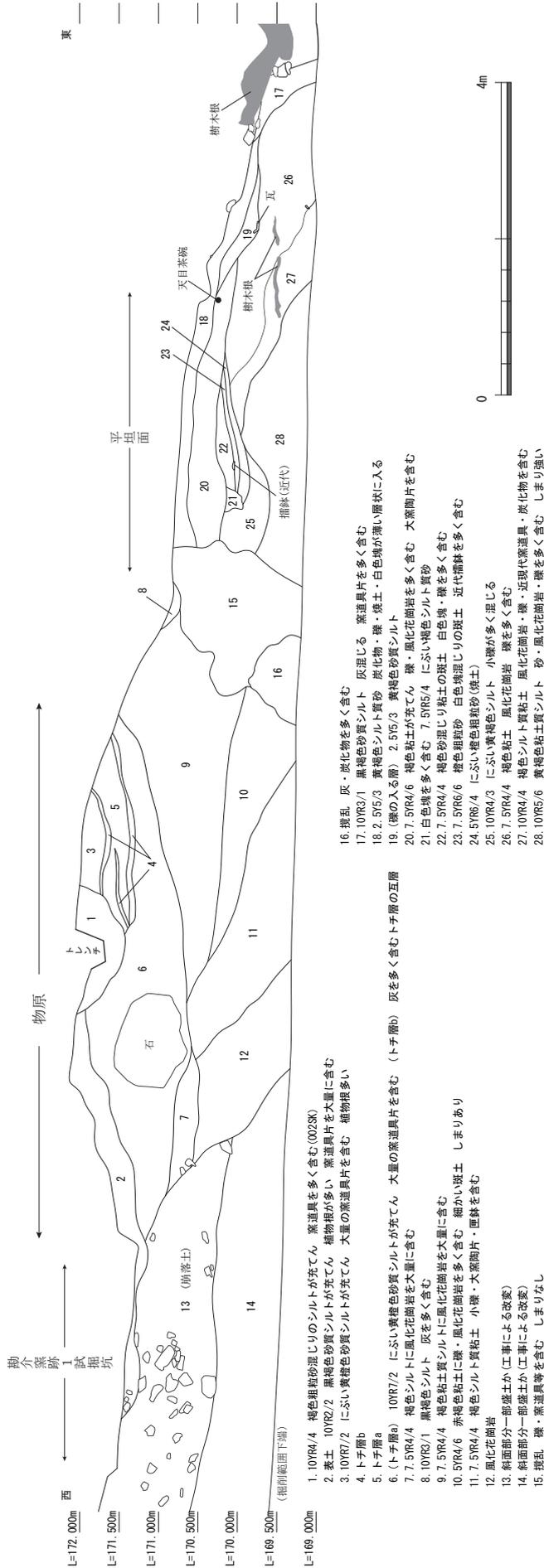


図 11 北山窯跡 調査範囲南壁土層断面図 (縮尺 1/80)

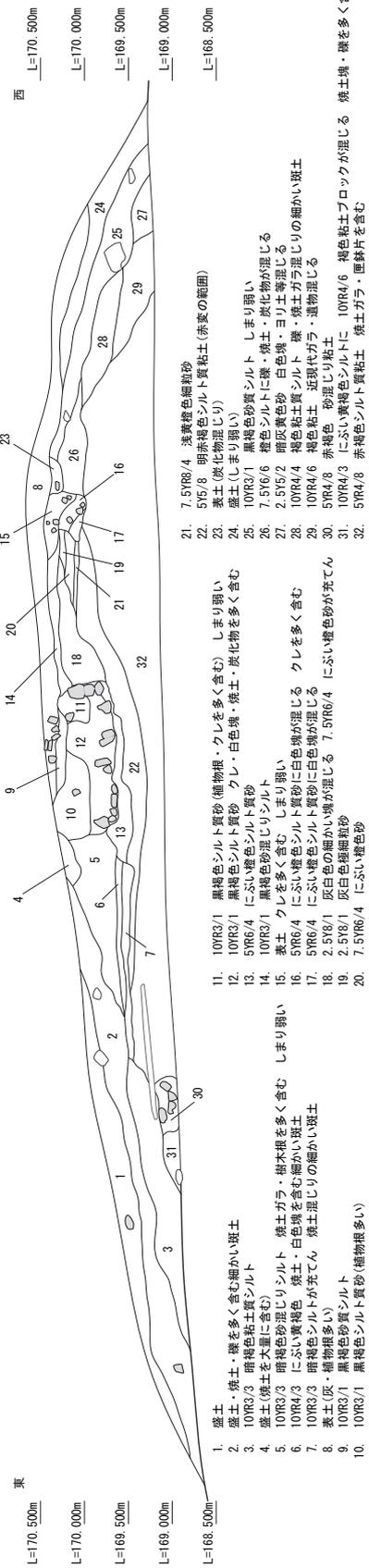


図 12 北山窯跡 窯体残存部土層断面図 (縮尺 1/80)

平成 29 年度調査では、参道の下となる通路状遺構 1 の西側の石垣の一部と平坦面 2 と通路状遺構 2 を繋ぐ部分が検出された。通路状遺構 1 の石垣は北端付近で高さ 68 cm である。土手表面に石材が充てられている状態であり、石材の隙間には匣鉢片が含まれているのがみえる。通路状遺構 2 の続きは西北側からさらに西側へ振り、窯脇平坦面から平坦面 2 に繋がる。3 段の階段の両脇の境界は不明瞭であり、横方向に並べられている石材のみが確認された。（武部）

オ．補足（窯体断面 図 12, 写真図版 10）

平成 27 年度窯体調査地点の南側部分にあたる。民家に沿って残る長さ約 17m の土手状部分について、北向きの壁面の記録を行った。連房式登窯の焼成室とその間の狭間の部分の確認できる。no. 6, 7 層と no. 19 ~ 21 層がそれぞれ焼成室床面に、no. 11, 12 付近のクレが狭間部分に相当する。なお、砂床を構成する白色砂層からサンプルを採取し、素焼(磁器製品未製品)片と比較して分析を行った。(第 4 章) (武部)

第 3 節 勘介窯跡

(1) 調査区の概要 (図 6, 7, 13 ~ 16, 写真図版 11 ~ 13)

勘介窯跡が存在する丘陵では、南斜面の末端部が現在宅地化されていて、丘陵裾部分はすでに削平され、斜面の大半は高さ 30 m 余の急峻な崖面となっており、崖下には住宅が密着する状況であった。なお、斜面上方と東側の斜面では崖面付近で試掘坑を設定して遺構の有無と堆積状況を確認しており、2 ヶ所の試掘坑では遺構は確認されなかった(写真図版 11)。

今回調査を行った調査区の基本層序は、調査地点が丘陵であるため、地山は黄褐色の砂礫層の堆積が認められ、崖面にはさらに下層の地山である礫層や砂岩層が認められる部分もある。概ね上層に腐植土(表土)があり、その下層では灰褐色土層があり、その下層は直接黄褐色の砂礫層の地山を確認した。灰褐色土層は地点により若干色調が変化するものの、一般的に灰褐色を呈する粘質土で粒位は細かく、小礫を多く含む。地山は砂礫層で、角礫が多く混在する。

試掘坑では遺構は確認できなかったものの、立会調査では、崖面上端部にわずかに残る斜面に物原の一部が露出する状況を確認でき、調査区の中央付近から 2 号窯の窯体とその西側に広がる灰原、東側からは 1 号窯の窯体の痕跡とこれに伴う灰原を確認した。また、東端では、北山窯の西側にかけて広がる平坦面 1 の一部とその下層から新たな平坦面が検出でき、勘介 1 号窯の灰原の一部を削平して北山窯の平坦面が造成されたことが確認できた。

なお、調査区西端崖面では 2 号窯の灰原の断面が確認できたことから、2 号窯の灰原が調査区外にあたる西側へ続くものと推定される(写真 13 右 2)。

以下、試掘坑と各遺構の概要を解説する。

(2) 検出遺構

ア．1 試掘坑 (図 7, 13, 写真図版 11)

1 試掘坑は北山窯の北西にあたる標高 173 m 前後の丘陵斜面に直交し、幅 1 m、延長 8 m に設定した。この斜面は試掘坑の中央付近から下方がすでに削平された状況が認められた。試掘坑上端部では表土直下の灰褐色土から大窯期の遺物が出土したが灰褐色土は薄く堆積するのみですぐに地山となる。削平された部分では褐色土が堆積しており、磁器製品に混じって大窯製品が出土した。この層の直下は角礫含む地山である。床面は比較的平坦ではあるものの、遺構ではなく盛土のための土砂を採掘した可能性が高い。

イ. 2 試掘坑 (図 7, 14, 写真図版 11)

2 試掘坑は 1 試掘坑の斜面上方、標高 177 m 前後の丘陵斜面に幅 1 m、延長 6.0 m に設定した。試掘坑では表土の下には灰褐色土層が堆積しており大窯期の遺物を伴う。北端部分には白粘土層の堆積があり、斜面の上方からの流入土の可能性が高い。試掘坑の大部分では灰褐色土は薄く堆積するのみで、すぐに角礫を含む地山となる。遺構は確認できず丘陵の斜面の一部であったものと思われる。

ウ. 勸介 1 号窯遺構 (図 7, 15, 写真図版 12)

窯体 (図 15, 写真図版 12)

調査区東側部分の崖面掘削で被熱したと推定される赤褐色土が確認できた。このため、斜面部分の表土を除去したところ、被熱部分の拡がり確認できた。最大幅 1.6 m、延長 4.3 m の範囲が赤褐色に被熱していて、周辺の表土中から小分炎柱や焼台、窯壁片とともに遺物も出土したことから、この被熱部分が窯体の痕跡と推定できる (写真図版 12)。

灰原 (図 7, 写真図版 13)

1 号窯は窯体の痕跡と推定した赤化範囲の南東側、斜面の下方に位置している。赤化範囲の下方は崖面となっていて、灰原は東側よりの一部が残存する。東側の斜面は 1 試掘坑 (図 13, 写真図版 11) の堆積状況から北山窯の造成に伴って削平されたものと推定でき、さらに下方には北山窯の平坦面 1 が所在しており、灰原の東側部分も失われ一部が残存するにすぎない。地形的には西側へ大きく傾斜する斜面がありこの部分から灰原の堆積を確認した。8 ラインの灰層では下層には炭粒を含む暗褐色土が堆積し、その上層に褐色土、表土が堆積する。暗褐色土は最大 0.3 m の厚さで堆積する (写真 13)。

エ. 勸介 2 号窯遺構 (図 7, 16, 写真図版 12, 13)

窯体 (図 16, 写真図版 12, 13)

調査区中央部分の崖面掘削で被熱したと推定される赤褐色土が確認できた。このため、斜面上端において表土を除去したところ、窯体の一部が検出できた。検出した窯体は焼成室上方の一部分であり、最大幅 1.3 m、延長 2.5 m の範囲で確認でき、天井支柱の痕跡が残る (写真図版 12, 13)。窯内や周辺の表土および褐色土とから窯壁片や遺物が出土した。

灰原 (図 7, 写真図版 13)

2 号窯の灰原は窯体を確認した斜面の西側の斜面上方から斜面の下端まで分布する。灰原の東側部分は崖面となっていて、灰原は一部が残存するにすぎない。斜面下端では下層には炭粒を含む暗褐色土が堆積し、その上層に褐色土、表土が堆積する。斜面上方では地山の上層には灰褐色土が堆積しており、多量のトチ片を含みその上層には斜面の下方と同様に褐色土、表土が堆積する (写真 13)。



图 15 勘介 1 号窯被熱範圍実測図 (縮尺 1/20)

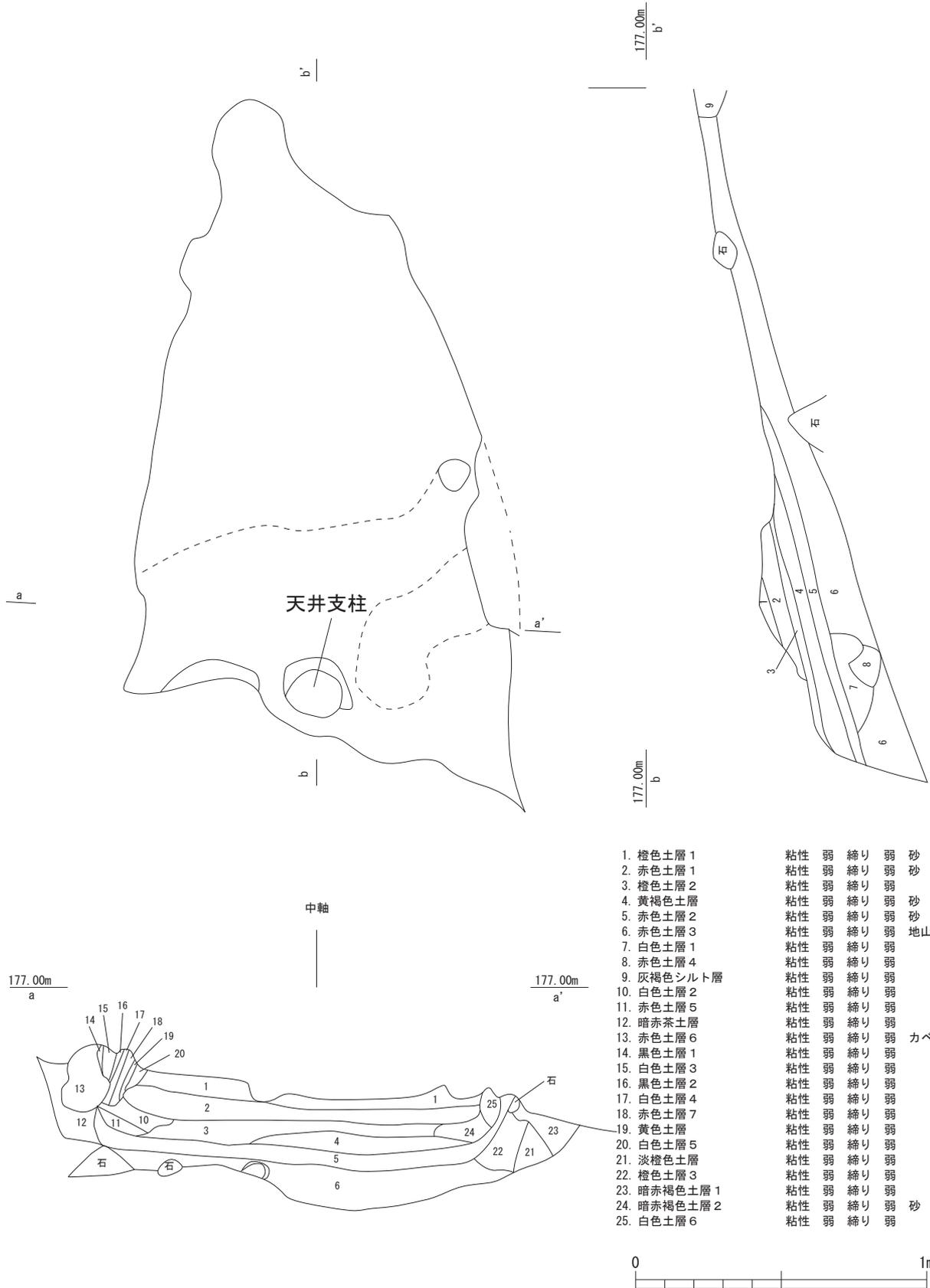


図 16 勘介 2 号窯窯体実測図 (縮尺 1/20)

第3章 遺物

第1節 北山窯跡 (図17～33)

北山窯跡の遺物は、窯体に伴う遺物は多くはないものの、物原を中心に出土している。このほか、平坦面などから出土していて、製品と窯道具とがあり全体でコンテナ箱に110箱である。このほか、花崗岩製の柱状で端部にU字形のくぼみをもつ製品の干し棚の台石(S-1, 写真図版20)がある。出土状況は概ね陶器は下層物原から、磁器は上層物原から出土している。窯道具の匣鉢はいずれの物原からも出土するが、下層ではロクロ製、上層は型製が大半を占める。(松澤)

製品には陶器の植木鉢・播鉢・蓋・鉢・皿・片口など、磁器では碗・蓋・小杯・湯呑・皿・鉢・容器・徳利・花瓶・水滴などがある。窯道具ではトチオサエ・色見・乳鉢・エブタ・匣鉢・棚板・ツク・トチ・栓などがあり、煙突の部材に用いられた土管や築窯材であるハコグレも含まれている。

整理の段階では、陶器・磁器を器種ごとに分け、破片点数のカウントではなく、ほぼ全ての重量の計測を行った(第5章8～10)。平成29年度調査時には近代陶磁器類について、遺存状況の良い資料を物原から選択的に採取した。平面的な出土地点、層位の情報は平成27年度調査にしたがう。

(1) 陶器製品 (図18～19 / 表8,9)

出土品のうちで主体を占めるのは**植木鉢**(1～5)であり、平面形が長方形のものと円形のものとがある。タタラ成形、型打ち(外型)技法による長方形のタイプは、底部から体部が直線的に僅かに開いて立ち上がり、外面四隅にかぎ状の足がつく。釉薬は底面を除く体部外面と内面は口縁付近に施され、色は白、緑、茶(赤)、青などがある。ロクロ成形の円形タイプの口径・器高は多様であり、直線的な体部から口縁部が外折して縁帯を持つもの、口縁端がやや肥厚して玉縁状となるもの、体部が丸みをもって立ち上がるもの、輪高台や貼り付け高台など器形も数種がみられる。釉薬は底部を除く外面から内面の口縁部付近に施され、色は白、青などが目立つ。両者いずれも底面に円形の穿孔がみられる。

播鉢(6～8)は口径に対して器高が低く体部が開く形状であり、口縁端部が肥厚して外面に浅い沈線がめぐる。口径が18cmと13cm前後の中・小型のものがあり、幅広の輪高台付近を除いて鉄釉が掛かる。内面底部から体部に密に播り目が施される。

小型の**片口**(9)体部は口径10cm、器高3.9cmと播鉢と同様、開くやや浅い形状であり、高台付近を除き灰釉が施される。片口(25)は口径19.8cmの半球形の体部に削出輪高台が付く。高台付近を除き灰釉系の黄色釉が施される。内面に目跡3ヶ所が残る。

刷毛目皿(26)はやや幅広の断面逆台形の削出高台のつく皿であり、内面には白泥で渦巻文様を描き、高台畳付を除き灰釉を施す。

白泥を用いた製品では、打ち刷毛目文様の蓋物は一定量があり、**蓋**(13、15～17)と**鉢**(18～22)は口径12cm、16cm、21.5cm前後と数種類の規格がある。他とは異質な暗灰色の胎土の皿(10)はこの1点のみであるが、全面に厚く鉄錆釉が掛かる焼成不良品である。このほかに未掲載資料で布目痕の残る型打ちの小皿(小鉢)などがある。

(2) 磁器製品 (図20～22 / 表8,10)

多くを占めるのは口径9.0cm前後の小形の碗・小杯類と口径10cm以上の中形碗類である。施文技法では小形碗類では手描き染付が多く、中形碗では手描き染付に加え、上絵付、型紙摺、銅版転写、吹き絵な

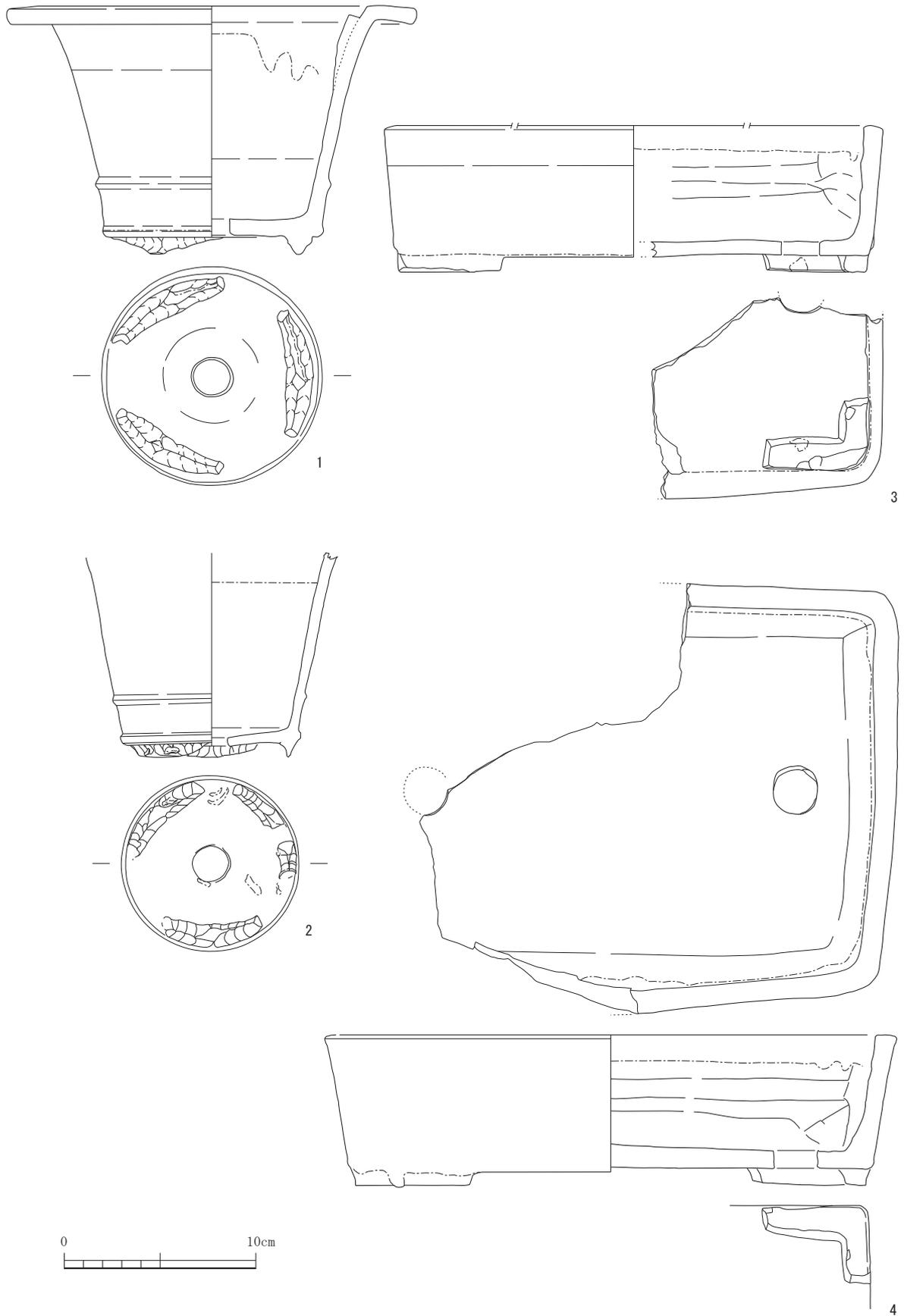


图 17 北山窯跡出土遺物 1 (1/3)

どがあり、用いられる釉薬も青・赤・茶・黒・緑色などがある。透明釉のほかにもクロム釉を用いた青磁釉製品（写真図版 19）がある。

小型碗類では、まず端反碗の形状を A 類（30～35, 46）、口縁端部が外反して腰に稜をもつ B 類（38）、その他に焼成時の変形であろうか体部が若干くびれるような小杯（39）を C 類とした。D 類（39～45）の体部は緩やかな丸みをもって立ち上がり、口縁にむかって少し開き気味になる。外傾する削り出し高台がつく。E 類（36, 37）は半球形に近い体部をもつ。特徴としては、D 類の施文技法は手描き染付であり、高台の脇の器壁が最も厚い。E 類は手描き染付が主体で転写技法もみられる。体部、高台ともに器壁を薄くつくるものが多い。44 は紀年銘があり、高台内と内面に「明治四十一年四月」「水野」「品野記念」と筆書がある。いずれも高台畳付部分を除き透明釉が施される。

中形碗はほとんどが平碗（平丸碗）であり、腰が張り器高の高いもの、器高のやや低いもの、体部がやや直線的に開き器高がやや高いものがある。

そのほか大型の丸碗形を呈する鉢（61, 62, 63）や口縁部を輪花につくる小形の鉢などは、見込にも文様が描かれる。同規格のものが一定量が確認できる器種として、白磁無文の湯呑（69, 70）、把手状の飾りの浮彫り文様を付けた白磁容器（67, 68, 70）などがあり、熔着関係により両者は重ね焼きで同時に焼成されたことがわかった。皿では銅版転写で紅葉と鹿の文様が描かれた口径 11.5cm 前後の丸皿（27, 28）が多く、高台内に「北山精製」の銘がみられる。ほかに型打ちの染付小皿などが数種ある。わずかではあるが染付德利（29）も出土している。

なお、最終段階の北山窯の窯体下の盛土（B7 最下層や物原下層）で確認される製品のグループには小形碗 D 類、白磁湯呑、白磁容器などが含まれており、さらに古い段階の資料と位置付けられる。

（3）その他製品類

未製品の状態の資料も出土している。猫形貯金箱（66）や磁器製品の素焼段階のもの（37, 47, 51, 61）の他に表面が無釉の状態の上絵付け用の花瓶素地（71）などがある。そのほか数量が少なく搬入品と考えられる器種がある。磁器丸皿（134）の文様は型紙摺りで、体部外面には「明治二四年」と紀年銘（図版 21）が認められる。磁器盃（135）は販促用のもの。磁器水滴（138）は天井部に浮彫りで交差する旗が表現され、その上に呉須で桜の文様が転写で描かれている。磁器染付小杯（136）の器形は希少であり、文様も転写技法。湯呑（137）は青、緑色釉で文様がプリントされている。陶器鉢（139）の内面文様は青色釉を用いた吹き絵技法。植木鉢（140）はタタラ成形・型打ち整形であり、胎土はここでは異質な緻密な朱泥が用いられている。141 は鉄釉の掛かる甕で、胎土は白色でやや軟質の焼成。142 は用途不明のロクロ成形の陶器製品であり、径 31.6cm の底面となる側が開口している。接地面は内側に折り返されて幅広の面をなし、使用による摩滅が認められる。外面には鉄釉が掛かり、内面は露胎で楕円形枠に記号（「特殊」か）が捺されている。正円の環状の陶製品（144～147）は無釉の赤く焼締まったもので、上端の径は 25cm 前後、円周内面には縦方向に 9.0cm 程度の突起が 3, 4ヶ所につくとみられ、陶器製の五徳と想像される。143 は磁器質の「陶丸」である。

（4）窯道具（図 23～31）

匣鉢は平面形が円形を呈し口径 11cm と 16cm 前後となるものが最も多く、ロクロ製で器高が高く丸底のもの（98～103）、やや浅い丸底のもの（104）、ロクロ製で平底のもの（106～108）がある。型製では凸底のもの（64, 65, 109, 110）、平底で浅い（105）ものがある。105, 106 は底面に円形の焼成前穿孔がある。111 はタタラ成形・型打ちによる隅丸方形のもので、内面底面には径 6.6cm の円形の置き跡 4 つが残る。

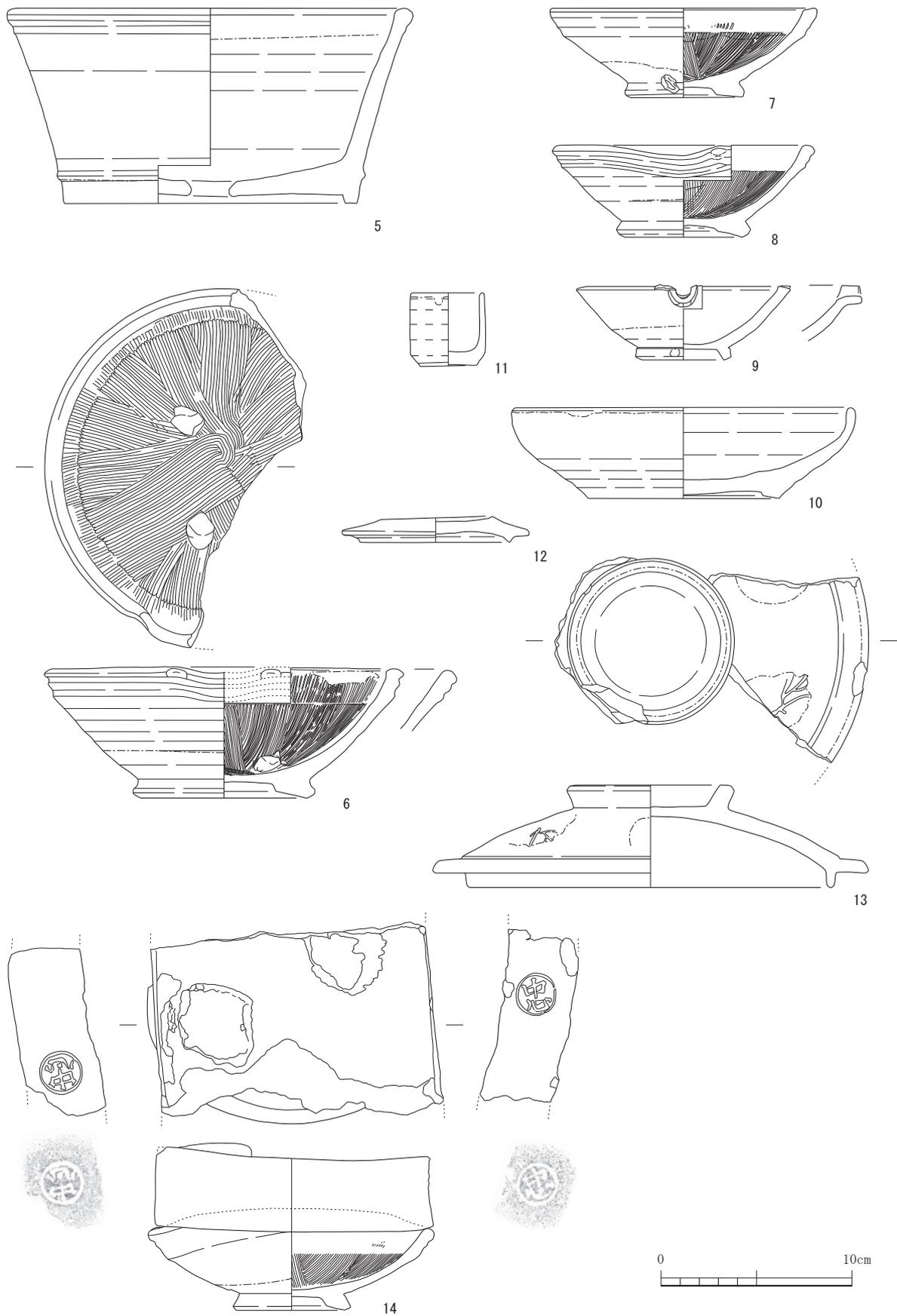


图 18 北山窯跡出土遺物 2 (1/3)

匣鉢蓋（113）と組み合わせると考えられる。大型の陶器円形板（114, 115）の用途は不詳であるが、煙突用の土管の径に近似している。112は無釉の浅い長方形の箱で、胎土が粗雑でやや軟質の焼成である。

エブタ（88～93）はタタラ成形の円形板で、径11.0～13.0cm、厚さ1.0～1.4cmである。片面に鉄釉で「北山」など窯印が筆書されるものがある（88～90, 93）。94は円形孔があるがエブタへの転用品と思われる。

トチは径6.0cm、厚さ0.6cm程度の磁器質の円形板、板トチ（86, 87）が最も多く、物原では灰混じりのトチ層を形成している。高さ1.2cm程度の円柱状の磁器質のトチ（75）は、高台内側に段をもつ中形碗（52, 53, 写真図版20）専用であり、これにより高台畳付もガラス質の皮膜に覆われることになる。同様の使用法は多治見市・根本焼にあり、「トチ焼」として明治33年に岐阜県陶磁器組合から専用権を得ている。こちらのトチは粘土製である。わずかであるが、96, 97のようなトチもみられる。

トチオサエ（81～85）は磁器製で、径4.7cm（84）、6.2cm（85）の底面及び上端部に使用痕が明瞭に認められる。側面に文字が呉須で筆書きされており、紀年銘のあるものでは「明治卅口落慶」（81）、「昭和七年四月」（85）がある。磁器製の**乳鉢**（79, 80）は同一個体の可能性のある資料であり、内面は使用による摩滅が顕著である。内面口縁部付近から外面体部にかけて透明釉がかかる。外面に「北山 口年五月」（80）、「口念 昭和」（79）の呉須筆書きがある。**色見**は陶器製品片（72～74）と磁器製品片（77, 78, 写真図版21）を用いるものがあり、呉須で試し書きをした磁器片が圧倒的に多い。**ツク**は粘土を材料とし、径4.2～5.5cmの円柱状を呈する。116は長さ20cm以上、117は完形で長さ9.5cm、端部付近にかけて径が太くなる形状のもの（118）などがある。

色見孔を塞ぐための**栓**（125～127）は、粗い胎土の粘土を材料としている。全体の形状が判る個体はないが、125の一部で直線的な辺が確認でき、これは平面形は方形であった可能性が高い。被熱による影響の少ない平らな面の中央に径と深さが3.5cm程度となる円形の凹みをもつ。

棚板・ハコグレは硬く焼締まった長方形のレンガであり、様々に組み合わせられ狭間柱や煙道部の天井アーチなど窯材に利用されている。棚板（120～123, 128）は長辺約30cm、短辺12～15cm、厚さは3.7～4.7cmであり、ハコグレ（129～131）は長辺約28cm、短辺17～19cm、厚さは9.6～10.3cmとおおよその規格が認められる。窯印の記号印が付くものがある。土管（132, 133）は常滑窯産の製品である。径は42.1cm、56.6cmとそれぞれ異なるもので、計画的なセット関係ではなく築窯材として転用されたと考えられる。

実測図の掲載はないが、干し棚の台石（S-1, 写真図版20）も採取している。石材は花崗岩であり、長さ1.04m、断面は一辺11.0cm～16.0cm程度の四角形で、側面には石材を割った時の矢穴の痕が残り、上端は丸太を支えるための短い二又状に加工・整形されている。

（5）北山窯でみられた文字・記号

製品および窯道具類にみられた文字・記号を表2, 3に示す。

紀年銘資料は4点がある。134の型紙摺りの染付丸皿には「明治二四年」とある。北山窯製品にはない施文技法であり搬入品と思われる。窯道具のトチオサエ（81）には「明治卅口落慶」とあり、また別の個体（85）には「昭和七年四月」「北山」と呉須筆書きがあり、これらは北山窯で使用されたものと考えられる。44染付小形碗は同様の器形・文様のものが複数個体あり、北山窯での焼成品と考えられるものであり、「明治四十一年 四月」と記されている。

銘は磁器製品に集中してみられる。まず、北山窯に関連するものは5種類（「北山」「北山造」「北山精造」「北山精製」「陶古園北山製」）があり、このうち「北山」は焼成前に小判型の枠内に文字を入れた印を捺したもので、印の種類も複数が存在する。その他は筆書の文字である。以上は操業期間中の主力製品と思われる端反碗・小杯・湯呑など小形の製品と平碗の高台内に記されている。次に目立つものは「松風□□」

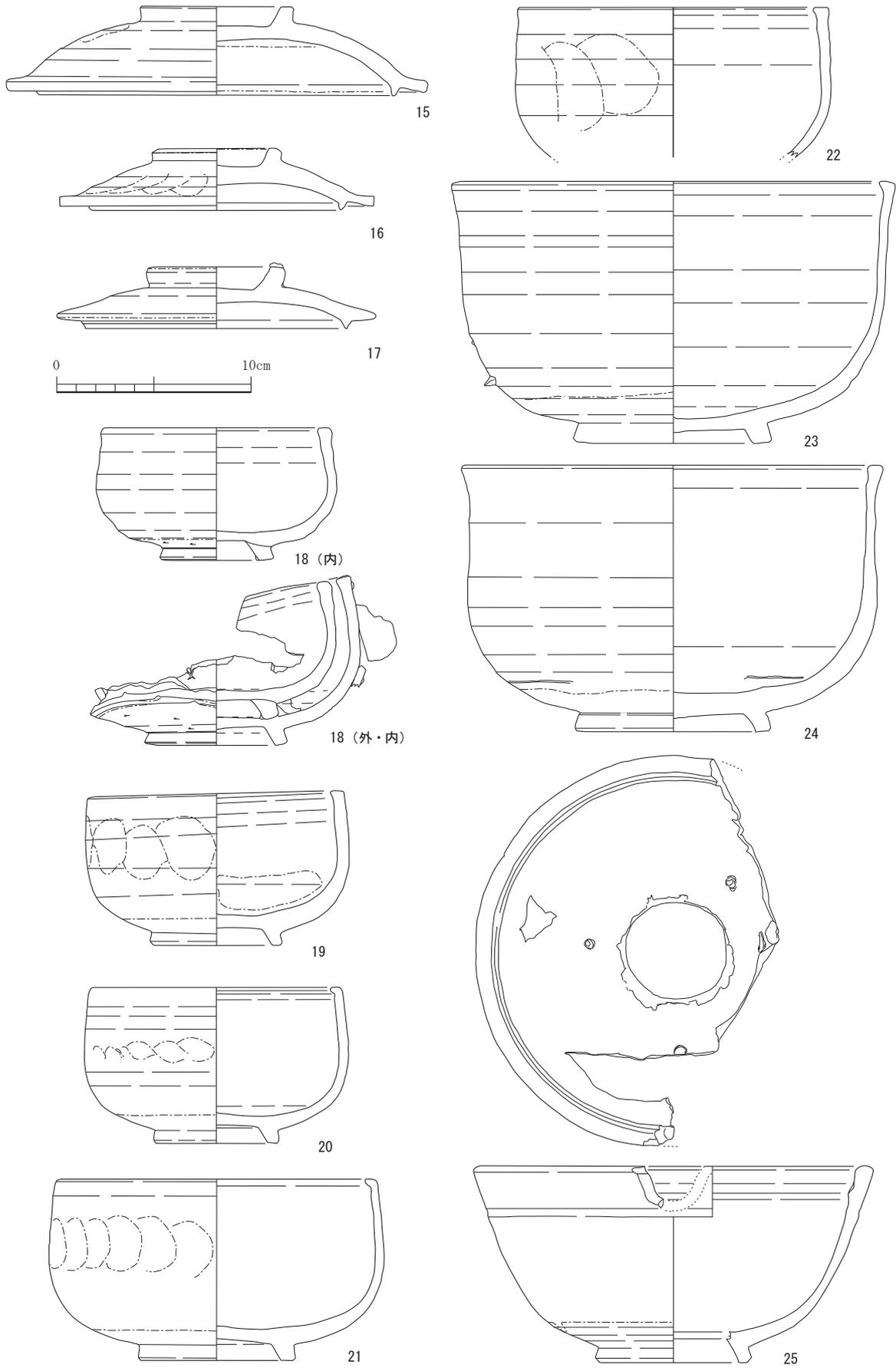


图 19 北山窯跡出土遺物 3 (1/3)



图 20 北山窯跡出土遺物 4 (1/3)



图 21 北山窑出土遗物 5 (1/3)

(32)、「陶玉園松風製」(63)があり、これらと関係が深いものとして「陶玉園製」(42, 62)、「陶玉精製」(61)があり、小杯とやや大型の深い碗形態の高台内に筆書されている。出土資料の中でこれらは染付文様の装飾性の高い一群に含まれる。そのほか窯元の銘には「暁山」(31)、「古白園製」(41)があり、北山窯以外の複数の窯元の製品がここで焼かれていたと考えられる。

59, 60 は統制番号「品 147」印のある平碗類である。戦時中の操業を伝える資料と考えられる。

窯道具では、先述のトチオサエや乳鉢(79, 80)などの磁器製の道具類は呉須筆書きされることが多い。その他にはエブタ・匣鉢の側面に鉄釉で筆書きされるものがあり、「北山」(88, 89)をはじめそれ以外にも十数種類の記号がある。また窯材の棚板にも記号印があり、窯道具類の多様な器種に共通するものが存在する。例えば「忠」は植木鉢片(73)、平底のロクロ製匣鉢(108, 759)、棚板(14, 120)にみられる。「ク」はトチオサエ(82)、丸底のロクロ製匣鉢(98, 99, 102, 760, 761)にみられる。なお、「ヨ」(90)は「山」の回転したものか、ヤマに「ク」を省略した記号かもしれない。

棚板等には以上のものに加え「友」(119, 124)や「金」(123)など計15種類の記号が確認されている。陶製植木鉢片を用いた陶片資料(73)の存在から、少なくとも「忠」は北山窯では相対的に古い時期の生産器種と見做される陶器生産との関連が推定される。

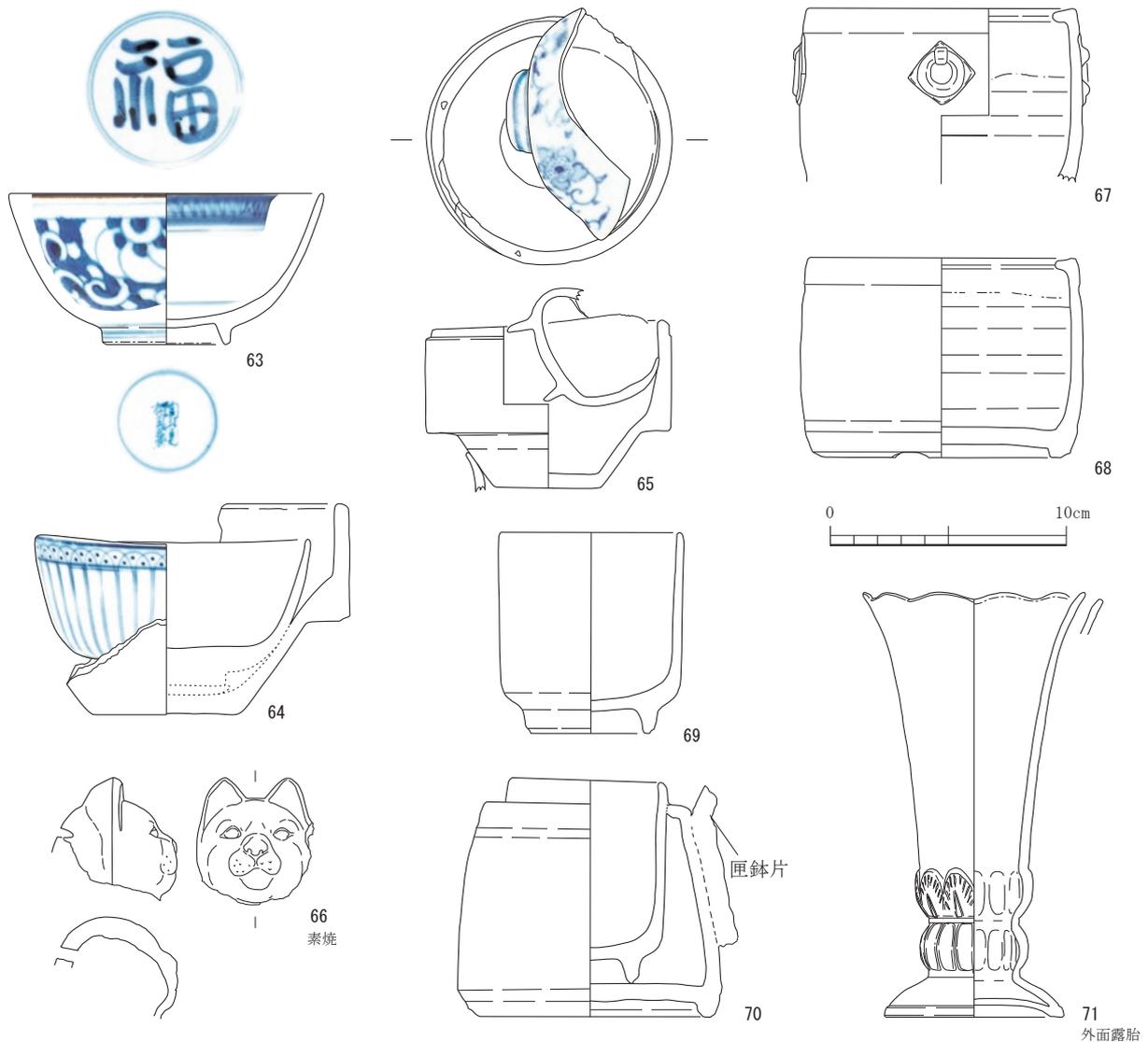


図 22 北山窯跡出土遺物 6 (1/3)



图 23 北山窯跡出土遺物 7 (1/3)

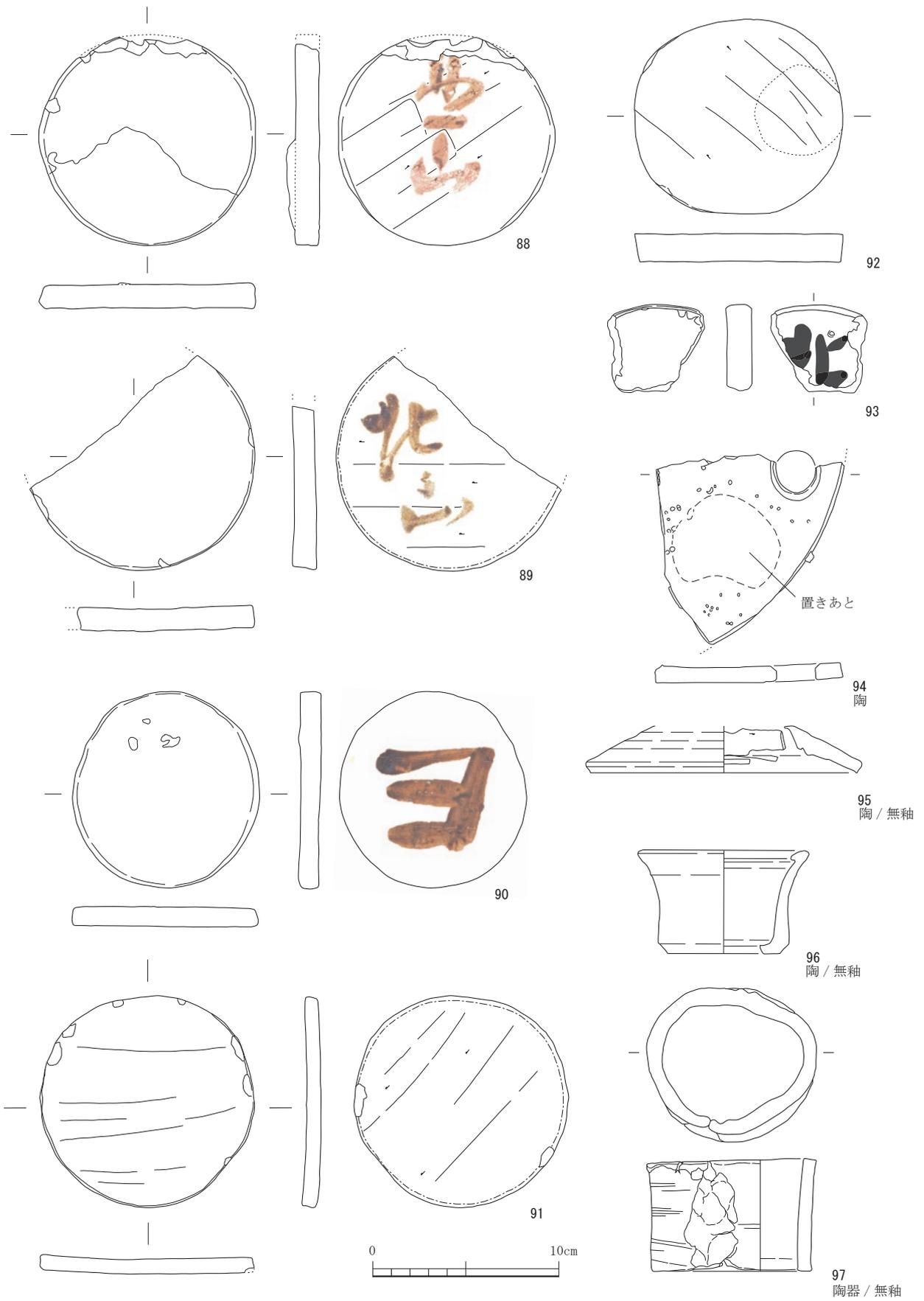


図 24 北山窯跡出土遺物 8 (1/3)

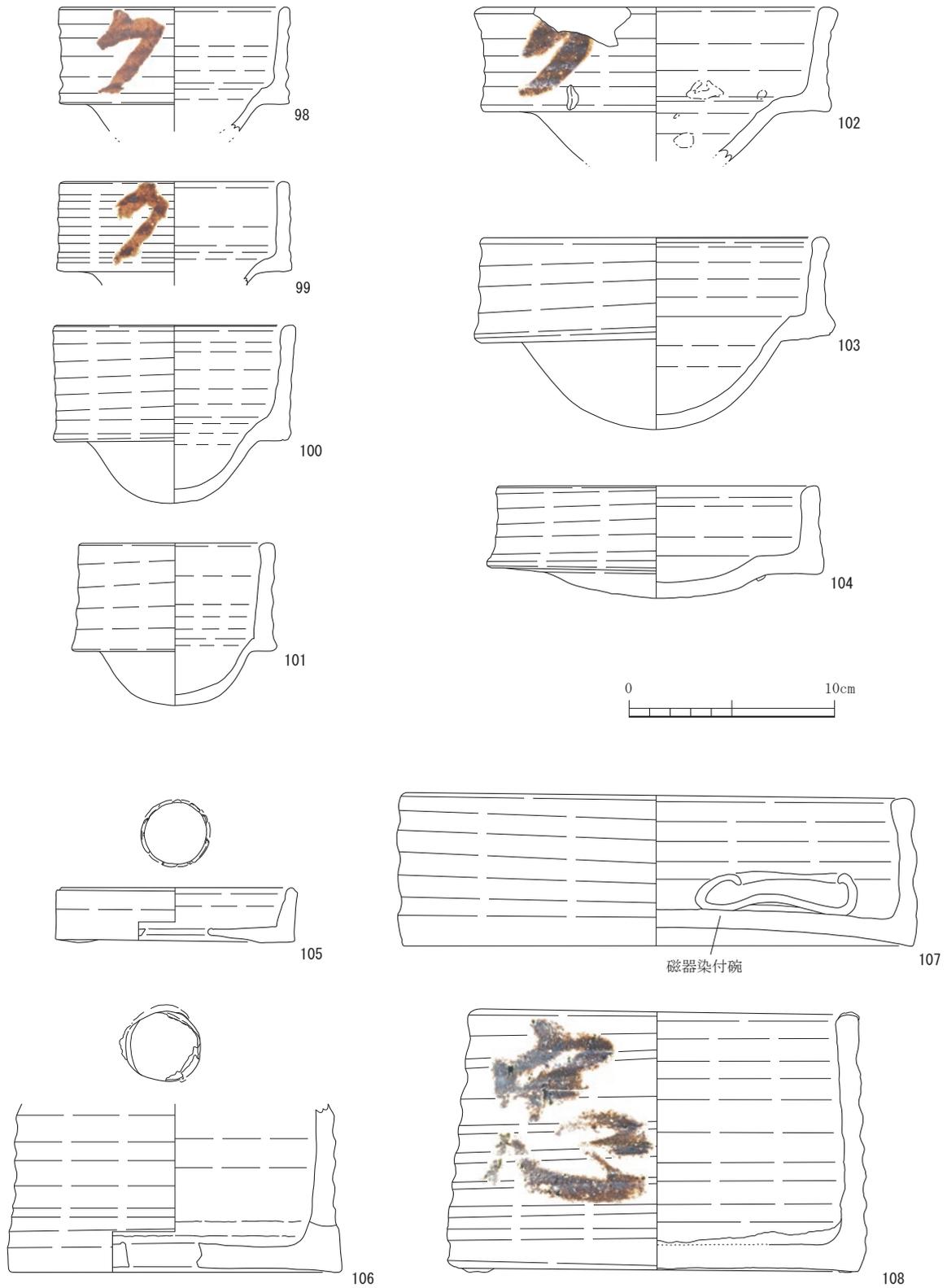


图 25 北山窯跡出土遺物 9 (1/3)

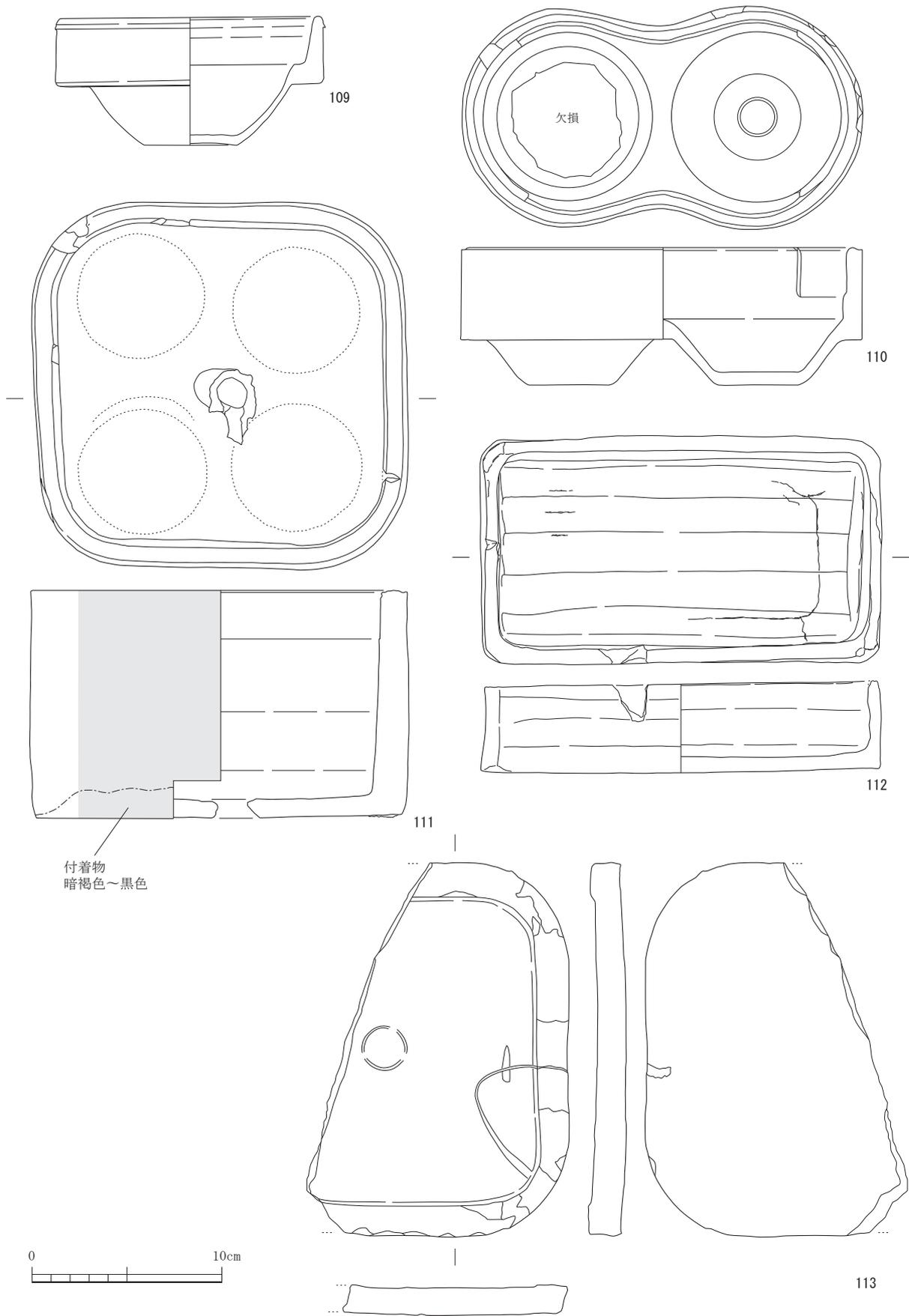


图 26 北山窯跡出土遺物 10 (1/3)

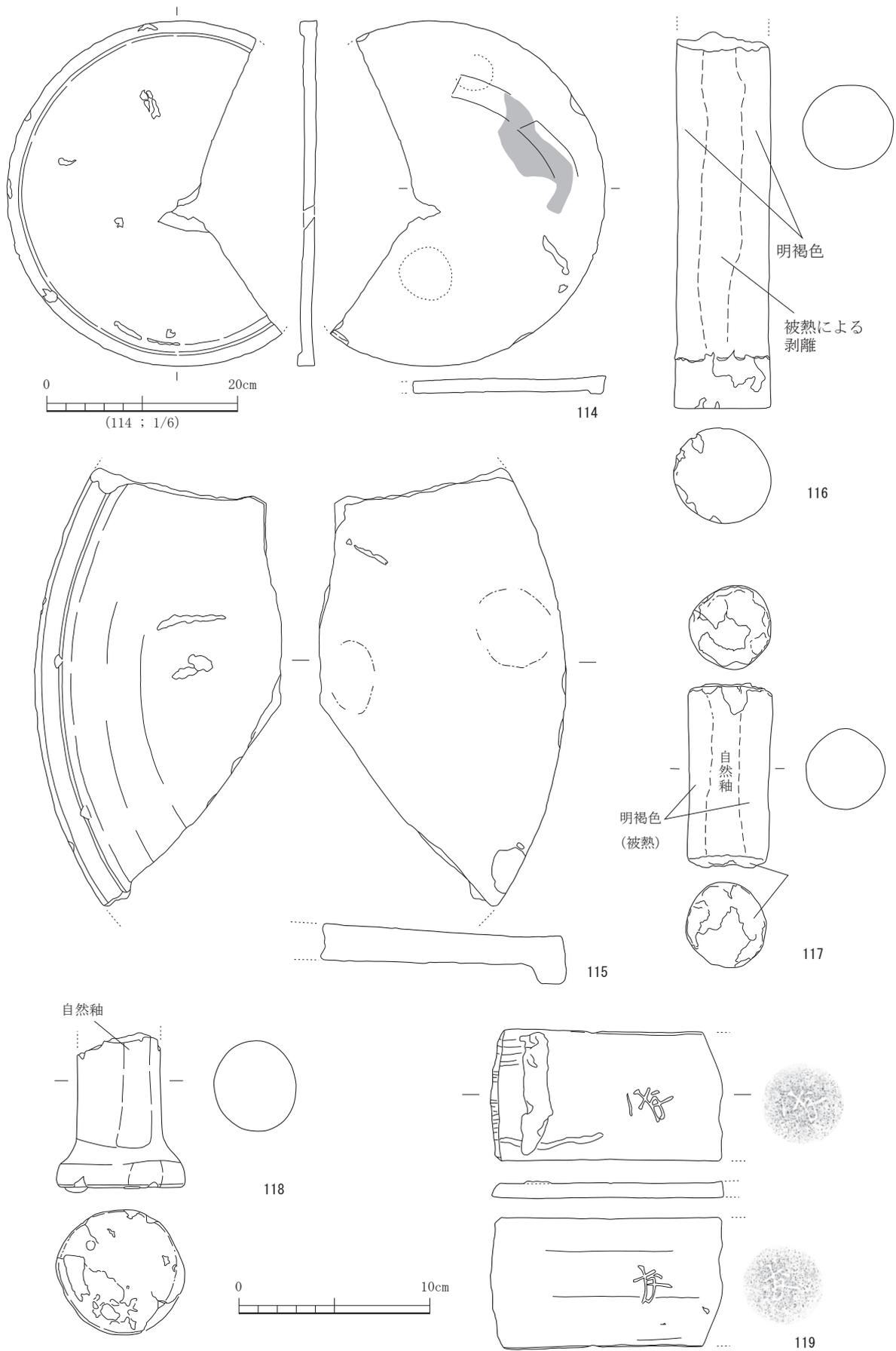
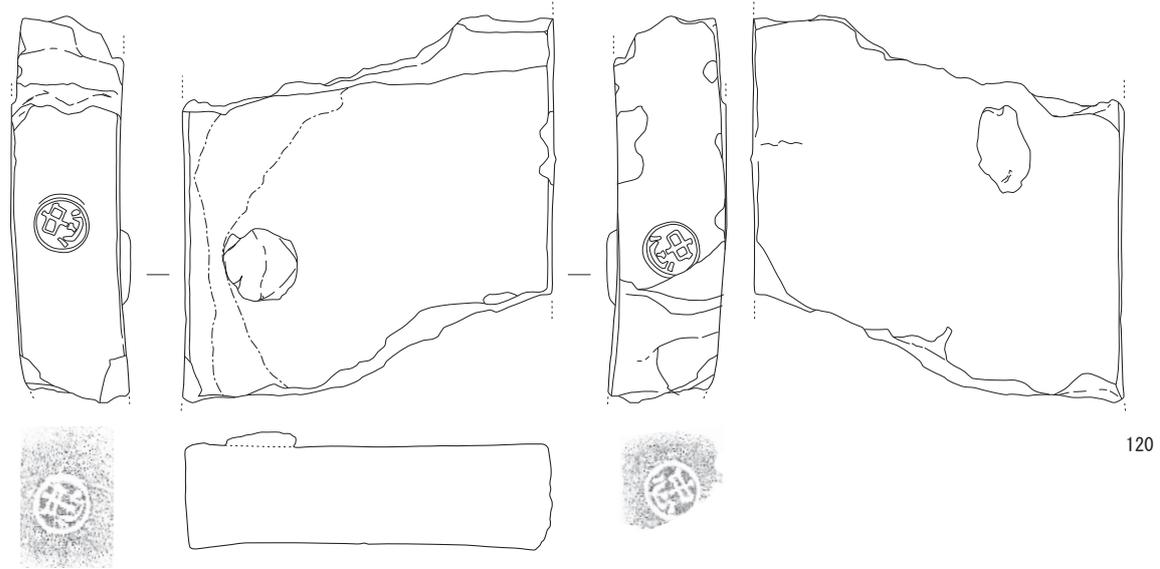
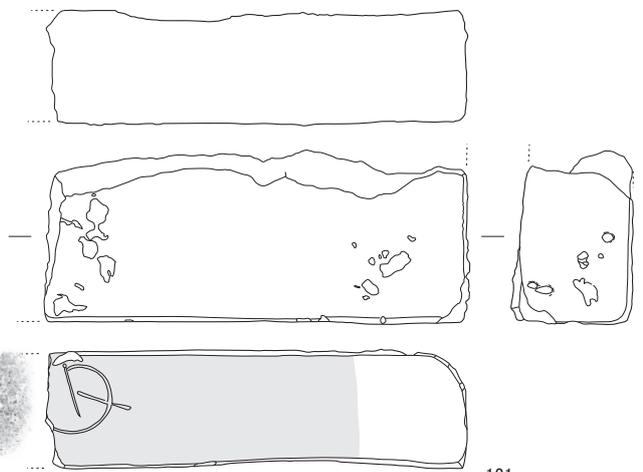


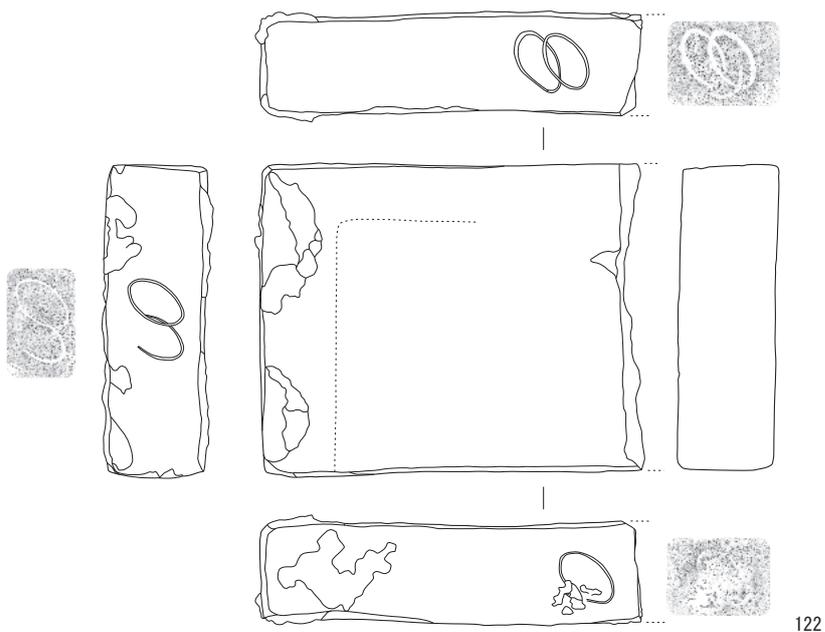
图 27 北山窯跡出土遺物 11 (1/3, 1/6)



120



121



122

图 28 北山窯跡出土遺物 12 (1/3)

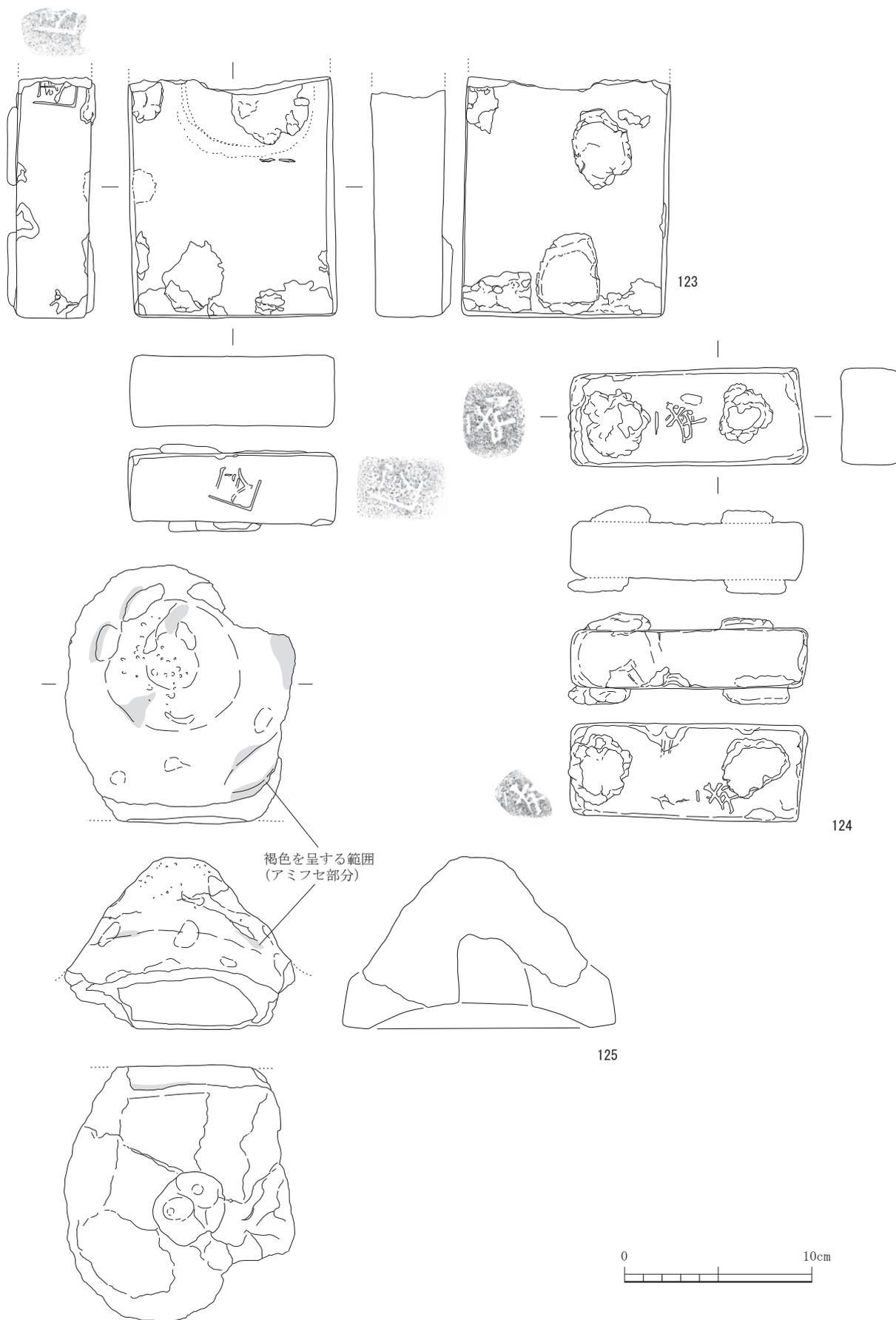


図 29 北山窯跡出土遺物 13 (1/3)

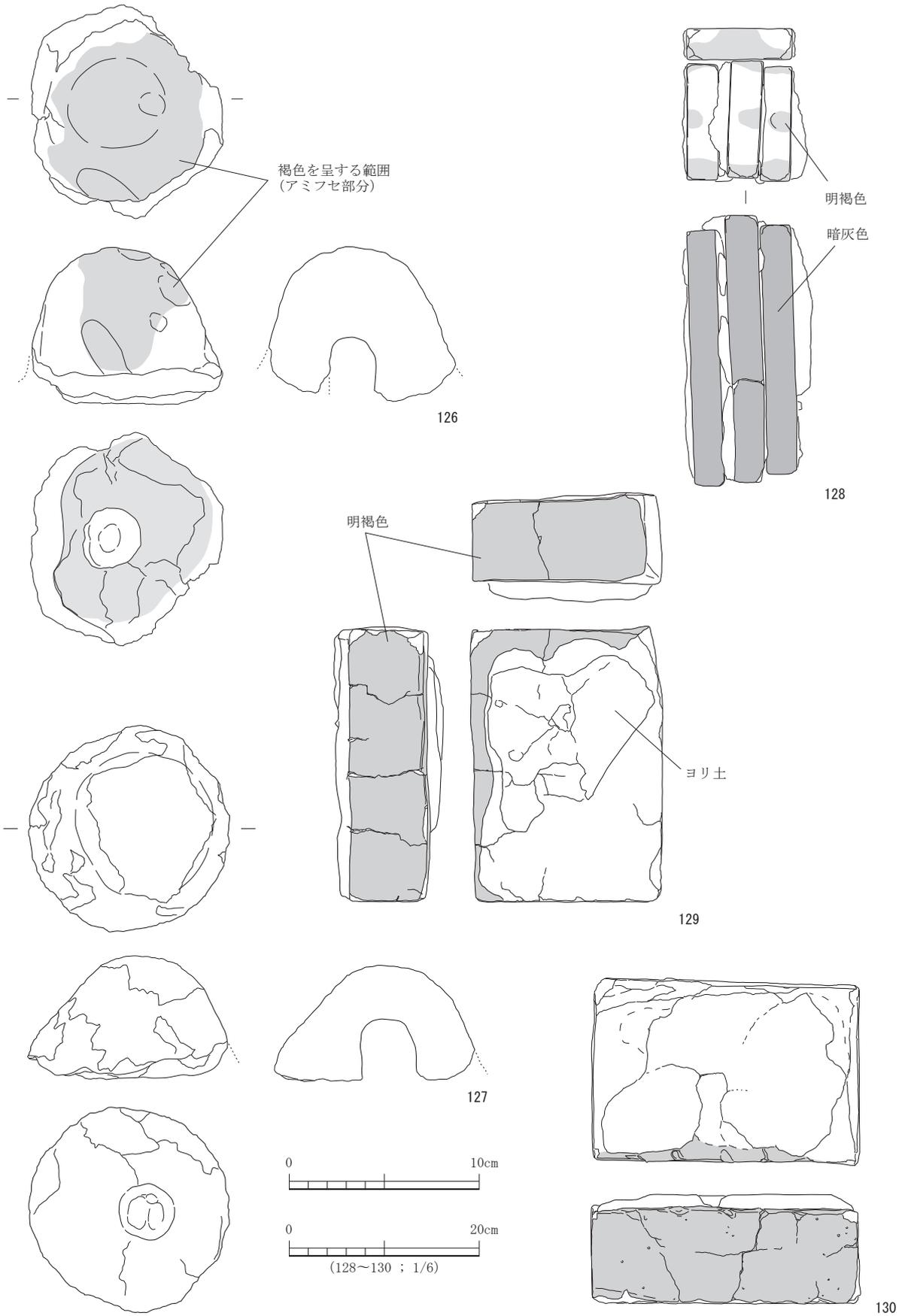
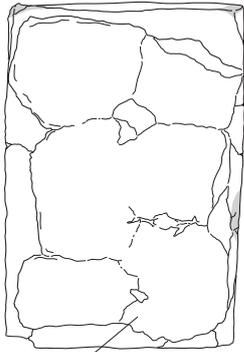
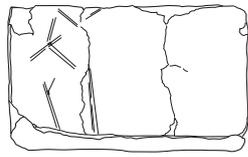


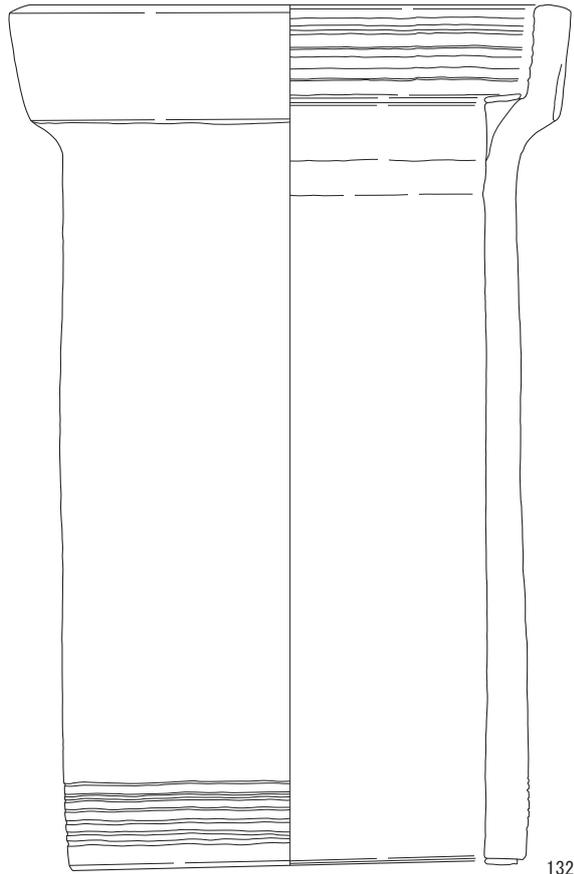
図 30 北山窯跡出土遺物 14 (1/3, 1/6)



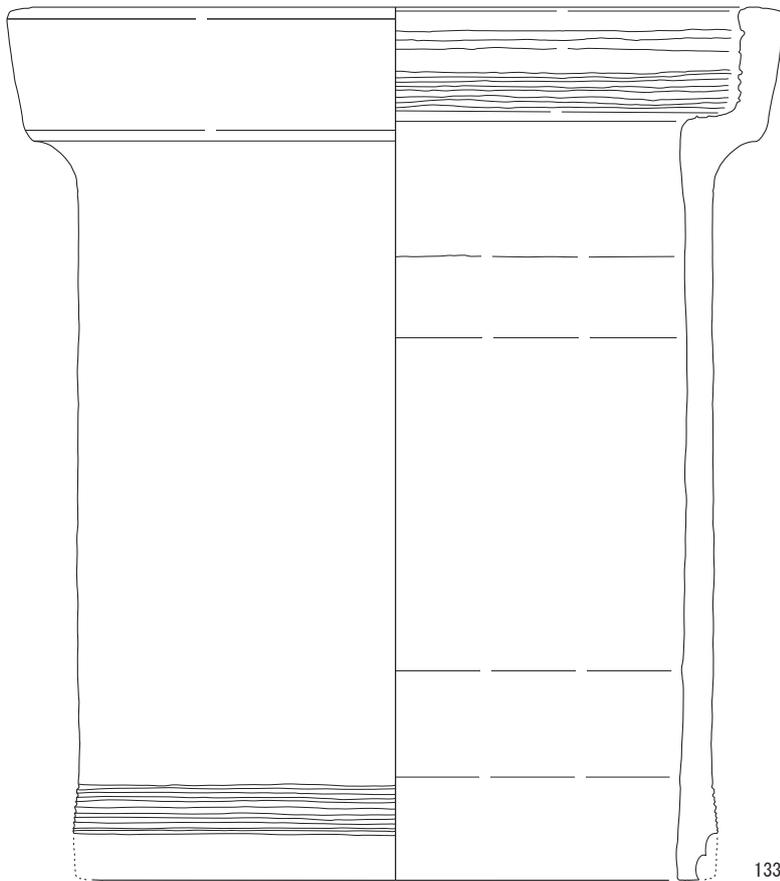
ヨリ土



131



132



133

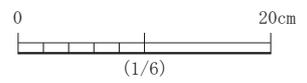


図 31 北山窯跡出土遺物 15 (1/6)

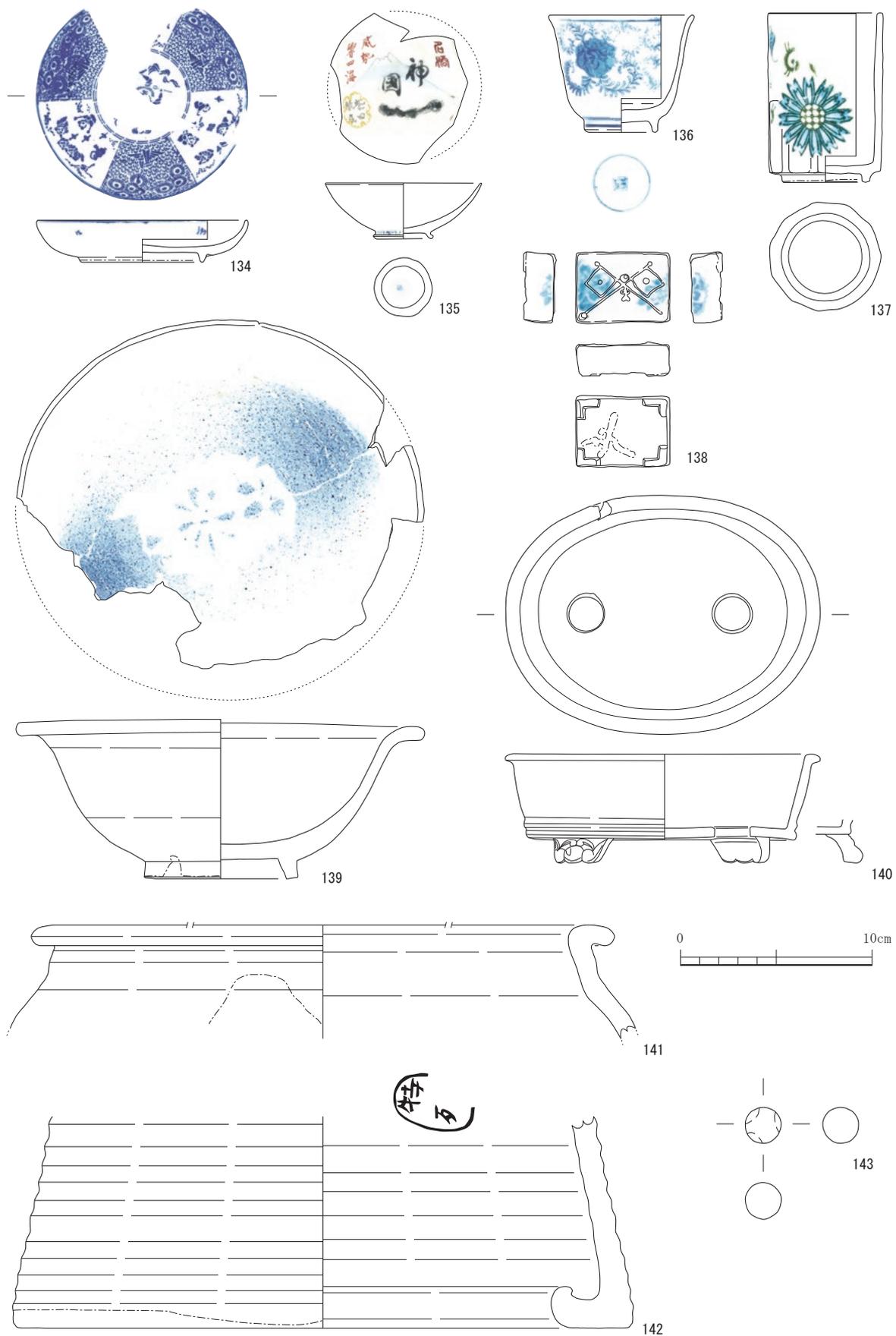


图 32 北山窯跡出土遺物 16 (1/3)

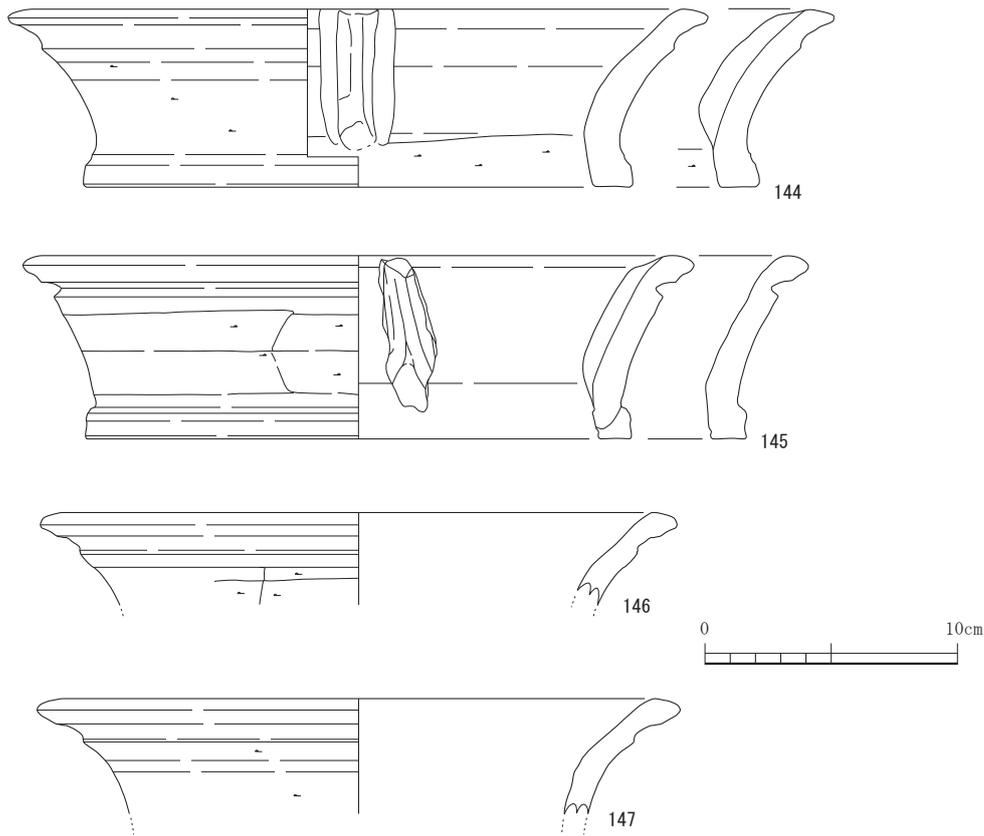


図 33 北山窯跡出土遺物 17 (1/3)

表 2 北山窯跡出土遺物の文字・記号 (1)

登録番号	種別	器種	技法	文字等の部位	釉薬/その他	グリッド・出土地点
27	磁器	皿	筆書文字	外面底部	「北山精製」	ZZ7
28	磁器	皿	筆書文字	外面底部	「北山精製」	ZZ7南壁
30	磁器	染付端反碗	筆書(呉須)	外面底部	銘あり	B7
31	磁器	染付碗	筆書(呉須)	外面底部	「暁山」	東煙道
32	磁器	染付端反碗	筆書(呉須)	外面底部	「松風□□」	ZZ7
33	磁器	染付端反碗	筆書(呉須)	外面底部	「□□□□」	C7
35	磁器	染付端反碗	筆書(呉須)	外面底部	「北山製造」	窯外
38	磁器	染付端反碗	筆書(呉須)	外面底部	「陶古園北山製」	B7
40	磁器	染付小形碗 (D類)	筆書(呉須)	外面底部	銘あり	ZZ7
41	磁器	染付小形碗 (D類)	筆書(呉須)	外面底部	「古白園製」か	C7
42	磁器	染付小形碗 (D類)	筆書(呉須)	外面底部	「陶玉園製」	A7
44	磁器	染付小形碗 (D類)	筆書(呉須)	高台内側/見込	「明治四十一年四月」, 「水野」 「品野記念」	B7
45	磁器	染付小形碗 (D類)	筆書(呉須)	高台内側/見込	「改修記念」, 銘あり	B7
48	磁器	湯呑	筆書文字	外面底部	「北山造」, 黒色釉	B7北壁
50	磁器	平碗	陰刻	外面底部	「北山」	ZZ7~A7
51	磁器	平碗	陰刻	外面底部	「北山」	B8
56	磁器	蓋碗	陰刻	外面底部	「北山」	ZZ7
59	磁器	蓋碗	陰刻	外面底部	統制番号か	ZZ7
60	磁器	平碗	陰刻	外面底部	統制番号「品147」	ZZ7
61	磁器	鉢(素焼)	筆書(呉須)	外面底部	「陶玉精製」	A7
62	陶器	鉢	筆書(呉須)	外面底部	「陶玉園製」	B7
63	磁器	平碗	筆書文字	外面底部	「陶玉園松風製」	B7
134	磁器	染付丸皿	筆書文字	体部外面	型紙摺, 「明治二四年」	半, B7北壁, B9
135	磁器	盃	転写	内面	「名酒神国」	C7
142	陶器	器種不明(円筒状)	スタンプ	内面	小判形枠に「特(殊?)」	B7西半
638*	磁器	平碗	筆書文字	外面底部	「平安竹泉」	9864V トチ層

表3 北山窯跡出土遺物の文字・記号(2)

登録番号	種別	器種	技法	文字等の部位	釉薬/その他	グリッド・出土地点
79	磁器	乳鉢	筆書(呉須)	体部外面	「(記)念 昭和」	9865W, X
80	磁器	乳鉢	筆書(呉須)	体部外面	「北山 □年五月」	9865X, Y
81	窯道具	トチオサエ	筆書(呉須)	体部外面	「明治卅〇落慶」	C7
82	窯道具	トチオサエ	筆書(呉須)	体部外面	ヤマ形に「ク」	D7
83	窯道具	トチオサエ	筆書(呉須)	体部外面	染付文字あり	B7東半
84	窯道具	トチオサエ	筆書(呉須)	体部外面	ヤマ形に「ク」と□「山」	ZZ7
85	窯道具	トチオサエ	筆書(呉須)	体部外面	「昭和七年四月」「北山」	B7, 9864B, C, D, V, I
752*	窯道具	トチオサエ	筆書(呉須)	体部外面	「北山」か	C7
73	窯道具	陶片(植木鉢)	筆書(鉄釉)	破片表裏面	「忠」/(文字)	A7
74	窯道具	陶片	線刻	破片裏面	「ほ山」	C7
88	窯道具	エブタ	筆書(鉄釉)	裏面	「山」	C7
89	窯道具	エブタ	筆書(鉄釉)	裏面	「北山」	ZZ7~A7
90	窯道具	エブタ	筆書(鉄釉)	裏面	「ヨ」	B8拡張
93	窯道具	陶片(エブタ)	筆書(鉄釉)	裏面	「北」	B7
119	窯道具	方形匣鉢蓋か	陰刻	両面	記号印「友」	窯床下
754*	窯道具	エブタ	筆書(鉄釉)	裏面	窯印筆書あり	ZZ7
755*	窯道具	エブタ	筆書(鉄釉)	裏面	「ヨ」	D8壁
98	窯道具	底)	筆書(鉄釉)	外面側面	「ク」	A7
99	窯道具	底)	筆書(鉄釉)	外面側面	「ク」	B7
102	窯道具	底)	筆書(鉄釉)	外面側面	「ク」	C7
108	窯道具	底)	筆書(鉄釉)	外面側面	「忠」	B7トレンチ
756*	窯道具	底)	筆書(鉄釉)	外面側面	窯印筆書あり	ZZ7
757*	窯道具	底)	筆書(鉄釉)	外面側面	窯印筆書あり	ZZ7
758*	窯道具	底)	筆書(鉄釉)	外面側面	「リ」?	ZZ7
759*	窯道具	匣鉢(ロクロ)	筆書(鉄釉)	外面側面	「忠」	ZZ7
760*	窯道具	底)	筆書(鉄釉)	外面側面	「ク」	C7
761*	窯道具	匣鉢(ロクロ丸底)	筆書(鉄釉)	外面側面	「ク」	C7
762*	窯道具	匣鉢(ロクロ平底)	筆書(鉄釉)	外面側面	「山」	C7
14	窯道具	棚板+搦鉢	陰刻	側面	記号印(○に「忠」)	C7
120	窯道具	棚板	陰刻	側面	記号印(○に「忠」)	-
121	窯道具	棚板	陰刻	側面	窯印陰刻あり	C7
122	窯道具	棚板	陰刻	側面	記号印(○2つ重ね)	C8南壁
123	窯道具	棚板	陰刻	側面	記号印(カギに「金」)	-
124	窯道具	クレ(小)	陰刻	胴面	記号印「友」	D8壁
763*	窯道具	棚板	陰刻	側面	記号印(かまぼこ形)	ZZ7
764*	窯道具	棚板	陰刻	側面	記号印(○に「口」)	ZZ7
765*	窯道具	棚板	陰刻	側面	記号印○	ZZ7
766*	窯道具	棚板	陰刻	側面	記号印○	ZZ7
767*	窯道具	棚板	陰刻	側面	記号印(○に「一」)	ZZ7
768*	窯道具	棚板	陰刻	側面	記号印○	ZZ7
769*	窯道具	棚板	陰刻	側面	記号(かまぼこ形)	ZZ7
770*	窯道具	棚板	陰刻	側面	記号(かまぼこ形)	ZZ7
771*	窯道具	棚板	陰刻	側面	記号(○に「一」?)	ZZ7
772*	窯道具	棚板	陰刻	側面	記号印(○に「一」)	A7
773*	窯道具	棚板	陰刻	側面	記号印(ヤマ形)	A7
774*	窯道具	棚板	陰刻	側面	記号印○	A7
775*	窯道具	棚板	陰刻	側面	記号印○	A7
776*	窯道具	棚板	陰刻	側面	記号印○	A7
777*	窯道具	棚板	陰刻	側面	記号印○	B
778*	窯道具	棚板	陰刻	側面	記号印「七」	D8
779*	窯道具	棚板	陰刻	側面	記号印(カギ形)	D8

*は実測図未掲載

第2節 勘介窯跡 (図34～図69)

遺物はコンテナ箱で140箱が出土している。

出土地点は試掘坑と窯体および窯体の下方にあたる灰原であるが、試掘坑出土遺物を除き出土地点からそれぞれ1号窯および2号窯に伴うことが明らかである。なお、1試掘坑はその位置と出土状況から1号窯に伴う可能性が高い。また、2試掘坑の出土遺物は大半が試掘坑の北側に推定される平坦面(工房跡)あたりから転落した遺物である可能性が高く、斜面上方に推定した遺構の状況が明らかではないため、1号窯あるいは2号窯のどちらに伴うものかは不明である。(松澤)

資料の整理にあたり、勘介1号窯、2号窯の位置が明らかとなったことを受けて、調査範囲東方のグリッドZY6, ZG6, ZY7, ZZ7, ZZ8にかけて広がる物原を1号窯、調査範囲西方のZV4, ZU5, ZV5, ZW5, ZU6, ZV6, ZU7, ZT7にかけて広がる物原を2号窯に伴う遺物として取り扱った。(以下武部)

(1) 勘介1号窯 (図34～図50)

勘介1号窯に伴う物原から出土した資料では、碗類では天目茶碗・丸碗・平碗があり、皿類には端反皿・稜花皿・腰折皿・丸皿・灯明皿・縁釉皿がある。鉢類では播鉢がある。このほかに小杯・茶入・筒形容器がある。窯道具では匣鉢・挟み皿・トチ・焼台・小分炎柱がある。このうち縁釉腰折皿は多数の溶着資料があり、挟み皿としての使用法が想定できる。

天目茶碗(148～173)は口唇部のくびれが比較的小さく、体部は若干の丸みをもって立ち上がる。浅い削り出し輪高台となるものが多く、高台の断面形状は方形あるいは逆台形を呈する。少量の内反高台のもの(171)も含まれる。高台脇の削り込み幅は小さく、外面体部下方から高台にかけて濃い錆釉が掛けられる。釉薬は内面および外面上方に鉄釉が掛けられる。

丸碗(175～186)の体部は、下方から丸みをもって開きつつ上方は直立する。器壁は底部でやや厚みがあり、口縁にむかって薄くなり、端部は丸く調整される。高台は断面形状が方形となる貼り付け高台が主となる。175～179は外面体部には鉤形の印花文を連続して蓮弁文が表現される。釉薬は内外面全体に灰釉が掛けられるものが多い。外面下方から底面にかけて露胎となるもの(186)は削り出し高台である。そのほか点数は多くはなく抽出できなかったものに灰釉平碗(174)がある。

皿類では端反皿が最も多い。灰釉端反皿(187～223)の体部は丸みをもって立ち上がり、口縁端部が緩やかに外反する。口径11.0～11.5cmを中心に、15.0～17.0cmの中皿(187～199)、8.0cm前後の小型の皿(217～223)がある。貼り付け高台の断面形状が逆三角形となり先端が尖るもの、方形に近いものがあり、後者は中皿に多く認められる。灰釉は全面に施されるが、中皿では内面底部を露胎とするものがある。内面底部に印花文のある個体が多い。菊花の他にかたばみ(214)などの印一つを捺す場合がほとんどであるが、中皿(192)のように菊花3つを配置するものがある。削り込み高台の端反皿(225～227)は口径約10.0cm、体部は丸みをもって開き口縁端部が緩やかに外反する。こちらは全面に鉄釉が掛かり、口径(・器高)は灰釉端反皿にはない中間の規格である。

灰釉稜花皿(228～230)の体部は下方ではやや直線的に開き、口縁にかけて緩やかに外反する。口径11.0～12.0cmの口縁は輪花状をなし、内面底部に菊花の印花文がつく。228は全面施釉で断面逆三角形の高台が付き、229は平底の底面に糸切り痕を残し、内面底部と共に露胎である。

腰折皿(224)は口縁部が大きく外反する器形で、器壁は全体に薄く内面から外面口縁部付に鉄釉が掛かる。

丸皿(231～234)は口径約11.0cm、全て削り込み高台であり、内外全面に鉄釉が掛けられる。231の高台畳付部分は釉が拭い取られている。233内面には2ヶ所のトチ痕が残る。235は口径11.2cmの内禿皿

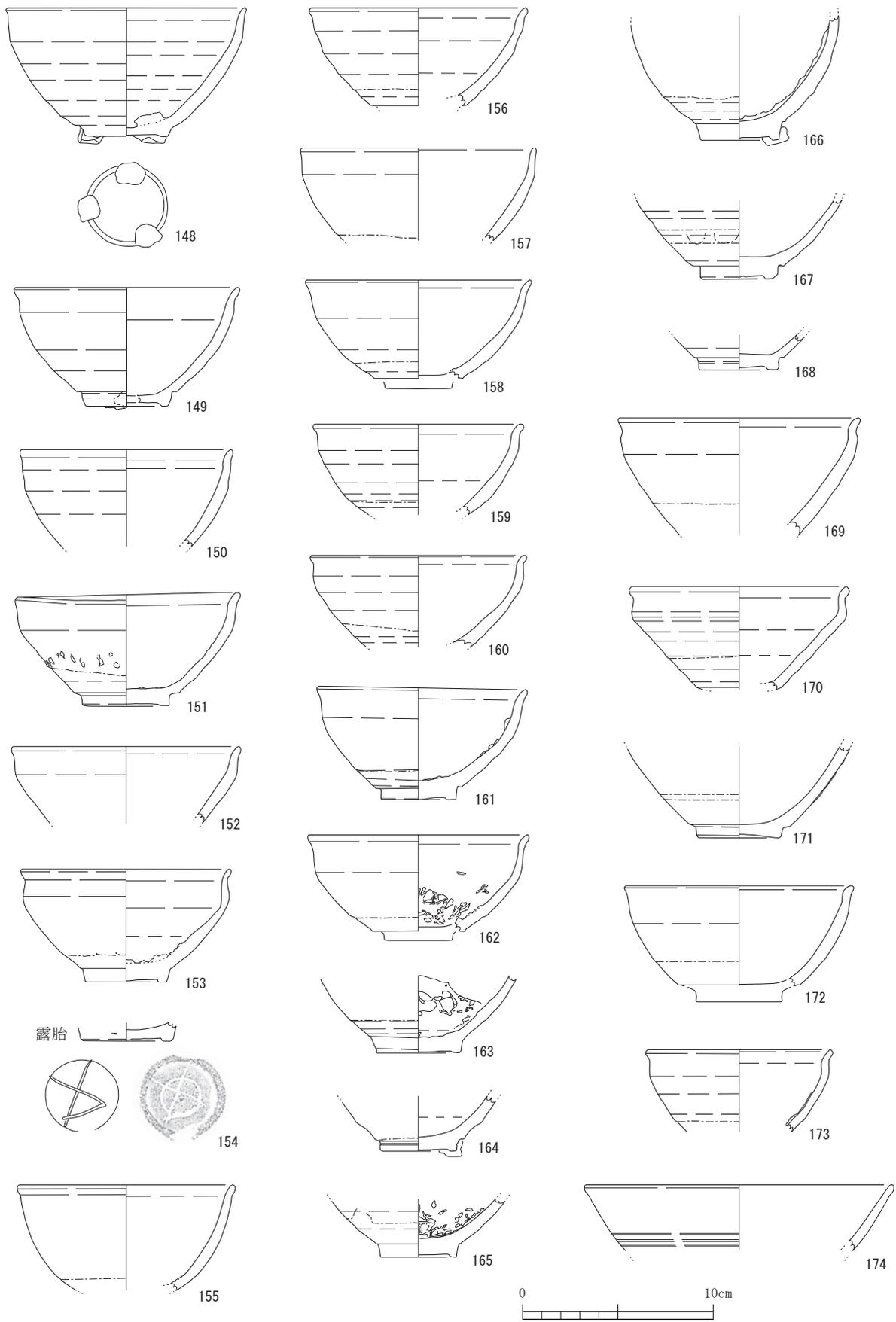


图 34 勘介 1 号窯跡出土遺物 1 (1/3)

の形態であるが、無釉の製品である。

灯明皿 (236～238) は口径約 11.0cm、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は細く尖る。内面に同心円状のナデの痕跡を残す。底部は平底で糸切り痕を残す。無釉、焼き締め製品である。

そのほか、**鉄釉小坏** (239) は底面に輪トチが付着する。**仏餉具** (240) は内外面に鉄釉が掛かる。**茶入** では、広口の壺形のもの (241, 242) は外面底部付近を除いて鉄釉が掛けられる。小瓶形のもの 243 は内外面に鉄釉、244 は外面底部を除いて錆釉に灰釉が掛けられる。以上の資料の器壁はやや厚く、文琳形 (245) の胎土は緻密で薄手のもので内外面に鉄釉が掛けられる。

鉢では**播鉢** (246～263) がある。口縁部に縁帯を形成する I 類であり、端部を内側に折り返す II 類は含まれていない。口径 28.0～30.0cm のものが中心で、平底の底部より体部は下方から直線的に開き、端部は屈曲して上方に短く立ち上がる。内面の底部から体部にすり目もち、口縁にユビオサエによる浅い注口がつく。口縁端部の形状により細分が可能である。端部上端に面を形成して尖る形状となるもの (249, 250)、先端を丸くするもの (264, 267)、屈曲部外面と口縁端部の先端をともに丸くするもの (251～254)、口縁端部がわずかに上方に引き上げられ、厚みもち断面形状が三角形を呈するもの (248, 255～259, 263)、口縁端部下方が引き出されて縁帯を形成するもの (260, 261, 262) に分けられる。内外面に錆釉が掛けられる。内面と外面底部の周囲に重ね焼きに用いられたヨリ土のトチ付着痕が認められる。

筒形容器 (264～270) には、内面は露胎で体部上方に鉄釉が掛けられた広口の容器類を含めた。形状として口頸部の区分が認められる (264～266) は**口広有耳壺**の可能性がある。267 は施釉範囲が短い。268 は自然釉か灰釉が部分的に掛かるもので、口縁部には焼成前に切り取られた部分が認められる。底部外面の処理は多くが糸切り後未調整であるが、回転ケズリするもの (269, 270) がある。

そのほか壺・瓶類では鉄釉**徳利** (274)、鉄釉**壺** (275)、立会調査時に出土した鉄釉**耳付水注** (276) がある。古瀬戸後期段階の鉄釉根来形**瓶子** (271, 272) と鉄釉**花瓶** (273) や、尾張型第 12 型式に比定される**山茶碗** (277～279) は搬入品と考えられる資料である。

窯道具として使用された皿形態には、**挟み皿** (291～299) と製品と溶着関係が認められる**縁釉腰折皿** (280～290) がある。挟み皿はロクロ成形、平底で糸切り後未調整であり、体部は下方からわずかに丸みもって開く。器壁の厚さがほぼ一定で口縁端部を丸くするもの (291, 297～299)、端部を面取りするもの (292)、先端部が細くなるもの (294)、端部が外反して端反となるもの (293, 295) がある。径 11.0～12.0cm、器高約 2.5cm に収まる。292, 295 は口縁部付近に灰釉が掛かる。他は無釉であるが、内面底部中央に一条のクシ描きがつけられているものがある (296～299)。縁釉腰折皿は口径 11.0～12.5cm、器高 2.0～2.5cm であり、削り出し輪高台が付く。高台の幅や高台脇の削り幅もやや広く、成形・調整が全体に粗雑なものが多い。290 は口径 9.6cm と小振り度で底面に端反皿 (205) が溶着する。300 は腰折皿の底部片で、周縁に打ち欠きが認められる。

匣鉢 は全てロクロ成形による平底、筒形の形態である。側面下端が面取される形であり、底部径は口縁部より若干小さくなる場合が多い。底面は糸切り後未調整であるが、底面に円形の窓が開口するもの (305, 309) もある。口径 11.0cm 前後の小型のものでは、器高約 4.0cm の広い平底となるもの (307, 317)、径 6.0cm 前後の底面が突出して器高が 4.0～6.0cm となるタイプ (302, 303, 319) がある。中型 (310～314, 316, 329) のものは、口径 15.0～17.0cm の間に複数の規格を含む。器高は 9.0cm～10.5cm であり、底面に穿孔のある 305, 309 のタイプに限り、器高が 7.0cm 以下と低くなっている。より大型のものでは口径 18.0cm～22.0cm のサイズがみられるが、器高は 8.6cm～10.6cm と中型サイズのものを超えることは少ない。中型の匣鉢内部に横ピンの付着するもの、側面下端付近に 2ヶ所程度の焼成前穿孔のある個体

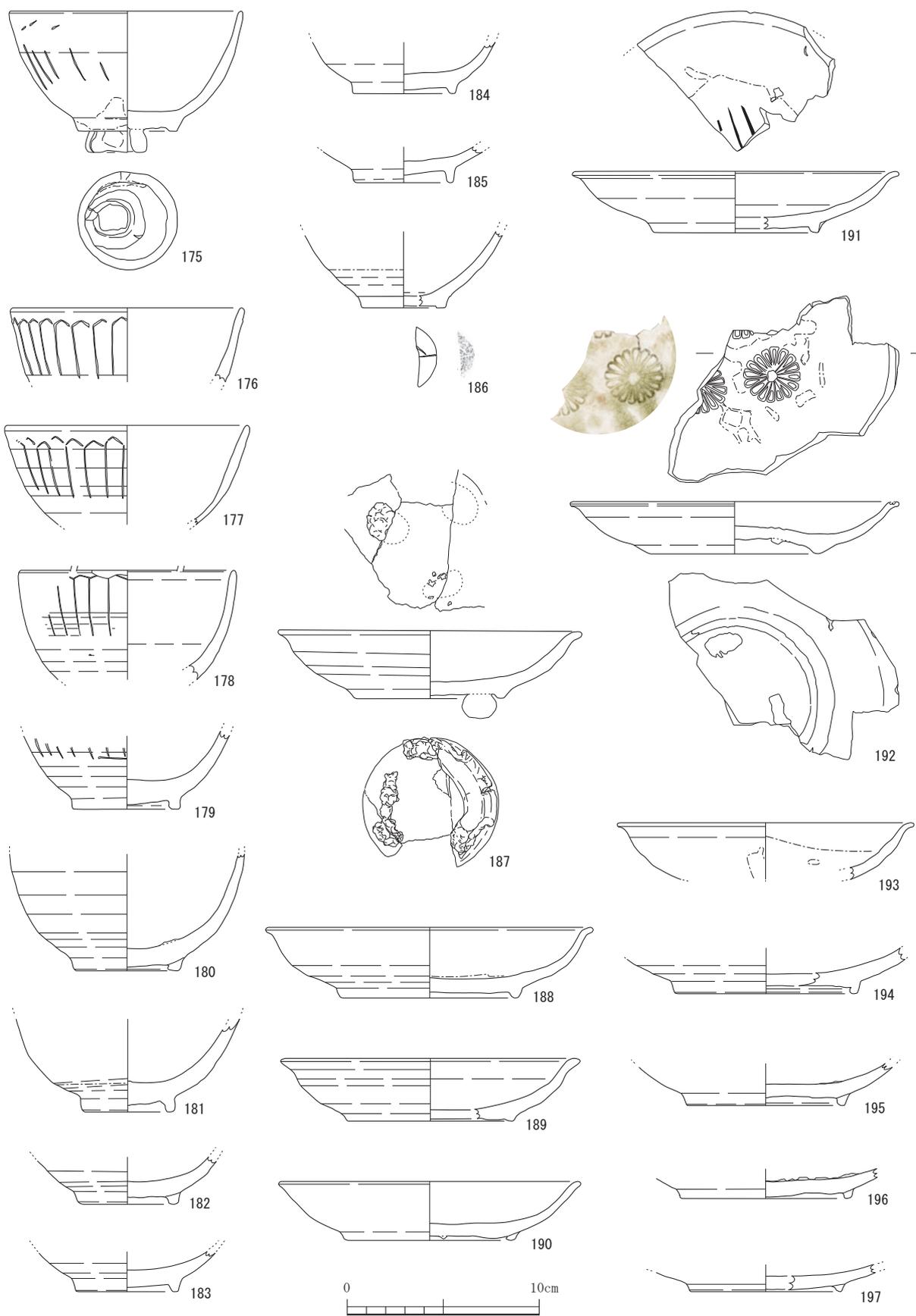


图 35 勘介 1 号窯跡出土遺物 2 (1/3)

(315, 333, 335) もみられる。

匣鉢蓋として使用されたと考えられる径 20.0cm ～ 14.0cm 程度の転用品がある。匣鉢の底部を利用したもの (337, 338) や大型の挟み皿のような形態 (339) があり、いずれも周縁部を打ち欠いて整形し、片面には自然釉が厚く付着している。(340 は溶着した 3 枚の円板状のもので、錆釉が厚く固着しているためこちらに提示したが、北山窯に関連する資料の可能性はある。) そのほかに匣鉢内で使われた**長脚ピン** (341 ～ 344) は長さ 4.6cm ～ 5.5cm、幅 3.0cm 弱である。**団子トチ** (345, 346) や様々な**輪トチ** (347 ～ 352) がある。断面形が長楕円になるやや高い 347, 348 のタイプが丸碗 (175) に底面に付着している。**焼台** (353, 354) は径 9.0cm ～ 11.0cm、厚さ 5.0cm ～ 6.0cm で付着物も多く窯材に転用されていた可能性がある。**小分炎柱**の部材 (355 ～ 359) は径 9.9cm ～ 11.5cm 程度の円柱状のもので、残存長は最大で 18.2cm であった。複数個を積み上げ、ヨリ土を用いて接着した。激しい被熱の痕跡は一方に偏って認められる。**ハリ** (360) は匣鉢の間を支持したようで、曲面の痕跡が残る。激しい被熱の痕跡は一方に偏って認められる。

なお、以上の窯道具類に認められる種々の窯印等については、勘介 1・2 号窯の両者を併せて後述することにする。

(2) 勘介 2 号窯 (図 51 ～ 図 69)

勘介 2 号窯に伴う物原から出土した資料では、碗類では天目茶碗・丸碗・平碗があり、皿類には端反皿・稜花皿・ソギ丸皿・丸皿・灯明皿・稜皿・内禿皿・折縁皿・土師器皿がある。鉢類では播鉢・焼締大皿・片口がある。壺・瓶類では德利・有耳壺・壺・耳付水注がある。鍋・釜類では釜・内耳鍋がある。このほかに筒形容器・水指・桶・小坏・茶入・香炉・蓋・狛犬がある。窯道具では匣鉢・挟み皿・トチ・焼台・小分炎柱がある。

天目茶碗 (361 ～ 397) には、口唇部のくびれが比較的小さく、削り出し輪高台のもの (364, 365) が含まれるが、主体となるのは体部が下方から緩やかな丸みをもって開き、上方が直立し、一旦くびれて口縁部がわずかに外反するものであり、体部下方はやや直線的となり高台脇を削りこむ。内反高台で高台下端を面取りするものがある。多くは外面体部下方から高台にかけて錆釉が掛けられるが、薄く掛かるもの (366, 367, 374, 389, 390, 394)、露胎となるもの (365, 391, 392, 393) がある。釉薬は内面および外面上方に鉄釉が掛けられるほか、銅緑釉の製品 (385 ～ 387) がある。

丸碗 (398 ～ 401) の体部は、下方から丸みをもって開きつつ上方は直立する。器壁は底部付近で厚みを持ち、口縁にむかってやや薄くなり、端部は丸く調整される。高台は断面形状が方形となる貼り付け高台が主となる。398, 399 は外面体部に鉤形の印花文を連続して蓮弁文が表現される。釉薬は内外面全体に灰釉が掛けられる。402 は口縁端部が外反する**端反碗**の形態であり、削り出し輪高台が付く。体部外面には丸ノミによるタテ方向の削りが入る。内面および外面上方に黄瀬戸釉が掛かる。**平碗** (406 ～ 407) は口径 15.0cm ～ 17.0cm、405, 406 は内外面に鉄釉、405 は体部外面下方に錆釉が掛かる。407 は無釉で焼締である。

端反皿 (408, 409, 411 ～ 421, 441, 442) の体部は下方から丸みをもって立ち上がり、口縁端部が緩やかに外反する。口径 8.2cm ～ 9.2cm と 11.0cm 前後のものがある。内外面全体に灰釉が掛けられるもののほか、鉄釉の製品 (409)、ほぼ無釉のもの (408, 415, 416, 418 ～ 421)、鉄釉・灰釉が掛かるもの (441) がある。内面底部中央に印花文が捺される。全体の形状が不明な灰釉皿 422 ～ 424 も含めると、菊花文、かたばみ文をはじめ 7 種ほどがある。

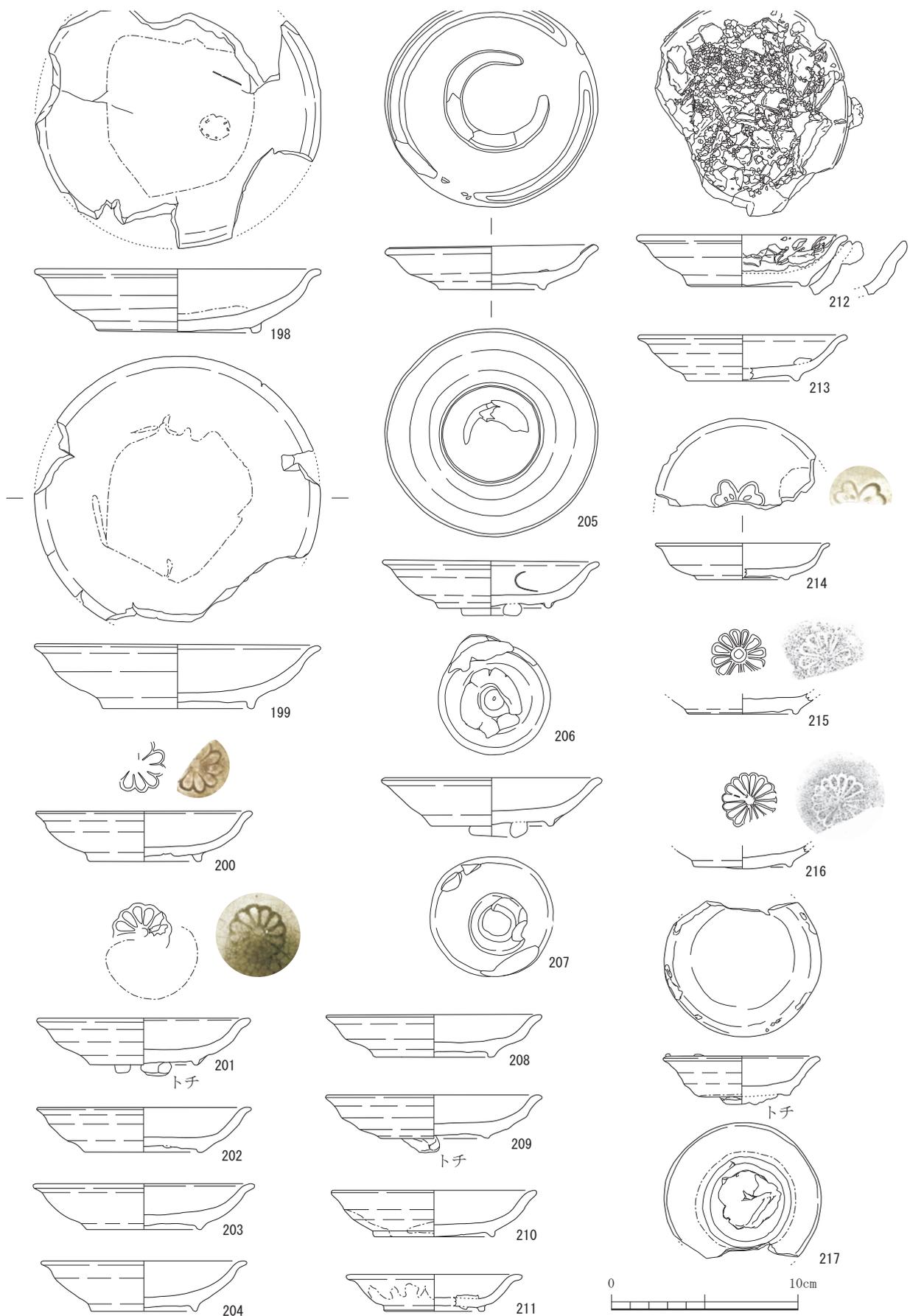


图 36 勘介 1 号窯跡出土遺物 3 (1/3)

稜花皿 (410) は口径 10.7cm、器高 2.5cm、体部は下方から丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部付近は器壁が薄くなり先端はやや尖る。口縁内面に波状文を描き、内面底部中央に菊花の印花文がつく。高台は断面形が逆三角形に近い貼り付け高台で、内外面に灰釉が掛かる。底面に輪トチが付着する。

ソギ丸皿 (425 ~ 432) 口径 10.0cm ~ 11.0cm、器高 2.9cm 前後の丸皿の形態である。内面体部と底部の境を沈線で区切り、その間に丸ノミによる削りを連続して文様とする。内面底部は沈線による二重円の中央に菊花の印花文を配する。内外全面に灰釉が掛けられる。底面に輪トチ痕が残るものが多い。428 は体部外面にも刻文(ソギ)が入る。433 はソギ丸皿とは異なる施文技法で、体部内側に刻み目文様がめぐる。内外面に灰釉が掛けられる。

豆皿 (434) 口径 6.0cm、器高 1.3cm、削り込み高台で内外面全体に灰釉が掛けられる。内面底部に印花文(八輪文)が捺される。

丸皿 (443 ~ 459, 478) は断面形が逆三角形に近い貼り付け高台と削り込み高台(448, 450)がある。釉薬は灰釉(443, 447, 451, 453, 457)、鉄釉(446, 448, 459, 458)、鉄釉に灰釉流し(454, 456)銅緑釉(449, 478)があり、444, 445, 452 は無釉である。内外全面に施釉されるもののほか、内外面の底部を露胎とするもの(453, 457, 458)がある。平均的な口径は、灰釉の製品で 10.0cm 前後、鉄釉の製品ではやや大きく 11.0cm 前後に分布するとみられる。457 は内面底部に、458 は外面高台内に窯印とみられるヘラによる十字の線刻がある。

灯明皿 (435 ~ 440) は口径 9.5cm 前後、器高 2.3cm 前後、糸切り後未調整の平底、無釉の焼締陶器である。体部は丸みをもって立ち上がり、内面にヘラまたはコテ状工具によるナデ痕が螺旋状に残る。

稜皿 (460 ~ 472) の口径は 10.5cm 前後、器高は 2.0cm ~ 2.5cm、体部は下方から直線的に開き、口縁部はそのまのびて端部を丸くするもの、わずかに外反するものがある。削り込み高台であり、内外前面に鉄釉が掛けられる。ただし 465 は平底の形状であり、小型の口径 8.5cm の 466 は灰釉が掛けられる。

内禿皿 (455, 473, 474) は内面底部に凸部をもつ。473 は糸切り後未調整の平底で無釉。455, 474 は丸皿の形状で断面形が逆三角形の貼り付け高台がつく。内外面底部を除いて施釉する(鉄釉に灰流し)。

折縁皿 (475 ~ 477) の体部は下方からやや直線的に立ち上がり、口縁部は外面する。削り込み高台(476)、貼り付け高台(477)の両者がある。釉薬は灰釉(475, 476)のほか、銅緑釉(477)がある。このほかロクロ成形の土師器皿(479)がある。

播鉢 (482 ~ 504) 体部は下方からやや外反気味に開き、口縁部に縁帯を形成する I 類(482 ~ 499)と端部を内側に折り返す II 類(500 ~ 504)に分けられる。錆釉が内外全面に掛けられるが、底面部分は薄くなっている。口径は 27.0cm ~ 29cm が多く、30.0cm を少し超えるもの、17.0cm 程度の小型のもの(504)などがある。I 類では口縁部形状から細分が可能であり、口縁部上端が上方に引き上げられるもの(482, 483)、口縁部断面形状が三角形になるもの(484 ~ 488)、口縁部縁帯の下端が引き出されたもの(490 ~ 492, 494)、口縁部縁帯の上下が引き出されたもの(496 ~ 499)などに概ね分けられる。II 類口縁部の折り返しの幅は 1.5cm ~ 2.1cm 程度であり、上面が少し盛り上がるものとわずかに凹むものがある。

焼締大皿 (480, 481) 480 は口径 25.4cm の口縁部で丸みをもって開く体部から続き端部は面をもち断面方形となる。底部の 481 は底径 12.3cm、断面が方形となる削り出し高台であり、外面下半は回転ヘラ削り調整、高台脇を削り込む。無釉の焼締陶器である。

耳付水注 (505) は平底で、やや扁平な胴部がすぼまり口頸部が上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く玉縁状となる。双耳の位置を結ぶ方向に注口がつけられる。底面を除き鉄釉が掛けられる。508 は耳付き、509 は平底の小型の壺で底面を除き外面に鉄釉が掛けられる。

徳利 (506, 507, 510 ~ 512) 506 はラッパ状に開く口縁部で内外面に鉄釉が掛けられる。507 は耳付きの

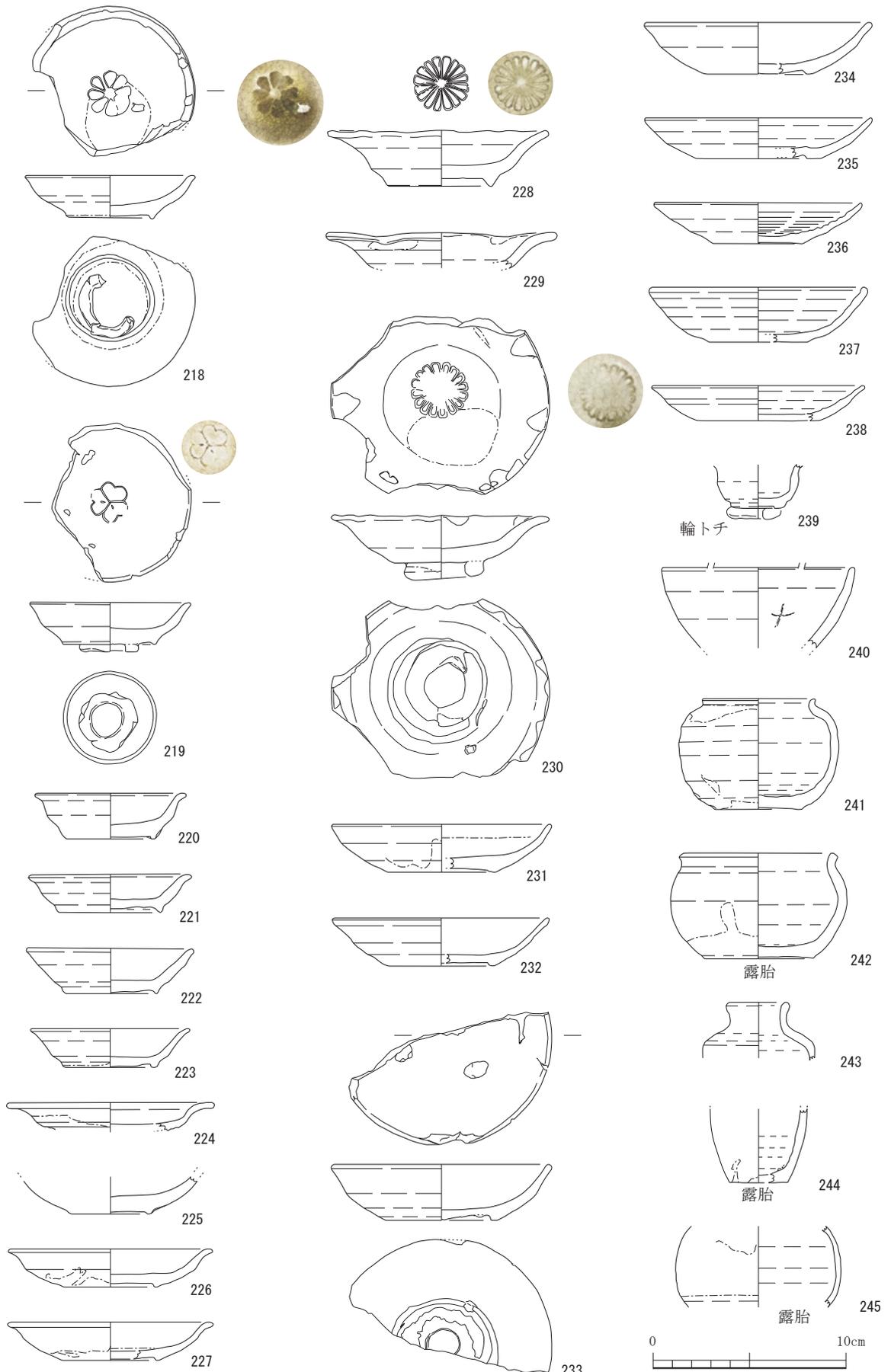


图 37 勘介 1 号窯跡出土遺物 4 (1/3)

徳利で体部上方に鉄釉が掛けられる。510～512は平底の徳利底部で底面を回転削り調整する。胴部下方まで鉄釉が掛けられる。

口広有耳壺（513～516）は口径に対して胴部径が若干大きく、短い口頸部と肩部をもつ。口縁端部がやや厚く、内側または外側に張り出し面をなす。513, 514は口径13.2cm、耳付きで内面口縁部から外面にかけて鉄釉が掛けられる。515, 516は耳の有無は不明で、内面口縁部から外面に掛けて錆釉が掛けられる。いずれも口縁部上端の釉は拭き取られる。水指（517）は口径11.0cm、断面方形の口縁部からつづく体部は一旦すぼまり、くびれる形状と思われる。外面に灰釉が掛かる。

筒形容器は、長胴の器形と口径に対し器高の低いものに分けられる。長胴の（518～530）は口径15.0cm～18.0cm、器高17.0cm～18.0cmのものが多い。口径と胴部最大径の差がほとんどなく、胴部中ほどから平底の底部にむかって若干径が小さくなる。口縁端部付近が厚みをもって面をなし、内側または外側に若干張り出すものがある。ロクロ成形で外面体部下半は回転ヘラ削り調整、外面底部は回転削り調整するものが多く、糸切り後未調整のもの（521）もある。内面と外面体部下方から底部に錆釉、内面口縁付近から外面下方近くまで鉄釉が掛けられる。口縁端部の釉は拭き取られる。器高の低い（531～547）は、口径11.0cm～13.0cm、器高8.0cm～9.0cmのものが中心であり、ほぼ同径の平底から体部が上方に立ち上がる形状である。口縁端部が若干厚みを増して面をなし、外側に若干突出するもの（533, 537, 543）がみられる。ロクロ成形、糸切り後未調整の平底であり、基本的な形状と調整は匣鉢とほぼ同様である。釉薬は、内面口縁部から外面体部上半にかけて鉄釉が掛けられる。口縁端部は拭き取られている。

片口は、体部が底面から直立するもの（548, 549）、丸みをもって立ち上がり、口縁が上方へのびるもの（550, 551）がある。548は口縁端部が外折して縁帯をなす。口縁に一ヶ所つく注口はヘラで撫で付けられている。内外面に厚く鉄釉が掛けられる。549は面をなす口縁端部が内傾する。口縁にはナデ調整により注口がつく。内面口縁部から外面体部に鉄釉が掛かる。口縁端部の釉は拭き取られる。550は口縁部がわずかに内傾する。口縁端部をのぞき鉄釉が掛かる。551は口縁にナデ調整により注口がつく。内外面に鉄釉が施され、口縁端部にヨリ土が付着する。555は陶製の鍋耳の部分。鉄鍋を模したような丁寧な作りで内外面に鉄釉が掛かる。

内耳鍋は内外面に錆釉が掛かる。半球形に近い体部の丸いもの（552）は内耳の痕跡があり、外面に煤が付着する。口縁部が内彎するもの（553）も内耳の痕跡が残る。**釜**（554）の錆釉のかかる胴部片は球形に近い。外面に煤が付着する。耳部分とその下側の火覆いの痕跡が認められる。

筒形香炉（556, 557）は体部は下方からわずかに外反して立ち上がり、口縁部は内側に折れて張り出す。端部は丸く調整される。556は口径10.0cm、器高6.7cm、底部外縁に三足が貼り付けられる。体部には3条の櫛描沈線がめぐる。内面口縁部から外面体部下方にかけて灰釉が掛けられる。558は底径5.0cm、底面は露胎で中央付近にかけて少し突出する。外縁に三足がつく。

茶入（559～564）では、559は白色の胎土の小壺で錆釉に灰釉が掛けられる。黄瀬戸釉か。560の播座茶入は古瀬戸後期IV新段階に比定される。緻密な胎土が用いられている。561, 562は肩衝、563は丸壺、564は内海と思われる。いずれも胎土は緻密であり外面に鉄釉が施される。565は鉄釉の小坏で底部に輪トチが付着する。

狛犬（566, 567）手捏ね成形の2個体はともに呷行の像である。軟質の焼成不良品でタタラ成形の台座底面を除き全体に鉄釉が施されていたとみられる。像固定用の心棒の痕跡であろうか、台座底面にはそれぞれ約1.5cmの孔が焼成前に開けられ、本体内部に向かって細くなる深さ約5.0cmの凹みがつくられている。566は台座を含めた高さは9.7cmであり、台座前部、前足、左耳の部分を欠損する。567は同じく9.6cm、左目、前足、後足、尾の部分を欠損する。

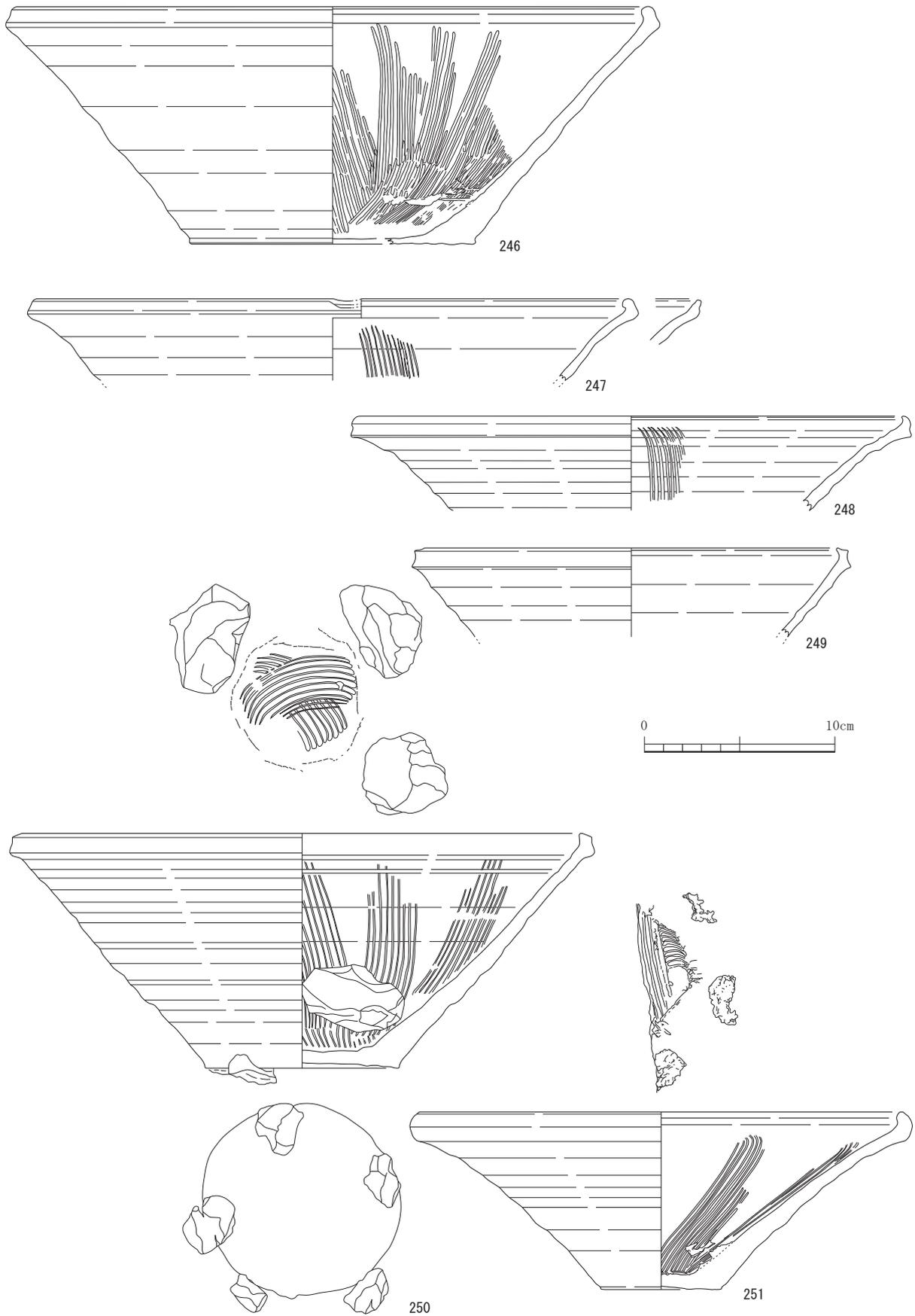


图 38 勘介 1 号窯跡出土遺物 5 (1/3)

桶 (568～571) としたものは、口径約 34.0cm に対して器高約 11.0cm となるロクロ成形の浅い筒形の容器であり、直立する体部外面に 3 条の箍の表現がめぐらされている。568 は外面底部を除き濃い鉄釉が掛けられ、口縁端部は拭き取りされている。569～571 はやや軟質の焼成で錆釉である。これまでに桶として知られている器種の形状と異なり器高が低く、盥と呼ぶべき形である。572 は甕の口縁部である。口縁が外折して幅 1.8cm 程度の縁帯を形成する。内外面に鉄釉が掛けられる。

そのほか、用途不明製品 (574) は径 15.0cm、高さ 4.0cm の蓋のような陶器製品であり、ただし器壁は厚く中央に径約 2.0cm の円形孔が開いている。上面となる側は蓮弁と端部付近にも装飾的な表現が加えられ、黄釉が掛けられている。165 は御深井釉の丸皿で貼り付け高台、高台付近のみ露胎で裏面に製品が溶着している。

575～579, 583, 584 は溶着資料である。575 は上から灰釉ソギ丸皿・輪トチ (2 重)・挟み皿 (端反, 無釉) / 灰釉端反皿 (総釉)・輪トチ・匣鉢と重なっている。576 は天目茶碗・トチ・鉄釉丸皿 (削り込み高台, 総釉)・輪トチが重なったものである。577 は灰釉皿・輪トチ・挟み皿 (無釉) / 灰釉稜皿 (総釉)・輪トチ・匣鉢が重なっている。灰釉稜皿よりも上の挟み皿の径は大きい。578 は上面に灰釉皿の一部が付着している。579 は匣鉢底面に灰釉碗がつぶれて付着している。583 の匣鉢口縁上端にはひも状のヨリ土が付着する。匣鉢の内側体部には灰釉皿口縁の一部が付着し、底部には輪トチが付着する。匣鉢の外表面底部には、灰釉皿 / 縁釉皿 (灰釉) / 灰釉端反皿 (総釉)・輪トチが重なっている。584 は匣鉢内面底部に多数のトチを配置したもので、トチ上端はそれぞれ傾きが異なり、小型の製品を置いたと考えられる。匣鉢には器壁の薄い製品の一部が付着が認められる上、トチの間隔は狭く小瓶や茶入などを置いた可能性が考えられる。

挟み皿 (580～582) はロクロ成形、糸切り後未調整の平底の皿で、体部は下方から丸みをもって開き、口縁部はわずかに外反して先端を丸くする。口径は約 11.5cm、やや小型のもので 9.0cm を測る。

匣鉢蓋 (585～587) も基本的には挟み皿と同様の成形・調整技法である。585 は口径 16.7cm の匣鉢蓋であり凹面にユビナデによる窯印がある。586 の口径は 18.8cm、587 の口径は 14.2cm で下面に灰釉皿が付着する。

匣鉢 は全てロクロ成形による筒形の形態を基本とし、底面は糸切り後未調整の平底である。側面下端が面取される形であり、底部径は口縁部より若干小さくなる場合が多い。小型のもの (588～602) は、口径 10.0cm～12.0cm、器高約 4.0cm で腰は丸く、底部がやや突出して径 6.0cm～7.0cm の底面を形成する。ただし 602 は口径 12.2cm、器高 5.2cm で体部下半が丸く器高の高いタイプであり、底面に 1ヶ所穿孔がある。中型以上のもでは複数の規格があり、口径・器高の差が小さく側面形が正方形に近いものでは、口径 12.0cm 前後、器高 8.0cm のもの (603, 604) と、口径 14.0cm～17.4cm、器高 9.6cm～10.7cm のもの (607～611, 622) に分けられ、後者では内面に横ピン、長脚ピンの付着または痕跡のある個体が認められた。器高が相対的に低く側面形が長方形に近いものでは、口径約 14.0cm～15.0cm、器高 5.0～6.0cm のもの (605, 606)、口径約 17.0cm～21.0cm、器高 6.8cm～9.2cm のもの (613～618) に概ね分けられる。

焼台 (623, 624) は径 9.0cm～10.0cm、高さ 4.3cm～6.2cm であり、降灰、ヨリ土などが付着する。626 は匣鉢間を支持するハリは、採取されたのはこれ 1 点のみである。長さ 6.3cm、中央付近の径は約 2.5cm。トチ類では**団子トチ** (625)、**輪トチ** (627～631) がある。**長脚ピン** (632～635) は長さ 4.7cm～6.3cm である。以上の窯道具類に認められる種々の窯印等について、勘介 1・2 号窯の両者を併せて後述する。

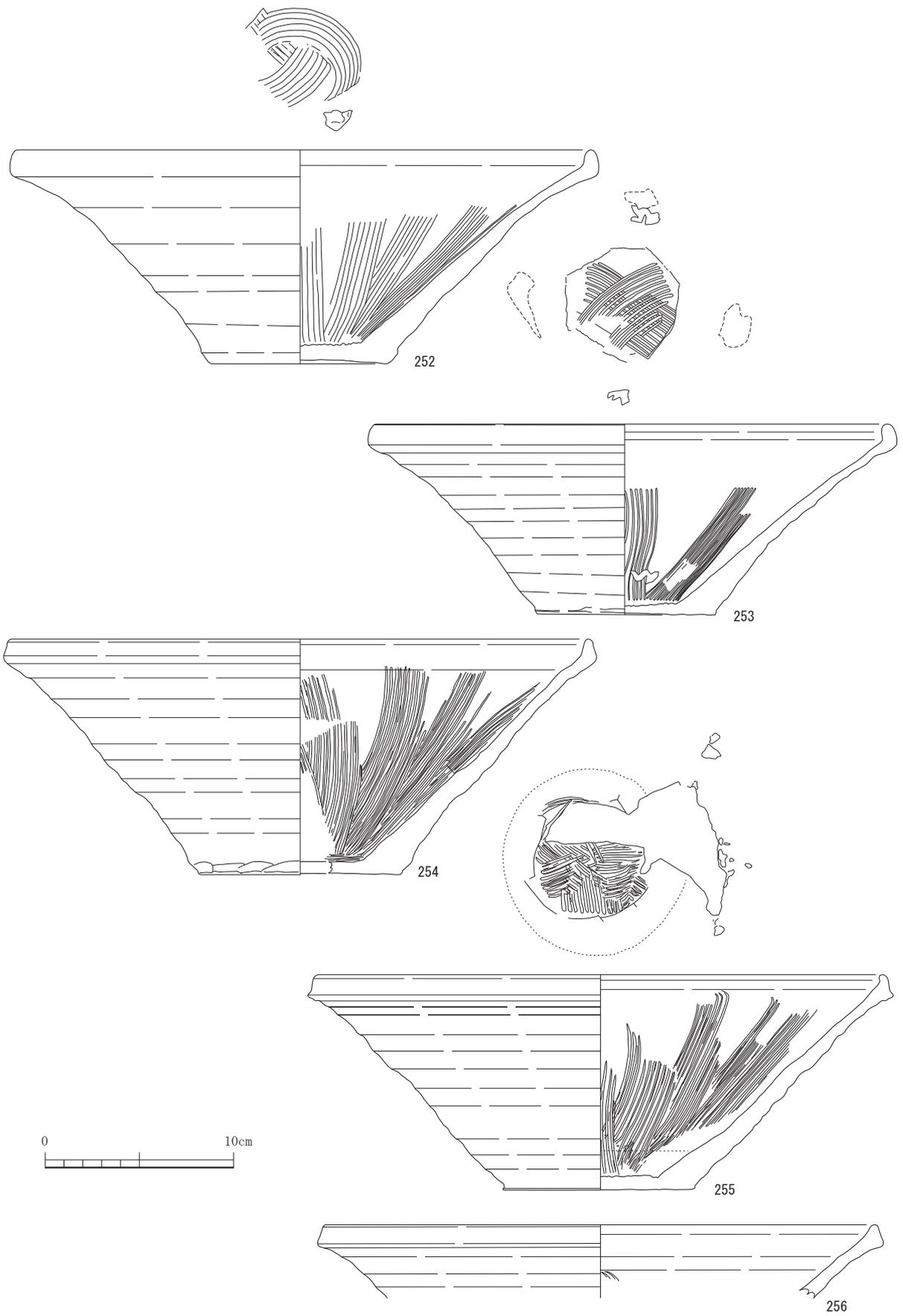


图 39 勘介 1 号窯跡出土遺物 6 (1/3)

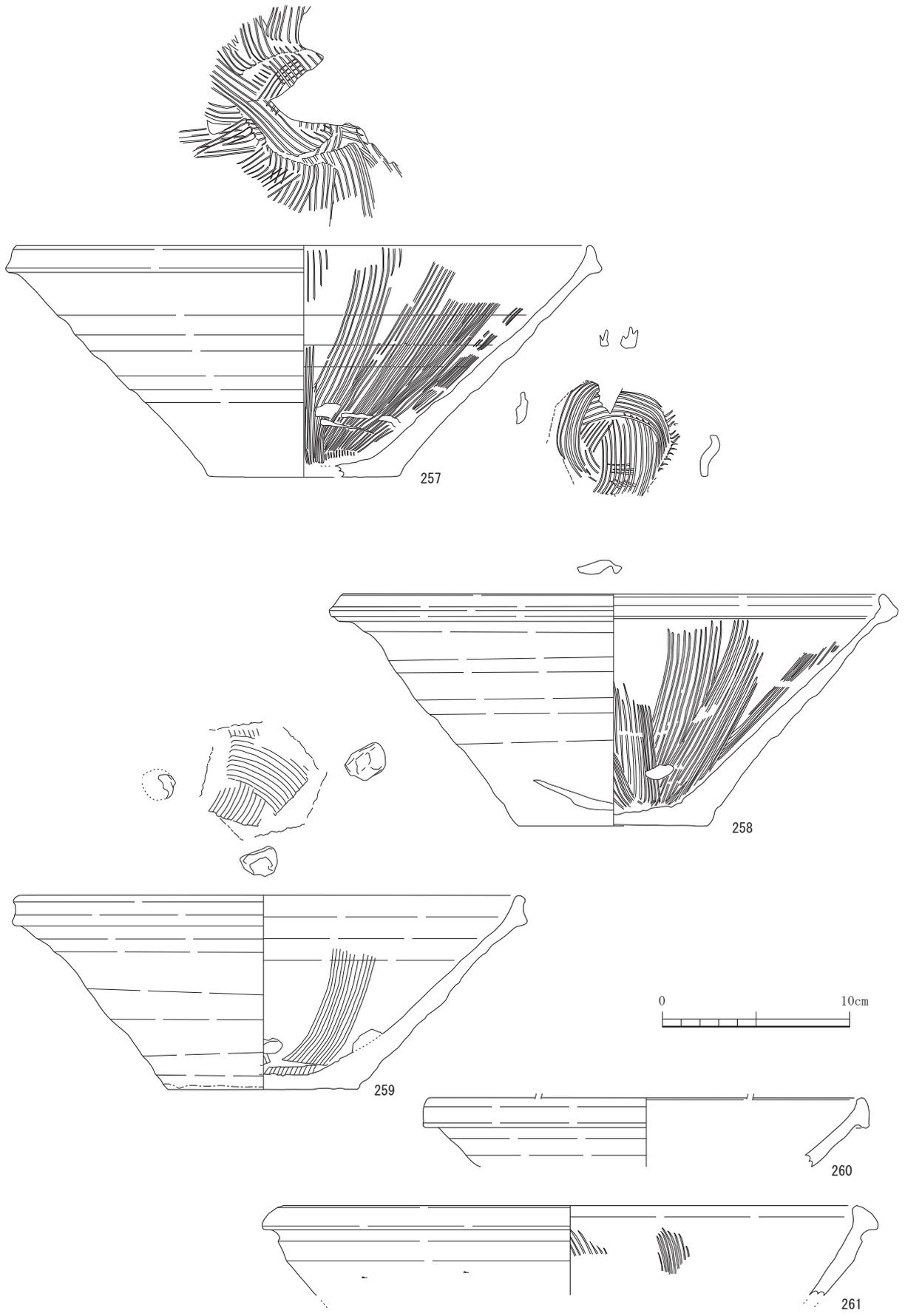


图 40 勘介 1 号窯跡出土遺物 7 (1/3)

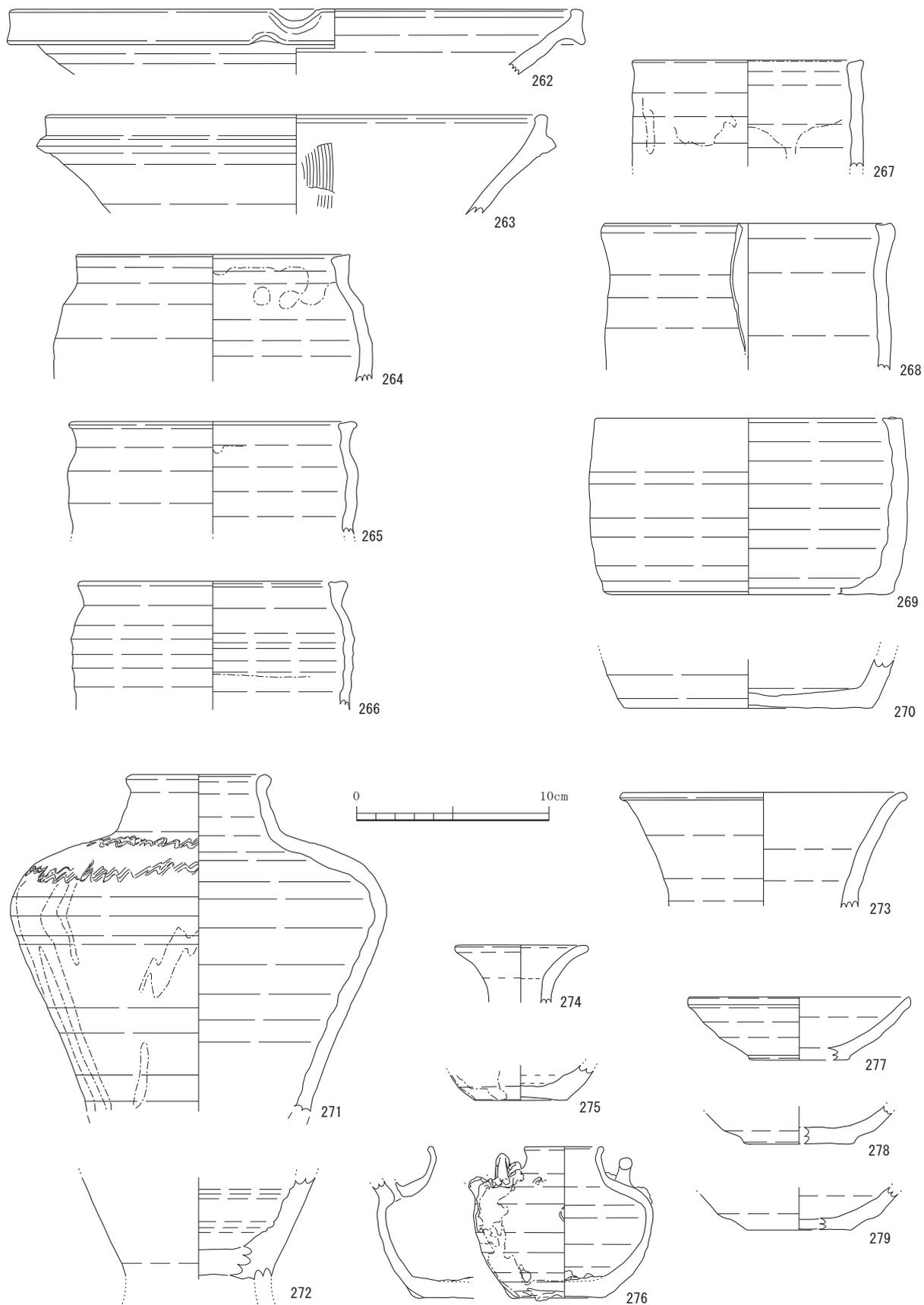


图 41 勘介 1 号窯跡出土遺物 8 (1/3)

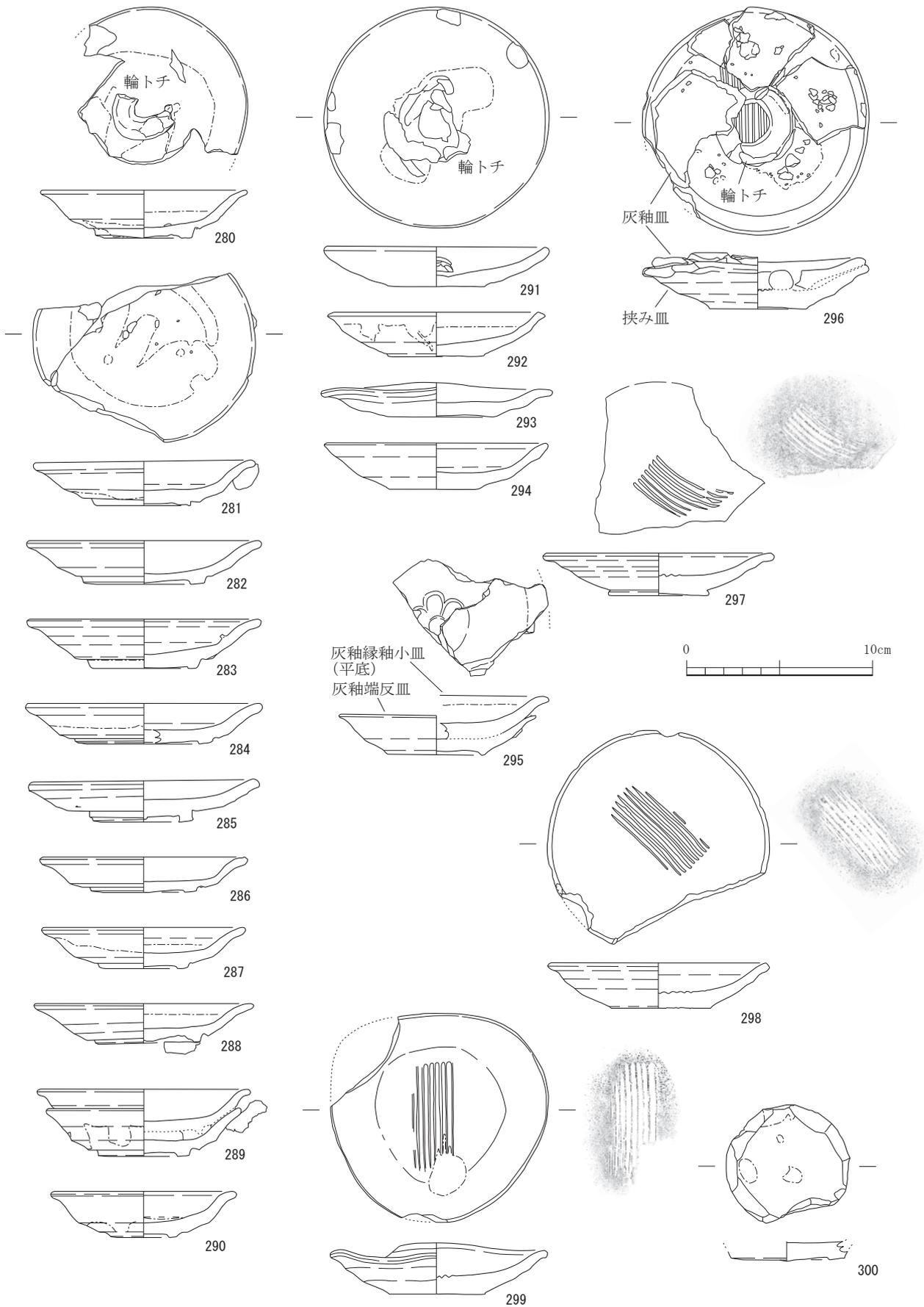


图 42 勘介 1 号窯跡出土遺物 9 (1/3)

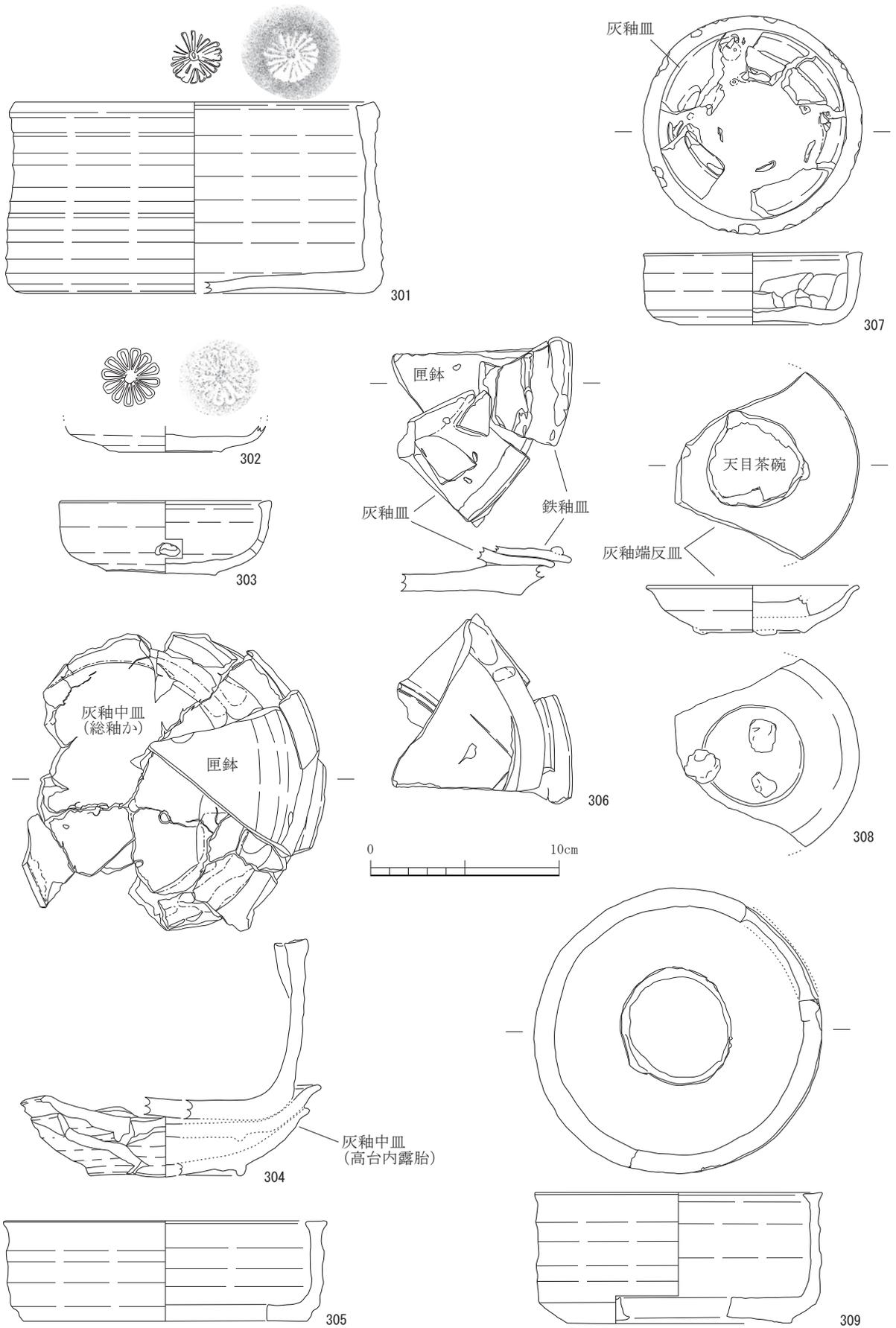
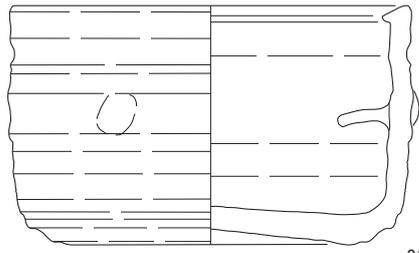
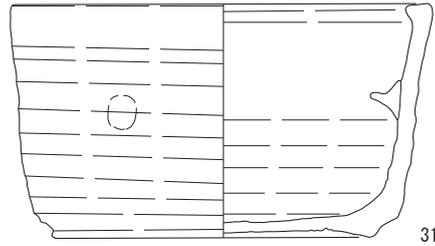


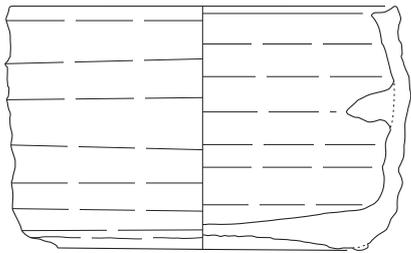
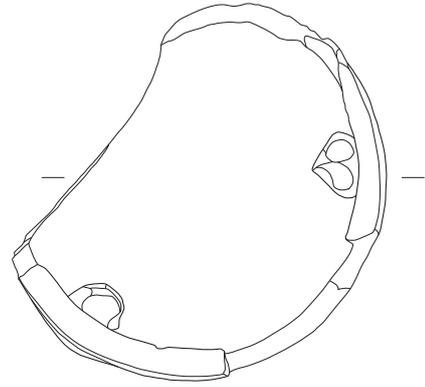
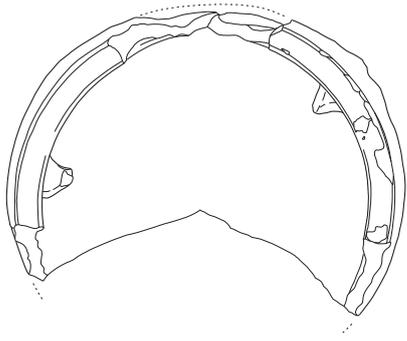
图 43 勘介 1 号窯跡出土遺物 10 (1/3)



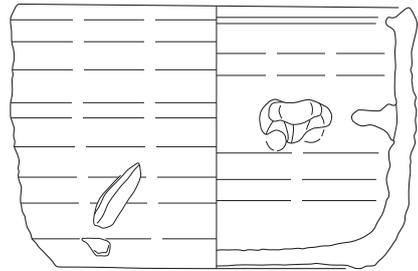
310



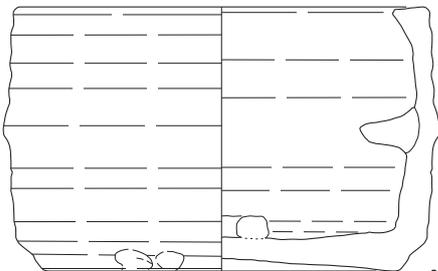
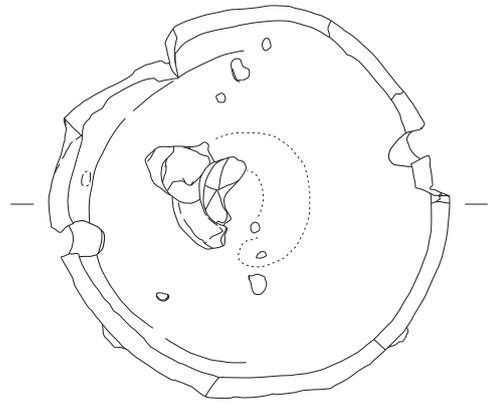
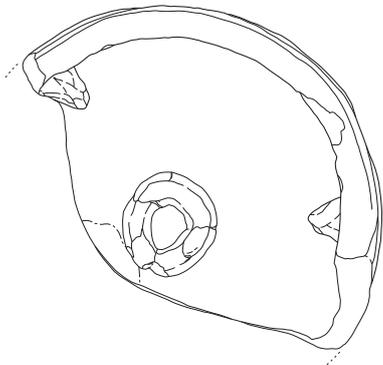
313



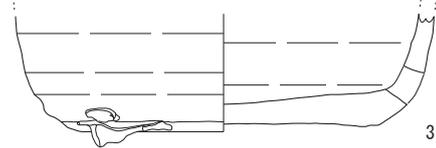
311



314



312



315



图 44 勘介 1 号窯跡出土遺物 11 (1/3)

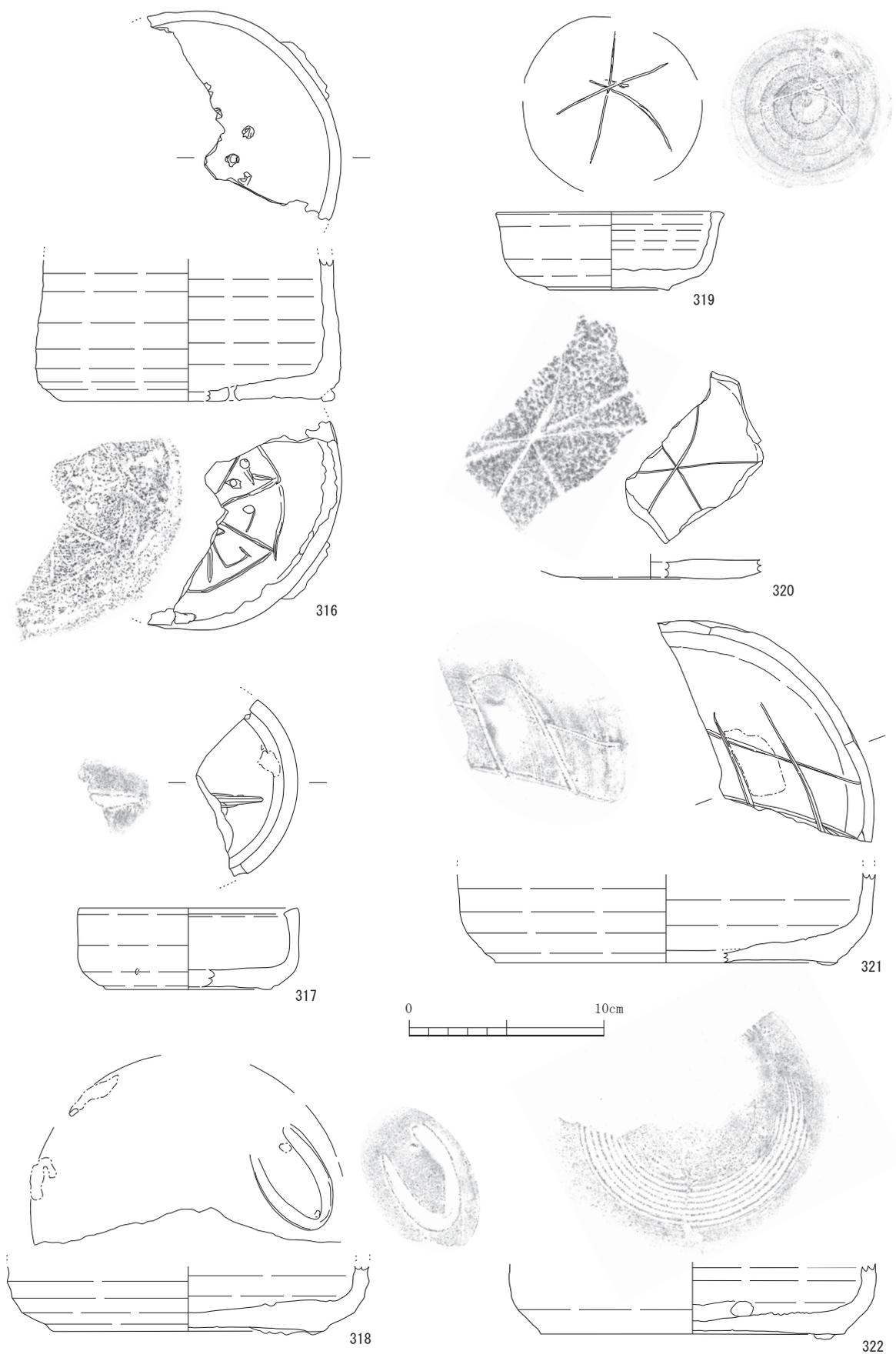


图 45 勘介 1 号窯跡出土遺物 12 (1/3)

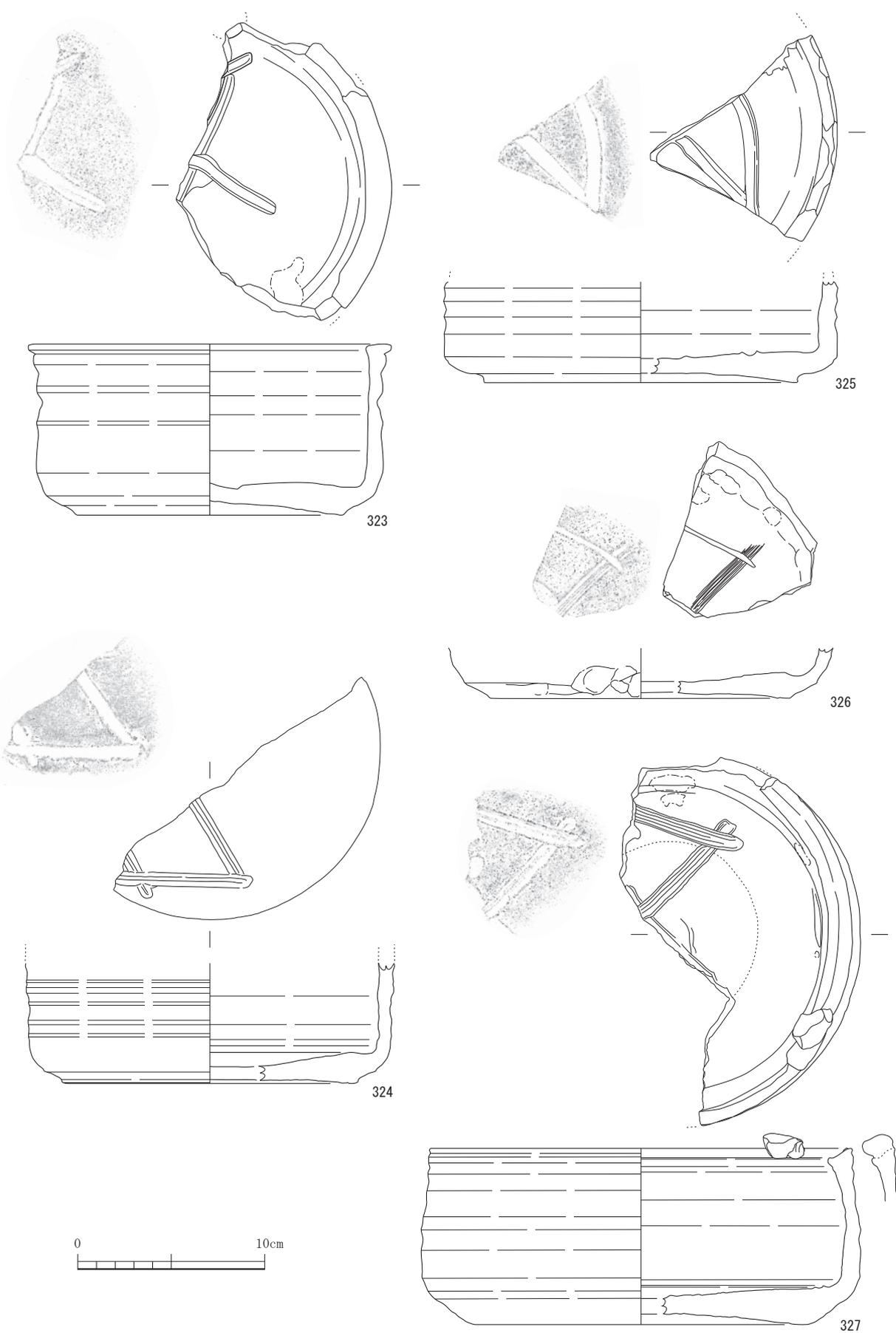


图 46 勘介 1 号窯跡出土遺物 13 (1/3)

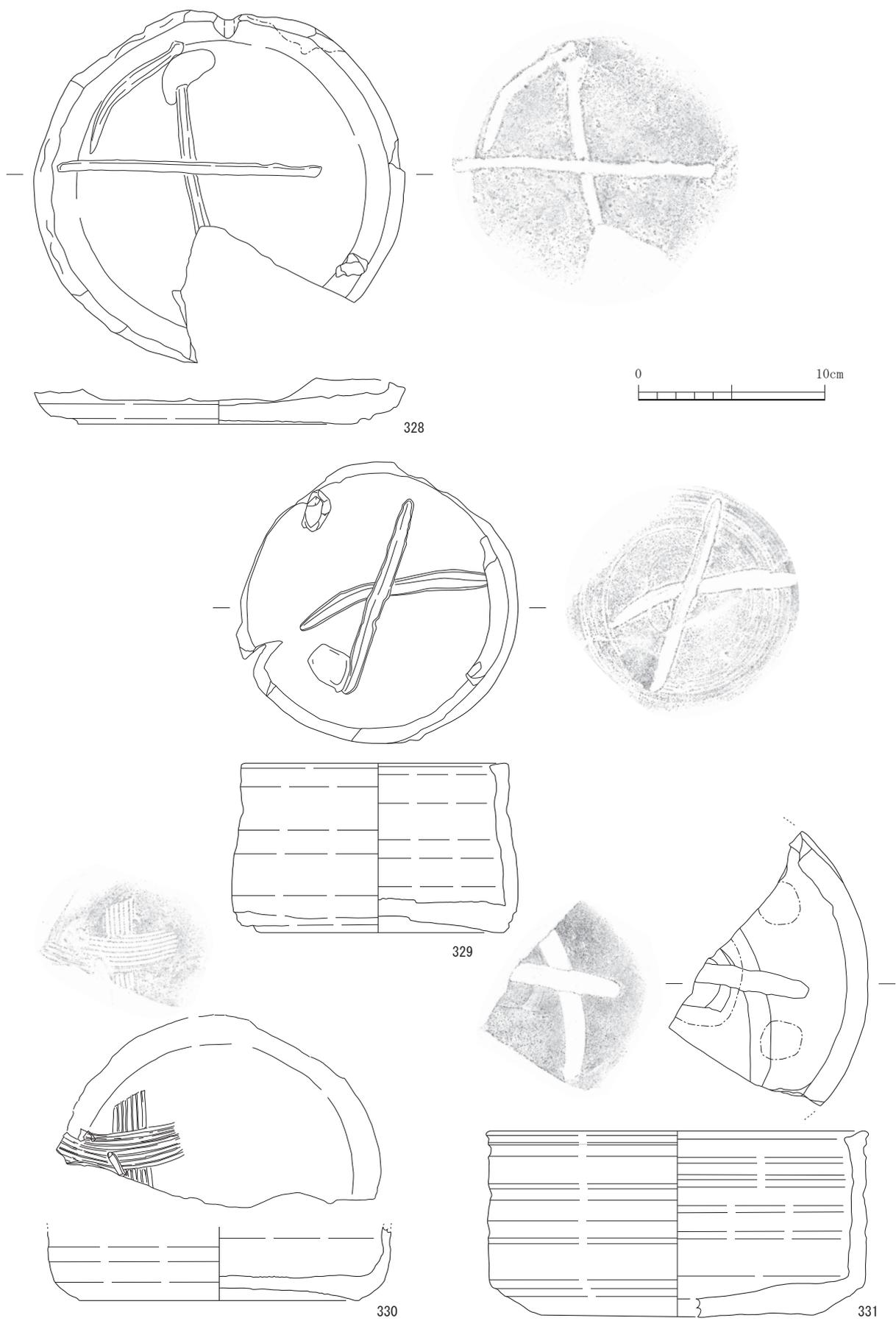


图 47 勘介 1 号窯跡出土遺物 14 (1/3)

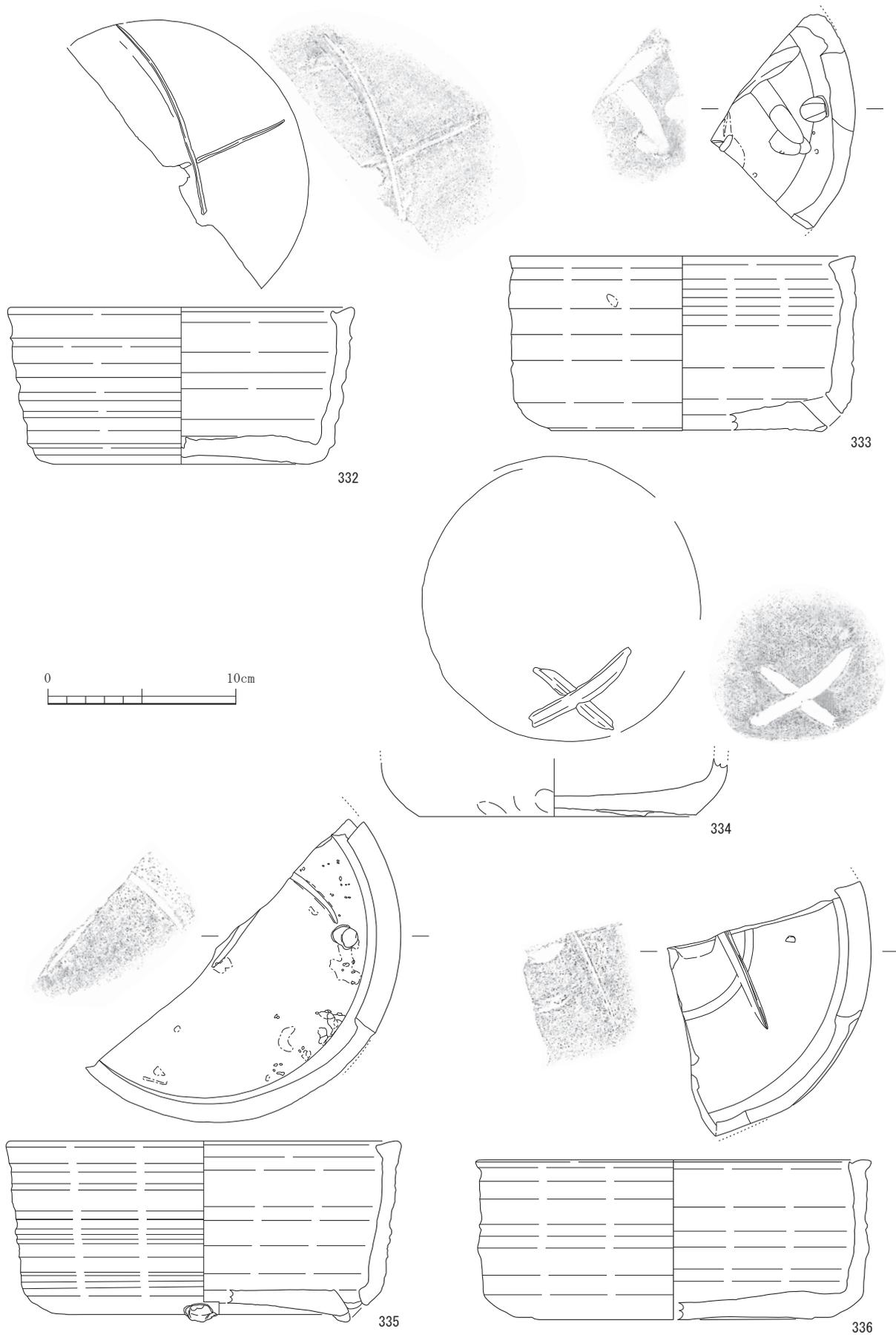


图 48 勘介 1 号冢跡出土遺物 15 (1/3)

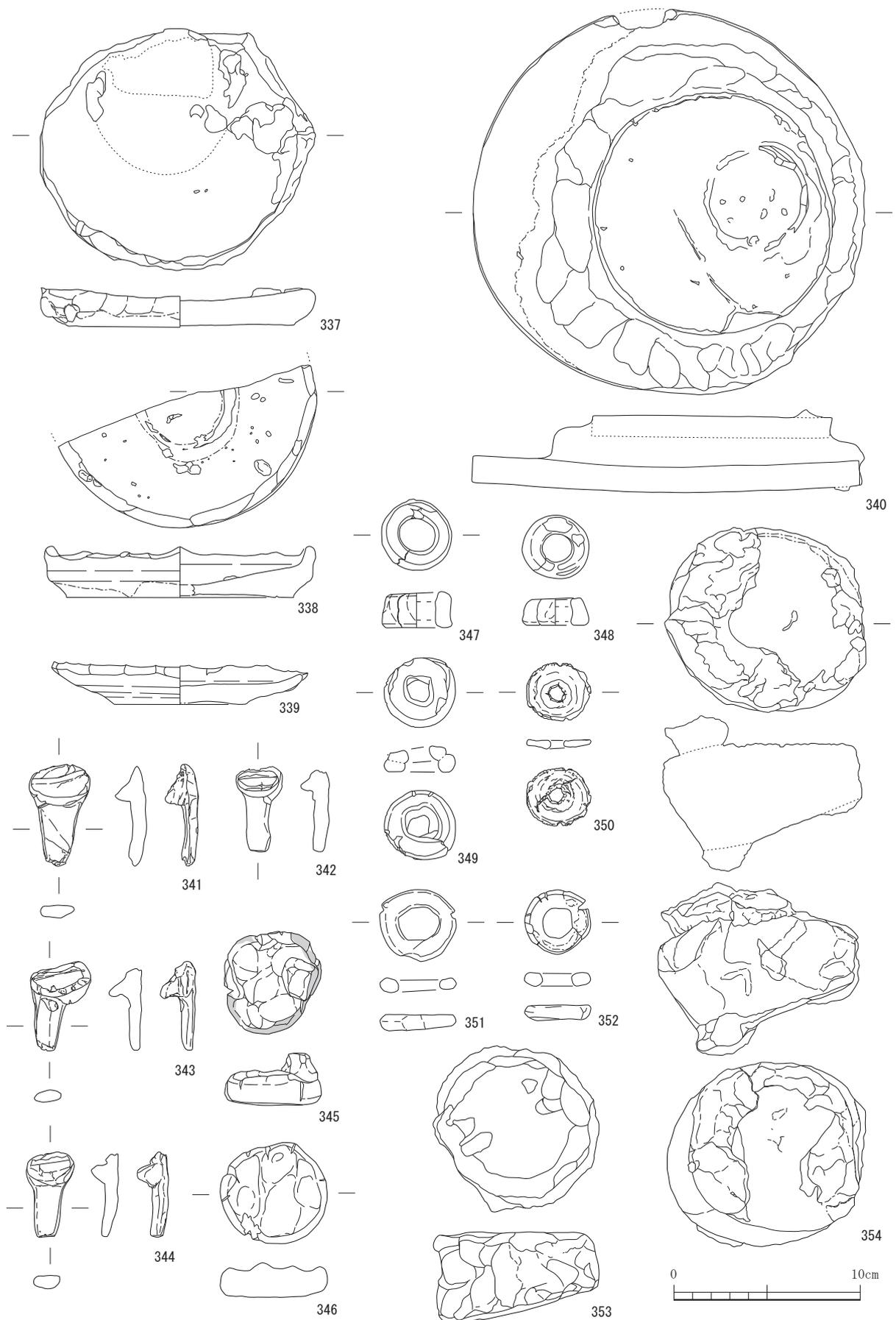


图 49 勘介 1 号窯跡出土遺物 16 (1/3)

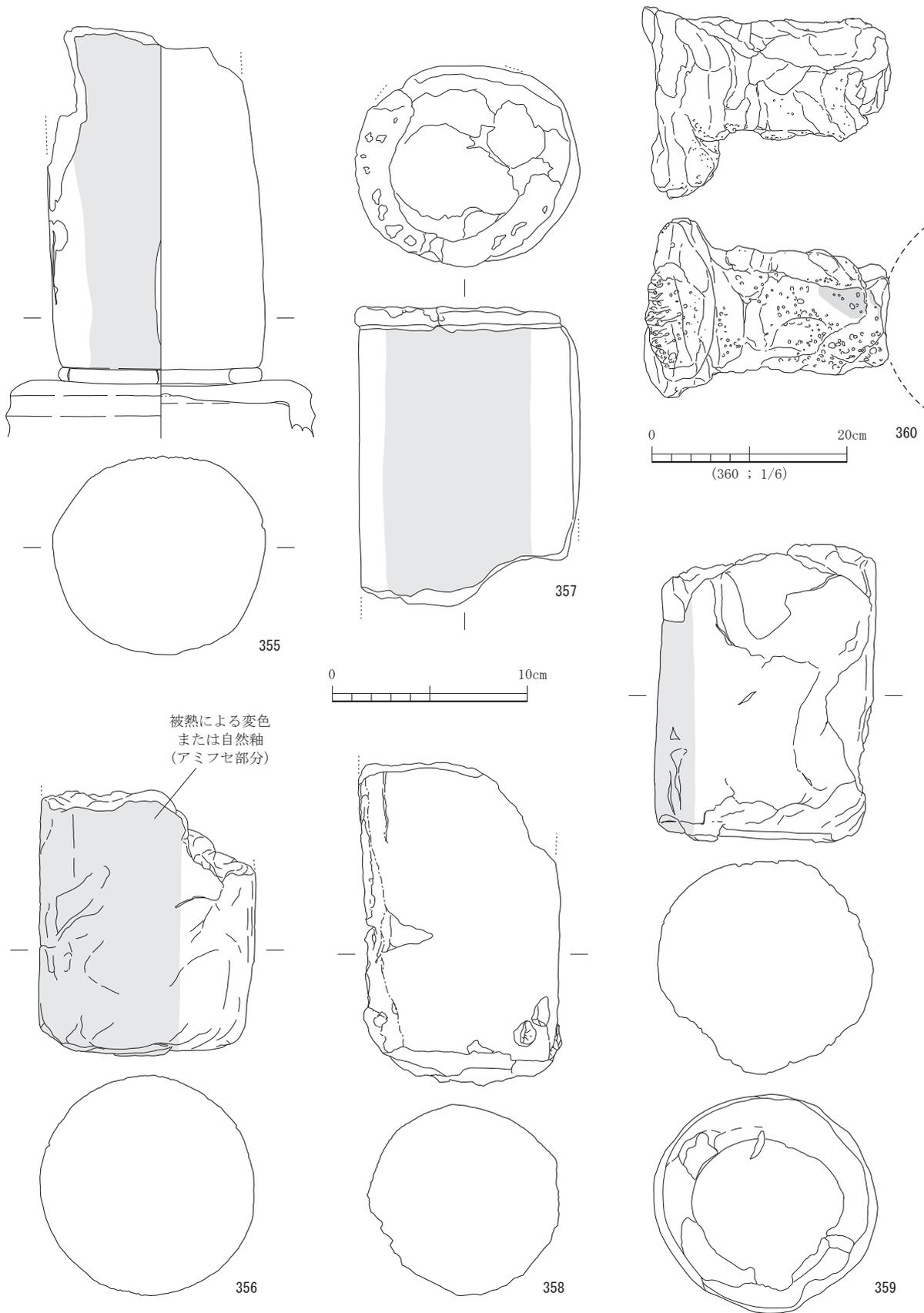


図 50 勘介 1 号窯跡出土遺物 17 (1/3, 1/6)

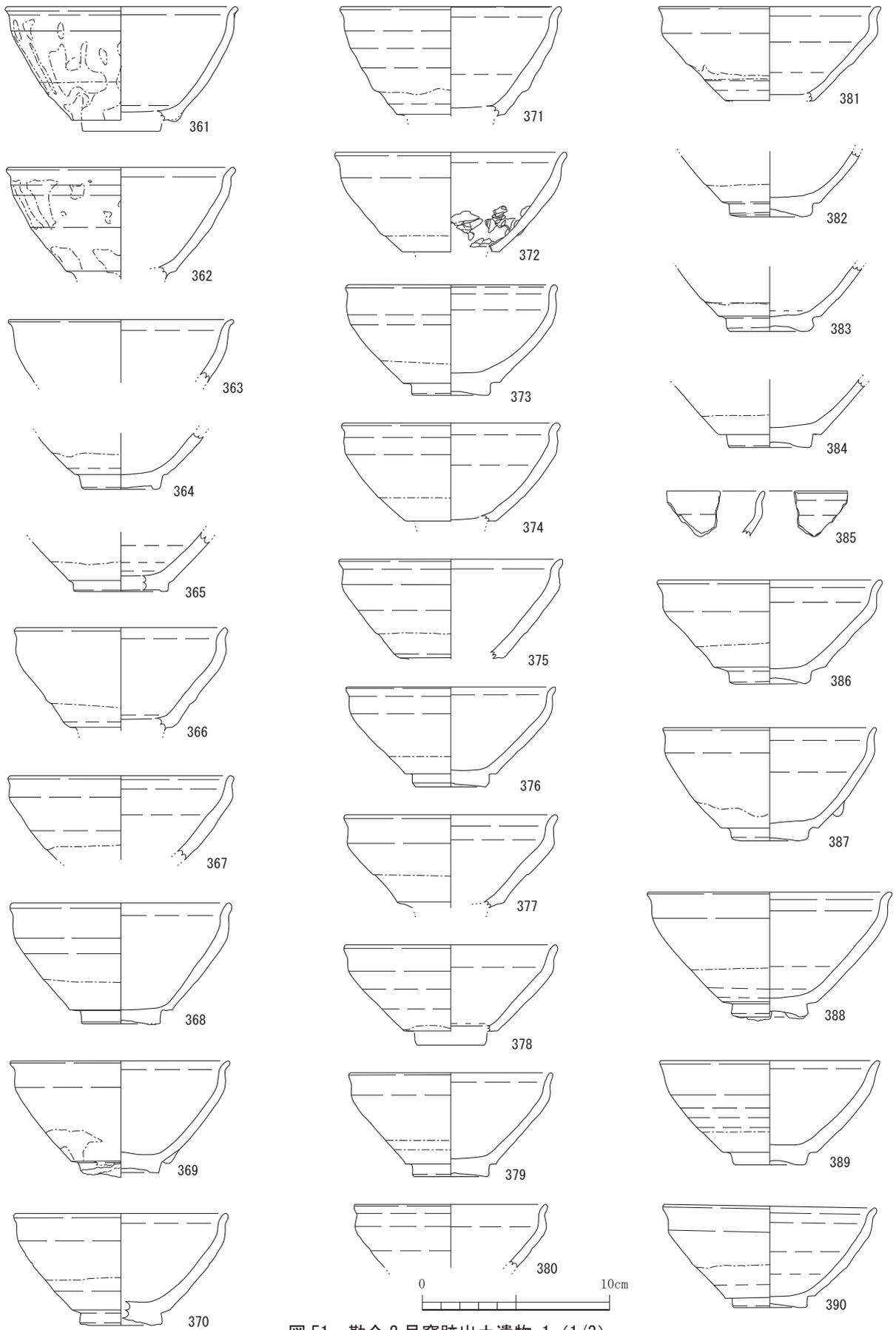


图 51 勘介 2 号窯跡出土遺物 1 (1/3)

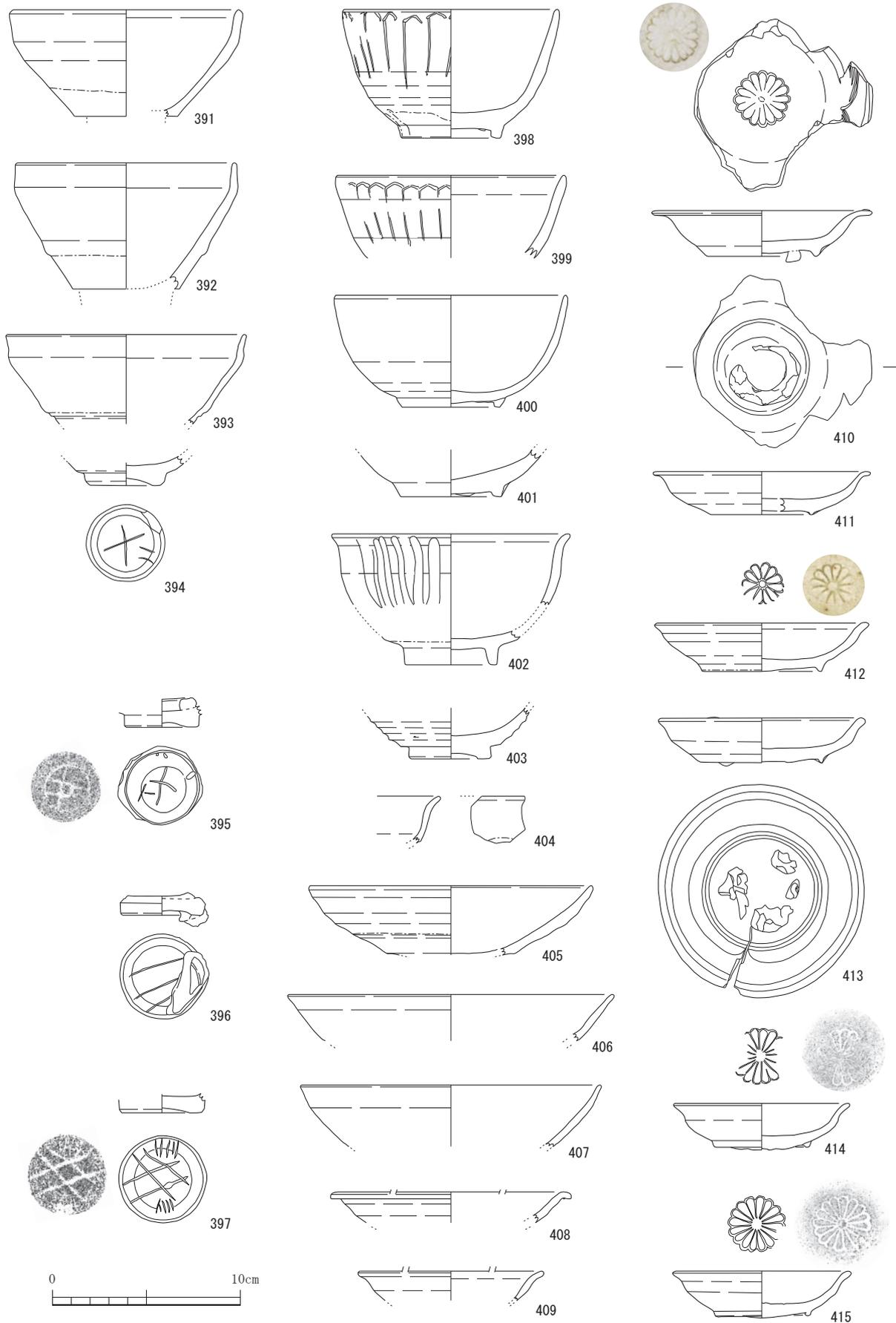


图 52 勘介 2 号窯跡出土遺物 2 (1/3)

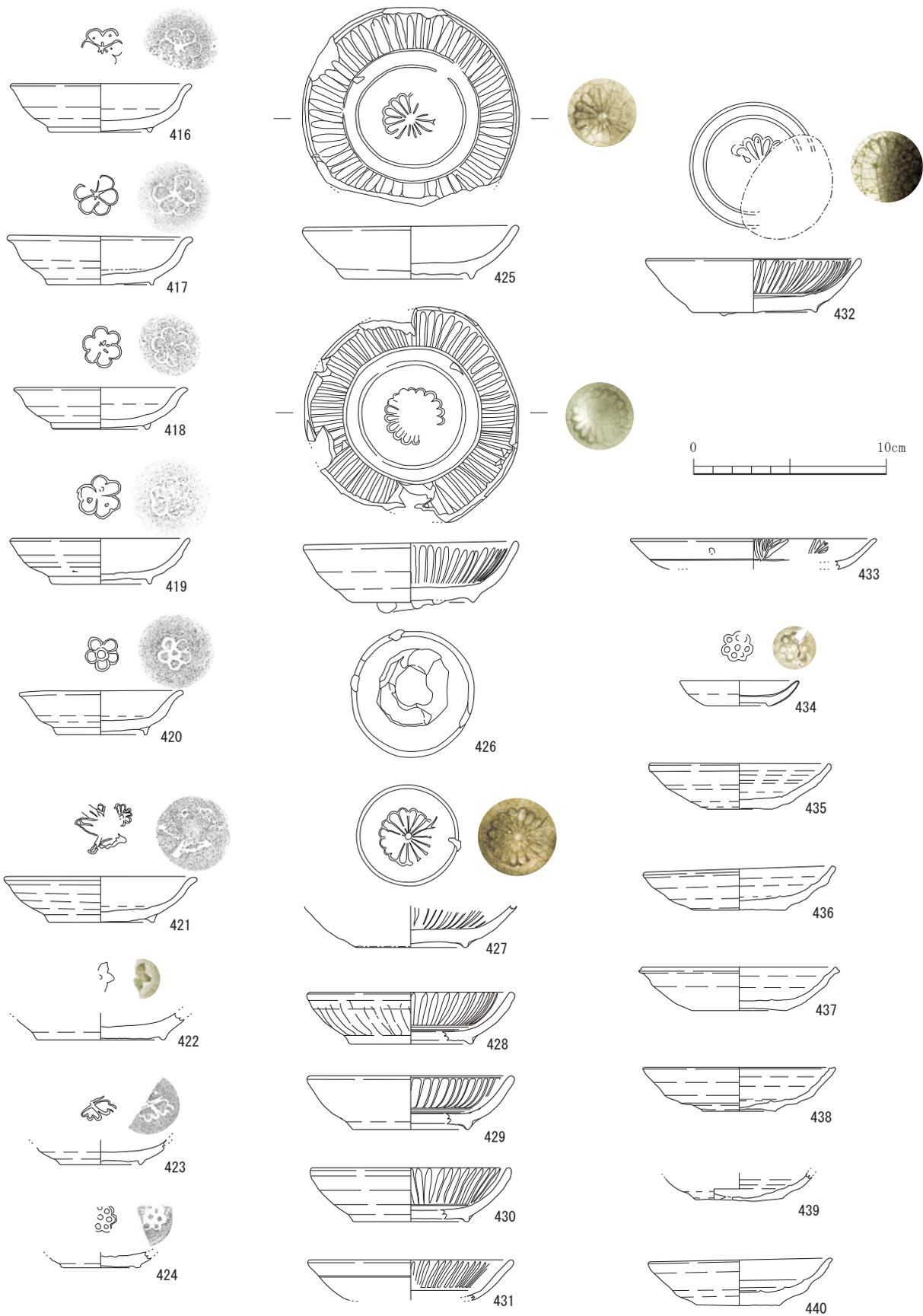


图 53 勘介 2 号窯跡出土遺物 3 (1/3)

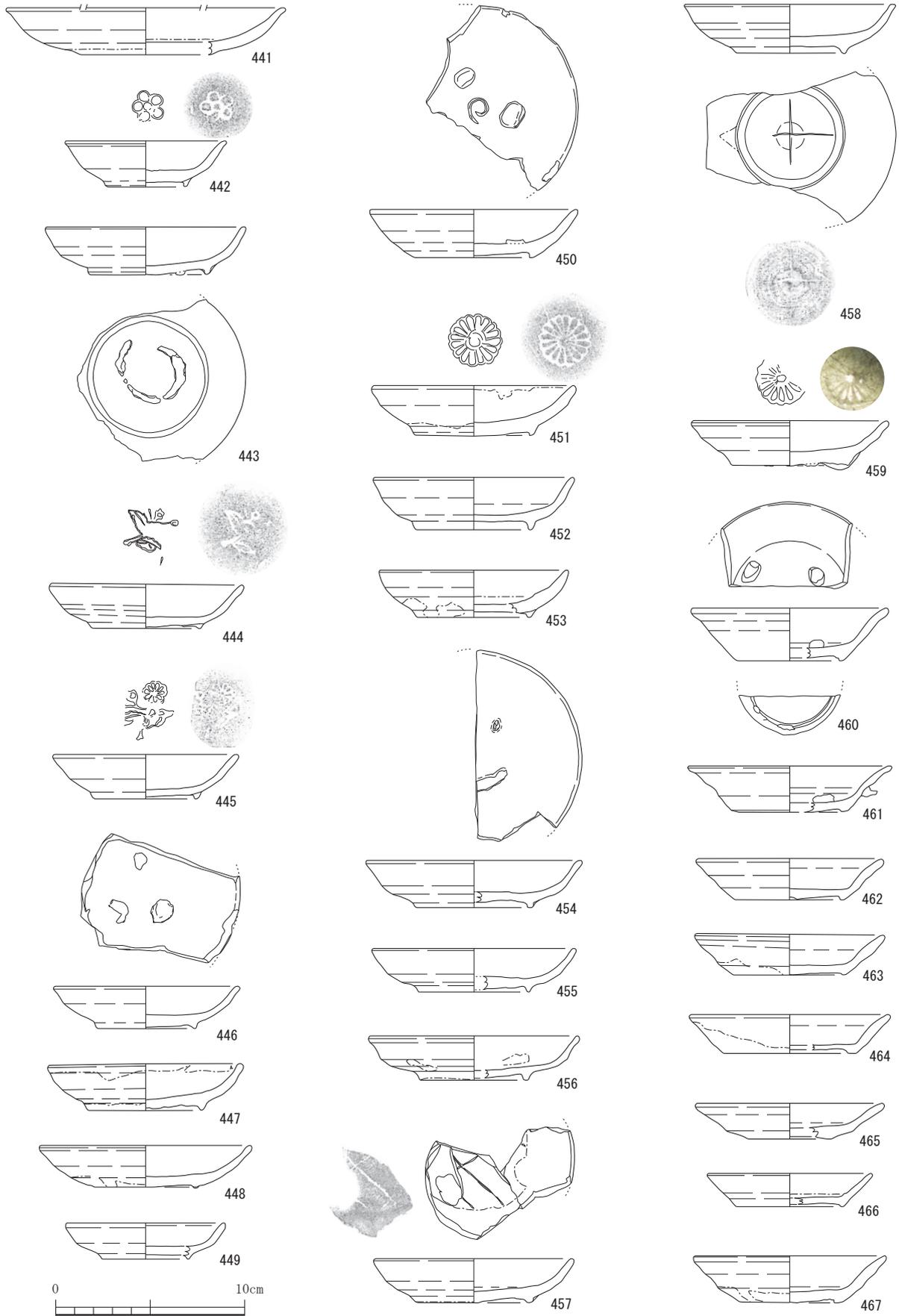


图 54 勘介 2 号窯跡出土遺物 4 (1/3)

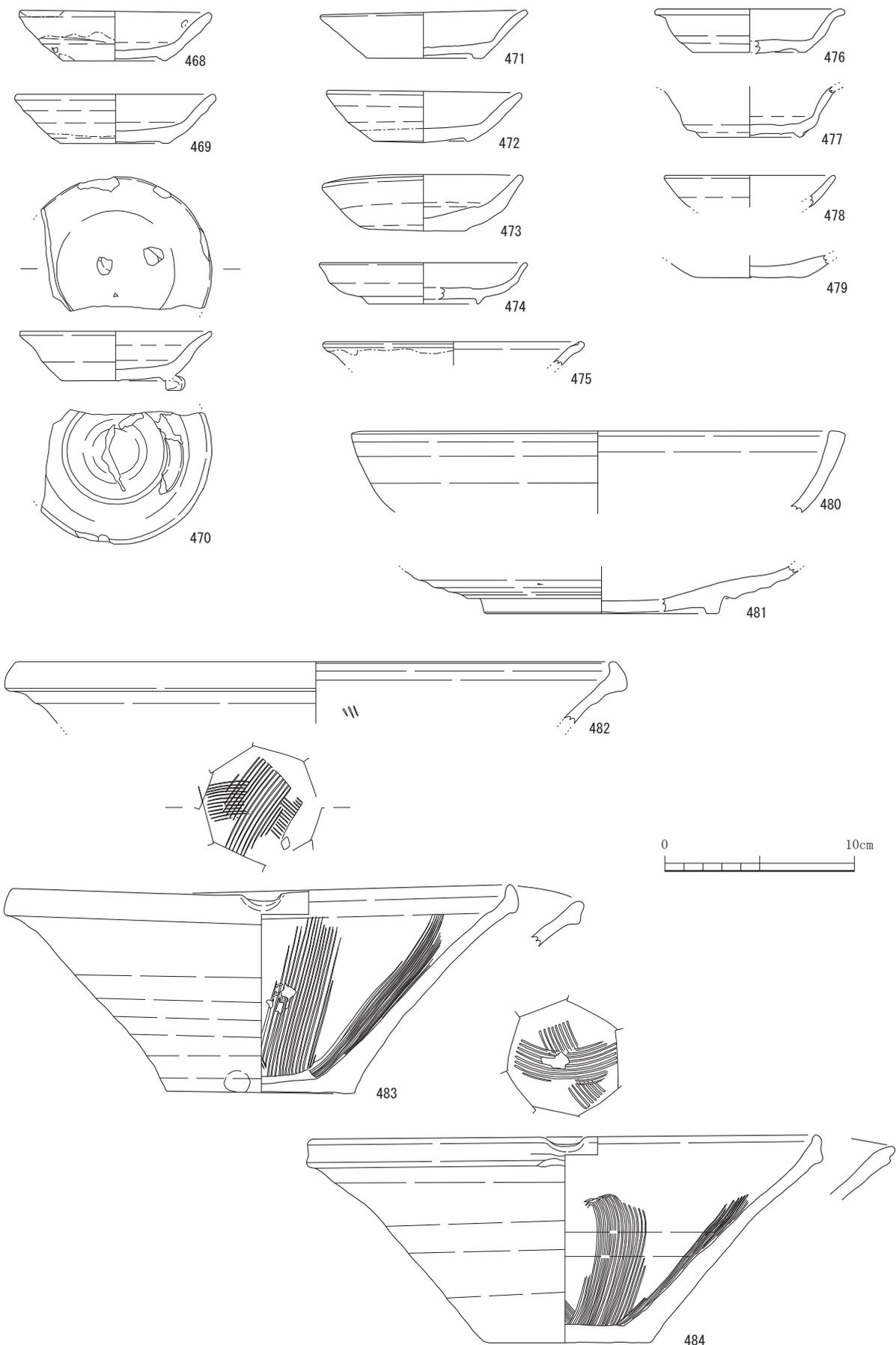


图 55 勘介 2 号窯跡出土遺物 5 (1/3)

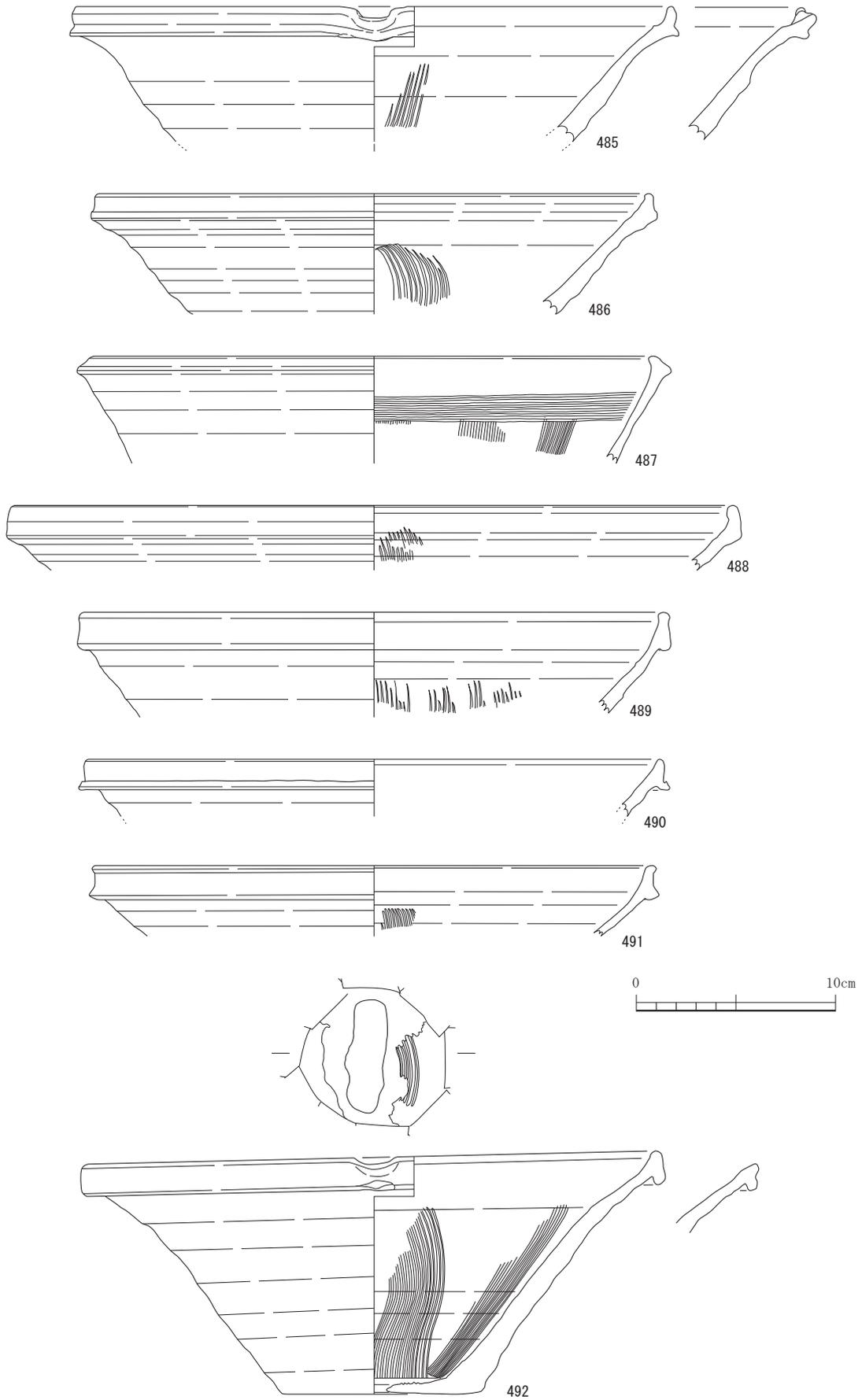


图 56 勘介 2 号窟跡出土遺物 6 (1/3)

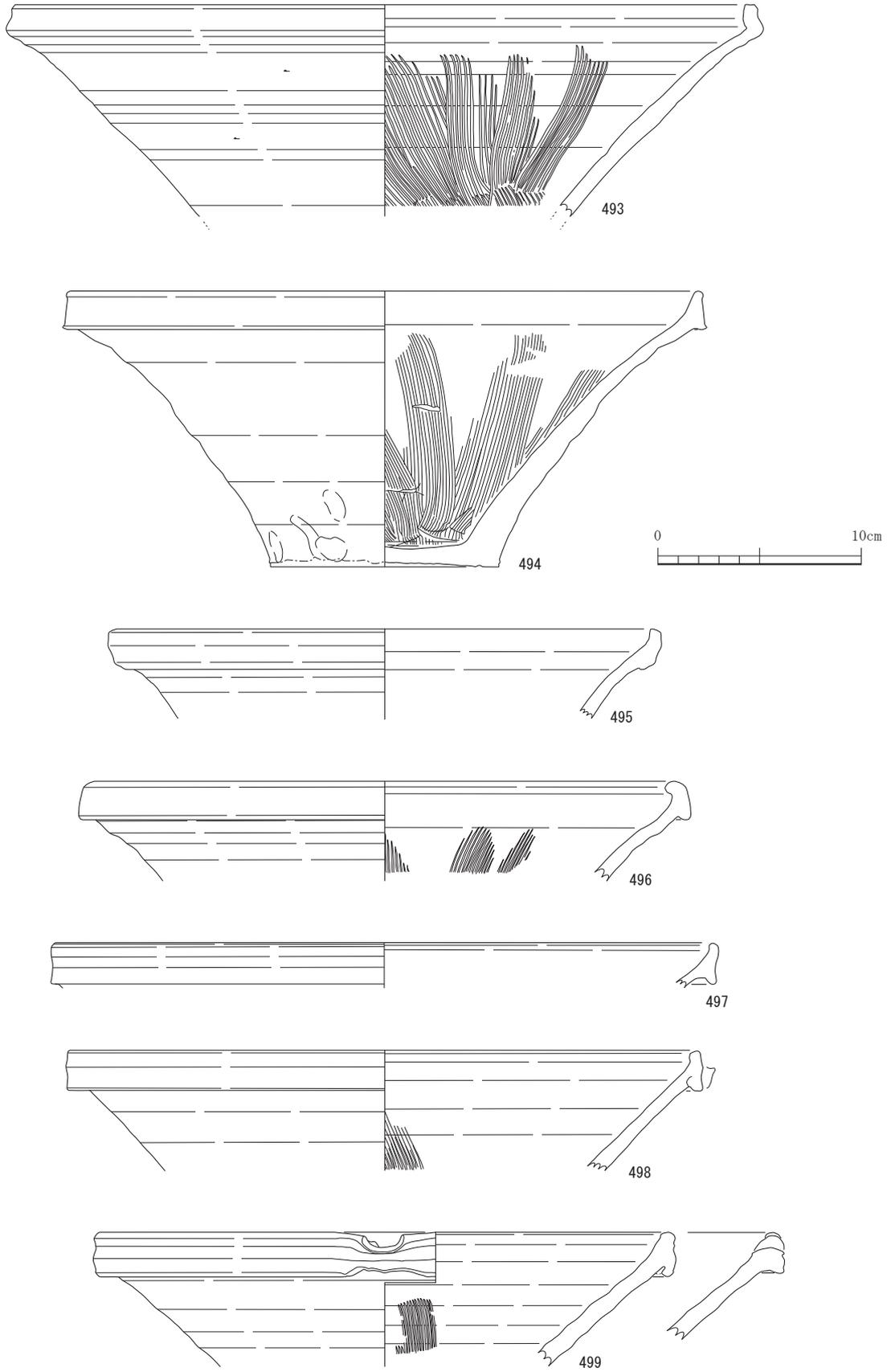


图 57 勘介 2 号窯跡出土遺物 7 (1/3)

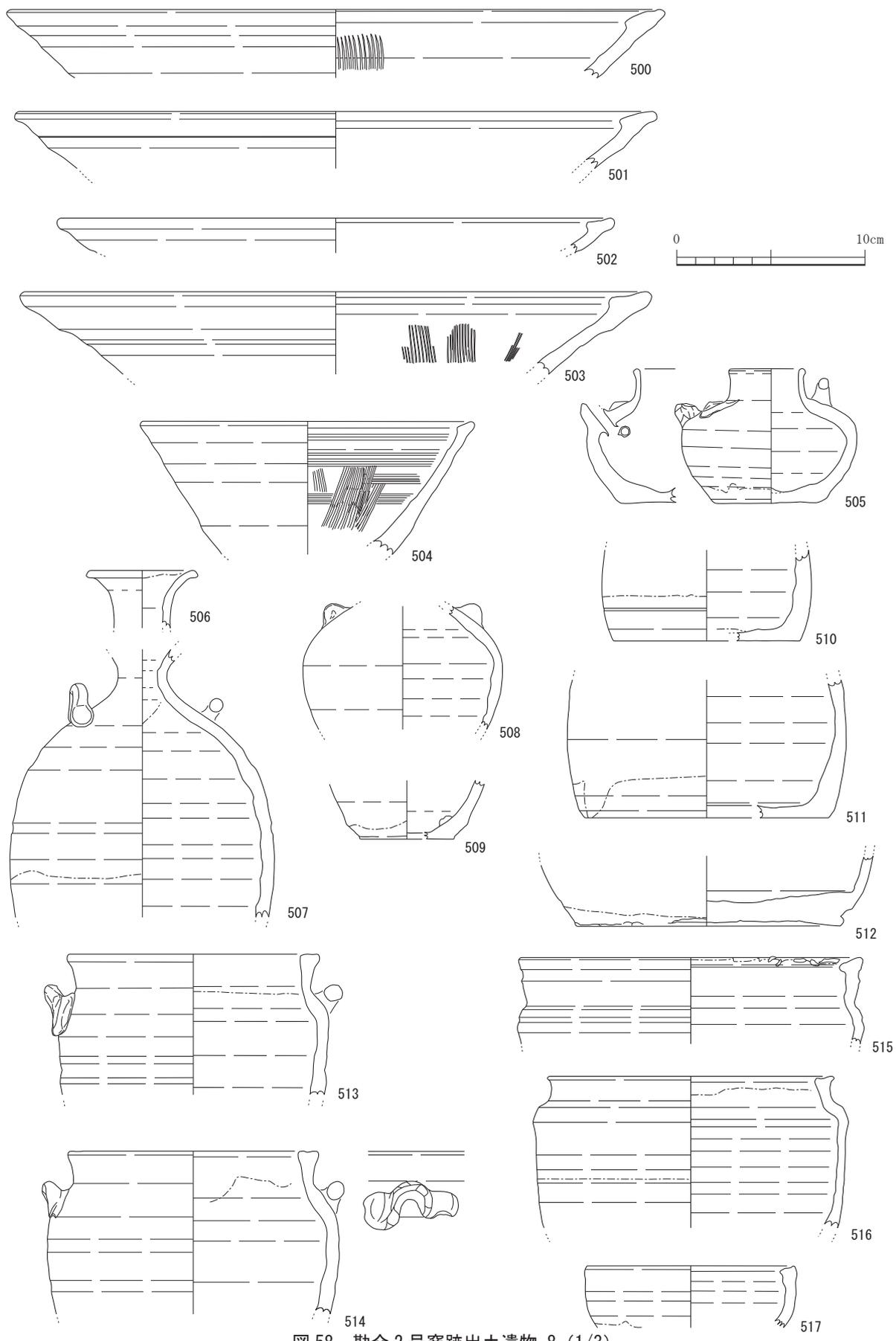


图 58 勘介 2 号窯跡出土遺物 8 (1/3)

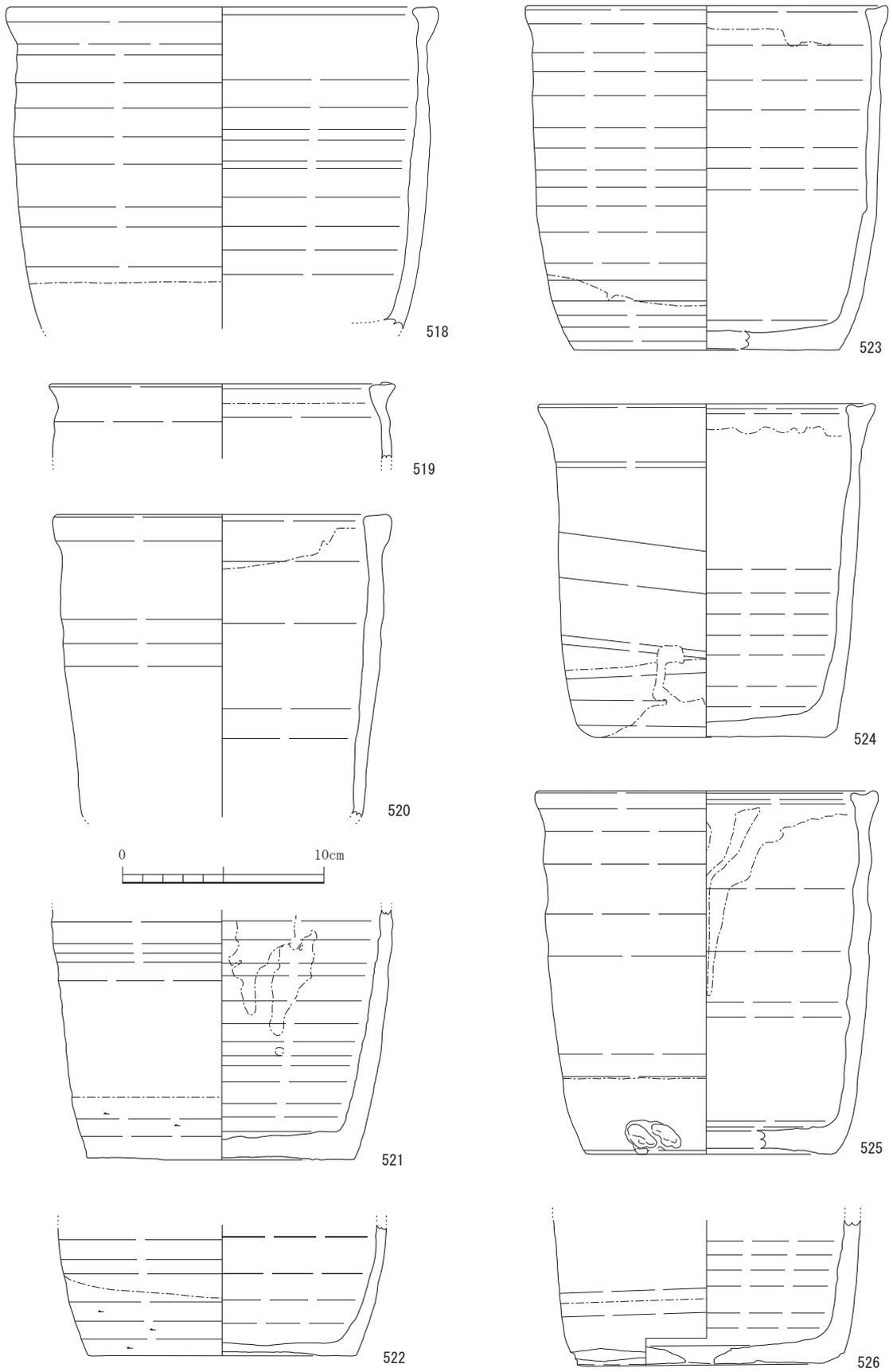


图 59 勘介 2 号窯跡出土遺物 9 (1/3)

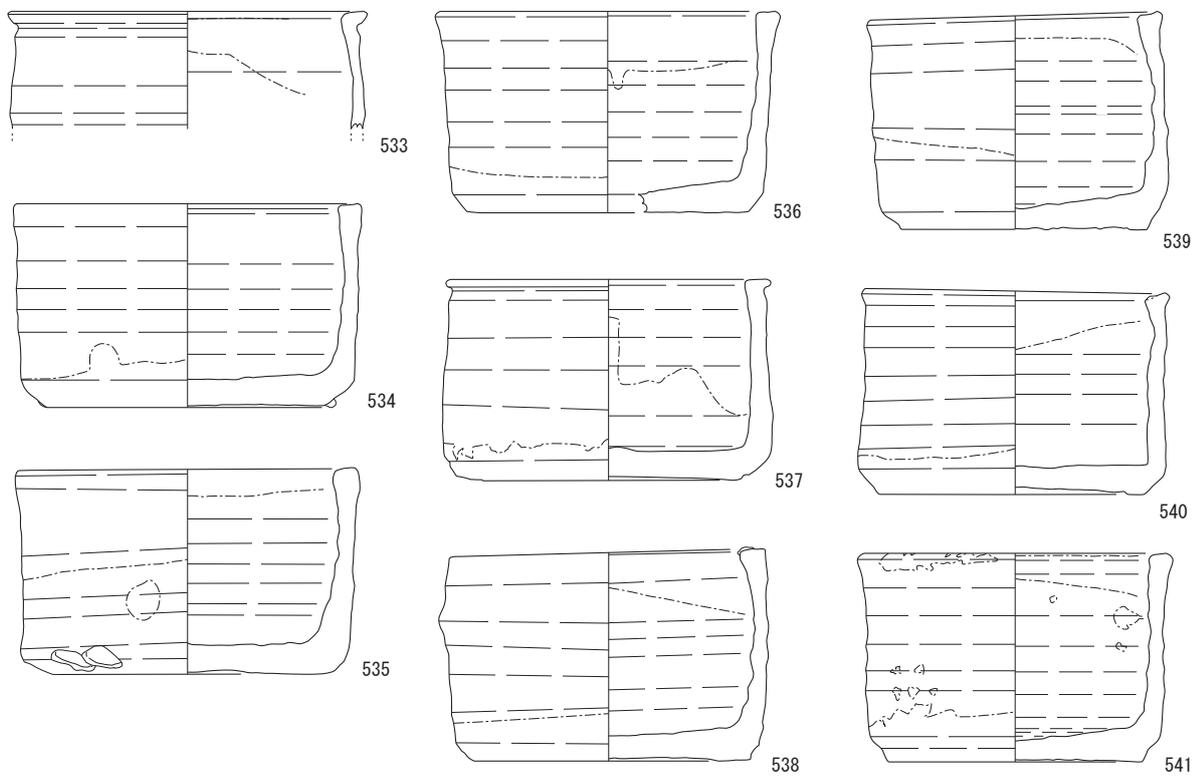
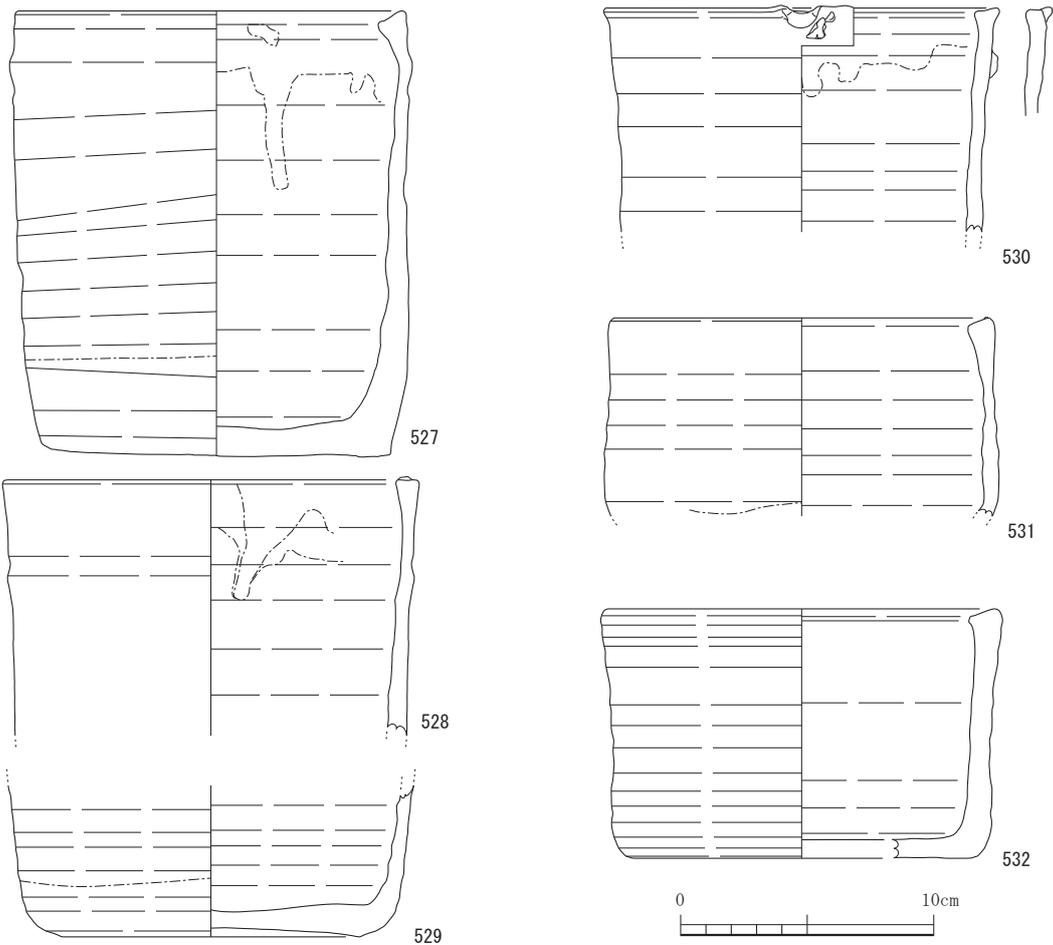


图 60 勘介 2 号窯跡出土遺物 10 (1/3)

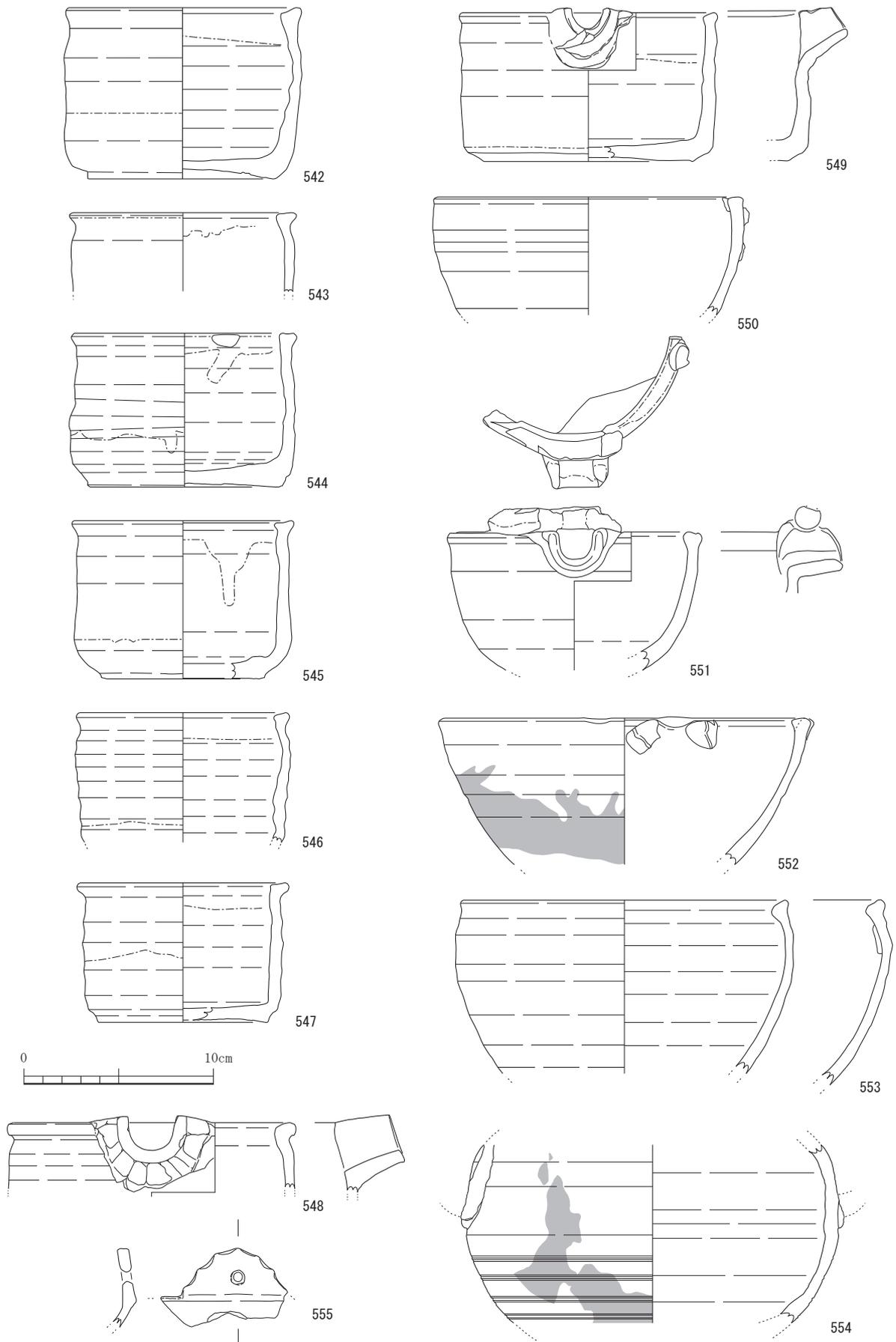
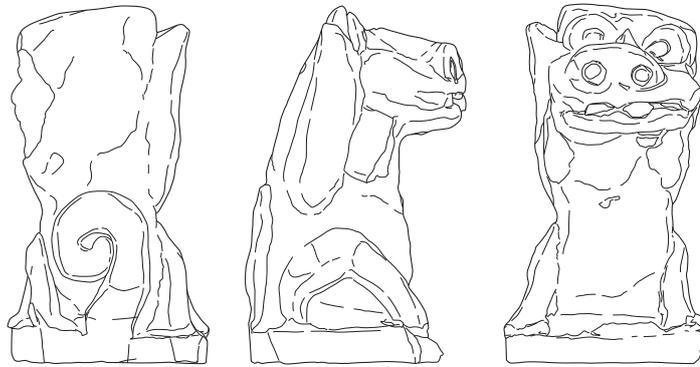
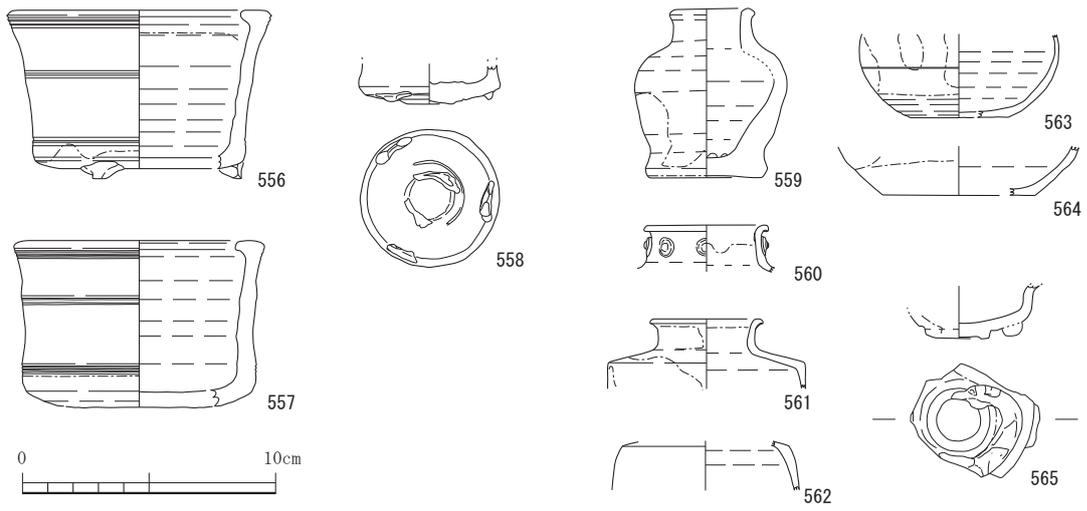
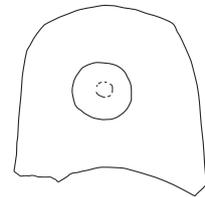


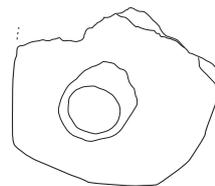
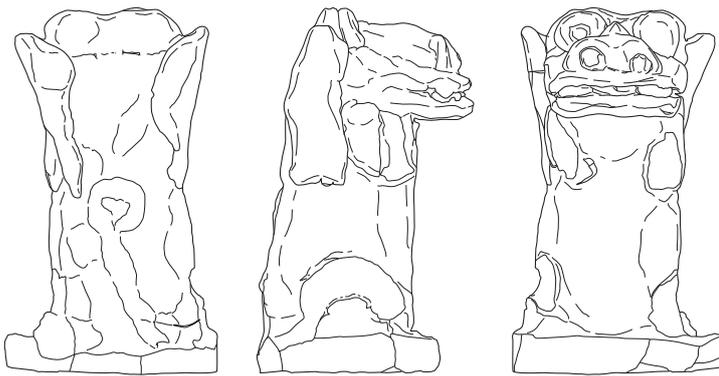
图 61 勘介 2 号窯跡出土遺物 11 (1/3)



0 10cm
(566, 567 ; 1/2)



566



567

图 62 勘介 2 号窯跡出土遺物 12 (1/2, 1/3)

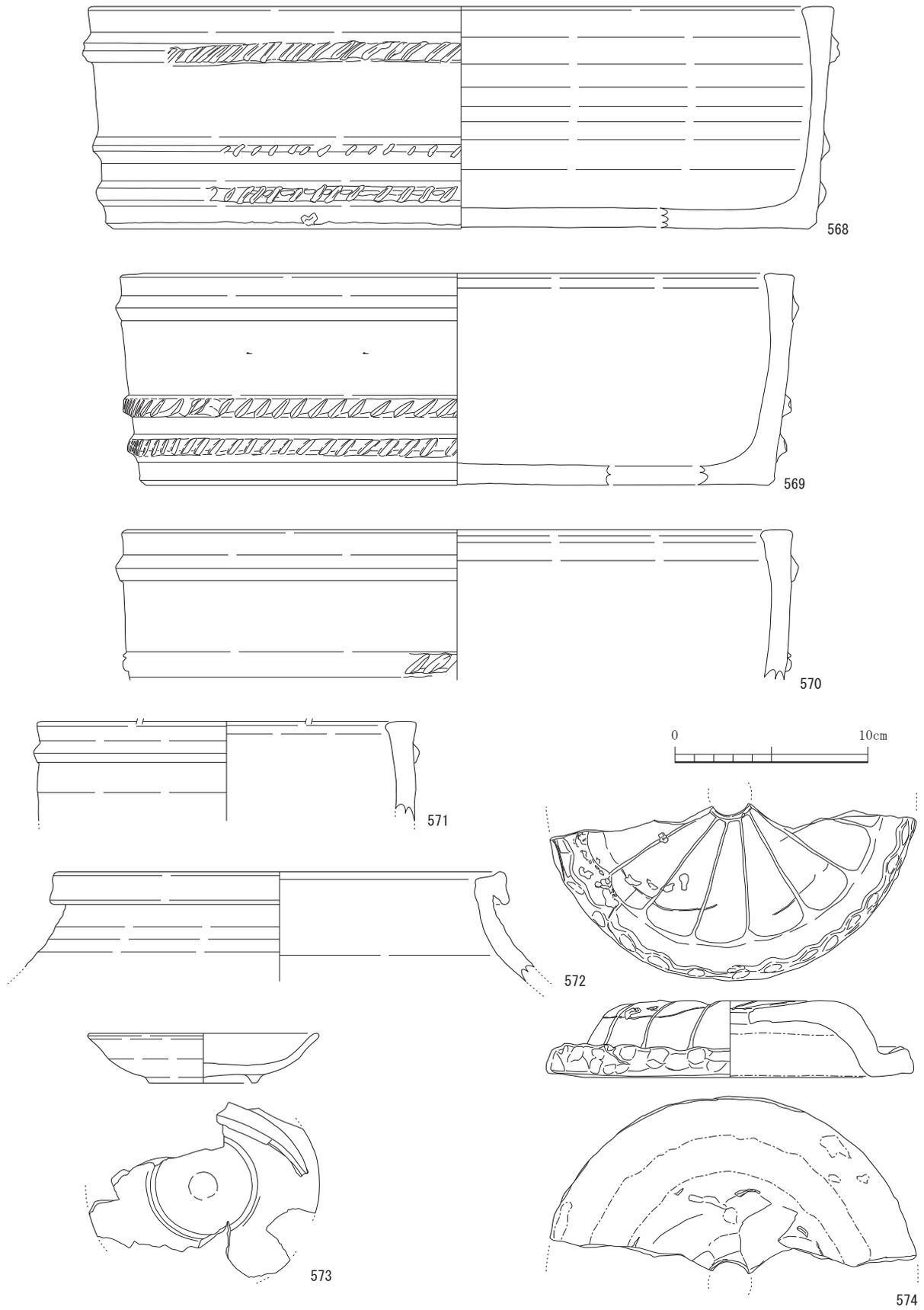


图 63 勘介 2 号窯跡出土遺物 13 (1/3)

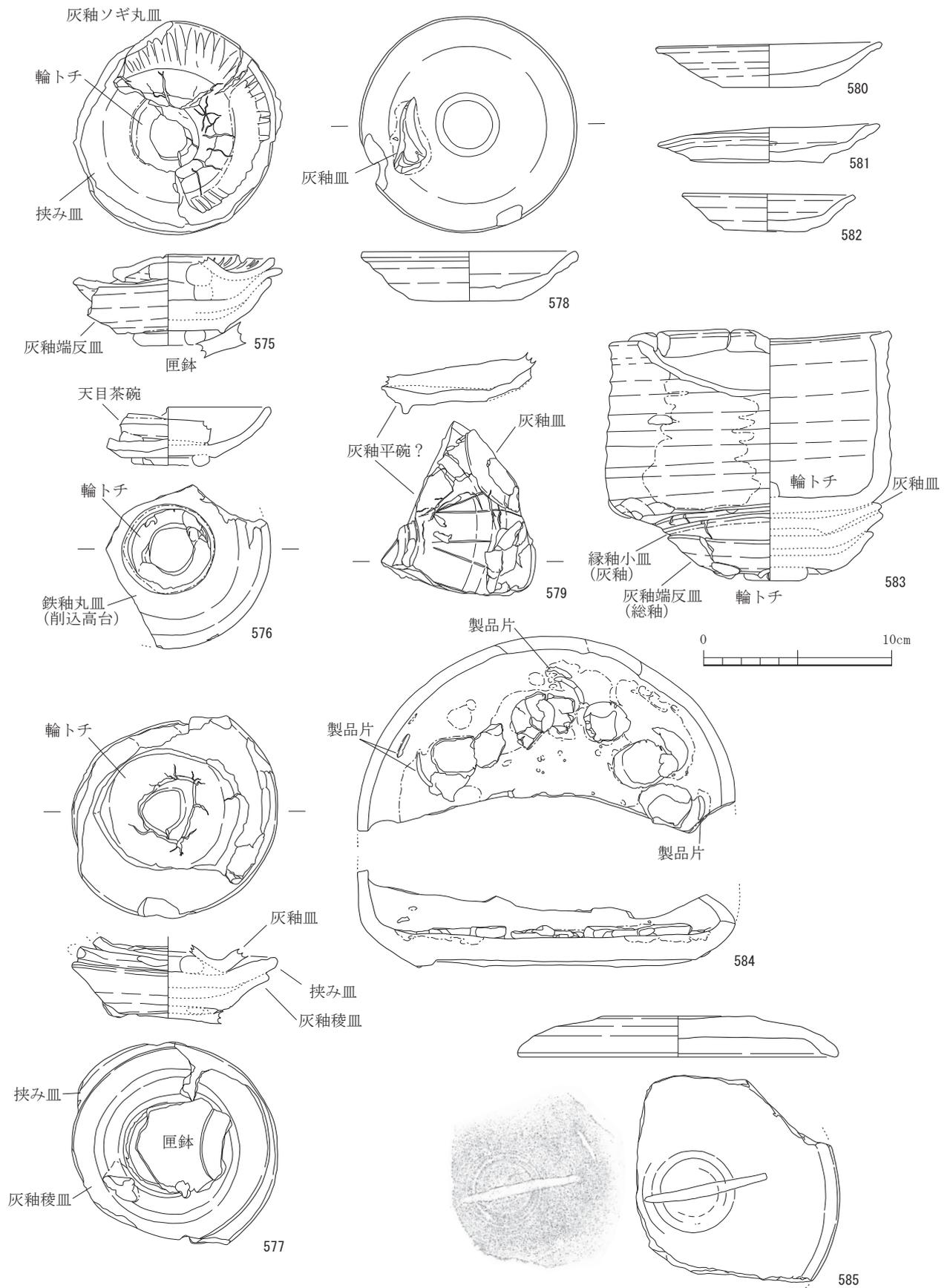
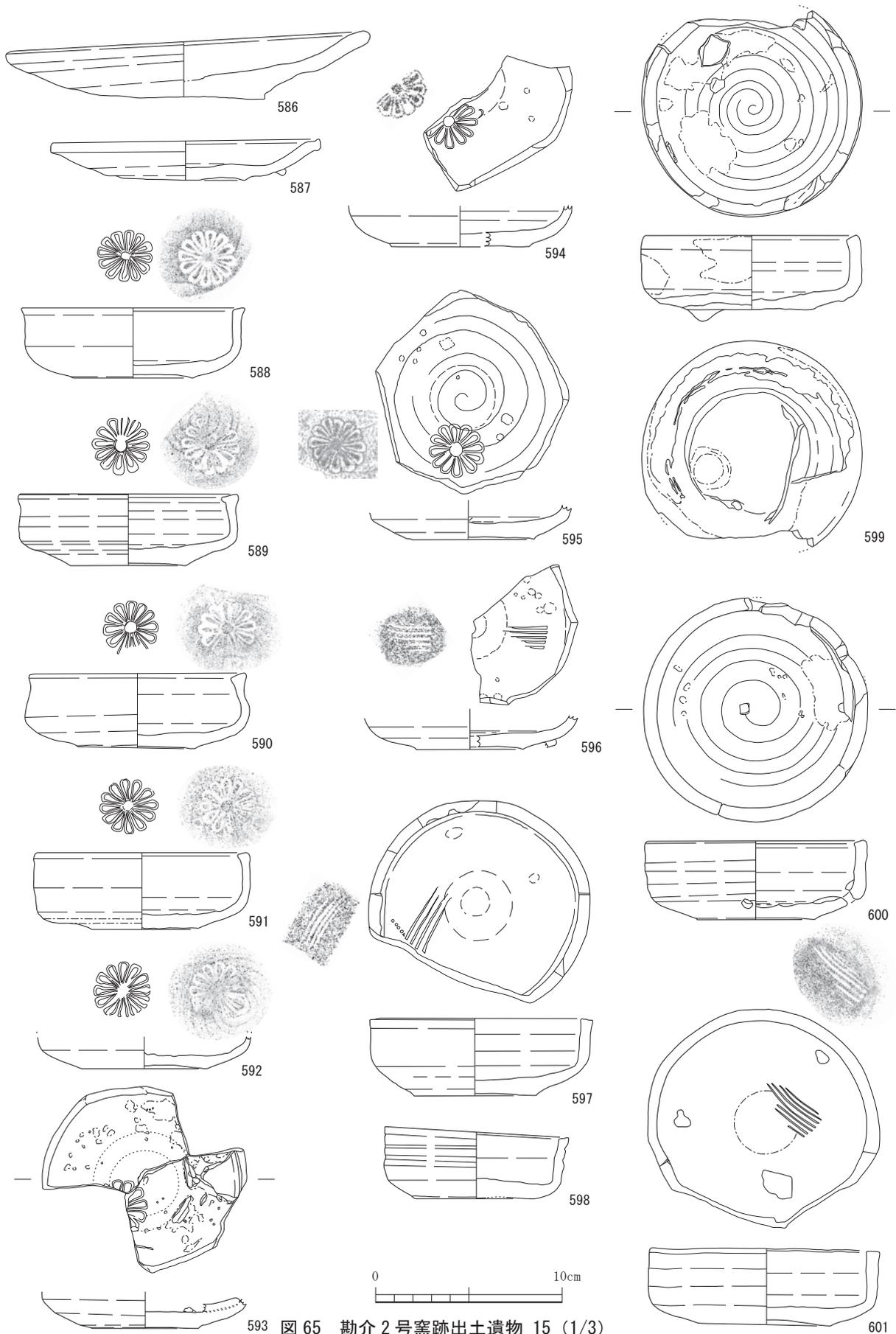


图 64 勘介 2 号窯跡出土遺物 14 (1/3)



339 图 65 勘介 2 号窯跡出土遺物 15 (1/3)

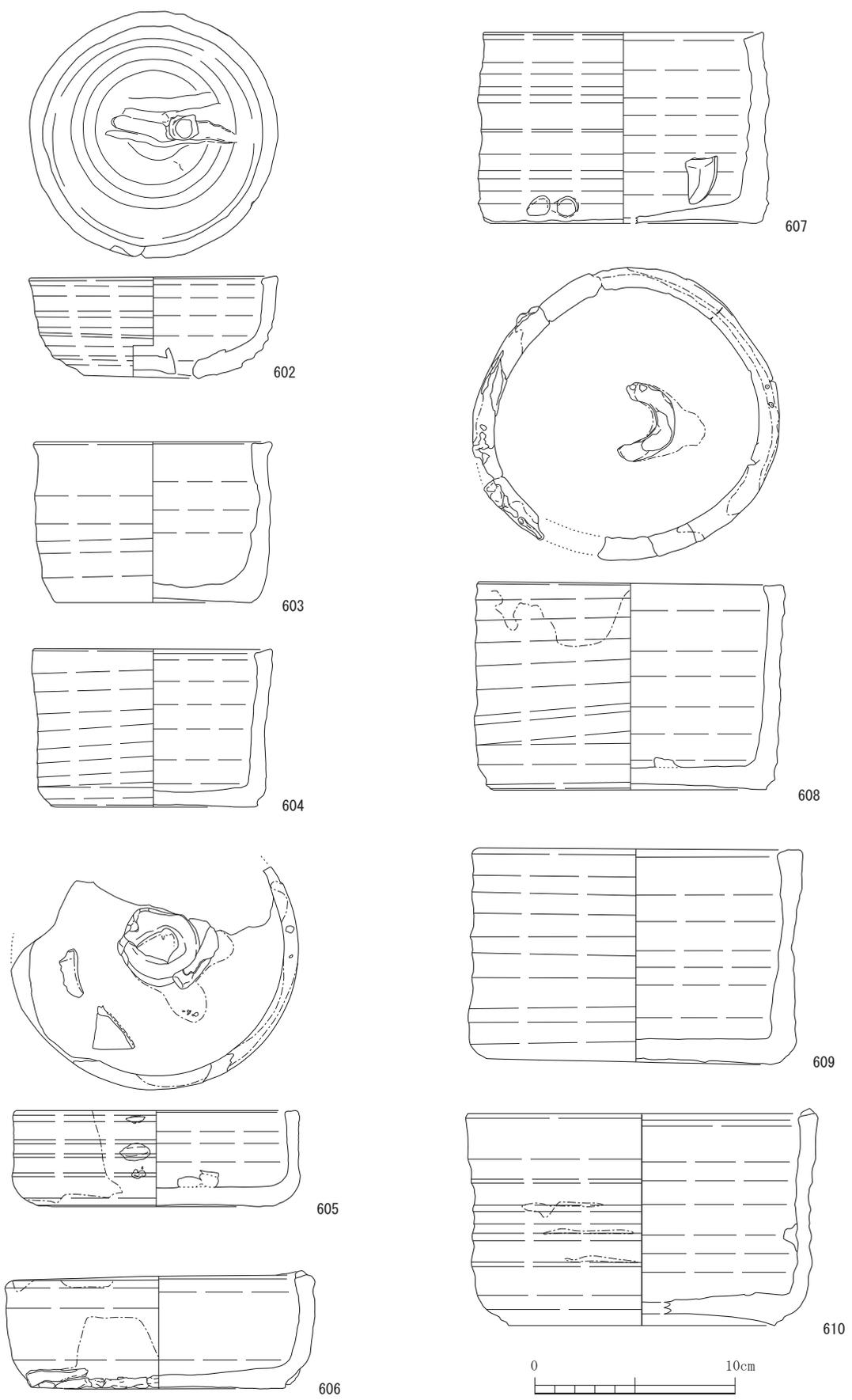


图 66 勘介 2 号窯跡出土遺物 16 (1/3)

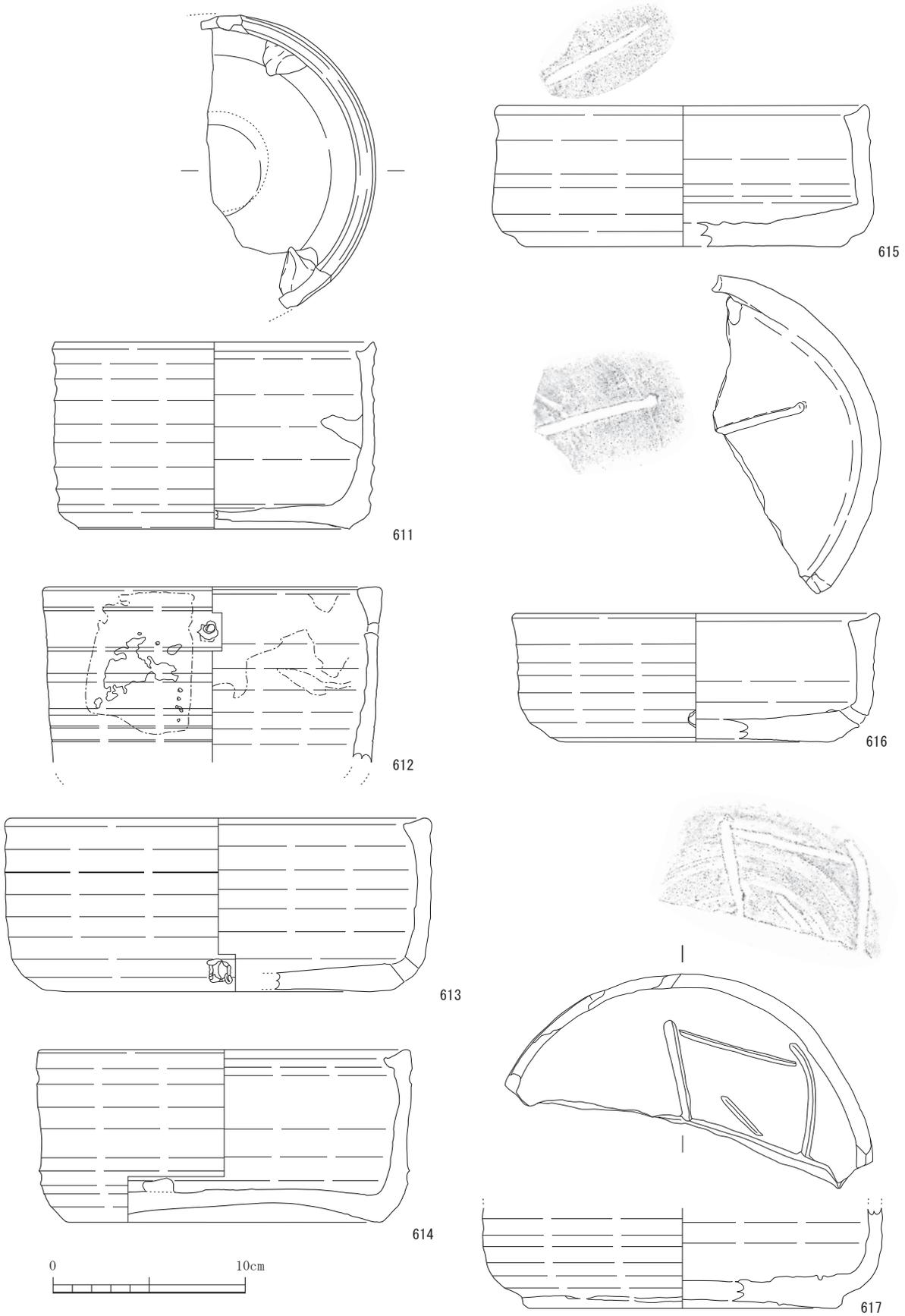


图 67 勘介 2 号窯跡出土遺物 17 (1/3)

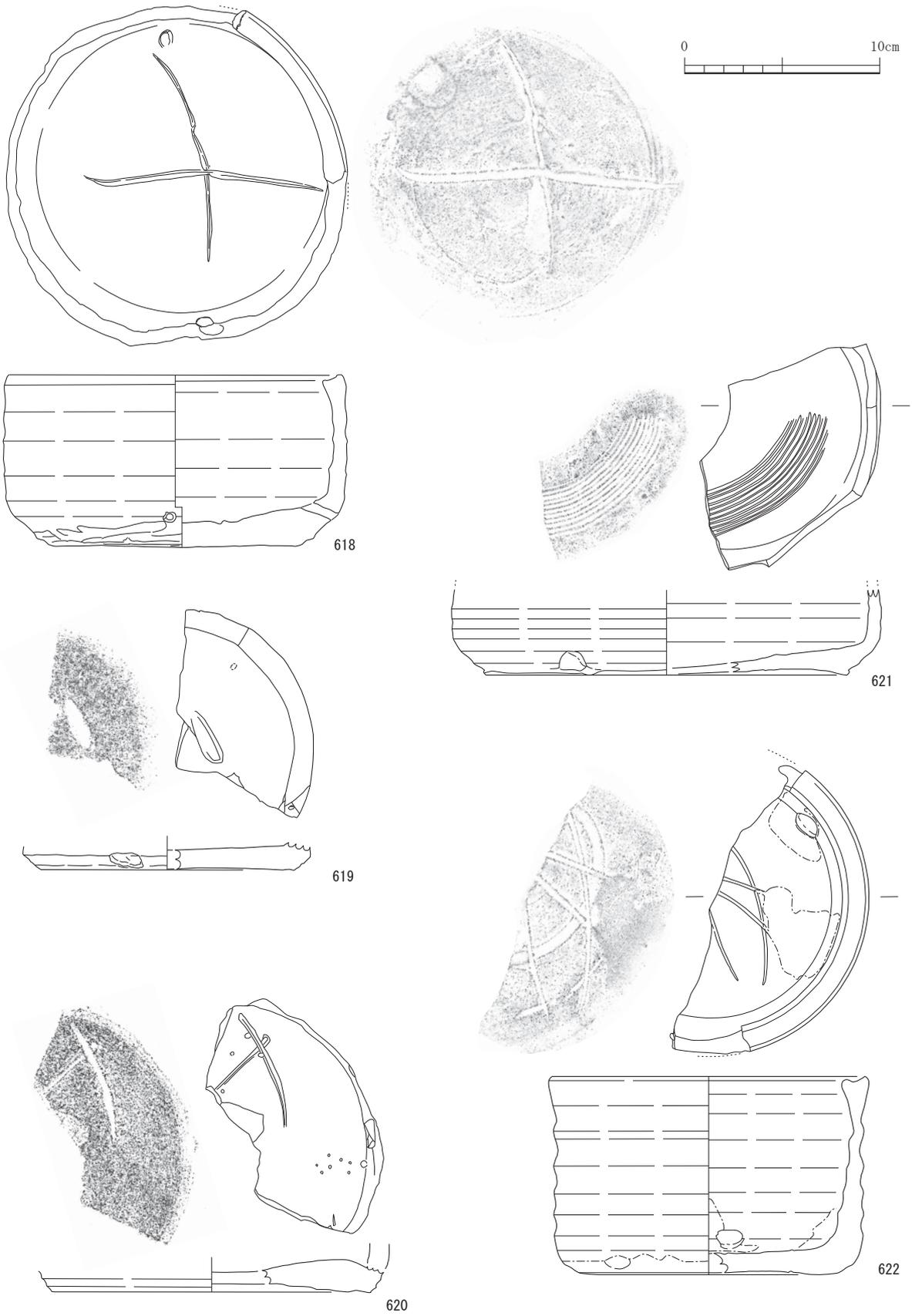


图 68 勘介 2 号窯跡出土遺物 18 (1/3)

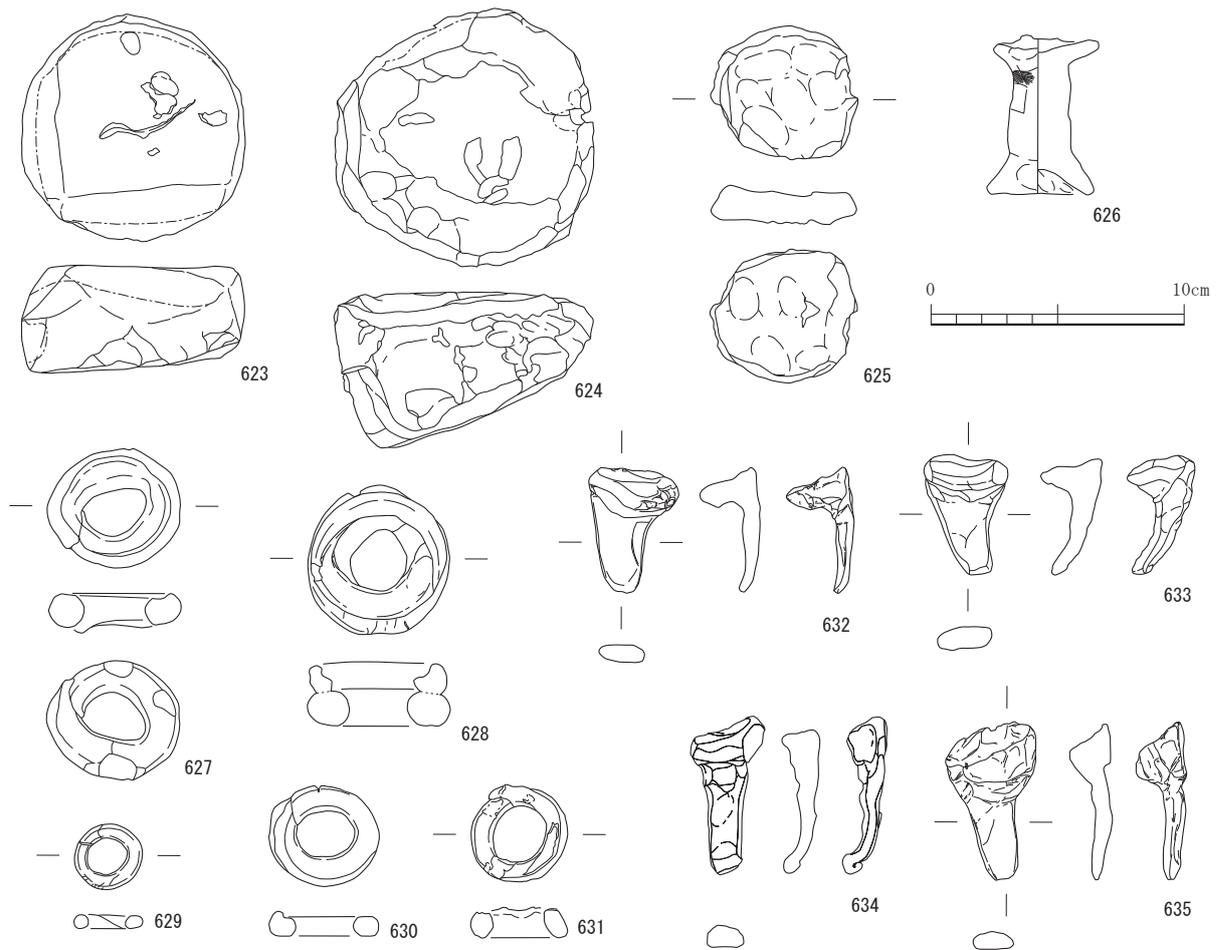


図 69 勘介 2 号窯跡出土遺物 19 (1/3)

(3) 勘介窯跡出土資料の窯印について

ここでは製品と窯道具に刻まれた標識（記号）について取り上げる。勘介 1 号窯の製品に刻まれたものは少なく、焼成後の線刻のある天目茶碗（154）も高台部分は錆釉の掛からない無釉のものが用いられている。挟み皿（296～299）は内面に一文字の櫛描きがある。匣鉢では、内面底部に菊花の印花文を捺すもの（301）、へら状工具で線刻、あるいはユビナデして描くもの、櫛描きで十字（330）や半円を描くもの（322）がある。このうち線刻は数種類があり、へらとユビナデでは十字と菱形が共通する。線刻などの位置は小型の匣鉢を除くと底部の中央ではなく、周縁寄りであることが多い。匣鉢（316）は特異なものであり、複数の小孔が穿孔されている上にへらによる線刻がおそらく底部外面全体に及び、内容も文字を含む複雑なものとなっている。勘介 2 号窯の製品では、天目茶碗高台（394～397）にみられる線刻は 3 種類がある。ほか灰釉丸皿（457）の内面底部と鉄釉内禿皿（458）の高台内に十字の線刻がある。窯道具では匣鉢蓋（585）の降灰のない凹面側に一文字のユビナデがある。小型の匣鉢では、内面底部に菊花の印花文（588～595）が捺されるほか櫛描きされるもの（596, 597, 601）がある。中型以上の径の匣鉢では、内面底部にへら状工具で線刻、あるいはユビナデでして描くもの、櫛描きで 1/4 程度の円弧を描くもの（621）がある。線刻類は 4 種類があり、へらとユビナデで共通する記号がない。位置は底面を広く使うものと周縁に偏るものの両者がある。

参考文献

藤澤良祐編 2018『大萱窯跡群 弥七田窯跡第 1・2 次発掘調査概要報告書』愛知学院大学文学部歴史学科

第4章 自然科学分析

北山窯跡の焼成室床材の材料分析

藤根 久・米田恭子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

北山窯跡は、愛知県瀬戸市落合町地内に位置する近代～現代の連房式登窯跡である。ここでは、この連房式登窯の床土の材料について、薄片の偏光顕微鏡観察を行い、粘土の種類と砂粒組成等の特徴を調べた。

なお、比較試料として、窯跡から出土した製品素焼き資料についても同様に分析を行った。

2. 試料と方法

試料は、北山窯跡の床土1点と、比較試料として陶器製品素焼5点の、合計6点である（表4）。

表4 北山窯跡床砂・製品の胎土分析試料

分析No.	種別	試料No.	時期	遺構等	グリッド	位置	層位
1	窯の床土	—	近代～現代	北壁（民家側）	2SHZ17	—	第19層（20層混じる）
2	陶器製品素焼	225	近代～現代	北壁	B8	T-26	下層
3	陶器製品素焼	300	近代～現代	物原	B7	T-27	最下層
4	磁器製品素焼	67	近代～現代	表土	D7（参道）	—	最下層
5	磁器製品素焼	275	近代～現代	物原	C7	—	下層
6	磁器製品素焼	449	近代～現代	物原	ZZ7	—	—

薄片の作製では、まず岩石カッターを用いて2×3cm程度を切り出し、恒温乾燥機により乾燥させた。次に、全体にエポキシ系樹脂を含浸させて固化処理を行い、スライドガラスに接着した。薄片作製面を平滑にして、エポキシ系樹脂で再度、固化処理を行い、精密岩石薄片作製機およびガラス板を用いて研磨した。その後、厚さ0.1mm程度に切断した後、さらに研磨して、厚さ0.02mm前後の薄片を作製した。最後に、仕上げとしてコーティング剤を塗布した。

作製した薄片は、偏光顕微鏡を用いて観察し、薄片全面に含まれる微化石類（放散虫化石、珪藻化石、骨針化石など）、鉱物、大型砂粒の特徴、その他の混和物等について記載を行った。記載した微化石類や岩石、鉱物の各分類群の特徴は、以下の通りである。

[珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、大きさは10～数百 μm 程度である。珪藻は、海水域から淡水域に広く分布する。小杉（1988）や安藤（1990）は、現生珪藻に基づいて環境指標種群を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種や属の同定が可能な珪藻化石（海水種、淡水種）を分類した。

[骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状である。海綿動物の多くは海水産であるが、淡水産も23種ほどが知られ、湖や池、川の底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。したがって、骨針化石は水成環境を指標する。

[植物珪酸体化石]

主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約10～50 μm 前後である。一般にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本やスゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在する。

[孢子化石]

孢子は、直径約10～30 μm 程度の珪酸質の球状粒子である。水成堆積物中に多く見られるが、土壌中

にも含まれる。

[石英・長石類]

石英および長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように、光学的な特徴をもたないものは石英と区別するのが困難な場合が多く、一括して扱う。

[長石類]

長石は、大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）に見られることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は、花崗岩などケイ酸分の多い深成岩などに産出する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で、風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では、長柱状や層状に見えることが多い。花崗岩などケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼ではビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼では緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類や、ケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類中にも産出する。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は、細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような、ケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類、火山岩類に産出する。特に、斑れい岩で多く含まれる。

[ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス（バブル・ウォール型：記載ではバブル型と略す）や、小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物（テフラ）である。

[片理複合石英類]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、片理構造を示す岩石である。雲母片岩や結晶片岩、片麻岩、粘板岩などと考えられる。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質、約0.06mm未満のものを泥岩質とした。

[複合石英類]

複合石英類は、石英が集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は、粗粒から細粒までさまざまである。ここでは便宜的に、粒径が0.01mm未満の粒子を微細、0.01～0.05mmの粒子を小型、0.05～0.10mmの粒子を中型、0.10mm以上の粒子を大型と分類した。微細結晶の集合体である場合には、堆積岩類のチャートなどに見られる特徴がある。

検討した床土および素焼き陶器製品の胎土は、粘土中に含まれていた微化石類により、a) 淡水成粘土、b) 水成粘土、c) その他粘土、の3種類に分類された(表3)。以下では、それぞれの粘土の特徴について述べる。

a) 淡水成粘土 (1 試料：分析 No. 1)

分析 No. 1 の床土中には、淡水種珪藻化石が特徴的に多く含まれていた。なお、陸域指標種群の珪藻化石も含まれていた。

b) 水成粘土 (2 試料：分析 No. 2、分析 No. 3)

これらの陶器製品素焼の胎土中には、少ないものの骨針化石が含まれていた。また、陸域指標種群の珪藻化石も含まれていた。

c) その他粘土 (3 試料：分析 No. 4～No. 6)

これらの陶器製品素焼の胎土中には、水成環境を示す微化石類は含まれていなかった。

3.2. 砂粒組成による分類

本稿で設定した分類群は、構成される鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域の地質を特徴づける源岩とは直接対比できない。したがって、胎土中の鉱物と岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。特に、深成岩類を構成する鉱物は粒度が大きいため、細粒質の砂粒からなる胎土の場合には、深成岩類の推定が困難な場合が多い。

ここでは、比較的大型の砂粒と鉱物群の特徴により、起源岩石の推定を行った(表6)。岩石の推定では、片理複合石英類が片岩類(A/a)、複合石英類(大型)が深成岩類(B/b)、複合石英類(微細)などが堆積岩類(C/c)、斑晶質・完晶質が火山岩類(D/d)、凝灰岩質や結晶度の低い火山岩が凝灰岩類(E/e)、流紋岩質が流紋岩類(F/f)、ガラス質がテフラ(G/g)である。

検討した床土および陶器製品素焼の粘土中の砂粒組成は、表4の組み合わせに従うと、6試料すべてが、1) 主に深成岩類(B群)、に分類された。以下に、B群の砂粒組成の特徴について述べる。

1) 主に深成岩類からなる砂粒組成 (B群：6試料)

これらの床土および陶器製品素焼の粘土中には、複合石英類(大型)または複合石英類が含まれ、他起源の堆積岩類などの岩石片が非常に少ないか、あるいは全く含まれていなかった。また、斜長石(双晶)やカリ長石(パーサイト)、ジルコンなどを伴っており、深成岩類と推定された。

3.3. 床土および陶器製品素焼の粘土の特徴

検討した床土および陶器製品素焼の粘土は、粘土中に含まれていた微化石類により、淡水成粘土(1試料)、

表7 岩石片の起源と組み合わせ

		第1出現群						
		A	B	C	D	E	F	G
		片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第2出現群	a	片岩類	Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab	Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Be	De	Ec	Fc	Ge
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd	Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De	Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef	Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg

水成粘土 (2 試料)、その他粘土 (3 試料)、の 3 種類に分類された。また、砂粒組成の組み合わせでは、6 試料すべてが、主に深成岩類 (B 群 : 6 試料) に分類された。

連房式登窯跡の床土には、 $250 \mu\text{m} \sim 750 \mu\text{m}$ (最大 2.78mm) の粗い砂粒物が多く含まれていた。一方、陶器製品素焼の胎土は細粒物からなり、分析 No. 2 の砂粒物が $60 \mu\text{m} \sim 220 \mu\text{m}$ (最大 0.98mm)、分析 No. 3 の砂粒物が $50 \mu\text{m} \sim 200 \mu\text{m}$ (最大 0.83mm) で、類似した粒度分布を示す。また、分析 No. 4 の砂粒物は $50 \mu\text{m} \sim 100 \mu\text{m}$ (最大 0.16mm)、分析 No. 5 の砂粒物は $40 \mu\text{m} \sim 80 \mu\text{m}$ (最大 0.14mm)、分析 No. 6 の砂粒物は $50 \mu\text{m} \sim 110 \mu\text{m}$ (最大 0.25mm) で、分析 No. 4 ~ 6 は、分析 No. 2 や分析 No. 3 と比較してさらに細粒である。

連房式登窯跡の床土と陶器製品素焼の胎土では、粒度組成に違いがあるものの、砂粒の岩石組成は類似していると考えられる。

粘土については、淡水成粘土や水成粘土、その他粘土の違いが見られた。なお、分析 No. 1 ~ 3 はいずれも完形殻の陸域指標種群の珪藻化石を伴うため、採取された粘土が一時的に冠水したか、あるいはジメジメとした湿った環境に放置されたために、珪藻化石が繁茂した可能性が考えられる。

北山窯跡の周辺には、新第三紀中新世の品野層、新第三紀鮮新世の瀬戸層群瀬戸陶土層・矢田川累層が分布する。中新世の品野層は、凝灰質シルトとホルンフェルスや花崗岩からなる角礫岩で構成される。瀬戸陶土層では、下部から角礫層・珪砂層・粘土層が堆積する。矢田川累層では、下部からチャートや砂岩や花崗岩からなる砂礫層、粘土およびシルト、砂層が堆積する (瀬戸市史編纂委員会, 1986)。

連房式登窯跡の床土と陶器製品素焼の胎土は、砂粒物の粒度組成に顕著な違いが見られたものの、砂粒組成には大きな違いが見られないため、同じ砂混じり粘土層が用いられたと推定される。陶器製品素焼の胎土の粒度が細かいのは、水籤が行われたためと考えられる。

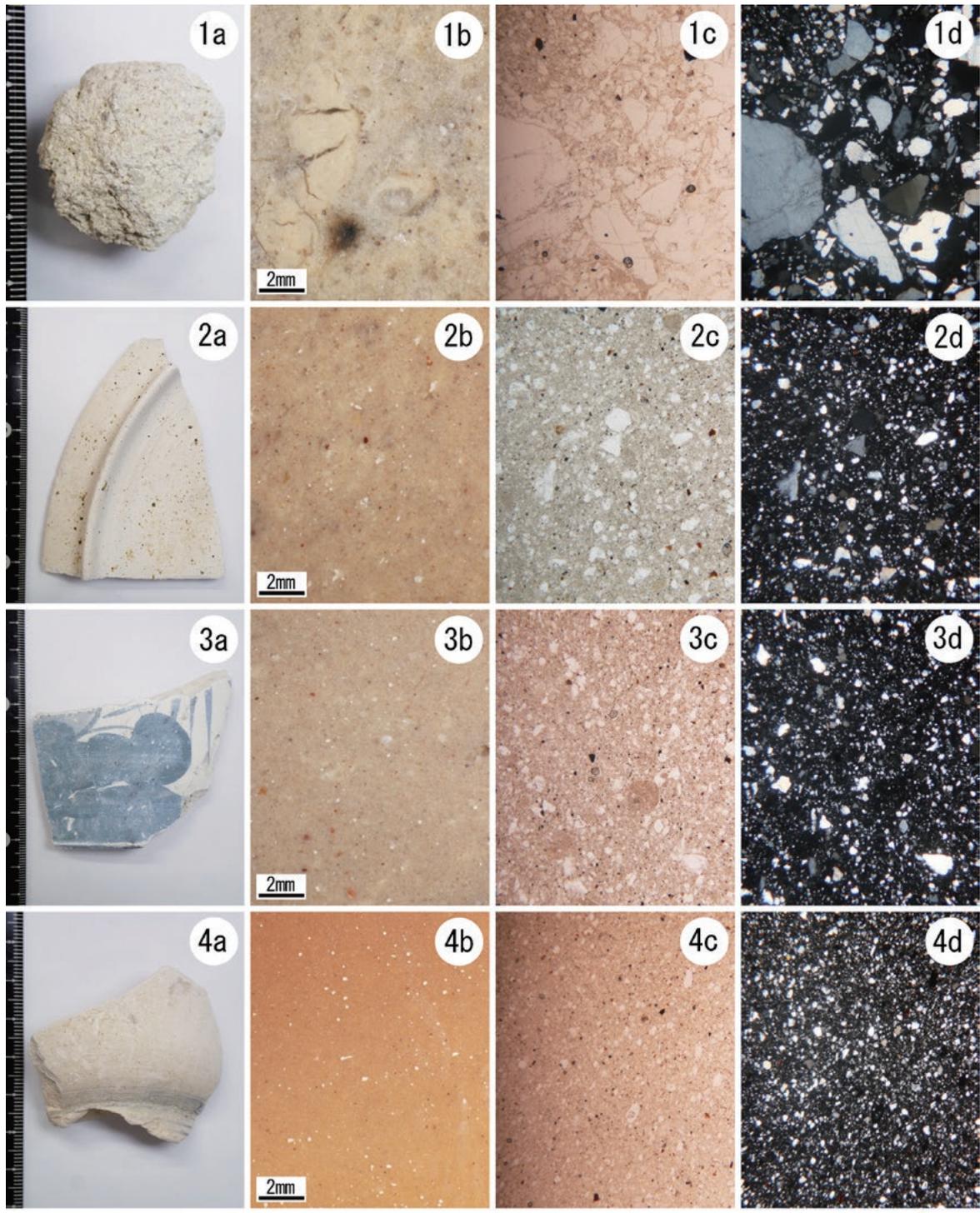
引用文献

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42 (2), 73-88.

地学団体研究会・地学事典編集委員会編 (1981) 増補改訂 地学事典. 1612p, 平凡社.

小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.

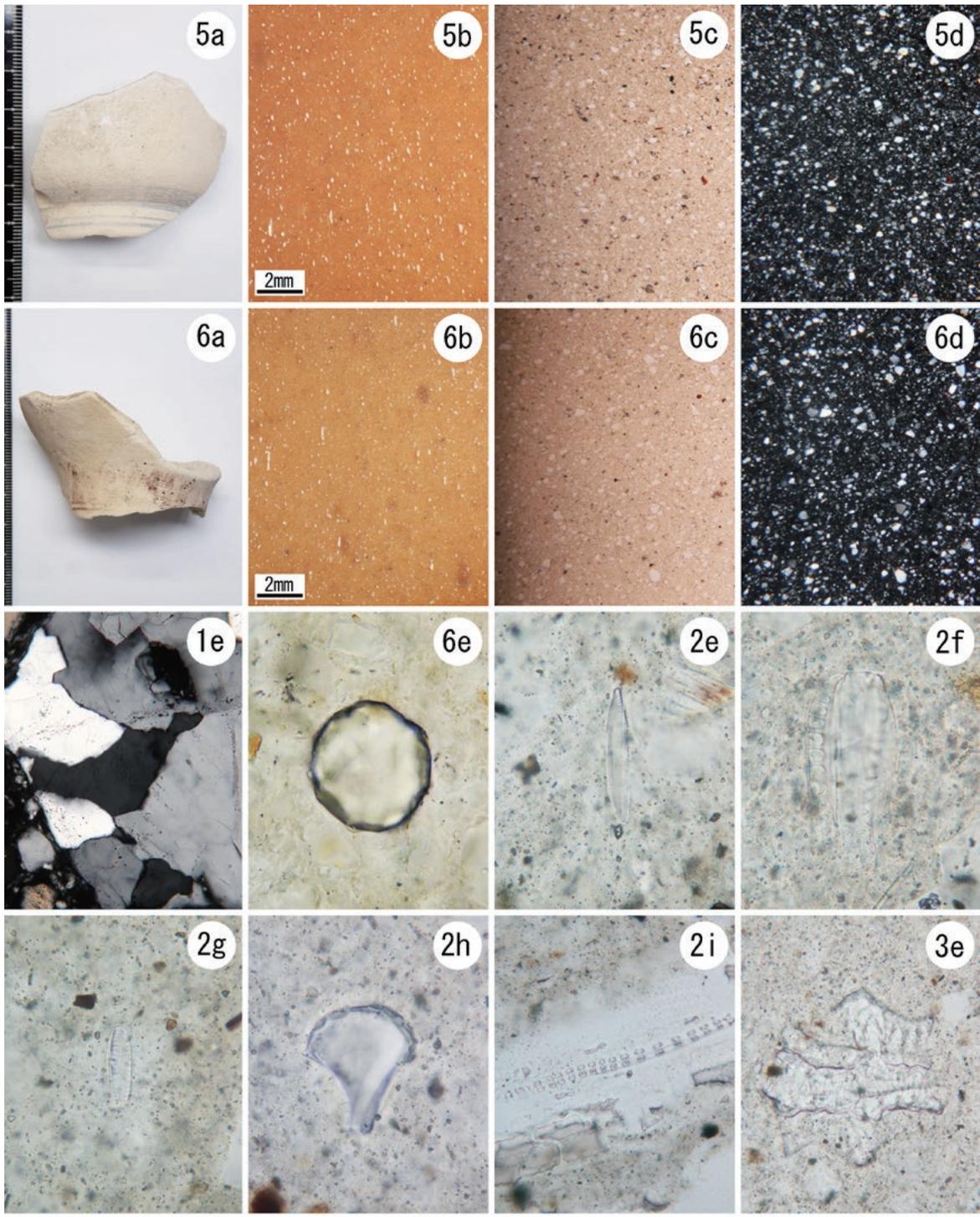
瀬戸市史編纂委員会 (1986) 瀬戸市史 資料編二 自然. 460p, 瀬戸市.



1. 分析No. 1、2. 分析No. 2、3. 分析No. 3、4. 分析No. 4

a: 土器、b: 土器断面、c: 解放ニコル (スケール: 500 μ m)、d: 直交ニコル (スケール: 500 μ m)

図 71 分析試料と態度の偏光顕微鏡写真 (1)



a : 土器、b : 土器断面、c : 解放ニコル (スケール : 500 μm)、d: 直交ニコル (スケール : 500 μm)
 (スケール : 5c, 5d, 6c, 6d: 500 μm 、1e: 100 μm 、2i, 3e: 50 μm 、6e, 2e, 2f, 2g, 2h: 20 μm)
 5a. 分析No. 5、5b. 分析No. 5 (断面)、5c. 分析No. 5 (解放ニコル)、5d. 分析No. 5 (直交ニコル)
 6a. 分析No. 6、6b. 分析No. 6 (断面)、6c. 分析No. 5 (解放ニコル)、6d. 分析No. 5 (直交ニコル)
 1e. 複合石英類 (大型)、6e. ザクロ石、2e. 珪藻化石 *Hantzschia amphioxys*、2f. 珪藻化石 *Surirella* 属
 2g. 珪藻化石 *Pinnularia borealis*、2h. イネ機動細胞珪酸体、2i. イネ型短細胞珪酸体列、
 3e. イネ籾殻の珪酸体

図 72 分析試料と態度の偏光顕微鏡写真 (2)

第5章 総括

(1) 北山窯跡

北山窯跡は愛知県遺跡地図（尾張地区）平成6年3月勘介窯（2）16C, 19～20Cと掲載されたもので、初めて調査が今回実施されたものである。調査では、窯体や平坦面の存在が確認でき、部分的ではあるものの物原の堆積も確認している。

調査地点にはすでに窯体の一部が露出しており、西側には現況地形からも平坦な区画が確認でき、窯体以外に平坦面も検出できるものと推定できた。また、窯体の上方にも平坦面と推定できる地形も確認されていた。今回の調査は急傾斜地崩壊対策工事のための工事中仮設道路部分にあたる地点を対象とし、すでに一部露出する窯体とその周辺を対象としている。

調査では、調査区中央から窯体をはじめ、東側では窯脇の平坦面を検出した。さらにその東側では石垣とともに、上方（北側平坦面）への通路と推定される階段状の通路やさらに東側では道路遺構と区画溝も確認できた。また、窯体の西側にも石垣が残されており、石垣の西側では工房跡と思われる平坦面とその南側では区画と思われる石垣に直交する石列を検出した。調査区南端では断面から窯体の一部を確認した。なお、調査区北端の平坦面1の上層には、大量の板トチが堆積する物原がある。

窯体は1室（房）の焼成室とコクド・煙道・煙突を検出したが、本窯が連房式登窯であることから南側には複数の焼成室が埋没する可能性が高い。

また、調査区の北側にあたる未調査部分の現況地形を精査したところ、削平され複数の造成された平坦な部分が認められ、調査区北側にあたる地点にも窯道具や遺物の散布も見られ、通路状遺構2の北側にも複数の平坦面が認められることから、北側にあたる造成部分には物原のほか平坦面群が存在する可能性が高い（図73）。

通路状遺構1は現在の参道の下層で検出していて、地形図（図2）に本窯の東側に示された道が現在の久雲寺参道にほぼ一致しており、地図に示された道の一部と推定される。

出土遺物には、窯道具のタナイタ・ツク・ヘダテ・匣鉢があり、製品には陶器の片口・鉢・播鉢・植木鉢、磁器の碗・皿・鉢があり、いずれも近代に位置づけできる。このほかの遺物には、干し棚の台石がある。窯体は当初一般的な連房式登窯で、上端部にはコクドと呼ばれる煙道部（煙り出し）が付属していた構造と考えられ、末端部の窯体北側には下層の物原が堆積する。その後、操業期間の途中で物原の上に窯体の末端部を延長し、煙突が構築された可能性が高い。煙突の下層に堆積する物原には磁器が含まれていないことと、最終段階の物原には陶器が認められず磁器製品が堆積することから、煙突の構築は磁器の焼成とかかわる可能性もある。少なくとも本窯の上部の房室では、当初は陶器が製造され、その後磁器生産に転換した可能性が高い。（松澤）

北山窯跡の調査で持ち帰った遺物の総重量を表8に示す。さらに陶器・磁器・窯道具類の重量を表9, 10に示す。ここで焼成されていた陶器製品は、主に植木鉢・播鉢・蓋物で構成されている。磁器製品は平碗を中心に、小形碗・白磁湯呑・容器が多くを占めている。このうち明治41年の銘のある小形碗D類としたものと白磁の湯呑・容器は、いずれも窯体下の盛土層に含まれ、さらに古い段階の窯体で焼成された製品と位置付けられる。

表8 北山窯跡出土遺物の重量

	平成27	平成29	合計 (g)
	(瀬戸市調査)	(県埋文セ調査)	
陶器製品	196968.7	2736.6	199705.3
磁器製品	87536.2	34544.5	122080.7
磁器+窯道具	24575.4	7943.6	32519
窯道具・窯材	335169.5	14305.4	349474.9

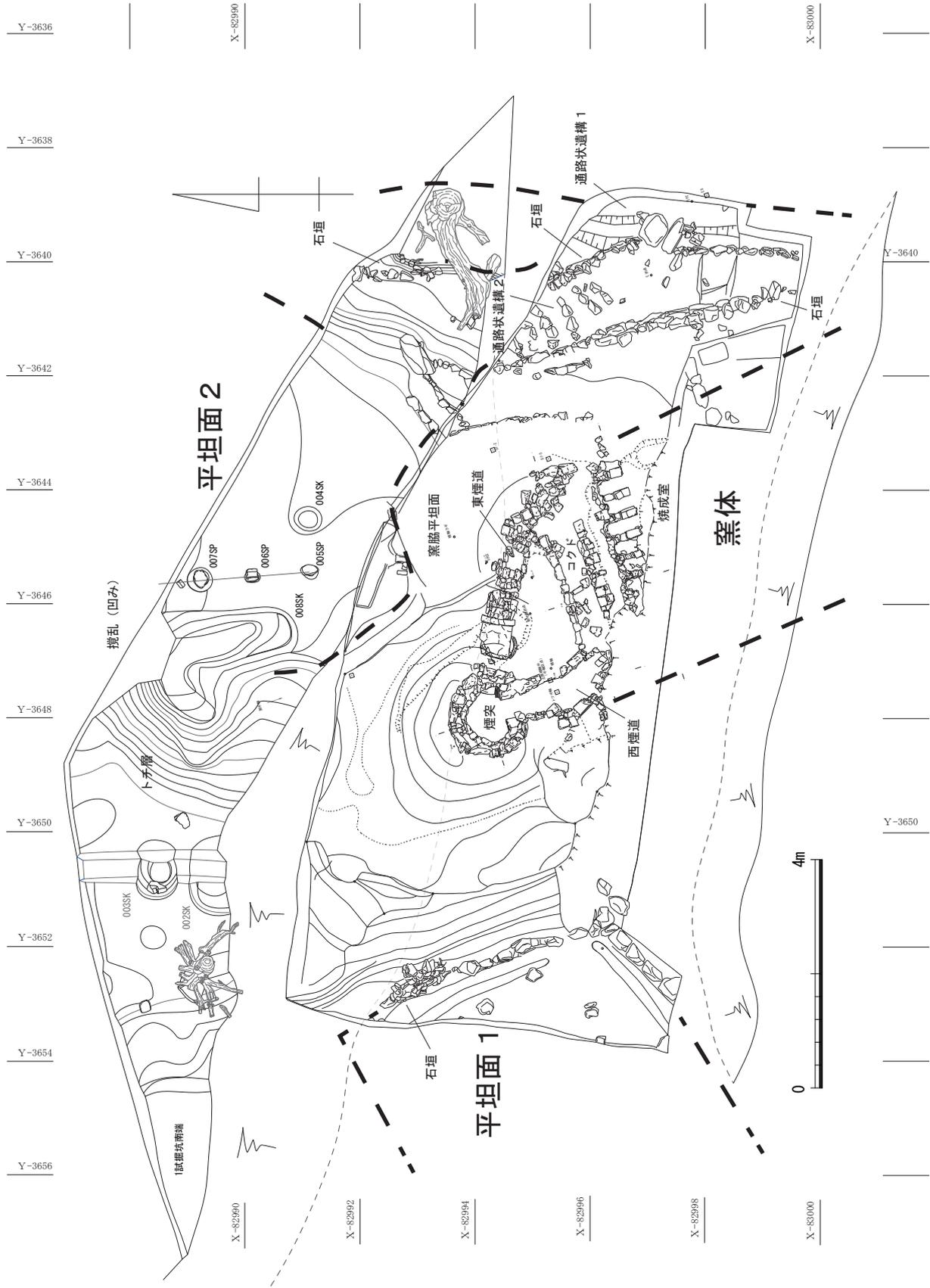


图 73 北山窯跡構造図 (縮尺 1/100)

表9 北山窯跡出土陶器の主要器種

器種\重量	重量合計 (g)	陶器片重量全体に占める割合 (%)
播鉢	60172.0	30.13%
植木鉢 (方形)	63340.4	
植木鉢 (円形・楕円形)	13895.0	
植木鉢片	4824.2	
植木鉢合計	82059.6	41.09%
鉢 (刷毛目)	19530.5	
鉢 (素焼)	497.3	
鉢 (染付)	1525.9	
鉢類	2699.2	
鉢類合計	24252.9	12.14%
蓋 (刷毛目)	15038.2	
蓋類	546.6	
蓋類合計	15584.8	7.80%
以上の主要製品の合計	182069.3	91.17%

表10 北山窯跡出土磁器の主要器種

器種\重量	重量合計 (g)	器種判明全体に占める割合
平碗	61595.5	58.43%
小形碗 (C, E類)	3954.6g	小形碗の28.5%
小形碗 (A, B類)	6915.3g	小形碗の49.8%
小形碗 (D類)	3017.5g	小形碗の21.7%
小形碗類合計	13887.4	13.17%
皿類	3024.0	2.87%
湯呑*注1	2898.1	2.75%
碗蓋	1673.8	1.59%
鉢類	2334.3	2.21%
その他の器種*注2	19998.8	18.97%
器種が分かるもの合計	105411.9	
*注1 無地白磁湯呑	1664.7g	湯呑のうちの57.4%
*注2 無地白磁容器	17442.2g	その他のうちの87.2%

(2) 北山窯跡に関する聞き取り調査

北山窯跡は聞き取り調査が実施されていて、明治34年に創業し、明治35年8月15日初窯火入れであったことがすでに知られ*1、出土遺物からもその操業時期を肯定できる。同様に、本地点の陶磁器製造工場が稼働していたのは戦前までと言われており、出土遺物とも矛盾はないことから、本窯の操業期間は20世紀前半と推定できる。よって、今回検出した北山窯跡の最終段階の遺構群は昭和初期あたりに位置付けられよう。(松澤)

その後の整理期間中に得られた北山窯の関係者からの聞き取り情報を追記しておきたい。

北山窯の操業開始は創業者の記憶によると明治35年という。当時の各施設の配置では、まず、創業者自宅近くにモロ(陶房、作業場となる建物)が建てられ、モロのすぐ前には素焼窯があった。登窯(連房式登窯)は自宅から少し離れた場所にあった。当初のモロは、スレート葺きの建物が新しく造られた昭和50年頃まで使用されていた。また登窯の東側には二階建ての木造建物があった。

モロでは、「粘土作り」「素地づくり」「素焼き」「絵付け」の作業が行われていた。「釉薬づくり」と「施釉」作業についての詳細は不明であるが、おそらく「施釉」作業までがモロで行われていた。施釉された素地は窯場へ運ばれ、エンゴロ(匣鉢)に入れて窯詰めされた。登窯の脇にあった二階建て建物は、4昼夜かかる窯焚き期間の休憩やその他の作業するために使われた。

北山窯の開窯時の名称は「北山陶古園」であり、のちに「北山園製陶所」(昭和31年以降の年)に改称された。登窯は(焼成室が)4室あり、中央の2室が「北山窯」、前後の2室は別の製陶所に貸していた。戦時中は灯火管制などがあり、操業を自粛していた。燃料に薪が使用されていた登窯の窯焚きは昭和31年に行われたものが最後となり、これ以降に石炭窯に変わった。

戦前からの北山窯を知る女性の記憶では、窯焚きの前には小割した薪を束ね、窯焚きの最中には食事の支度として「ごもくごはん」を作った。窯出しの際には、窯場から自宅まで製品を運ぶ手伝いをしたという。

なお、かつて陶器生産を行っていたとの情報は、現在の関係者には伝わっていなかったようである。

(武部)

(3) 勘介窯跡

勘介窯跡はこれまでに発掘調査は実施されていないものの以前から知られており、水野川の支流寺前川右岸丘陵の東斜面に所在していて、2基の窯体が残存するものと推定されていた*2。

今回の調査では、北山窯跡の盛土中に大窯期の遺物が含まれていたことから北山窯の造成に伴って、灰

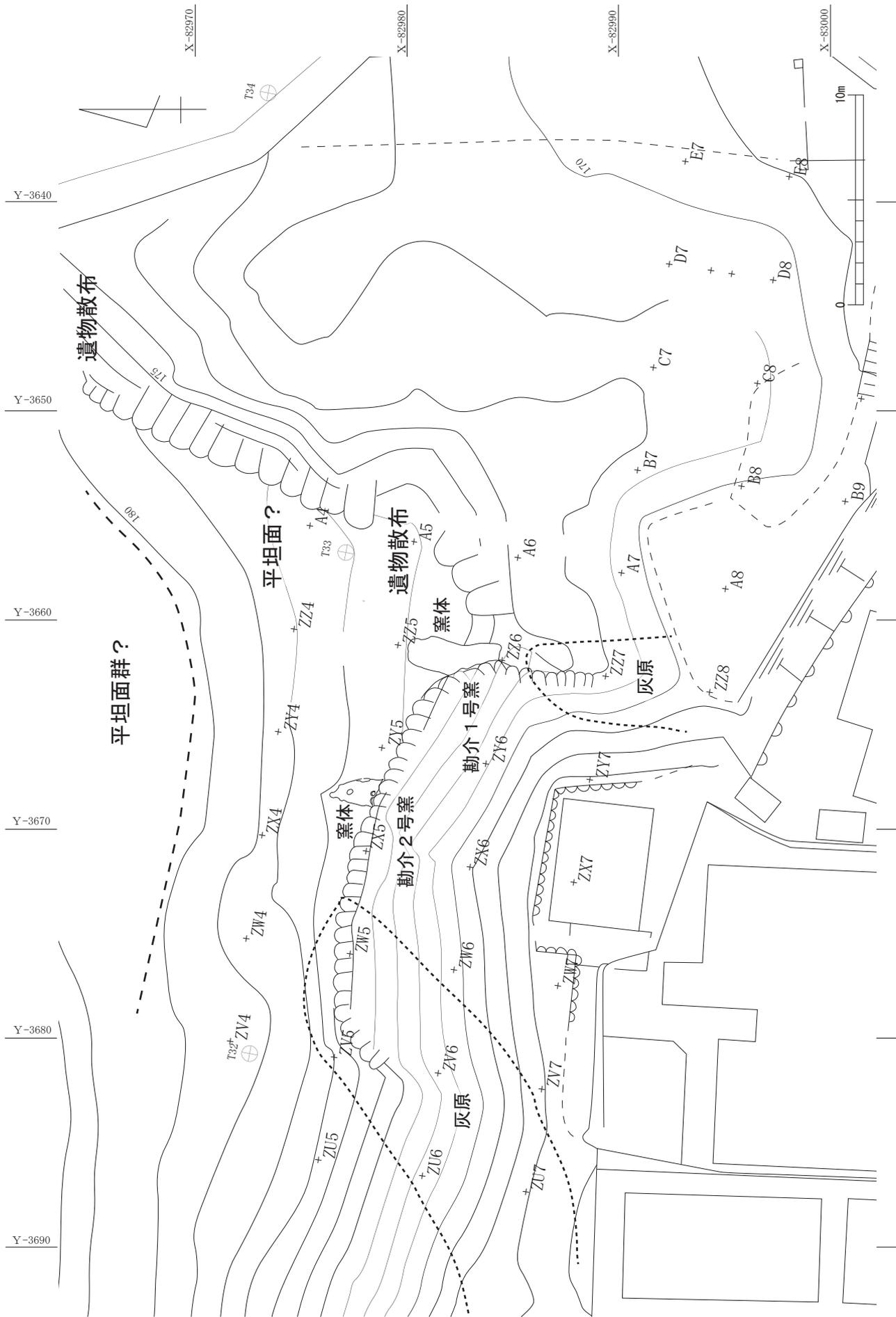


图 74 勘介窯跡構造图 (縮尺 1/250)

表 11 勘介窯跡出土遺物（器種・重量）

器種\窯体・重量	1号窯		2号窯		1号か2号
	重量 (g)	製品全体に占める割合	重量 (g)	製品全体に占める割合	重量 (g)
天目茶碗・小天目	3434.4	1.75%	9245.3	2.52%	
灰釉碗類	1194		1568.7		
碗類片	1033.21		843.3		
碗類合計	5661.61	2.89%	11657.3	3.18%	
灰釉皿	16716.3	8.50%	21761.5	5.94%	111.6
鉄釉皿	1363.2	0.69%	3002.4	0.82%	77.9
皿類片	19506.8		34382.5		327.0
皿類合計	43247.91	22.00%	70803.7	19.32%	189.5
大皿類	-		622.6		
播鉢	142541.9	72.66%	246668.2	67.32%	1119.3
甕（錆釉）	2075.9		3410.0		
その他鉢類	110.1		1664.6		
鍋・釜類	559.2		4773.2		28.3
徳利・花瓶類	3424.1		7050.6		6.0
小瓶・小壺類	457.0		895.9		
筒形容器・片口・有耳壺類	3171.4	1.61%	26862.3	7.33%	93.6
その他の器種	576.3		3679.9		3.6
製品類合計	196163.81		366431.0		1767.3
匣鉢	217641.7		164649.3		635.4
製品・窯道具溶着	33335.6		44903.4		467.8
焼台	12274.9		11113		
小分炎柱	20385.6		2148.4		
長脚ピン	1856.6		1740.4		
輪トチ	2044.6		1066.3		
窯道具類合計	287539.0		225620.8		1103.2

原の一部が削平されたことが明らかとなった。調査では2ヵ所の試掘坑とも遺構は確認されず近接地に所在するものと考えていた。ところが、工事に入り立会調査の段階において斜面末端の崖下から灰原の一部を確認することとなり、崖面上端部には灰原の一部が露出することが明らかとなった。また、工事が進み立会調査が進むにつれて窯体の痕跡（1号窯）や別の窯体（2号窯）の一部を検出した。これによって、勘介窯跡には少なくとも2基の窯体があり、それぞれの灰原がわずかではあったが残存していて、これまで不明であった勘介窯跡の様相の一部が明らかとなってきた。

確認された遺構は2基の窯体と灰原であるが、2試掘坑の北側には現況地形でも比較的広い平坦面が認められる。試掘坑では堆積土に炭化物や白色粘土が含まれていて、近接地に工房跡の存在を推定した。また、東側斜面にも大窯期の遺物が散布しており、勘介窯跡の遺構が北側のみならず、さらに広範囲に分布する可能性が高い（図74）。（松澤）

窯体の位置関係から1号窯、2号窯それぞれの焼成品とした出土遺物について、大まかな器種ごとに計測した重量合計を表11に示す。1号窯と2号窯では播鉢・皿類・碗類（天目茶碗）の大窯の主要器種の割合が異なり、2号窯では筒形容器、徳利・花瓶類などその他の器種の割合の増加が目立つ。皿類の鉄釉・灰釉製品の重量比では、1号窯は1:12.3、2号窯では1:7.3であり、2号窯の方が鉄釉製品の割合が高くなっている。出土遺物全体は、大窯第1段階後半から第3段階前半までの遺物と位置付けられ、このうち特に皿類で顕著にみられる傾向として、1号窯では大窯第1段階後半、2号窯では大窯第3段階前半に比定される資料が多くなっている。したがって、1号窯→2号窯の順に操業を開始したものと推定でき、勘介窯跡の操業期間は16世紀初頭から中葉あたりに位置付けられよう*3。（武部）

註・参考文献

- 1) 大瀬戸新聞社 1980『大瀬戸新聞 第3753号』
 - 2) 瀬戸市教育委員会 1997「勘介窯跡」『瀬戸市詳細分布調査報告書』
 - 3) 愛知県 2007『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』
- 春日美海 2010「-近代の美濃陶磁-根本焼の展開」多治見市文化財保護センター研究紀要 第10号
 河合竹彦 2005「明治時代に焼かれたやきもの美濃印判の記年名について」瑞浪陶磁資料館研究紀要 11
 瀬戸市文化振興財団企画展図録『瀬戸・美濃窯の近代』

掲載遺物一覧表 1

登録番号	種別	器種	時期・所見など	グリッド・出土地点	遺構・層位	釉薬、その他	口径cm	底径cm	器高cm	残存率 / 12	
										口縁部	底部
1	陶器	植木鉢	近代	盛土黄	No. 264の下, No. 257と同一層	円形大, 白釉	18.0	11.0	13.0	2	12
2	陶器	植木鉢	近代	盛土黄	No. 264の下, No. 257と同一層	円形小, 白釉	-	7.8	(10.75)	-	12
3	陶器	植木鉢	近代	C7	下層	施釉	(24.9)	(24.5)	7.7	3	3
4	陶器	植木鉢	近代	横軸 (2m)	下層	方形, 緑釉	長径28.0	短径20.0	8.0	5	5
5	陶器	植木鉢	近代	C7	物原下層	円形, 白釉	20.3	15.25	10.3	10	12
6	陶器	播鉢	近代	B7	物原下層	中型, 鉄釉	17.6	8.6	6.9	6	8
7	陶器	播鉢	近代	9964F	南壁 (ガケ面下)	小型, 鉄釉	13.8	5.8	4.7	5	12
8	陶器	播鉢	近代	B7	下層	小型, 鉄釉	12.8	6.1	4.85	2	12
9	陶器	片口	近代	B7	下層	灰釉	10.0	4.2	3.9	4	9
10	陶器	大皿	-近代	B7	表土	鉄釉総釉	17.2	10.4	4.9	1	12
11	陶器	筒形容器	-近代	ZU7	立会	小型, 円筒状, 内面のみ灰釉	3.8	3.0	3.9	3	12
12	陶器	蓋	近代	ZZ6	表土	灰釉に褐色斑点	7.8	-	(1.35)	12	-
13	陶器	蓋	近代	B7	物原最下層	外面に錆釉, 白泥釉	18.9	つまみ径7.35	5.4	2	10
14	窯道具	棚板・播鉢	近代	C7	物原下層	棚板に紫印, 記号印 (○に「忠」)	縦10.5 14.2	横14.6 5.7	厚3.7 4.3	- 7	- 12
15	陶器	蓋	近代	B7	物原下層	灰釉, 錆釉, 白泥釉 (打ち刷毛)	21.6	つまみ径7.8	4.6	12	4
16	陶器	蓋	近代	C7北壁	物原下層	灰釉, 白泥釉 (打ち刷毛)	16.1	つまみ径6.3	3.3	12	9
17	陶器	蓋	近代	B8	北壁	灰釉, 錆釉, 白泥釉	13.4	つまみ径5.6	3.2	10	4
18	陶器	鉢	近代	C7北壁	物原下層	灰釉, 白泥釉 (打ち刷毛)	14	7.2	8.8	2	12
19	陶器	鉢	近代	B7	物原下層	灰釉, 白泥釉 (打ち刷毛)	12.05	6.6	8.0	7	12
20	陶器	鉢	近代	B7	物原下層	灰釉, 白泥釉 (打ち刷毛)	12.7	6.15	8.1	6	12
21	陶器	鉢	近代	B7	物原下層 277と同じ	灰釉, 白泥釉 (打ち刷毛)	16.4	高台径7.8	9.4	2	9
21	陶器	鉢	近代	B7	物原下層	灰釉, 白泥釉 (打ち刷毛)	-	-	-	-	-
22	陶器	鉢	近代	C7北壁	物原下層	灰釉, 白泥釉 (打ち刷毛)	15.8	-	(7.8)	2.5	-
23	陶器	鉢	近代	盛土黄	No. 264の下 (この下はシャモット)	灰釉, 白泥釉 (打ち刷毛)	21.4	8.2	13.6	2	12
24	陶器	鉢	近代	B7	物原下層	灰釉, 錆釉, 白泥釉 (打ち刷毛)	21.6	高台径9.8	13.9	1	12
25	陶器	鉢	近代	B7	下層	陶器, 黄釉	19.8	7.6	10.2	6	12
26	陶器	刷毛目皿	近代	A7	灰層	灰釉, 白泥釉	13.1	5.0	3.05	2	3
27	磁器	染付皿	近代	ZZ7	物原	銅版転写, ダミ, 銘「北山精製」	11.8	7.8	2.4	8	12
28	磁器	染付皿	近代	ZZ7南壁	灰層	銅版転写, ダミ, 銘「北山精製」	11.35	7.25	2.5	7	12
29	磁器	染付徳利	近代	ZZ7~A7	表土	-	2.8	-	(8.5)	12	-
30	磁器	染付端反碗	近代	B7	物原最下層, 最下層4	銘款	11.6	4.6	6.05	3	3
31	磁器	染付碗	近代	東煙道	埋土	銘「峯山」, 赤色釉	-	3.8	(2.2)	-	12
32	磁器	染付端反碗	近代, 小形碗A類	ZZ7	物原	銘「松風□□」	8.6	3.9	5.0	6	11
33	磁器	染付端反碗	近代, 小形碗A類	C7	下層掘り下げ②	銘「□□□□」	8.3	4.05	4.9	3	12
34	磁器	染付端反碗	近代, 小形碗A類	B7	上層	銘「北山」	7.4	3.0	4.65	7	12
35	磁器	染付端反碗	近代, 小形碗A類	室外	261層の上層	銘「北山製造」	8.2	3.95	5.1	2	11
36	磁器	染付小碗	近代, 小形碗E類	ZZ7	表土	小型	7.4	2.9	4.45	9	12
37	磁器	染付小碗	近代, 小形碗E類	B7	物原(ガラ)	素焼, 呉須絵あり	-	3.6	(2.8)	-	6
38	磁器	染付小杯	近代, 小形碗B類	B7	最下層	銘「陶玉園北山製」	8.7	4.5	5.15	5	12
39	磁器	染付小杯	近代, 小形碗C類	B7	下面物原(ガラ)	色見に利用	8.2	4.1	4.95	8	12
40	磁器	染付小杯	近代, 小形碗D類	ZZ7	表採	銘あり	7.6	3.6	4.5	6	6
41	磁器	染付小杯	近代, 小形碗D類	C7	物原(下面直上)	銘「古白園製」か	8.9	4.4	5.1	3	9
42	磁器	染付小杯	近代, 小形碗D類	A7	灰層	銘「陶玉園製」	7.7	4.0	4.6	10	12
43	磁器	染付小杯	近代, 小形碗D類	B7	立会	-	8.5	4.1	5.0	3	12
44	磁器	染付小杯	近代, 小形碗D類	B7	下層	紀年銘「明治四十一年四月」, 「水野」, 「品野記念」	8.8	4.1	5.3	3.5	12
45	磁器	染付小杯	近代, 小形碗D類	B7	物原下層(窯体下)	「改修記念」, 銘あり	9.2	4.0	5.1	3	12
46	磁器	染付端反碗	近代	B7	立会	転写	10.8	4.0	6.1	7	12
47	磁器	鉢	近代	ZZ7	表土(褐色)	素焼, 呉須絵あり, 染付	-	4.45	(2.4)	-	11
48	磁器	湯呑	近代	B7北壁	せんべい層	銅版転写, 銘「北山造」, 黒色釉	-	3.25	(3.0)	-	12
49	磁器	平碗	近代	B7	上層	手描, 口錆	12.1	4.9	6.3	10	11
50	磁器	平碗	近代	ZZ7~A7	表土	転写, 手描, 「北山」凹印	13.3	4.9	6.9	10	9
51	磁器	平碗	近代	B8	黒色土	「北山」凹印	-	-	(1.8)	-	1
52	磁器	平碗	近代	B7	立会	転写, 手描, 高台内に段あり	10.75	3.9	5.95	5	12
53	窯道具	碗+トチ	近代	-	表土(南カベガケ面)	転写, 手描, 円筒状トチ付着	-	4.2	(2.5)	-	0.5
54	磁器	平碗	近代	A7, B7	立会	転写, 手描	11.7	4.2	5.0	6	12
55	磁器	碗蓋	近代	ZZ7	表土	転写, 手描	10.0	-	2.5	10	12
56	磁器	平碗	近代	ZZ7	表土	転写, 吹絵, 「北山」凹印	11.5	4.3	5.8	8	10
57	磁器	平碗	近代	ZZ7~A7	表土	転写, 手描, 茶, 黒色釉	12.8	4.8	6.8	5	8
58	磁器	碗蓋	近代	ZZ7~A7	表土	手描, 上絵	10.1	-	3.2	7	12
59	磁器	平碗	近代	ZZ7	表土	手描, 上絵, 統制番号	10.6	3.45	5.2	9	12
60	磁器	平碗	近代	ZZ7	表土	転写, 統制番号「品147」	11.5	3.75	5.8	9	12
61	磁器	鉢	近代	A7	表土	手描, 素焼素地, 銘「陶玉園製」	-	6.8	(3.6)	-	12
62	陶器	平碗	近代	B7	立会	手描, 口錆, 銘「陶玉園製」	15.3	5.7	6.8	2	12
63	磁器	平碗	近代	B7	南壁(ガケ面) 平坦面下, 9	手描, 口錆, 銘「陶玉園松風製」	13.1	5.0	6.4	2	12
64	窯道具	平碗・匣鉢	近代	B7	立会	転写, 型作り匣鉢	11.4 14.5	5.0 5.7	6.2 8.9	9 2	12 12
65	窯道具	匣鉢+磁器碗	近代	B7北壁	表土	手描, 型作り匣鉢	9.4	4.4	8.6	12	12

掲載遺物一覧表 2

登録番号	種別	器種	時期・所見など	グリッド・出土地点	遺構・層位	釉薬、その他	口径cm	底径cm	器高cm	残存率 /12	
										口縁部	底部
66	陶器	土人形(猫形貯金箱)	近代	ZZ7	表土	素焼	-	-	(5.3)	-	-
67	磁器	容器	近代	ZZ7	物原	白磁	11.25	-	(7.1)	5	-
68	磁器	容器	近代	ZZ7	物原	白磁	11.1	10.0	8.5	1	12
69	磁器	湯呑	近代	9964F	南壁崖面下	白磁	7.5	4.8	8.45	9	12
70	窯道具	湯呑・容器	近代	9964F	南壁崖面下	白磁	11.0	9.9	(10.0)	9~11	12
71	磁器	花瓶	近代	D7, D8拡張	表土	洋風花瓶, 上絵付用素地	9.4	7.4	18.0	4	12
72	窯道具	色見(植木鉢片)	近代	窯内	断割	緑釉, 側面に焼成前穿孔	-	-	(5.75)	-	-
73	窯道具	色見(植木鉢片)	近代	A7	灰層	「忠」/口口	-	-	(4.85)	-	-
74	窯道具	陶片(植木鉢片)	近代	C7	最終面下	「ほ山」刻文	長(4.2)	幅(3.6)	厚(1.25)	-	-
75	磁器	トチ	近代	B7	表土	平碗E-52, 53タイプ専用	長(3.1)	幅(3.1)	厚(1.15)	12	12
76	磁器	色見	近代	C7	物原(下面直上)	「配合異なる4色を試用か」	6.45	2.7	2.9	2	12
77	窯道具	色見	近代	D7	最終面下	磁器染付片	長(4.2)	幅(4.3)	1.1	12	12
78	窯道具	色見	近代	D7	最終面下	磁器染付片	長(3.5)	幅(3.1)	(1.1)	12	12
79	磁器	乳鉢	近代	9865W, X	検出(001SU含)	染付銘「(記)念 昭和」	11.0	-	(4.2)	2	-
80	磁器	乳鉢	近代	9865X, Y	検出	染付銘「北山 年五月」	11.0	6.0	5.85	4	6
81	磁器	トチオサエ	近代	C7	下層	染付銘「明治卅口落慶」	2.7	-	(5.8)	12	-
82	磁器	トチオサエ	近代	D7	表土	染付銘ヤマ形に「ク」	2.9	-	(5.75)	6	-
83	磁器	トチオサエ	近代	B7東半	物原上層	染付文字あり	-	-	(4.7)	-	-
84	磁器	トチオサエ	近代	ZZ7	褐色, 表土	染付銘ヤマ形に「ク」と口「口山」	3.8	4.65	7.7	3	12
85	磁器	トチオサエ	近代	B7, 9864B, C, D, V, I	下層物原	染付銘「昭和七年四月」「北山」	-	6.2	(5.3)	-	12
86	磁器	板トチ	近代	B7	表土		6.2	-	0.5	12	12
87	磁器	板トチ	近代	B7	表土		5.6	-	0.7	12	12
88	窯道具	エブタ	近代	C7	下層物原	鉄軸筆書「北山」	長11.4	幅11.6	厚1.3	10	10
89	窯道具	エブタ	近代	ZZ7~A7	南壁2	鉄軸筆書「北山」	長12.3		厚1.3	9	9
90	窯道具	エブタ	近代	B8拡張	シャモット	鉄軸筆書「ヨ」	長10.65	幅10.0	厚1.1	12	12
91	窯道具	エブタ	近代	A7	表土	片面灰軸	長11.4	幅11.4	厚0.8	12	12
92	窯道具	エブタ	近代	B7	物原下層	隅丸方形	長11.1	短10.5	厚1.5	12	12
93	窯道具	陶片(エブタ)	近代	B7	立会	鉄軸筆描「北」	12.0	12.0	1.4	2	2
94	窯道具	エブタ?	近代	B7窯外	一次床下	円形, 焼成前穿孔あり	13.0	-	0.9	2	2
95	陶器	用途不明	近代	9964F	南壁(ガケ面下)	無釉	-	14.4	(2.5)	-	2
96	窯道具	トチ	近代	B7窯外	一次床下	無釉	9.0	6.0	5.55	1	4
97	窯道具	トチ	近代	ZZ7	物原	無釉, 円筒状	8.0~9.2	-	6.1	12	12
98	窯道具	皿鉢(ロクロ)	近代	A7	物原	鉄軸筆描「ク」	10.7	-	(6.1)	1	-
99	窯道具	皿鉢(ロクロ)	近代	B7	物原下層	鉄軸筆描「ク」	10.5	-	(5.1)	3	12
100	窯道具	皿鉢(ロクロ)	近代	補助1トレ	表土	丸底	11.5	11.2	8.7	12	12
101	窯道具	皿鉢(ロクロ)	近代	B7西半	表土	丸底	9.2	9.5	8.0	7	12
102	窯道具	皿鉢(ロクロ)	近代	C7	物原下層	丸底, 鉄軸筆描「ク」	16.4	-	(7.55)	2	-
103	窯道具	皿鉢(ロクロ)	近代	補助1トレ	表土	丸底	16.5	16.95	9.45	12	12
104	窯道具	皿鉢(ロクロ)	近代	B7	立会	浅い丸底	15.4	15.9	5.5	12	12
105	窯道具	皿鉢(型)	近代	A7	表土	浅い平底, 穿孔	11.3	11.5	2.7	12	12
106	窯道具	皿鉢(ロクロ)	近代	C7	下層掘り下げ③	円形, 平底, 穿孔	-	16.1	(8.3)	-	12
107	窯道具	皿鉢+磁器碗	近代	B7	280と同じ		24.2	24.7	7.5	8	8
108	窯道具	皿鉢(ロクロ)	近代	B7トレンチ	物原上層	平底, 鉄軸筆描「忠」	17.95	19.4	12.9	12	12
109	窯道具	皿鉢(型凸底)	近代	B7	立会	凸平底	13.6	4.8	6.85	12	12
110	窯道具	皿鉢(型凸底)	近代	C7	表土	双子凸平底	-	-	7.3	12	-
111	窯道具	皿鉢(型)	近代	ZZ7	立会	隅丸方形, 平底に穿孔あり	19.9	19.3	12.1	12	12
112	陶器	長方形容器	近代	B7西半ガケ下	表土	無釉	21.1	12.1	4.9	12	12
113	窯道具	皿鉢蓋	近代	D8	表土		長19.9	幅(13.8)	厚1.8	6.5	6.5
114	窯道具	蓋	近代	ZV5	褐色	円形, 「はじめ型」(常滑)か	径36.4	幅(28.8)	厚1.3	9	9
115	窯道具	蓋	近代	ZV5	褐色	円形, 「はじめ型」(常滑)か	径23.15	幅(12.9)	厚1.8	2	2
116	窯道具	ツク	近代	B7トレンチ	下層物原		長19.8	幅4.8	厚4.4	-	12
117	窯道具	ツク	近代	B7	立会		長9.5	幅4.2	厚4.2	12	12
118	窯道具	ツク	近代	B7	物原下層(トチ)		-	5.5~6.5	(7.6)	-	-
119	窯道具	皿鉢蓋?	近代	窯床下	トチ層	方形, 凹印「友」	長7.0	幅12.2	厚0.9	-	-
120	窯道具	棚板	近代	-	煙突, 窯材	記号印(○に「忠」)	長15.4	幅14.8	厚4.7	-	-
121	窯道具	棚板	近代	C7	立会	窯印陰刻あり	長6.95	幅16.2	厚4.6	-	-
122	窯道具	棚板	近代	C8南壁	図あり	記号印(○2つ重ね)	長12.55	幅15.0	厚4.1	-	-
123	窯道具	棚板	近代	-	煙突, 窯材	記号印(カギに「金」)	長12.9	幅11.05	厚3.8	-	-
124	窯道具	クレ(小)	近代	D8壁	上層	記号印「友」	長5.3	幅12.6	厚3.2	12	12
125	窯道具	栓(孔径3.9)	近代	B7	下面物原(ガラ)		長(13.9)	幅(11.5)	厚(8.4)	-	-
126	窯道具	栓(孔径3.3)	近代	B7窯外	一次床下		長(10.5)	幅(9.7)	厚(8.4)	-	-
127	窯道具	栓(孔径3.0)	近代	ZZ7	物原		長(10.5)	幅(10.4)	厚(6.6)	-	-
128	窯道具	棚板	近代	窯体	サマ柱 棚板		長26.9	幅12.0	厚3.7	-	-
129	窯道具	ハコグレ	近代	窯体煙突	西煙道一チ 東		長28.5	幅19.1	厚0.8	-	-
130	窯道具	ハコグレ	近代	B7 窯外	一次床上		長28.0	幅17.0	厚0.6	-	-
131	窯道具	ハコグレ	近代	D7 窯外	一次床上		長27.5	幅18.3	厚10.3	-	-
132	陶器	土管	近代	東煙道	土管2	常滑窯産	41.2	35.6	69.0	12	12
133	陶器	土管	近代	煙突東煙道	土管1	常滑窯産	56.6	(48.0)	60.98	6	3

掲載遺物一覧表 3

登録番号	種別	器種	時期・所見など	グリッド・出土地点	遺構・層位	釉薬、その他	口径cm	底径cm	器高cm	残存率 / 12	
										口縁部	底部
134	磁器	染付丸皿	近代	B7中軸ベルト, B7東半, B7北壁, B9	物原(ガラ), 赤褐色, 上層, 立会	型紙摺, 銘「明治二四年」	10.8	6.2	2.2	10	11
135	磁器	盃	近代	C7	立会, 物原下層	転写, 上絵, 販促用銘「名酒神国」	8.1	2.85	2.9	3	12
136	磁器	小杯	近代	D7(参道)	表土(最下層)	転写	7.4	3.45	6.2	4	12
137	磁器	湯呑	近代	B7付近	立会	転写, 多色	5.6	4.3	8.9	1	12
138	磁器	水滴	近代	B7	物原上層	転写, 文様型押	長4.9	幅3.75	1.8	12	12
139	陶器	鉢	近代	ZZ7	物原	吹き絵	20.85	6.8	8.4	5	12
140	陶器	植木鉢(型)	近代	D7	表土(黒土)	施釉	15.6	13.8	5.7	12	12
141	陶器	甕	近代	B7	下層	鉄釉	(28.0)	-	(6.0)	1	-
142	陶器	器種不明(円筒状)	近代	B7西半	表土	外面に鉄釉, 内面にスタンプ, 小判形に「特口」	-	31.6	(11.1)	3	-
143	不明	不明製品	近代	D7	表土	磁器製の陶丸形	縦1.85	横1.85	厚1.85	12	12
144	陶器	五徳	近代	B7西半ガケ下	表土	無釉, 赤褐色	25.7	22.0	7.05	3	3
145	陶器	五徳	近代	B7西半	表土	無釉, 赤褐色	25.4	19.2	7.3	1	1
146	陶器	五徳	近代	B7東半	最終面下	無釉, 赤褐色	23.4	-	(3.7)	-	1
147	陶器	五徳	近代	B7東ベルト	赤褐色	無釉, 赤褐色	23.4	-	(4.6)	-	1
148	陶器	天目茶碗	大窯1	ZZ7	表土	腰縮, 輪高台	12.45	4.4	6.8	2	12
149	陶器	天目茶碗	大窯1	ZZ7	褐色	腰縮, 輪高台	11.6	4.3	6.3	6	4
150	陶器	天目茶碗	大窯1	ZZ7	表土	腰縮, 輪高台	11.0	-	(5.2)	-	-
151	陶器	天目茶碗	大窯1	ZZ7	表土	腰縮, 輪高台	11.5	4.2	6.0	12	12
152	陶器	天目茶碗	大窯1	ZZ7	シャモット面北落ちこみ	腰縮, 輪高台	11.8	-	(4.1)	2	-
153	陶器	天目茶碗	大窯1	ZZ7	赤褐色	腰縮, 輪高台	10.9	4.3	5.95	2	12
154	陶器	天目茶碗	大窯1	ZZ7	灰褐色	露胎, 輪高台, 刻印	-	4.6	(1.0)	-	11
155	陶器	天目茶碗	大窯1	ZZ7	褐色	腰縮	11.2	-	(5.55)	2	-
156	陶器	天目茶碗	大窯1	ZZ7	褐色	腰縮	11.2	-	(5.2)	3	-
157	陶器	天目茶碗	大窯1	ZZ7	立会	腰縮	12.1	-	(4.9)	3	-
158	陶器	天目茶碗	大窯1	ZZ7	表土	腰縮	11.8	-	(5.2)	3	2
159	陶器	天目茶碗	大窯1	ZZ7	赤褐色	腰縮	10.9	-	(4.8)	2	-
160	陶器	天目茶碗	大窯1	ZZ7	赤褐色	腰縮	11.2	-	(4.85)	2	-
161	陶器	天目茶碗	大窯1	ZZ7	物原	腰縮, 輪高台	10.8	3.8	5.8	1	12
162	陶器	天目茶碗	大窯1	ZZ7	表土(崖)	腰縮	11.5	-	(5.1)	3	-
163	陶器	天目茶碗	大窯1	ZZ7	赤褐色	腰縮, 輪高台	-	4.3	(4.1)	-	12
164	陶器	天目茶碗	大窯1	ZZ7	表土	腰縮, 輪高台	-	3.7	(2.6)	-	12
165	陶器	天目茶碗	大窯1	ZZ7	赤褐色	腰縮, 輪高台	-	4.0	(3.1)	-	12
166	陶器	天目茶碗	大窯1	ZZ7	表土	腰縮, 輪高台	-	4.0	(6.6)	-	12
167	陶器	天目茶碗	大窯1	ZZ7	表土下層(黒層)	腰縮, 輪高台	-	3.65	(4.2)	-	12
168	陶器	天目茶碗	大窯1	ZZ7	灰褐色	腰縮, 輪高台	-	4.05	(1.85)	-	12
169	陶器	天目茶碗	大窯2	ZZ7	表土	腰縮	12.6	-	(6.3)	2	-
170	陶器	天目茶碗	大窯2	ZZ7	表土~褐色	腰縮	11.3	-	(5.4)	3	-
171	陶器	天目茶碗	大窯2	ZZ7	シャモット面北落ちこみ	腰縮, 内反高台	-	4.2	(4.85)	-	12
172	陶器	天目茶碗	大窯2	ZZ7	灰褐色	腰縮	11.8	-	(5.3)	2	-
173	陶器	小天目茶碗	大窯2	ZZ7	褐色	腰縮	9.6	-	(4.3)	2	-
174	陶器	平碗	大窯	ZZ7	表土	灰縮	15.9	-	(3.5)	2	-
175	陶器	丸碗	大窯1後半	ZZ7	灰褐色, 表土	灰釉, 剣先文	12.0	5.1	6.3	2	12
176	陶器	丸碗	大窯1	ZZ7	表土	灰釉, 剣先文	11.9	-	(3.9)	2	-
177	陶器	丸碗	大窯1	ZZ7	立会	無釉, 剣先文	12.5	-	(5.2)	2	-
178	陶器	丸碗	大窯1	ZZ7	灰褐色	無釉, 剣先文	(11.1)	-	(5.75)	1	-
179	陶器	丸碗	大窯1	ZZ7	表土	無釉, 剣先文	-	5.5	(4.1)	-	12
180	陶器	丸碗	大窯1	ZZ7	表土下層(黒灰)	灰釉	-	5.2	(6.15)	-	11
181	陶器	丸碗	大窯1	ZZ7	表土	灰釉	-	4.5	(4.9)	-	12
182	陶器	丸碗	大窯1	ZZ7	灰褐色	灰釉	-	4.9	(2.9)	-	12
183	陶器	丸碗	大窯1	ZZ7	灰褐色	灰釉	-	5.2	(2.15)	-	5
184	陶器	丸碗	大窯1	ZZ7	灰褐色	灰釉	-	5.2	(2.7)	-	12
185	陶器	丸碗	大窯1	ZZ7	灰褐色	灰釉	-	4.9	(1.9)	-	12
186	陶器	丸碗	大窯3	ZZ7	褐色	露胎, 窯印	-	4.2	(4.0)	-	5
187	陶器	端反中皿	大窯1	ZZ7	表土	灰釉縁軸	15.65	7.6	3.6	2	10
188	陶器	端反中皿	大窯1	ZZ7	灰褐色	灰釉縁軸	16.8	9.0	3.7	4	6
189	陶器	端反中皿	大窯1	ZZ7	表土下層(黒層)	灰釉	14.8	8.6	3.3	1	4
190	陶器	端反中皿	大窯1	ZZ7	表土	灰釉	15.4	8.5	(3.1)	2	6
191	陶器	端反中皿	大窯1	ZZ7	表土(崖)	灰釉縁軸, 内面に墨書	16.7	8.4	3.2	2	2
192	陶器	端反中皿	大窯1	ZZ7	灰褐色	灰釉, 菊印花3	16.8	8.6	2.7	1	4
193	陶器	端反中皿	大窯1	ZZ7	表土下層(黒層)	灰釉縁軸	15.2	-	(3.0)	2	-
194	陶器	中皿	大窯1か2	ZZ7	赤褐色	灰釉	-	9.4	2.3	-	3
195	陶器	中皿	大窯1	ZZ7	褐色	灰釉	-	8.2	(2.2)	-	3
196	陶器	中皿	大窯1か2	ZZ7	灰褐色	灰釉	-	9.0	-	-	12
197	陶器	中皿	大窯1か2	ZZ7	赤褐色	灰釉	-	7.8	(1.4)	-	3

掲載遺物一覧表 4

登録番号	種別	器種	時期・所見など	グリッド・出土地点	遺構・層位	釉薬、その他	口径cm	底径cm	器高cm	残存率 / 12	
										口縁部	底部
198	陶器	端反中皿	大窯 1	ZZ7	赤褐色	灰釉緑釉	14.9	8.45	3.5	4	11
199	陶器	端反中皿	大窯 1	ZZ7	赤褐色	灰釉緑釉	15.0	8.0	3.5	7	12
200	陶器	端反皿	大窯 1	ZZ6	褐色	灰釉, 菊印花	11.4	6.0	2.7	2	5
201	陶器	端反皿・輪トチ	大窯 1	ZZ7	灰褐色	灰釉, 菊印花	11.2	5.8	2.5	3	11
202	陶器	端反皿	大窯 1	ZZ7	シャモット面 検出 表土	灰釉	11.3	6.2	2.4	9	12
203	陶器	端反皿	大窯 1	ZZ7	表土下層(黒層)	灰釉	11.4	6.2	2.5	4	6
204	陶器	端反皿	大窯 1	ZZ7	表土	灰釉	10.8	5.6	2.7	2	10
205	陶器	端反皿	大窯 1	ZZ7	灰褐色	灰釉	11.05	5.6	2.4	12	12
206	陶器	端反皿・輪トチ	大窯 1	ZZ7	表土下層(黒層)	灰釉	11.3	5.9	2.6	9	9
207	陶器	端反皿・輪トチ	大窯 1	ZZ7	検出, 立会	灰釉	11.4	6.2	2.6	3	10
208	陶器	端反皿	大窯 1	ZZ7	赤褐色	灰釉	11.4	6.1	2.3	7	4
209	陶器	端反皿	大窯 1	ZZ7	灰褐色	灰釉	11.15	5.75	2.35	1	7
210	陶器	端反皿	大窯 1	ZZ7	表土~灰褐色	灰釉	10.8	6.2	2.5	5	6
211	陶器	端反皿	-	ZZ7	表土下層(黒層)	小型, 灰釉	8.9	5.3	2.0	4	7
212	陶器	端反皿・付着物	大窯 1	ZZ7	表土	灰釉	10.9	5.9	2.8	6	10
213	陶器	端反皿	大窯 1	ZZ7	表土	灰釉	10.9	5.8	2.5	2	4
214	陶器	端反皿	大窯 1	ZZ7	表土	灰釉, 印花	9.2	4.8	2.0	4	5
215	陶器	皿	大窯 1 か 2	ZZ7	表土~灰褐色	灰釉, 菊印花	-	5.7	(1.1)	-	3
216	陶器	皿	大窯 1 か 2	ZZ7	褐色	灰釉, 菊印花	-	5.05	(1.2)	-	9
217	陶器	端反皿(小)	大窯 1	ZZ7	表土	灰釉	8.0	4.7	2.2	9	12
218	陶器	端反皿(小)	大窯 1	ZZ6	表土	灰釉, 印花	8.7	4.3	2.2	6	12
219	陶器	端反皿(小)	大窯 1	ZZ7	表土	灰釉, 印花	8.2	4.8	2.2	3	12
220	陶器	端反皿(小)	大窯 1	ZZ7	灰褐色	灰釉	7.3	4.5	2.4	1	12
221	陶器	端反皿(小)	大窯 1	ZZ7	灰褐色	無釉	8.1	5.2	2.0	12	12
222	陶器	端反皿(小)	大窯 1	ZZ7	灰褐色	灰釉, 印花	8.6	4.7	2.4	10	12
223	陶器	端反皿(小)	大窯 1	ZZ7	赤褐色	灰釉	7.9	4.6	2.05	5	12
224	竈道具	腰折狭み皿	大窯 1 / (古瀬戸後IV新)	ZZ7	表土	鉄釉	10.6	-	(1.4)	2	-
225	陶器	皿	大窯 1 か 2	ZZ7	赤褐色	灰釉	-	4.0	(1.95)	-	5
226	陶器	端反皿	大窯 1 か 2	ZZ7	表土	鉄釉, 萐苜底	10.3	4.6	2.0	2	5
227	陶器	端反皿	大窯 1 か 2	ZZ7	表土	鉄釉, 萐苜底	10.2	4.8	2.0	3	4
228	陶器	稜花皿	大窯 1	ZZ7	表土	灰釉, 菊印花	11.2	5.35	2.9	5	11
229	陶器	稜花皿	大窯 1	ZZ7	表土	灰釉	11.8	-	(1.8)	2	-
230	陶器	稜花皿・輪トチ	大窯 1	ZZ7	灰褐色	灰釉, 菊印花	10.95	4.2	2.45	4	12
231	陶器	丸皿	大窯 2	ZZ7	褐色	鉄釉, 萐苜底	11.2	5.6	2.5	1	6
232	陶器	丸皿	大窯 2	ZZ7	褐色	鉄釉, 萐苜底	11.0	5.4	2.5	2	4
233	陶器	丸皿	大窯 2	ZZ7	褐色	鉄釉, 萐苜底	11.0	5.8	2.9	5	5
234	陶器	丸皿	大窯 2 か 3 / (大1後~2前)	ZZ7	褐色	鉄釉, 萐苜底	11.6	5.0	2.7	4	6
235	陶器	内系皿	大窯 3	ZZ7	表土	無釉	11.2	5.8	(2.1)	3	3
236	陶器	焼締灯明皿	大窯 1	ZZ7南壁	表土		10.6	4.6	2.15	5	12
237	陶器	焼締灯明皿	大窯 1	ZZ7	灰褐色		10.9	5.1	2.85	8	6
238	陶器	焼締灯明皿	大窯 3	ZZ7	表土		10.7	6.3	1.85	2	3
239	陶器	小杯・輪トチ	大窯 2 か 3	ZZ7	表土	鉄釉	-	2.8	(2.2)	-	12
240	陶器	仏胸具	大窯 1	ZZ7	表土	鉄釉	(9.8)	-	(4.2)	1.5	-
241	陶器	茶入	-	ZZ7	灰褐色	外・内面に鉄釉	5.8	4.5	5.8	3	12
242	陶器	茶入	-	ZZ7	赤褐色	外・内面に鉄釉, 広口	7.6	5.5	5.5	5	8
243	陶器	小壺	-	ZZ6	表土	外・内面に鉄釉	3.0	-	(2.4)	12	-
244	陶器	茶入	-	ZZ7	表土	黄瀬戸釉か	-	3.0	(3.9)	-	4
245	陶器	茶入	-	ZZ7	表土	鉄釉	-	-	(4.3)	-	-
246	陶器	搦鉢	大窯 1	ZZ7南壁	101	鉄釉	33.15	14.75	12.55	2	4
247	陶器	搦鉢	大窯 1	ZZ7	褐色	錆釉	31.2	-	(4.3)	2	-
248	陶器	搦鉢	大窯 1 / (後IV新~大1)	ZZ7	表土	錆釉	28.5	-	(5.0)	2	-
249	陶器	搦鉢	大窯 1 / (後IV新~大1)	ZZ7	表土	錆釉	21.6	-	(4.7)	1	-
250	陶器	搦鉢	大窯 1	ZZ7	表土	錆釉	29.2	10.2	12.4	3	12
251	陶器	搦鉢	大窯 1	ZZ7	表土下層(黒層)	錆釉	25.4	5.8	9.4	1.5	5
252	陶器	搦鉢	大窯 1	ZZ7	表土	錆釉	30.3	9.4	11.4	2	12
253	陶器	搦鉢	大窯 1	ZZ7	灰褐色	錆釉	27.0	9.45	10.2	1	12
254	陶器	搦鉢	大窯 1	ZZ7	表土	錆釉	30.6	10.6	12.6	2	3
255	陶器	搦鉢	大窯 1	ZZ7	赤褐色	錆釉	30.0	10.1	11.5	3	6
256	陶器	搦鉢	大窯 1	ZZ7	表土	錆釉	29.2	-	(3.9)	2	-
257	陶器	搦鉢	大窯 1 後	ZZ7	表土下層	錆釉	30.5	10.2	12.45	1	8
258	陶器	搦鉢	大窯 2	C7	盛土	錆釉	28.75	10.1	12.5	3	12
259	陶器	搦鉢	大窯 2	ZZ7	表土	錆釉	26.6	10.1	10.45	1	12
260	陶器	搦鉢	大窯 2	ZZ7	表土	鉄釉	(23.0)	-	3.7	1	-
261	陶器	搦鉢	大窯 2 / 大1後か	ZZ7	表土	錆釉	30.6	-	4.85	1	-
262	陶器	搦鉢	大窯 3 前半	ZZ7	表土	錆釉	(29.0)	-	(3.4)	1	-
263	陶器	搦鉢	大窯 3 前半	ZZ7	表土	錆釉	25.5	-	(5.2)	2	10
264	陶器	筒形容器	-	ZZ7	表土	鉄釉, 内面露胎	14.2	-	-	3	-
265	陶器	筒形容器	-	ZZ7	表土	鉄釉, 内面露胎	14.4	-	(5.9)	1	-

掲載遺物一覧表 5

登録番号	種別	器種	時期・所見など	グリッド・出土地点	遺構・層位	釉薬、その他	口径cm	底径cm	器高cm	残存率 /12	
										口縁部	底部
266	陶器	筒形容器	-	ZZ7	表土	鉄釉, 内面露胎	13.6	-	(6.7)	2	-
267	陶器	筒形容器	-	ZZ7	褐色	外面と内面口縁部付近に鉄釉, 口縁部は拭き取り	11.8	-	(5.6)	-	3
268	陶器	筒形容器	-	ZZ7	表土	灰釉 (自然釉か)	14.8	-	(7.7)	1.5	-
269	陶器	筒形容器	-	ZZ7	表土 (まざり)	外側面に鉄釉	15.9	15.1	9.2	2	2
270	陶器	筒形容器	-	-	表土	外面に錆釉+鉄釉, 底面回転ケズリ	-	13.0	(2.6)	-	5
271	陶器	瓶子	古瀬戸後IV新	ZZ7	赤褐色, 表土	鉄釉, 締腰	6.9	-	(17.65)	3	-
272	陶器	根来形瓶子	古瀬戸後111か・IV	ZZ7	表土	鉄釉	-	-	(5.3)	-	-
273	陶器	花瓶	古瀬戸後IV	C7	盛土	鉄釉, 口縁部	14.6	-	-	1	-
274	陶器	徳利	大窯2か・3	ZZ7	灰褐色	鉄釉	6.8	-	-	7	-
275	陶器	壺	大窯	ZZ7	表土	鉄釉	-	4.8	(1.5)	-	12
276	陶器	耳付水注	大窯2	工事立会	西側	鉄釉, 窯ゴミ付着	3.9	4.4	8.1	1	12
277	陶器	山茶碗	尾張型12型式	ZZ7	表土	無釉	11.4	4.4	3.3	4	4
278	陶器	山茶碗	尾張型12型式	ZZ7	表土	無釉	-	5.5	2.0	-	3
279	陶器	山茶碗	尾張型12型式	ZZ7	表土	無釉	-	5.4	(2.25)	-	4
280	窯道具	縁袖腰折挟み皿	大窯1	ZZ7	表土下層(黒層)	灰釉	11.0	4.1	2.6	3	12
281	窯道具	縁袖腰折挟み皿	大窯1	ZZ7	表土下層	灰釉	11.6	5.0	2.45	6	12
282	窯道具	縁袖腰折挟み皿	大窯1	ZZ7	表土下層(黒層)	灰釉	12.3	5.0	2.4	2	5
283	窯道具	縁袖腰折挟み皿	大窯1	ZZ7	表土下層(黒層)	灰釉	12.3	5.6	2.7	2	12
284	窯道具	縁袖腰折挟み皿	大窯1	ZZ7	表土	灰釉	12.5	5.95	2.2	4	12
285	窯道具	縁袖腰折挟み皿	大窯1	ZZ7	灰褐色	灰釉	11.8	5.0	2.3	11	12
286	窯道具	腰折挟み皿	大窯1	ZZ7	表土(崖)	無釉	10.8	4.4	1.9	4	12
287	窯道具	縁袖腰折挟み皿	大窯1	ZZ7	表土	鉄釉	10.8	4.4	2.2	5	6
288	窯道具	縁袖腰折挟み皿	大窯1	ZZ7	表土下層(黒灰)	灰釉	11.55	5.4	2.2	2	12
289	窯道具	縁袖腰折皿+端反皿	大窯1	ZZ7	表土下層(黒灰)	灰釉	-	-	-	-	-
290	窯道具	縁袖腰折挟み皿	大窯1	ZZ7	106	灰釉	9.6	2.7	2.5	3	6
291	窯道具	挟み皿		ZZ7	物原灰層	無釉	11.7	5.2	2.2	12	12
292	窯道具	縁袖挟み皿	大窯1	ZZ7	表土	鉄釉	11.0	5.2	2.4	3	12
293	窯道具	縁袖挟み皿	完形	ZZ7	表土	灰釉	11.1	5.75	1.9	11	12
294	窯道具	挟み皿		ZZ7	灰褐色	無釉	11.7	4.45	2.5	9	12
295	窯道具	端反皿+縁袖挟み皿	大窯1	ZZ7	表土	灰釉	12.0	5.2	-	1	6
296	窯道具	挟み皿+輪トチ+灰釉皿		ZZ7	表土下層(黒褐色ガケ)	挟み皿内面に窯印(スリ目)	-	-	3.05	-	-
297	窯道具	挟み皿		ZZ7	表土	窯印	12.0	5.3	2.3	1.7	12
298	窯道具	挟み皿		ZZ7(南壁)	101	内面に窯印(スリ目)	11.5	5.3	2.45	9	12
299	窯道具	挟み皿		ZZ7	表土下層(黒灰)	内面に窯印(スリ目)	11.4	5.15	2.8	11	12
300	窯道具	腰折挟み皿	大窯1	ZZ7	赤褐色	灰釉, 打ち欠き	-	4.55	(1.05)	-	12
301	窯道具	匣鉢		ZZ7	表土	内面に菊印花	19.0	18.0	10.2	2	5
302	窯道具	匣鉢		ZZ7	物原	内面に菊印花	-	5.45	(1.4)	-	6
303	窯道具	匣鉢		ZZ7	表土	底面隅に穿孔	11.0	5.75	3.95	3	12
304	窯道具	匣鉢+端反皿	大窯1	ZZ7	赤褐色	灰釉	-	-	-	-	-
305	窯道具	匣鉢		ZZ7	表土	底面に円形孔	16.8	15.0	5.4	2	2
306	窯道具	灰釉端反皿+鉄釉皿+匣鉢	大窯	ZZ7	表土		-	14.0	(2.6)	-	-
307	窯道具	匣鉢・灰釉皿		ZZ7	灰褐色		11.3	7.6	3.9	12	12
308	窯道具	灰釉端反皿+天目茶碗	大窯1	ZZ7	表土		11.1	5.5	2.55	4	12
309	窯道具	匣鉢	大窯窯道具	9964F	南壁(ガケ面下)	底面に円形孔	15.2	12.0	7.0	11	12
310	窯道具	匣鉢+横ビン2		ZZ7	赤褐色		15.6	11.2	9.5	6	6
311	窯道具	匣鉢+横ビン2		ZZ7	赤褐色		15.1	12.0	9.7	4	7
312	窯道具	匣鉢+横ビン2+輪トチ		ZZ7	表土		16.0	13.8	10.5	5	6
313	窯道具	匣鉢+横ビン2		ZZ7	表土下層	内面に長脚ビン跡	16.25	12.4	9.3	7	12
314	窯道具	匣鉢		ZZ7	表土~灰褐色	横ビン2つ	15.4	12.0	10.5	4	9
315	窯道具	匣鉢		ZZ7	褐色	平底中型, 底面隅対角線上に穿孔	-	11.3	(4.7)	-	-
316	窯道具	匣鉢		D8	表採	外面底部に刻印	-	13.1	(7.3)	-	6
317	窯道具	匣鉢		ZZ7	表土(まざり)	内面に窯印(ヘラ)	11.2	8.4	4.2	4	3
318	窯道具	匣鉢		ZZ7	表土	内面に窯印	-	14.0	(3.3)	-	6
319	窯道具	匣鉢		ZZ7	表土下層	内面に線刻	11.25	6.2	4.05	4	12
320	窯道具	匣鉢底部?		補助2トレ	褐色	内面底線刻	-	7.0	0.9	-	5
321	窯道具	匣鉢		ZZ7	表土	内面底線刻	-	17.6	(4.6)	-	4
322	窯道具	匣鉢		ZZ7	赤褐色	内面に窯印(クシ目)	-	15.6	(3.6)	-	7
323	窯道具	匣鉢		ZZ7	赤褐色	内面に窯印	18.85	14.15	9.2	3	3
324	窯道具	匣鉢		ZZ7	表土	内面に窯印	-	14.8	(6.5)	-	5
325	窯道具	匣鉢		ZZ7	表土	内面に窯印	-	16.6	(5.4)	2	2
326	窯道具	匣鉢		-	工事立会	内面に窯印	-	16.0	(2.7)	-	2
327	窯道具	匣鉢		ZZ7	灰褐色	内面に窯印	22.6	17.8	9.45	3	6
328	窯道具	匣鉢		ZZ7	表土(混ざり)	内面に窯印	-	14.85	2.5	-	9
329	窯道具	匣鉢		ZZ7	表土~灰褐色	内面に窯印	13.85	13.05	9.15	2	12
330	窯道具	匣鉢		ZZ7	表土(混ざり)	内面に窯印(クシ目)	-	15.0	3.95	-	6
331	窯道具	匣鉢		ZZ7	表土	内面に窯印	20.2	14.4	10.05	3	3
332	窯道具	匣鉢		ZZ7	表土	内面に窯印(ヘラ)	18.4	13.4	8.4	2	6

掲載遺物一覧表 6

登録番号	種別	器種	時期・所見など	グリッド・出土地点	遺構・層位	釉薬、その他	口径cm	底径cm	器高cm	残存率 / 12	
										口縁部	底部
333	窯道具	匣鉢		ZZ7	表土下層 (黒灰)	内面に薬印	18.2	14.4	9.4	1	2
334	窯道具	匣鉢		ZZ7	表土～灰褐色	内面に薬印	-	14.7	(3.1)	-	12
335	窯道具	匣鉢		9964F	南壁 (ガケ面下)	内面に薬印 (ヘラ)	20.6	14.4	9.7	2	6
336	窯道具	匣鉢		ZZ7	表土 (ガケ)	内面に薬印 (ヘラ)	19.9	14.8	8.6	2	4
337	窯道具	匣鉢		ZZ7	表土	匣蓋に転用	-	12.1	2.05	-	12
338	窯道具	匣鉢		ZZ7	表土下層 (黒灰)	匣蓋に転用	13.9	12.2	(2.8)	6	6
339	窯道具	匣鉢蓋		ZZ7	赤褐色	周縁打ち欠き	13.0	7.0	2.3	11	12
340	窯道具	エブタ大+エブタ小		ZZ7	物原	厚く鉄軸かかる	縦20.9	横21.0	厚4.15	11	11
341	窯道具	長脚ピン		ZZ6	表土～灰褐色		長5.5	幅3.25	厚1.8	11	11
342	窯道具	長脚ピン		ZZ6	表土～灰褐色		長4.6	幅2.5	厚1.55	12	12
343	窯道具	長脚ピン		ZZ6	表土～灰褐色		長4.85	幅3.2	厚1.9	12	12
344	窯道具	長脚ピン		ZZ6	表土～灰褐色		長4.6	幅2.6	厚1.7	12	12
345	窯道具	トチ		ZZ6	表土～灰褐色		長5.5	幅5.2	2.85	12	12
346	窯道具	トチ		ZZ6	表土～灰褐色		長5.5	幅5.7	厚1.85	12	12
347	窯道具	輪トチ		ZZ7	表土		縦3.8	横3.7	1.95	12	12
348	窯道具	輪トチ		ZZ6	NO.13基ソ (表土)		縦3.5	横3.6	1.5	12	12
349	窯道具	輪トチ		ZZ7	表土, 褐色	二重に溶着	縦3.8	横3.9	1.4	12	12
350	窯道具	輪トチ		ZZ7	表土		縦3.1	横3.45	0.45	12	12
351	窯道具	輪トチ		ZZ6	表土～灰褐色		長3.9	幅4.1	0.9	12	12
352	窯道具	輪トチ		ZZ6	表土～灰褐色		長3.5	幅3.55	0.85	12	12
353	窯道具	焼台		ZZ6	表土		長9.1	幅8.9	4.9	12	12
354	窯道具	焼台		ZZ6	表土～灰褐色	転用か	長10.0	幅10.8	9.3	12	12
355	窯道具	小分炎柱		B7	中層		-	匣13.2 分10.9	匣2.9 全21.1	-	匣5
356	窯道具	小分炎柱		ZZ7	灰層		長11.4	幅10.9	(13.75)	10	10
357	窯道具	小分炎柱		B7	赤褐色		長10.4	幅11.5	15.5	9	9
358	窯道具	小分炎柱		ZT7	表土		長9.9	幅9.8	16.7	11	11
359	窯道具	小分炎柱		ZZ7	灰層		長11.4	幅11.45	(15.3)	11	11
360	窯道具	ハリ		ZZ7	立会		長12.0～12.8	幅6.1～9.7	-	12	12
361	陶器	天目茶碗	大窯 1	ZU6	灰層, 物原	腰鉋	12.1	-	(6.1)	2	8
362	陶器	天目茶碗	大窯 1	ZV6	灰層, 物原	腰鉋	12.0	-	6.0	5	-
363	陶器	天目茶碗 (灰釉)	大窯 1	ZT7	表土		11.9	-	(3.4)	1	-
364	陶器	天目茶碗	大窯 1 / (大窯 1 後)	ZU6	褐色	腰鉋, 輪高台	-	4.0	(3.0)	-	12
365	陶器	天目茶碗	大窯 1	ZV6	褐色	高台露胎	-	5	-	-	5
366	陶器	天目茶碗	大窯 3	ZU5	褐色	腰鉋 (薄い)	10.6	-	-	3	-
367	陶器	天目茶碗	大窯 3	ZU6	物原	腰鉋 (薄い)	11.8	-	(4.5)	3	-
368	陶器	天目茶碗	大窯 2	ZU5	褐色	腰鉋	11.6	4.1	6.5	9	12
369	陶器	天目茶碗	大窯 2	ZT7	褐色	腰鉋	11.5	4.15	6.0	3	12
370	陶器	天目茶碗	大窯 2	ZT7	褐色	腰鉋	11.2	3.3	6.05	6	6
371	陶器	天目茶碗	大窯 2	ZU6	物原	腰鉋	11.6	-	(5.9)	4	-
372	陶器	天目茶碗	大窯 2	ZT7	褐色	腰鉋	12.2	5.2	5.35	3	1
373	陶器	天目茶碗	大窯 2	ZT6	表土	腰鉋	10.9	3.95	5.95	5	12
374	陶器	天目茶碗	大窯 3	ZU6	物原	腰鉋	11.4	-	(5.3)	4	-
375	陶器	天目茶碗	大窯 2	ZU6	立会	腰鉋	11.9	-	(5.4)	4	-
376	陶器	天目茶碗	大窯 2	ZT7	褐色 (ベラス色)	腰鉋	11.1	3.8	5.35	0.5	12
377	陶器	天目茶碗	大窯 2	ZU6	立会	腰鉋	11.2	-	(5.0)	2	-
378	陶器	天目茶碗	大窯 2	ZU6	立会	腰鉋	11.2	-	-	4	-
379	陶器	天目茶碗	大窯 2	ZV5	褐色	腰鉋	10.6	3.9	5.6	4	12
380	陶器	天目茶碗	大窯 2 か 3	ZU5	褐色		10.2	-	(3.4)	1	-
381	陶器	天目茶碗	大窯 2	ZT7	褐色	腰鉋	11.8	-	(5.1)	6	-
382	陶器	天目茶碗	大窯 2	ZU5	褐色	腰鉋	-	3.3	(3.5)	-	12
383	陶器	天目茶碗	大窯 3	ZT6	褐色	腰鉋	-	5.2	(3.6)	-	12
384	陶器	天目茶碗	大窯 3	ZU6	立会	腰鉋	-	4.2	-	-	-
385	陶器	天目茶碗 (緑釉)	-	ZT7	褐色		-	-	(2.45)	-	-
386	陶器	天目茶碗 (緑釉)	大窯 2	ZU6	表土	腰鉋	11.8	3.8	5.6	4	12
387	陶器	天目茶碗 (緑釉)	大窯 2	ZT7	褐色	腰鉋	11.2	3.8	6.2	1	12
388	陶器	天目茶碗	大窯 3	ZT6	褐色	腰鉋	13.0	3.2	6.7	4	12
389	陶器	天目茶碗	大窯 3	ZU5	褐色	腰鉋 (薄い)	11.5	3.8	5.6	4	12
390	陶器	天目茶碗	大窯 3	ZU6	立会	腰鉋 (薄い)					
390	陶器	天目茶碗	大窯 3	ZT6	褐色	腰鉋 (薄い)	11.2	3.8	5.55	9	12
391	陶器	天目茶碗	大窯 3	ZT6	褐色	高台露胎	11.8	-	(5.7)	4	-
392	陶器	天目茶碗	大窯 3	ZU5	褐色	高台露胎	11.5	-	(6.8)	1.5	-
393	陶器	天目茶碗	大窯 3	ZU6	褐色	高台露胎	12.6	-	(4.8)	2	-
394	陶器	天目茶碗	大窯 3	ZT7	褐色	底部露胎, 線刻	-	3.8	(1.6)	-	12
395	陶器	天目茶碗		ZT7	褐色	底部露胎, 線刻	-	3.8	(1.1)	-	12
396	陶器	天目茶碗		ZT7	褐色	底部露胎, 線刻	-	4.2	(1.9)	-	12
397	陶器	天目茶碗		ZT6	褐色	底部露胎, 線刻	-	4.3	(1.0)	-	12
398	陶器	丸碗	大窯 1	ZT7	褐色	灰釉, 剣先文	11.4	5.2	6.9	4	11
399	陶器	丸碗	大窯 1	ZU6	表土	灰釉, 剣先文	12.0	-	(4.4)	4	-
400	陶器	丸碗	大窯 1	ZU5	褐色	灰釉	12.2	5.2	6.0	0.25	12
401	陶器	丸碗	大窯 1	ZT7	表土	灰釉	-	5.3	(2.5)	-	8

掲載遺物一覧表 7

登録番号	種別	器種	時期・所見など	グリッド・出土地点	遺構・層位	釉薬、その他	口径cm	底径cm	器高cm	残存率 /12	
										口縁部	底部
402	陶器	丸碗	大窯 2	ZU5	褐色	黄瀬戸軸か	12.6	4.8	7.0	2	5
403	陶器	丸碗	-	ZT7	褐色	鉄軸	-	4.1	(2.7)	-	12
404	陶器	小杯	-	ZV6	褐色	鉄軸	-	-	(2.5)	-	-
405	陶器	平碗	大窯 3	ZT7	赤褐色	鉄軸, 腰緒	15.0	-	(3.7)	1	-
406	陶器	平碗	-	ZV6	褐色	鉄軸	17.1	-	(2.45)	2	-
407	陶器	焼締平碗	大窯 3	ZV5	褐色	無釉, 須恵質	15.8	-	(3.3)	1	-
408	陶器	端反皿	-	ZU6	褐色	無釉, 須恵質	(11.8)	-	(1.7)	1	-
409	陶器	皿	大窯 1 か 2	ZU6	物原灰層	鉄軸	(9.6)	-	(1.6)	1	-
410	陶器	稜花皿	大窯 1	ZU7	表土	灰軸, 菊印花	10.7	5.7	2.45	1	12
411	陶器	端反皿	大窯 1 / (大窯 2)	ZU6	褐色	灰軸	11.0	5.4	2.3	1	5
412	陶器	端反皿	大窯 1	ZU6	褐色	灰軸, 菊印花	11.0	6.4	2.6	6	12
413	陶器	端反皿	大窯 1 後半 / (大窯 2)	ZT7	褐色	灰軸	10.65	6.5	2.4	12	12
414	陶器	端反皿	大窯 1	ZU6	褐色	灰軸, 菊印花	9.2	4.8	2.5	4	12
415	陶器	端反皿	大窯 1	ZT6	褐色	無釉か, 菊印花	9.2	4.7	2.5	6	12
416	陶器	端反皿	大窯 1 / 完形	ZT6	褐色	無釉か, 印花	9.2	5.2	2.5	12	12
417	陶器	端反皿	大窯 1 / 完形	ZT6	褐色	灰軸, 印花	9.3	5.5	2.5	12	12
418	陶器	端反皿	大窯 1	ZU5	褐色	無釉か, 印花	8.6	4.9	2.2	11	12
419	陶器	端反皿	大窯 2	ZU6	立会	無釉か, 印花	9.2	5.05	2.4	12	12
420	陶器	端反皿	大窯 1	ZU6	物原	無釉か, 印花	8.2	4.45	2.3	7	12
421	陶器	端反皿	大窯 2 / (大1後、仮-182と印花同タイプ)	ZT6	褐色	無釉か, 印花	9.6	5.4	2.4	10	12
422	陶器	皿	大窯 1 か 2	ZU6	褐色	灰軸, 印花	-	6.6	(1.4)	-	2
423	陶器	皿	大窯 1 か 2	ZU5	褐色	無釉か, 印花	-	4.2	(1.3)	-	6
424	陶器	皿	大窯 1 か 2	ZU5	褐色	灰軸, 印花	-	4.0	(0.8)	-	2
425	陶器	丸皿 (ソギ)	大窯 2	ZT6	褐色	灰軸, 菊印花	10.9	6.5	2.8	9	11
426	陶器	丸皿 (ソギ)	大窯 2	ZT7	赤褐色 (ベース直)	灰軸, 菊印花	11.0	6.25	3.2	5	12
427	陶器	丸皿 (ソギ)	大窯 2	ZU7	立会	印あり	-	5.65	(2.2)	-	10
428	陶器	丸皿 (ソギ)	大窯 2	ZT6	褐色	灰軸	10.6	6.2	2.7	3	3
429	陶器	丸皿 (ソギ)	大窯 2	ZT7	赤褐色	灰軸	10.5	6.0	2.8	0.4	3
430	陶器	丸皿 (ソギ)	大窯 2	ZT6	褐色	灰軸	10.2	6.0	2.8	2	1
431	陶器	丸皿 (ソギ)	大窯 2	ZU7	立会	灰軸	10.6	-	(2.1)	2	-
432	陶器	丸皿 (ソギ)	大窯 2	ZT6	褐色	灰軸, 菊印花	11.0	6.35	2.85	2	12
433	陶器	皿	大窯 1 か 2	ZT7	赤褐色, 表土	灰軸, 刻目文様	12.8	-	(1.6)	2	-
434	陶器	豆皿	大窯 1	ZU5	褐色	灰軸, 碁笥底, 印花	6.0	3.2	1.3	3	9
435	陶器	焼締灯明皿	大窯 1	ZT7	赤褐色		9.25	3.35	2.35	11	12
436	陶器	焼締灯明皿	大窯 2	ZU5	褐色		9.65	4.7	2.3	9	12
437	陶器	焼締灯明皿	大窯 2	ZT7	褐色		10.1	4.9	2.25	4	4
438	陶器	焼締灯明皿	大窯 2	ZT7	褐色		9.8	3.8	2.3	3	3
439	陶器	焼締灯明皿	大窯 2	ZT6	褐色	底部穿孔	-	-	-	-	12
440	陶器	焼締灯明皿	大窯 3	ZV5	褐色		9.4	4.25	2.5	12	12
441	陶器	端反皿	大窯 1	ZT7北壁	褐色 時	灰軸+鉄軸か	(14.5)	6.6	2.5	1	-
442	陶器	丸皿	大窯 1	ZU5	褐色	灰軸, 印花	8.45	4.2	2.45	3	11
443	陶器	丸皿	大窯 2 / (大窯 2 後)	ZT6	褐色	灰軸	10.3	6.2	2.6	4	12
444	陶器	丸皿	大窯 2	ZT6	褐色	印花	10.1	5.8	2.4	6	10
445	陶器	丸皿	大窯 2	ZU5	褐色	印花	9.7	5.2	2.4	3	6
446	陶器	丸皿	大窯 2	ZV6	褐色	鉄軸	9.6	5.15	2.25	3	5
447	陶器	丸皿	大窯 2	ZU5	褐色	灰軸	10.1	6.0	2.5	12	12
448	陶器	丸皿	大窯 2	ZU6	褐色	鉄軸, 腰緒	11.0	5.6	2.2	4	4
449	陶器	丸皿 (緑釉)	大窯 2	ZT7	褐色		8.4	4.4	1.9	2	1
450	陶器	丸皿	大窯 2	ZU6	褐色	鉄軸, 碁笥底	10.8	6.3	2.55	5	4
451	陶器	丸皿	大窯 3	ZT6	褐色	灰軸緑釉, 菊印花	10.6	6.0	2.7	5	12
452	陶器	丸皿	大窯 2 か 3 / (大窯 2 後半)	ZT7	褐色	鉄軸二重掛け	10.5	6.0	2.8	4	6
453	陶器	丸皿	大窯 3	ZT6	褐色	灰軸緑釉	9.9	6.0	2.5	2	1
454	陶器	丸皿	大窯 3	ZT7	褐色	鉄軸二重掛け	11.3	5.95	2.55	4	6
455	陶器	丸皿	大窯 3 前半	ZT7	褐色	内壳, 鉄軸二重掛け	10.6	5.8	2.3	2	6
456	陶器	端反皿	大窯 2 か 3	ZU5	褐色	鉄軸二重掛け	11.0	5.7	2.4	4	5
457	陶器	丸皿	大窯 3 / 内壳皿なら	ZT7	表土	灰軸, 内壳, 線刻	10.3	5.9	2.35	1	5
458	陶器	丸皿	大窯 3 前半	ZT7	表土	鉄軸, 内壳, 高台内に線刻	11.0	5.75	2.6	3	9
459	陶器	稜皿	大窯 2	ZU6	褐色	灰軸, 菊印花	10.2	6.1	2.35	2	11
460	陶器	稜皿	大窯 2	ZT7	表土	鉄軸 (総軸), 碁笥底	10.2	5.6	2.8	3	5
461	陶器	稜皿	大窯 2	ZU5	褐色	鉄軸, 碁笥底	10.7	5.45	2.45	4	6
462	陶器	稜皿	大窯 2	ZU5	褐色	鉄軸, 碁笥底	9.75	5.75	2.2	12	12
463	陶器	稜皿	大窯 2 か 3	ZU6	褐色	鉄軸, 碁笥底	10.0	5.9	2.2	8	12
464	陶器	稜皿	大窯 2 / (大窯 2 後)	ZU6	褐色	鉄軸, 碁笥底	10.4	7.0	2.1	4	3
465	陶器	稜皿	大窯 2 か 3	-	表土	鉄軸, 平底	9.8	4.6	1.9	4	4
466	陶器	稜皿	- / (大窯 2)	ZT7	褐色	灰軸, 碁笥底	8.5	5.7	1.75	1	5
467	陶器	稜皿	大窯 2 か 3	ZV5	褐色	鉄軸, 碁笥底	10.0	4.95	2.5	8	12
468	陶器	稜皿	大窯 2 か 3 / 完形	ZU5	褐色	鉄軸, 碁笥底	9.8	5.4	2.7	12	12

掲載遺物一覧表 8

登録番号	種別	器種	時期・所見など	グリッド・出土地点	遺構・層位	釉薬、その他	口径cm	底径cm	器高cm	残存率 / 12	
										口縁部	底部
469	陶器	稜皿	大窯2か3	ZU6	褐色	鉄軸, 萆苺底	10.3	5.75	2.6	3	10
470	陶器	稜皿	-	ZT6	褐色	鉄軸, 萆苺底	10.0	5.6	2.6	6	10
471	陶器	稜皿	大窯2	ZT6	褐色	鉄軸, 萆苺底	10.75	6.1	2.55	7	12
472	陶器	稜皿	大窯3	ZU6	褐色	鉄軸, 萆苺底	10.0	4.95	2.8	7	12
473	陶器	内禿皿	大窯3	ZT7	赤褐色(灰)	無軸	10.2	4.8	3.0	11	12
474	陶器	内禿皿	-/大窯3か	ZT7	赤褐色	鉄軸二重掛け	10.7	5.6	2.2	2	3
475	陶器	折縁皿	大窯2	ZV6	褐色	灰軸	13.6	-	(1.25)	2	-
476	陶器	稜皿	大窯2	ZV6	灰層	無軸, 萆苺底	9.8	6.0	2.3	4	12
477	陶器	折縁皿(緑軸)	大窯3	ZT7	褐色		-	5.2	(2.7)	-	7
478	陶器	丸皿(緑軸)	-	ZT7	褐色		8.7	-	(1.7)	1	-
479	土器	土師器皿		ZT6	褐色	口クロ整形	-	5.6	(1.2)	-	6
480	陶器	焼締大皿	大窯3	ZV6	表土		25.4	-	-	1	-
481	陶器	焼締大皿	大窯3	ZT7	赤褐色		-	12.3	(2.5)	-	2
482	陶器	播鉢	IV新か大1	ZT7	赤褐色	錆軸	31.2	-	(3.3)	2	-
483	陶器	播鉢	大窯1	ZT6	褐色	錆軸	26.2	9.9	11.1	9	12
484	陶器	播鉢	大窯1	ZT6	褐色	錆軸	26.5	8.5	11.05	7	12
485	陶器	播鉢	大窯1	ZU5	褐色	片口部分, 錆	30.0	-	-	2	-
486	陶器	播鉢	大窯1	ZT7	表土	錆軸	27.6	-	(6.1)	2	-
487	陶器	播鉢	大窯1	ZT7	褐色	錆軸	29.2	-	(5.4)	3	-
488	陶器	播鉢	大窯2	ZT6	褐色	錆軸	36.0	-	(3.3)	1	-
489	陶器	播鉢	大窯2/(大窯1)	ZT7	赤褐色	錆軸	29.3	-	-	-	-
490	陶器	播鉢	大窯2/(大窯2前)	ZT7	表土	錆軸	28.7	-	(2.9)	1	-
491	陶器	播鉢	大窯2	ZT7	赤褐色	錆軸	28.0	-	(3.5)	1	-
492	陶器	播鉢	大窯2	ZT6	褐色	錆軸, 底部穿孔あり	28.45	10.0	12.3	6	12
493	陶器	播鉢	大窯3/口縁端部内折れ	ZT6	褐色	鉄軸, 錆軸	36.3	-	(10.5)	2	-
494	陶器	播鉢	大窯3	ZV6	表土	錆軸	30.8	11.2	13.65	1.25	7
495	陶器	播鉢	大窯3	ZT7	表土	鉄軸	26.0	-	-	1	-
496	陶器	播鉢	大窯3/(大窯3前)	ZT7	赤褐色	錆軸	28.4	-	(4.95)	2	-
497	陶器	播鉢	大窯3/(大窯2)	ZT7	赤褐色	錆軸	32.8	-	-	-	-
498	陶器	播鉢	大窯3	ZT7	表土	錆軸	31.0	-	-	1	-
499	陶器	播鉢	大窯3	ZU6	褐色	鉄軸	28.0	-	(6.6)	2	-
500	陶器	播鉢	大窯2/(大窯2後)	ZT7	褐色	錆軸	36.6	-	(3.7)	1	-
501	陶器	播鉢	大窯2/(大窯2後)	ZT7	褐色	錆軸	33.7	-	(3.05)	1	-
502	陶器	播鉢	大窯2/大窯2後	ZU6	褐色	錆軸	29.2	-	(1.85)	1	-
503	陶器	播鉢	大窯3	ZT7	赤褐色	錆軸	33.1	-	(4.4)	2	-
504	陶器	播鉢	大窯1	ZT7	褐色	錆軸	17.4	-	-	2	-
505	陶器	耳付水注	大窯2	ZU6	褐色	鉄軸	3.8	5.3	7.2	2	12
506	陶器	徳利(壺類)	-	ZT6	褐色	鉄軸	5.6	-	(3.0)	9	-
507	陶器	壺(耳付)	大窯2か3	ZT7	褐色	鉄軸	-	-	(14.35)	-	-
508	陶器	壺(耳付)	-	ZU7	褐色	鉄軸	-	-	(6.7)	-	-
509	陶器	小型壺か鉢	大窯	ZT7	表土	灰軸, 外面底部のみ無軸	-	5.0	(3.2)	-	3
510	陶器	徳利	-	ZT7北壁	褐色	外面錆軸, 鉄軸, 底面は回転ケズリ	-	9.9	(4.9)	-	3
511	陶器	徳利	-	ZT7北壁	褐色	外面に鉄軸, 胴部下底面は露胎, 底面は回転ケズリ	-	13.0	(7.4)	-	4
512	陶器	徳利	-	ZU6	褐色	底面回転ケズリ	-	13.95	(3.75)	-	12
513	陶器	口広有耳壺	大窯1	ZT7	褐色, 灰褐色	鉄軸	13.2	-	(7.5)	1	-
514	陶器	口広有耳壺	大窯1	ZT6	褐色	鉄軸	13.2	-	(8.7)	1.5	-
515	陶器	口広有耳壺か	-	ZU6	褐色	鉄軸	18.0	-	(4.6)	-	2
516	陶器	口広有耳壺か	-	ZU6	褐色	錆軸	15.2	-	(8.1)	2	-
517	陶器	水指か	-	ZT6	褐色	灰軸	11.0	-	-	2	-
518	陶器	筒形容器	-	ZT7北端	褐色	外面鉄軸, 灰軸, 内面に鉄軸	21.0	-	(16.1)	2	-
519	陶器	筒形容器	-	ZT7北壁	褐色	外面から内面口縁付近に鉄軸, 内面に錆軸	16.8	-	(3.7)	2	-
520	陶器	筒形容器	-	ZT7	褐色	外面から内面口縁付近に鉄軸, 内面に錆軸	16.1	-	(15.1)	3	-
521	陶器	筒形容器	-	ZV5	褐色	外面側面鉄軸, 胴部下と底面内面は錆軸, 底面糸切後未調整	-	13.2	(12.5)	-	12
522	陶器	筒形容器	-	ZU5	褐色	外面側面鉄軸, 胴部下と底面内面は錆軸, 底面回転ケズリ	-	13.2	(6.55)	-	2
523	陶器	筒形容器	-	ZU6, ZU7	立会, 褐色	外面側面鉄軸, 胴部下と底面内面は錆軸, 底面回転ケズリ	17.8	13.2	17.2	1	5
524	陶器	筒形容器	-	ZV5	褐色	外面側面鉄軸, 胴部下と底面内面は錆軸, 底面回転ケズリ	16.5	11.4	16.65	3	12
525	陶器	筒形容器	-	ZU5	褐色	外面側面鉄軸, 胴部下と底面内面は錆軸, 底面回転ケズリ	16.6	11.85	18.15	6	12
526	陶器	筒形容器	-	ZV5	褐色	外面側面鉄軸, 胴部下と底面内面は錆軸, 底面回転ケズリ底部, 穿孔あり	-	12.2	(7.3)	-	12
527	陶器	筒形容器	-	ZV5	褐色	外面鉄軸, 胴部下と底面と内面は露胎, 底面糸切後未調整	15.1	13.8	17.7	4	12

掲載遺物一覧表 9

登録番号	種別	器種	時期・所見など	グリッド・出土地点	遺構・層位	釉薬、その他	口径cm	底径cm	器高cm	残存率 /12	
										口縁部	底部
528	陶器	筒形容器	-	ZU6	物原	外面胴部と内面口縁付近に鉄軸, 内面に錆軸	16.3	-	(10.15)	2	-
529	陶器	筒形容器	-	ZU6	物原	外面と内面に鉄軸, 胴部下と底面と内面は露胎, 底面糸切後未調整	-	11.7	(6.0)	-	6
530	陶器	筒形容器	-	ZV6	褐色	外面と内面口縁付近に鉄軸, 内面に錆軸	15.5	-	(8.95)	3	-
531	陶器	筒形容器	-	ZU6	褐色	外面と内面口縁付近に鉄軸, 内面に錆軸	14.8	-	(7.85)	1.5	-
532	陶器	筒形容器	-	ZT6	褐色	外面側面と内面に鉄軸, 底面糸切後未調整	15.2	13.4	9.9	4	3
533	陶器	水指	-	ZV6	褐色	外面側面と内面口縁付近に鉄軸	13.9	-	(4.7)	1.5	-
534	陶器	筒形容器	-	ZV5	褐色	口縁端部を除き鉄軸, 底面糸切後未調整	13.5	11.0	8.1	3	12
535	陶器	筒形容器	-	ZV5	褐色	外面胴部上半と内面口縁付近に鉄軸	13.3	10.7	8.2	12	12
536	陶器	筒形容器	-	ZU5	褐色	外面胴部と内面に鉄軸, 底面糸切後未調整	13.2	11.1	8.0	4	4
537	陶器	筒形容器	-	ZV5	褐色	内面下半分と外面底部を除き鉄軸, 底面糸切後未調整	12.4	9.8	8.0	5	12
538	陶器	筒形容器(水指)	-	ZU5	褐色	外面胴部と内面口縁付近に鉄軸, 底面糸切後未調整	11.75	9.55	8.45	12	12
539	陶器	筒形容器	-	ZT6	褐色	外面胴部と内面口縁付近に鉄軸, 底面糸切後未調整	11.3	9.7	8.7	12	12
540	陶器	筒形容器	-	ZV5	褐色	外面胴部と内面口縁付近に鉄軸, 底面糸切後未調整	11.9	10.5	8.2	12	12
541	陶器	筒形容器	-	ZU7	立会	外面側面と内面に鉄軸, 底面糸切後未調整	11.9	10.0	8.3	3	9
542	陶器	筒形容器	-	ZU5	褐色	外面側面と内面に鉄軸, 底面糸切後未調整	12.0	10.0	9.1	9	12
543	陶器	筒形容器	-	ZT7北壁	褐色	外面側面と内面に鉄軸	11.6	-	(4.2)	2	-
544	陶器	筒形容器	-	ZT7	褐色	外面側面と内面に鉄軸, 底面糸切後未調整	11.6	10.0	8.15	3	12
545	陶器	筒形容器	-	ZU6	褐色	外面側面と内面に鉄軸, 底面糸切後未調整	11.4	8.0	8.4	3	3
546	陶器	筒形容器	-	ZU7	立会	外面鉄軸, 内面口縁付近に鉄軸	10.8	-	(6.9)	2	-
547	陶器	筒形容器	-	ZU6	褐色	外面側面と内面に鉄軸, 口縁端部は拭き取り, 底面糸切後未調整	10.8	8.9	7.4	5	6
548	陶器	片口	-	ZT7	褐色	鉄軸	14.7	-	(4.1)	5	-
549	陶器	片口	大窯2か3	ZU7	表土	鉄軸	13.2	10.9	8.15	2	4
550	陶器	片口	-	ZU6	褐色	鉄軸	16.0	-	(6.3)	1.5	-
551	陶器	片口	-	ZU6	褐色	鉄軸	11.9	-	(7.35)	2	-
552	陶器	内耳鍋	大窯1	ZT6	褐色	錆軸, スス付着	19.0	-	(7.8)	3	-
553	陶器	内耳鍋	-	ZT7	褐色, 表土	錆軸	16.9	-	(9.2)	4	-
554	陶器	釜	-	ZT6	褐色	錆軸, スス付	-	-	(9.5)	-	-
555	陶器	鍋(耳)	-	ZT7	褐色	鉄軸	-	-	(4.2)	-	-
556	陶器	香炉	大窯1?	ZT6	褐色	灰軸	10.0	6.2	6.7	3	1
557	陶器	香炉	-	ZT6	褐色	灰軸	9.0	6.0	(6.6)	1	-
557	陶器	香炉	-	ZT6	褐色	灰軸	-	-	-	-	-
558	陶器	香炉	大窯2か3	ZT7	褐色	灰軸	-	5.0	(1.6)	-	12
559	陶器	茶入	古瀬戸後IV新	ZU5	褐色	内外面に鉄軸・灰軸	3.0	4.4	6.75	12	8
560	陶器	茶入	-	ZT7	褐色	外面鉄軸二重掛け, 内面鉄軸, 插座茶入	4.3	-	(1.8)	4	-
561	陶器	茶入	-	ZU6	表土	外面鉄軸, 内面錆軸?, 肩衝	3.0	-	(2.8)	2	-
562	陶器	茶入	大窯2か3	ZV6	褐色	外面鉄軸, 内面露胎	-	-	(1.9)	-	-
563	陶器	茶入	大窯2か3	ZU6	褐色	外面鉄軸・灰軸, 内面露胎	-	3.8	(3.3)	-	3
564	陶器	茶入	-	ZT7	褐色	外面鉄軸, 外面下方底面と内面は露胎	-	6.0	(2.0)	-	1
565	陶器	小杯	大窯2か3	勘助2トレ	表土	鉄軸・灰軸	-	1.8	12.1	-	12
566	陶器	狛犬	-	ZU6	赤褐色	錆軸	高9.5	幅(5.1)	厚(5.0)	-	-
567	陶器	狛犬	-	ZU6	表土	錆軸	高8.7	幅(5.5)	厚(4.8)	-	-
568	陶器	桶	-	ZT6, ZT7, ZU6	褐色, 表土, 赤褐色	鉄軸	36.6	36.0	11.6	6	5
569	陶器	桶	-	ZU5, ZU6, ZT7	褐色	錆軸	32.6	32.2	11.05	1	3
570	陶器	桶	-	ZT7	褐色	錆軸	34.1	-	(7.85)	1	-
571	陶器	桶	-	ZU6, ZT7	褐色	錆軸	(19.1)	-	(5.2)	1	-
572	陶器	甕	-	ZT7	褐色	錆軸	22.8	-	(5.75)	1	-
573	陶器	皿	17世紀か	ZT7	褐色	近世, 御深井軸?	11.8	5.55	2.6	3	5
574	陶器	蓋	時期近世?	ZT7	表土	黄軸	15.0	-	4.0	5	-
575	陶器	丸皿(ソギ)・挟み皿	大窯2	ZU6	立会	溶着資料	-	-	-	-	-
576	窯道具	丸皿・天目茶碗	大窯2	ZU6	物原	鉄軸, 鉄軸	12.8	5.0	(3.3)	4	12
577	窯道具	稜花皿・挟み皿	大窯1	ZU7	表土	灰軸	-	-	-	-	-
578	窯道具	挟み皿	-	ZT6	褐色	上面に灰軸皿一部付着	11.3	5.7	2.7	11	12
579	窯道具	平碗・匣鉢	大窯1	ZU5	褐色	灰軸剣先文平碗	-	-	-	-	きや3碗2
580	窯道具	挟み皿	-	ZU5	褐色		11.55	5.15	2.45	12	12
581	窯道具	挟み皿	-	ZU5	褐色		11.7	7.1	2.1	12	12

掲載遺物一覧表 10

登録番号	種別	器種	時期・所見など	グリッド・出土地点	遺構・層位	釉薬、その他	口径cm	底径cm	器高cm	残存率 /12	
										口縁部	底部
582	窯道具	挟み皿	大窯2か3	ZU6	物原		9.05	4.45	2.1	12	12
583	窯道具	匣鉢・灰軸皿3		ZU7	立会		匣14.7	皿5.8	13.4	匣6 皿12	匣12 皿11
584	窯道具	匣鉢とトチ		ZU5	褐色		-	15.0	(5.2)	-	7
585	窯道具	匣鉢蓋		ZU6	褐色	窯印	16.7	-	2.2	1.5	7
586	窯道具	匣鉢蓋		ZV6	灰層	大型	18.75	6.9	3.7	3	12
587	窯道具	匣鉢蓋		ZU6	物原	裏面に皿口縁部付着	14.25	6.6	2.2	4	12
588	窯道具	匣鉢		ZT6	褐色	内面に菊印花	11.8	6.4	3.8	3	12
589	窯道具	匣鉢		ZT6	褐色	内面に菊印花	11.5	6.2	3.85	2	6
590	窯道具	匣鉢		ZU5	褐色	内面に菊印花	11.0	6.25	4.05	1	12
591	窯道具	匣鉢		ZT6	褐色	内面に菊印花	11.3	5.8	4.1	2	12
592	窯道具	匣鉢		ZT6	褐色	内面に菊印花	-	6.7	(1.75)	-	12
593	窯道具	匣鉢		ZT6	褐色	内面に菊印花	-	-	-	皿1 匣-	皿- 匣10
594	窯道具	匣鉢		ZT6	褐色	内面に菊印花	-	7.4	(2.2)	-	5
595	窯道具	匣鉢		ZT6	褐色	内面に菊印花	-	6.5	(3.4)	-	12
596	窯道具	匣鉢		ZT7	褐色	内面に窯印(スリ目)	-	5.7	(1.7)	-	4
597	窯道具	匣鉢		ZT6	褐色	内面に窯印(スリ目)	10.3	6.7	4.1	6	12
598	窯道具	匣鉢		ZU6	物原		9.85	6.4	3.9	12	12
599	窯道具	匣鉢		ZU6	褐色	蓋に利用	11.3	6.8	4.0	9	12
600	窯道具	匣鉢		ZU5	褐色	側面下方に焼成前穿孔	11.6	6.2	4.3	9	12
601	窯道具	匣鉢		ZU6	立会	内面に窯印(スリ目)	11.65	7.0	4.2	7	12
602	窯道具	匣鉢		ZT6	褐色	底部焼成前穿孔,内面に窯印	12.15	6.7	5.15	12	12
603	窯道具	匣鉢		ZU5	褐色(山上)		11.6	9.85	8.1	4	12
604	窯道具	匣鉢		ZU5	褐色(山上)		11.8	9.95	7.95	12	12
605	窯道具	匣鉢		ZU5	褐色	輪ドチと灰軸皿付着	14.0	11.5	4.85	9.5	12
606	窯道具	匣鉢		ZU5	褐色	内面に鉄軸付着	14.7	12.7	5.75	11	12
607	窯道具	匣鉢		ZV6	立会	内面に灰軸と長脚ピン跡	13.8	13.0	9.6	1	6
608	窯道具	匣鉢		ZT7	赤褐色(灰褐色)		15.0	13.6	10.45	11	12
609	窯道具	匣鉢		ZW4	補助2号西 灰褐色		15.4	14.1	10.9	12	12
610	窯道具	匣鉢		ZU7	立会	内面に長脚ピン跡	17.4	13.2	10.65	4	4
611	窯道具	匣鉢		ZV6	褐色	内面に横ピン付着	16.6	14.1	9.8	4	3
612	窯道具	匣鉢		ZT7	褐色	側面口縁下に穿孔,内面に鉄軸付着	16.9	-	(9.15)	2	-
613	窯道具	匣鉢		ZU5	褐色	胴部下方に穿孔	21.3	15.8	9.15	1	3
614	窯道具	匣鉢		ZT7	表土		18.6	16.4	9.0	3	7
615	窯道具	匣鉢		ZT7北壁	褐色	内面に窯印	18.9	16.4	7.4	2.5	3
616	窯道具	匣鉢		ZV6	立会	胴部下方に穿孔,内面に窯印	18.8	13.6	6.75	4	4
617	窯道具	匣鉢		ZU5	褐色	内面に窯印(ヘラ)	-	16.0	(5.25)	-	6
618	窯道具	匣鉢		ZU5	褐色	胴部下方に穿孔,内面に窯印	17.0	12.2	8.9	2	12
619	窯道具	匣鉢		ZT7	表土	内面底部に窯印	-	13.0	(1.6)	-	4
620	窯道具	匣鉢		ZT6	褐色	内面に窯印(ヘラ)	-	16.4	(1.8)	-	4
621	窯道具	匣鉢		ZU7	立会	内面に窯印(スリ目)	-	18.4	(4.4)	-	3
622	窯道具	匣鉢		ZU6	立会	内面に鉄軸付着,窯印(ヘラ)	16.0	12.0	10.2	4	4
623	窯道具	焼台		ZT7	表土		長9.0	幅8.8	4.3	12	12
624	窯道具	焼台		ZT7	表土		長10.2	幅10.2	6.2	12	12
625	窯道具	トチ		ZV6	立会,褐色		縦5.35	横5.85	1.55	12	12
626	窯道具	ハリ		ZT6	褐色		長6.3	幅2.5	最大径4.2	12	12
627	窯道具	輪トチ		ZU7	立会		縦4.7	横5.2	1.6	12	12
628	窯道具	輪トチ		ZU6	褐色	二重に溶着	縦5.95	横5.6	2.55	12	12
629	窯道具	輪トチ		ZU6	物原		縦2.65	横2.7	0.55	12	12
630	窯道具	輪トチ		ZV6	灰層		縦4.0	横4.3	0.95	12	12
631	窯道具	輪トチ		ZV6	物原		縦3.9	横3.8	1.2	12	12
632	窯道具	長脚ピン		ZV6	立会,褐色		5.0	3.6	2.7	12	12
633	窯道具	長脚ピン		ZU7	立会		長4.7	幅3.35	厚2.65	12	12
634	窯道具	長脚ピン		ZU7	立会		長6.3	幅2.9	厚1.55	12	12
635	窯道具	長脚ピン		ZV6	立会		6.3	3.55	2.0	12	12
636	磁器	平碗(深)	近代	B7北壁	表土	(写真掲載)	9.9	3.4	5.7	5	10
637	磁器	平碗(深)	近代	B7北壁	表土	(写真掲載)	11.2	3.4	5.9	11	12
638	磁器	平碗(浅)	近代	9864V	トチ層	(写真掲載)	10.7	4.4	5.25	11	12
639	磁器	平碗(深)	近代	9864V	トチ層	(写真掲載)	10.2	4.6	5.4	5	8
640	磁器	平碗(浅)	近代	9864V	トチ層	(写真掲載)	11.2	3.8	5.6	6	12
641	磁器	平碗(深)	近代	9864V	トチ層	(写真掲載)	10.4	3.8	5.45	8	12
642	磁器	平碗(京)	近代	9864V	トチ層	(写真掲載)	11.2	3.9	6.0	5	12
石製品											
S-1	石	干し台支脚					(103.5)	(16.0)	(10.5)		
S-2	石	砥石		C7	表土		長13.2	幅3.8	2.65	12	12
S-3	石	砥石		ZT7	物原		長7.2	幅5.2	2.5	12	12
S-4	石	台石?		C7	東ベルト		長(26.5)	幅(25.8)	(2.0)	-	-



北山・勘介窯跡航空写真（北山窯跡・勘介窯跡周辺風景 昭和32年撮影）



北山窯跡・勘介窯跡より北東方向 上品野地区をのぞむ（平成 29 年）



北山窯跡・勘介窯跡全景（平成 29 年）



北山窯跡・勘介窯跡 調査前風景 (平成 27 年)



北山窯跡 調査前風景 (平成 29 年)



遺跡付近遠景 土岐市方面を望む（北方向）



遺跡付近遠景（北西方向）



遺跡付近遠景 瀬戸市街方面を望む（南方向）



遺跡付近遠景（西方向）



調査前風景（西から 平成 27 年）



遺跡付近全景（北から 平成 29 年）



調査前現況（南東から 平成 27 年）



北山窯跡調査準備状況（北西から 平成 29 年）



北山窯跡完掘状況（南東から）



窯体完掘状況（南から）



窯体完掘状況（南から）



窯体コクド完掘状況（東から）



窯体西半完掘状況（南から）



窯体東半完掘状況（南から）



窯体完掘状況（北から）



窯体東半完掘状況（北東から）



窯体煙道煙突検出状況（西から）



窯体東半完掘状況（南から）



煙突・西煙道完掘状況（北から）



煙突完掘状況（南から）



煙突裏込め石材検出状況（西から）



煙突完掘状況（北から）



西煙道東壁完掘状況（西から）



煙突完掘状況（西から）



西煙道西壁完掘状況（東から）



煙突完掘状況（東から）



東煙道完掘状況（西から）



横軸（窯体東脇）断割り土層断面（南から）



東煙道土管検出状況（東から）



B7・C7 北壁土層断面（南から）



東煙道暗渠天井部検出状況（北から）



A7・ZZ7 南壁土層断面（北から）



窯体中軸断割り土層断面（西から）



山ノ神現況（南から）



調査区東半完掘状況（東から 平成 27 年）



通路状遺構完掘状況（東から）



調査範囲全景（東から 平成 29 年）



平坦面完掘状況（南西から）



調査区東半完掘状況（東から）



平坦面上石列検出状況（北西から）



南側断面 整地層・物原層（南から）



南側断面東部 土層断面（南から）



立会調査範囲断面（北から）



窯体残存部断面 1（北から）



立会調査範囲断面（北西から）



窯体残存部断面 2（北から）



立会調査作業風景（東から）



窯体残存部断面 3（北から）



立会調査 窯体床面の一部（東から）



窯体残存部断面 4（北から）



1 試掘坑西壁土層断面 (南東から)



2 試掘坑完掘状況 (南から)



1 試掘坑南半西壁土層断面 (東から)



2 試掘坑完掘状況 (北から)



1 試掘坑南半東壁土層断面 (西から)



2 試掘坑北壁土層断面 (南から)



勘介窯跡西半調査後全景



1 試掘坑完掘状況 (北から)



2 試掘坑東壁土層断面 (西から)



勘介1号窯検出状況（南東から）



勘介2号二次窯完掘状況（北西から）



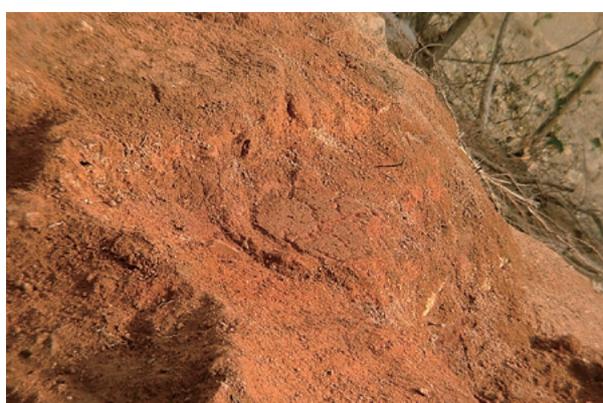
勘介1号窯検出状況（北から）



勘介2号二次窯完掘状況（東から）



勘介2号二次窯完掘状況（北から）



勘介2号二次窯天井支柱痕検出状況（北西から）



勘介2号一次窯完掘状況（北から）



勘介2号一次窯焼台出土状況（東から）



勘介 2 号窯横軸東半断割り土層断面（北から）



A7・ZZ7 区南壁土層断面（北から）



勘介 2 号窯横軸西半断割り土層断面（北から）



ZT7 区西壁土層断面（東から）



勘介 2 号一次窯完掘状況（北西から）



ZU6 区北壁土層断面（南から）



勘介 2 号一次窯天井支柱痕検出状況（北西から）



ZV6 区北壁土層断面（南から）



北山窯の焼成品（陶器・磁器 / 北山窯跡）



北山窯の窯道具類



勘介第1・2号窯の焼成品



勘介第1・2号窯の窯道具類

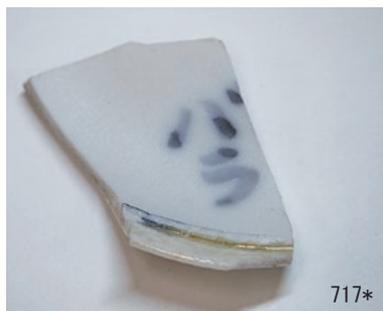
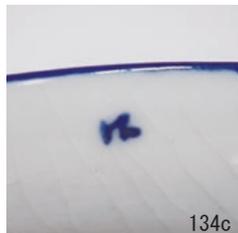
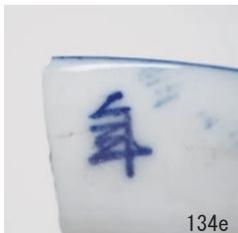
















200



210



224



214



227



202



228



218



230



205



231



217



233



206



236



237



241



242



247



263



250



253



255



257



256



278



281



285



287



290



292



293



368



387



369



308



370



388



277



271



373



389



386



405



416



390



415



420



399



410



417



425



412



432



413



419



434



|



435



436



440



447



451



450



452



454



455



456



458



462



463



467



468



470



|



471



472



505



568



483



559



569



484



507



574



492



540



542



493



544



535



503



556



524



527



537



525



538



566



539



626



567



307



589



328



579



606



314



304



356



359



各種窯印のある匣鉢類（勘介第1・2号窯跡）

報告書抄録

ふりがな	ほくざんかまあと かんすけかまあと							
書名	北山窯跡 勘介窯跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第214集							
編著者名	武部真木(編)・松澤和人(瀬戸市文化振興財団)・藤根 久,米田恭子(パレオ・ラボ)							
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL 0567(67)4161							
発行年月日	西暦 2020年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほくざんかまあと 北山窯跡 かんすけかまあと 勘介窯跡	あいちけん せとし 愛知県瀬戸市 おちあいちよう 落合町	23204	030970 030408	35度 15分 7秒	137度 07分 35秒	2015.08.~09 2015.10. ~2016.03 2017.05	290	急傾斜地 崩壊対策 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
北山窯跡	窯跡	近代・現代	窯体(連房式登窯1基) 物原		磁器(碗,湯呑,皿類) ・陶器(植木鉢,鉢類) ・窯道具		近代連房式登窯の 貴重な調査事例 (北山窯跡)	
勘介窯跡	窯跡	戦国	窯体(大窯2基) 物原		大窯製品(天目茶碗, 皿類,播鉢,筒形容器ほか) ・窯道具		落合城跡(中世城館) 推定地に近い窯跡 (勘介窯跡)	
文書番号	発掘届出 (27瀬文振第1050-8号,2015.7.1/29埋セ第5号,2017.4.7) 通知(27教生第1231号,2015.7.1/29教生第250号,2012.4.18) 終了届・保管証・発見届 (27瀬文振第1050-17号・27瀬文振第1050-18号・27瀬文振第1050-19号,2018.3.11 /29埋セ第22号,2017.5.31) 鑑定結果通知 (27教生第3287号・27瀬文第698号,2016.3.31/29教生第955号,2017.6.14)							
要約	<p>勘介窯跡は、瀬戸市北部の水野川右岸丘陵地に位置し、標高175m前後の南斜面に立地する戦国期の窯跡である。調査により2基の大窯の窯体の一部と、これに伴う灰原を確認した。それぞれの操業期間には時期差がみられ、勘介1号窯は大窯第1段階後半から第2段階前半(16世紀初頭から前葉)、勘介2号窯は大窯第2段階後半から第3段階前半(16世紀中葉)を主体とする時期と考えられる。</p> <p>北山窯跡は創業が明治に遡ると伝えられる近・現代の連房式登窯である。常滑窯産土管を利用した煙道部など、最終段階の構造の一端が明らかとなった。連綿と続いてきた窯業地ではむしろ希少な資料であり、百年ほどの昔の事柄はすでに不明瞭となっている部分も少なくない。</p>							

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第214集

北山窯跡 勘介窯跡

2020年3月31日

発行 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 新日本法規出版株式会社